

トランスローカリティの社会学：条件不利地域と地方中枢拠点都市の生活とキャリア
(研究課題番号 18H00917)
2018-2021 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 B)

北海道・京都府

20-30 代暮らしの実態と価値観に関する調査 報告書

2021 年 3 月

トランスローカリティ研究会

研究代表者 羽瀧 一代 (弘前大学人文社会科学部)

目次

序章 北海道・京都地域 20-30 代調査の概要	羽渕 一代	1
第 1 章 北海道・京都の若者たちの居住歴、U ターン希望、および進路決定におけるキャリア教育 ・ふるさと教育の影響	成田 凌	8
第 2 章 現住地への評価および出身地域との関係	白石壮一郎	34
第 3 章 北海道および京都の若者の「地元」意識、キャリア、きょうだい構成、両親のキャリア	寺地 幹人	45
第 4 章：地域についてどのように感じているか／地域の愛着の範囲	井戸 聡	58
第 5 章 趣味縁と地域社会	岩田 考	71
第 6 章 家族との関係と地域差	羽渕 一代	98
第 7 章 コミュニケーションの状況	羽渕 一代	103
第 8 章 北海道・京都の若者における恋愛と婚活、結婚	木村絵里子	108
第 9 章 京都と北海道の若者の仕事と収入	阿部 真大	117
第 10 章 国家と地域に対する社会・政治意識から見た京都府・北海道の若者	竹内 陽介	129
第 11 章 地域評価・生活満足度・感染症流行の影響	羽渕 一代	145
単純集計表		152

序章 北海道・京都府 20-30 代調査の概要

羽瀧一代（弘前大学人文社会科学部 教授）

0. はじめに

本報告書は、トランスローカリティ研究会（代表：羽瀧一代）が北海道と京都でおこなった地方に生きる「20-30 代の若者の暮らしの実態と価値観に関する調査」の結果を示したものである。調査項目は、移動、家族、人間関係、教育、労働、趣味、地域活動、政治意識、地域観、生活満足度などを網羅的に設定した。これにより地方に生きる若者の暮らしを構造的に把握することを目的としている。

本研究会が提唱するトランスローカリティモデルは、人々の移動や地域（地方居住）、これに関わる意識を構造的に把握する中範囲の理解モデルのことである。従来、地域社会の研究や地方自治体の人口政策においては、地域が分析単位とされてきた。このような地域ではなく個人を分析単位として地方の社会構造を探究する新しい枠組の構築を目指している。

地域社会固有の社会問題化がなされるとき、概ね人口減少がその要因とされる。その際に決まって参照されるのは地域から都市への人口流出についての社会減データである。しかし人口統計のデータを確認するならば、1950 年代の移動率を頂点として、移動は減少している。さらに、2010 年以降の研究においても、量的・質的調査の双方のデータを根拠として、若者が「地元志向」であることが示されている（鈴木 2008、浅野 2011、阿部 2013、堀 2015、辻 2016、広井 2019、羽瀧 2021）。もちろん東京が転入超過していることから考えれば、向都離村傾向は変わらないともいえる。しかしその若者たちであっても、彼らの行動とは裏腹に「地元に戻って生活したい」という意識をもっているという結果も明らかにされてきた。以上より、行動に関わる数量的なデータからみても、主観的事実のデータからみても、地域社会から人口流出が深刻であるという一般的な理解には疑問が残る。したがって、従来の人口政策が拠って立つ人々の移動についての認識と政策効果については、具体的な地方の人々の暮らしのリアリティに基づいたうえで、学術的に問いなおされる必要がある。

本報告で扱うような主観的事実を扱った分析結果の解釈には慎重さが必要であるだろう。若者が「地元」と表現する際、その地元が出身地を指していないケースがあることや（羽瀧 2021）、地方出身者のいう「地域」志向においても条件不利地域への志向は弱く、都市機能をもつ「地域」の志向が強いということは見逃せない（成田・羽瀧 2021）。ここから地方を条件不利地域（地域内に高等教育機関が存在せず、進学や就職において住居の移動を伴う必要のある地域）と地方中枢拠点都市圏とに操作的に区分し、そこに暮らす生活者の視点から生活スタイルとキャリアを捉えなおす必要があることがわかる。

さらに地方にもそのなかで社会のバラエティがある。そのように考えるならば、条件不利地域と都市的機能を有する地方中枢拠点都市圏とに分類するだけでなく、立地に伴う文化という観点から東日本と西日本という分類も可能である。本研究会がプレ調査としておこなった青森調査の結果をもとに岩田(2018)が次のように指摘している。「自身の人生に対する評価」や「日本社会や政治に関する価値観」では、「条件不利地域圏」と「地方中枢拠点都市圏」の間の差を確認できなかったが、「青森／広島」あるいは「東北地方／中国地方」の間に、明瞭にはないにしろ差がみられた。このように地域の立地による差異についても検証し、地域社会のバリエーションを描き出していくことも調査の目的の 1 つとしている。

これと関わり轡田は『地方暮らしの幸福と若者』(2017)のなかで、三大都市圏に対する地方という対比ではなく、地方圏を地方中枢拠点都市圏とそれ以外の条件不利地域圏とに分け、大都市・地方中枢拠点都市・条件不利地域の三層構造モデルという視点を提唱している。とくに地方に生きる困難さについては条件不利地域圏にみられるだろう。そのリアリティは、個々人の社会的属性の差異に注目し、各々にとっての地域の意味を厳密に捉えることによって、はじめて明らかになるようなものではないだろうか。本調査では地方圏を「政令指定都市」と「地方都市」と「条件不利地域」の三層構造を設定し、地方圏の地域的な多様性を明らかにしようと調査設計をおこなった。本報告では、三層構造の分析にはいたっていない。今後、三層構造に着眼した分析結果を発表する予定であるが、まずは第一報として4地域の集計結果を報告することとした。また、どのような地理的範囲において人口減少に関わる問題のリアリティをもつかという観点から、主観的な地域への評価を分析に織り込んでいる。モバイルメディアの登場によってその境界の変性・再変性が生じている。この「場所感」(メイロウィッツ 1985)や個人の属性や生活・キャリアに着目するならば、それぞれの地域の独自性を越えたトランスローカリティモデルの構築が可能となるのではないかと構想している。

1. 調査概要

本調査では北海道のオホーツク管内、札幌市、京都府の京都北部7市町村、京都市を対象地としている。調査地の選定は次のような手続きでおこなった。地理的立地、自治体の人口規模、都市雇用圏データをもとに、地方の「政令指定都市」と「地方都市」と「条件不利地域」に適合する地域を検討した。その結果、立地については首都圏を境として東日本と西日本から各1都道府県を対象とすることとした。そのうえで政令指定都市を擁し、政令指定都市と地方都市、政令指定都市と条件不利地域の自治体、ならびに地方都市と条件不利地域の自治体とが隣接しない都道府県という基準を設けている。

地方都市は人口規模が10万人程度の都市雇用圏の中心的な都市を想定した。そして人口1万人以下であり、高等教育機関が自治体内外の通える範囲がなく、総合病院の設置がない自治体を条件不利地域として選定した。

これらの条件にあてはまる地域として京都府、北海道を選定した。政令指定都市である札幌市の人口は約197万人であり、京都市は約145万人である。両市の人口を比較するならば札幌市のほうがやや多いものの、人口密度が1平方kmあたり1760人前後とほぼ似たような状況である。そして、北海道内・京都府内にあり政令都市から地理的に近接がなく、比較に値する人口規模をもち、さらに条件不利地域と地方都市を含み、内包される自治体間の連携が制度化されている地域の選定をおこなった。

北海道では「北海道総合振興局及び振興局の設置に関する条例」において14の総合振興局および振興局が設置されている。各総合振興局および振興局は、その所管区域において行政業務が遂行されている。北海道内の10万人程度の市町村は江別市、北見市、小樽市があげられるが、江別市と小樽市は札幌市に隣接している。また都市雇用圏としても10万人程度となっている。したがって、北見市を地方都市として選択し、市が位置しているオホーツク総合振興局管内を調査対象地域とした。オホーツク総合振興局は23の市町村で構成されており、人口は27万3千800人となっている(2020年8月調べ)。上述の条件を満たす条件不利地域の自治体である雄武町や西興部村などを擁している。

京都府では福知山都市圏と舞鶴都市圏の人口はいずれも10万人程度となっている。京都市と隣接しない地域である、京都北部7市町村は京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会が設立されており、福知

山市、綾部市、舞鶴市、宮津市、与謝野町、京丹後市、伊根町の地域連携強化をおこなっている地域でもある。人口は27万6千900人である（2020年8月調べ）。人口1万人以下の条件不利地域である伊根町を擁している。京都北部7市町は同程度の人口ではあるが、面積はオホーツク総合振興局の5分の1程度の広さである。したがって人口密度はオホーツク地域のほうが低く、人口密度の観点からいえば京都北部7市町よりも条件不利的立地といえる。調査の概要は以下のとおりである。

調査時期：2020年6月～9月

対象地：北海道オホーツク管内18市町村、札幌市、京都府北部7市町村、京都市¹

対象年齢：20歳から39歳

調査方法：選挙人名簿（オホーツク・札幌市・京都北部7市町）と住民基本台帳（京都市）²を用いた無作為抽出（系統抽出）によるアンケート調査（郵送法と訪問回収法の併用）

計画サンプル：各2000票（合計8000票）

有効回収サンプル：795票（39.8%）：男性44.2% 女性54.2% その他1.6%（オホーツク）

749票（37.5%）：男性41.0% 女性54.2% その他1.2%（札幌市）

527票（26.4%）：男性45.9% 女性53.1% その他0.9%（京都北部）

511票（25.6%）：男性40.7% 女性57.9% その他1.4%（京都市）

2. 調査方法

調査は2020年6月から9月にかけて実査をおこなった。自治体の選挙人名簿を使用したランダムサンプリング（系統抽出法）によるアンケート調査（郵送法と訪問回収法の併用）である。本調査は調査会社に作業をアウトソーシングすることなく、すべての調査業務を研究会メンバーでおこなった。調査設計、調査票の作成だけでなく、各自治体の選挙管理委員会における選挙人名簿（京都市は住民基本台帳）を使用したサンプリング、調査票郵送、訪問回収、データ入力、データクリーニング作業である。訪問回収業務については北海道地域のみで実施している。

本調査では、条件不利地域も対象地としていたため、調査対象者の抽出に多大な労力を必要とした³。しかしそのような労力をかける意味は大きいと考えている。地方、とくに条件不利地域では大都市と異なり、学術的な量的調査がおこなわれることはまれである。人口規模の問題などから、条件不利地域を含む地域を研究する際には概ね質的調査の手法が採用されることが多い。統計的な分析をおこなうために必要となるサンプル抽出のための人口のクリティカルマスが条件不利地域には望めないからである。

ただそれでは、条件不利地域の社会構造について俯瞰的に確認することが難しいのではないだろうか。

¹ 京都市北部山間地域は対象から外している。対象外地域は次のとおりである。北区（中川・小野郷・雲ヶ畑）、左京区（花脊・別所、久多、広河原、大原（百井））、右京区（水尾、宕陰、京北）の11地点。

² オホーツク管内、札幌市、京都北部の自治体においては、住民基本台帳と同様の住所が記載されているが、京都市の場合、選挙管理人名簿の住所記載が完全ではないため、住民基本台帳を使用した抽出をおこなうこととした。

³ プレ調査をおこなうことも考え、本調査設計をもとにインターネット調査の請負企業に見積もりをお願いした。その際に「貴研究会の調査設計にある条件不利地域におけるサンプルの抽出ができるネット調査会社はないと思われる」という回答を得ている。

条件不利地域の社会を俯瞰的にとらえるための手法について、本研究会では2年を費やし検討してきた。その結果、次のような手順でデータを集めることとなった。

条件不利地域を1つの自治体に定めることなく対象とするならば、少ない人口の若者を対象とした調査であっても量的調査も手法として採用可能である。量的調査をおこなう場合でも、実施する前に十分な準備が必要となり、その中でもフィールドワークは必須である。本調査ではサンプリング作業もフィールドワークの1つとして位置づけている。サンプリングをおこなうためには、調査対象地域の自治体職員の方々とやりとりをおこなわなければならない。研究者自身が、役所や役場という現場で作業をすることによって当該地域の状況を少なからず把握することが可能となるからである。本調査のサンプリングは、2020年2月から4月にかけて研究会メンバー全員で分担し実施した。1週間程度、各対象地に滞在しサンプリングを完了することができた。

次に調査票の回収について挑戦的な手法を試行した理由を示しておく。訪問回収法を採用する場合には、調査会社などへの委託によっておこなわれることが多い。これらはコストパフォーマンスが良い利点がある一方で、訪問回収業務を調査会社などの調査員に委託することで、調査に非協力的な対象者がどのような属性であるのか知りえないという問題がある。分析をおこなう研究者が自ら訪問回収をおこなうならば、少なからず対象地域の社会について情報を研究者自身で得ることが可能だ。これもフィールドワークといえるだろう。さらに付け加えるならば、量的調査が代表性を確保した手法であると評価されるためには、高い回収率が条件としてある。しかし若者を対象とした郵送法によるアンケート調査の多くは有効回収率が2割から3割である。これでは代表性を確保した調査とはいえないだろう。ただし、回答してもらえなかった対象者がどのような人々なのかを少しでも理解したうえで分析をおこなうことができるならば、この問題について多少の対処が可能になると考えている。

協力的な対象者のみを対象とした偏った調査を避けて代表性を重んじる社会調査を志すのであれば、調査に非協力的な対象者を知る必要がある。そのためには、調査会社などに回収を委託した調査やネット調査などで得られたデータのみの分析では、社会のリアリティを読み間違えるのではないだろうか。もちろん委託した調査においても8割程度の回収率が見込めるのであれば、問題にはならない。それが望めないのであれば、現場に研究者が赴く必要性はより高まるだろう。また、とくに社会意識を扱う調査であるならば、セレクションバイアスの問題は研究者が汗をかいてデータを収集する努力によってのみ解決の可能性があるようにも思える。

このような理由により、北海道地域のみとなったが、郵送法と訪問回収法の併用を採用した。訪問回収をおこなったメンバーは、岩田考、井戸聡、木村絵里子、白石壮一郎、成田凌、羽淵一代の6名である。京都と北海道とで回収法が異なるため、有効回収率に差がある。京都地域も訪問回収をおこなう計画をしていたが労力の問題があり断念している。そのかわりとして、轡田竜蔵、阿部真大、永田夏来、竹内陽介を中心に、行政や地域住民への聞き取り調査をおこなっている。

以上が本調査の概要である。これらのデータから地方に生きる若者たちの行動、意識に関わる居住地域の影響を主眼に分析をおこなっていきこう。多岐の項目にわたるが、それぞれのテーマにおいて政令指定都市と地方都市と条件不利地域を含む地域の差や東日本と西日本との差などの把握に努めている。

なお先行する調査として『広島20-30代住民意識調査』（轡田2016）、『青森20-30代住民意識調査』（トランスローカリティ研究会2018）があることも付記しておきたい。これらの結果と本報告と比較して今後分析をおこなっていく予定である。

本研究会メンバーと報告書執筆者と執筆章については、次のとおりである。

【トランスローカリティ研究会メンバー】

- 阿部真大（甲南大学 教授） 第9章
井戸 聡（愛知県立大学 准教授） 第4章
岩田 考（桃山学院大学 教授） 第5章
木村絵里子（日本女子大学 助教） 第8章
轡田竜蔵（同志社大学 准教授）
白石壮一郎（弘前大学 准教授） 第2章
竹内陽介（名古屋大学大学院博士後期課程） 第10章
寺地幹人（茨城大学 准教授） 第3章
永田夏来（兵庫教育大学 准教授）
成田 凌（東京都立大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員） 第1章
羽渕一代（弘前大学 教授/代表） 序章、第6章、第7章、第11章

【参考文献】

- 阿部真大 2013『地方にこもる若者たち—都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版
浅野智彦 2011『若者の気分—趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店
羽渕一代 2021「ソーシャルメディアの利用と友人関係満足度—コミュニケーションメディアは遠距離にある親密な関係を維持するのか—」『人文社会科学論叢』（人文科学篇）弘前大学人文社会科学部
広井良典 2019『人口減少社会のデザイン』東洋経済新報社
堀有喜衣 2015「若者の地域移動—長期的動向とマッチングの変化—」『JILPT 資料シリーズ』No.162
独立行政法人 労働政策研究・研修機構
岩田考 2018「『自身の人生』『日本社会・政治』『学歴・年収』から見たむつ市・おいらせ町の若者」トランスローカリティ研究会『「青森 20-30 代住民意識調査」報告書』公益財団法人マツダ財団
轡田竜蔵 2016『平成 26 年度 公益財団法人マツダ財団委託研究「広島 20-30 代住民意識調査」報告書（統計分析篇）【第2版】』公益財団法人マツダ財団
轡田竜蔵 2017『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房
Meyrowitz, J. 1985 *No Sense of Place : the Impact of Electronic Media on Social Behaviour*, Oxford : Oxford University Press. (=安川一・高山啓子・上谷香陽訳 2003『場所感の喪失』新曜社)
成田凌・羽渕一代 2021「『地方』の若者の定住意向とその要因に関する検討—『青森 20-30 代住民意識調査』の分析から—」『人文社会科学論叢』（社会科学篇）弘前大学人文社会科学部
白石壮一郎・羽渕一代 2016「条件不利地域普通科校の高卒後の移動と地元定着：青森県下北郡北通の同窓会調査から」『人文社会科学論叢』（人文科学篇）弘前大学人文社会科学部
鈴木謙介 2008『サブカル・ニッポンの新自由主義』ちくま新書
辻泉 2016「地元志向の若者文化—地方と大都市の比較調査から」川崎賢一・浅野智彦編『〈若者〉の溶解』勁草書房

謝辞

お世話になった方々にお礼を申し上げたいと思います。とりわけ北海道庁オホーツク総合振興局地域創生部の地域政策課地域連携推進室のみなさまには大変お世話になりました。まず立川康裕さまには調査票の確認、調査対象のみなさまからの問い合わせへのご対応などをいただきました。調査をおこなう際の様々な苦勞をおかけしてしまいました。次に、同室におられた和田恵周さまには北海道庁オホーツク総合振興局のご協力をいただく際に力になっていただきました。また北見市企画財政部の近藤亮さま、近藤和雄さま、滝上町まちづくり推進課の清原尚弘さま、紋別市企画調整課の竹本幸孝さま、原友輝さま、湧別町企画財政課の近石翔平さま、西海谷巧さまら、多くの自治体職員のみなさまに地域の状況についてご教示いただきました。ありがとうございました。

プレ調査のインタビュー調査でも多くの方々にご協力をいただきました。北海道新聞社の川上昌弘記者、岩崎勝記者、本田みなみ記者からは、オホーツク地域の社会状況について貴重なアドバイスをいただきました。ありがとうございました。残念ながら本調査のご協力をいただけませんでした。札幌市まちづくり政策局のみなさまにも札幌市の概況について教えていただきましたことお礼申し上げます。

札幌市民の方々にもインタビューにご協力いただきました。札幌地域については、北海道放送局の報道部記者のみなさまからご教示をいただきました。とくに澤出梨江記者には、HBCの報道記者のみなさまをご紹介いただき、大変充実したインタビュー調査をおこなうことができました。弘前大学人文学部の卒業生のみなさまにもインタビュー調査のご協力をいただきました。福知山市役所、京都市役所の職員の方々にもお礼申し上げます。インタビュー調査では、地域活性に関わるさまざまな情報をご教示いただきました。ありがとうございました。

オホーツク管内、札幌市、京都北部7市町の選挙管理委員会、京都市各区役所市民課のみなさまに対してもお礼を申し上げたいと思います。サンプリングのための手続きを進めていただき、書類をチェックしてくださいました。またお時間や会議室の確保をしていてくださった自治体もございました。ありがとうございました。

最後に、本調査の調査対象となったすべてのみなさまとご家族やサポーターのみなさまに対して、心からお礼を申し上げます。プライベートな質問も多く、また突然のお願いに大変驚かれたと思います。お忙しいなか、みなさまから調査について、電話やメールでご質問や相談をいただきました。こちらの説明不足をお詫びするとともに、多くの方々が「協力します」と言ってくださって本当にうれしかったことをこの場を借りてお伝えできれば幸いです。

訪問回収の際に、せっかく眠った赤ちゃんを起こしてしまって申し訳ありませんでした。また夜通しお仕事をされて、お休みになっているところ、起こしてしまって申し訳ありませんでした。それでも、「(研究している) 本人が来たんだから協力するよ」や「この調査票のために来たの？すごいね。協力するよ」と言ってくださって救われる思いがしました。感染症拡大の不安を抱えていらっしゃるなかのご協力であったことに対しても、感謝の言葉が思いつかないほどです。わたしたちの不躰なお願いにご立腹しながら、あきれながらも調査にご協力いただき、ありがとうございました。また障がいのある対象者をサポートして下さっている方々や調査協力を促して下さった対象者のご家族のみなさまや対象者と親しい方々にも本当に感謝しております。ありがとうございました。

【付記】

本研究は、2018年度～2020年度科学研究費補助金（基盤研究B）「トランスローカリティの社会学：条件不利地域と地方中枢拠点都市の生活とキャリア」（研究課題番号 18H00917）の助成を受けておこなった成果の一部である。

第1章 北海道・京都の若者たちの居住歴、Uターン希望、および 進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響

成田 凌（東京都立大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）

0. はじめに

本章では、北海道と京都の若者たちの「居住歴」（1節）、「居住経験地域」（2節）、「現住地域への転入（Uターン／転入）理由」（3節）、「現住地域における通算居住年数」（4節）、「Uターン希望」（5節）、「進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響」（6節）について分析をおこなう。具体的には、4地域を条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）と地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）とに区別したうえで、単純集計および基本属性（年代、性別、学歴、婚姻状態、居住歴）との関連について検討する。

その際、基本属性については、年代は20代／30代、性別は男性／女性、学歴は大卒・短大卒／非大卒・短大卒、婚姻状態は既婚／未婚、居住歴は土着（定住）／Uターン／転入と変数の操作化をおこなった（詳細は表1を参照）。なお本章では、非該当や無回答（DK・NA）は欠損値として処理したため、度数やパーセンテージが本報告書末尾の「単純集計表」と一致しない場合がある。

表1 基本属性（年代・性別・学歴・婚姻状態・居住歴）

変数	説明
年代	20代／30代
性別	男性／女性
学歴	大卒・短大卒＝在学中（大学・大学院）、在学中（短大・高専）、大卒・大学院卒、短大・高専卒 非大卒・短大卒＝在学中（専門学校）、専門学校卒、高卒、中卒、その他
婚姻状態	既婚／未婚
居住歴	土着（定住）／Uターン／転入

注）年代については、新型コロナウイルスの影響で実査期間が後ろ倒しとなった都合上、30代の回答者には一部40歳が含まれている（オホーツク15人、札幌市5人、京都北部7人、京都市6人）。性別については、選択肢に「その他」が含まれていたが、少数であったため便宜上、この章では除外して分析をおこなう（オホーツク5人、札幌市1人、京都北部0人、京都市2人）。婚姻状態については、選択肢に「離死別」が含まれていたが、この章では分析から除外した（オホーツク40人、札幌市28人、京都北部21人、京都市21人）。

1. 居住歴

本調査では「居住歴」について、「問9：あなたの居住歴についてあてはまるものはどれですか。（○は1つ）」で尋ね、3つの選択肢（1. 現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない／2. 現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた／3. 現在住んでいる地域以外の出身である）から一つ回答してもらった⁴。以下、本章では居住歴（のパターン）について、それぞれに対応する形で、土着（定住）／Uターン／転入として表記する（表2）。

⁴ 報告書末尾の単純集計表にあるとおり、居住歴に関する一連の設問について、回答率が低かった（「DN・NA」が多かった）。「DN・NA」の度数をそれぞれ確認すると（以下、人数（有効回答数に対するDK・NAの割合）の順で記す）、「居住歴（問9）」はオホーツク41人（5.2%）、札幌市56人（7.5%）、京都北部21人（4.0%）、京都市25人（4.9%）であった。

表 2 居住歴の選択肢

選択肢	
土着（定住）	現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない
Uターン 転入	現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた 現在住んでいる地域以外の出身である

(1) 単純集計

まず、それぞれの地域における土着（定住）／Uターン／転入の割合を確認しておこう（図 1）。4つの地域を比較すると、条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）と地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）で回答者の居住歴の傾向が異なっている。具体的には、条件不利地域圏のオホーツクは土着(定住)21.8%、Uターン 38.6%、転入 39.7%、京都北部は土着（定住）18.4%、Uターン 45.5%、転入 36.2%である。地方中枢拠点都市圏の札幌市は土着（定住）24.8%、Uターン 22.8%、転入 52.4%、京都市は土着（定住）29.2%、Uターン 20.6%、転入 50.2%である。

ここから次の点が指摘できる。一つは、条件不利地域圏においては 6 割程度、地方中枢拠点都市圏では 5 割弱が現在住んでいる地域の出身であるということである。ただし、他の地域で暮らしたことの無い土着（定住）層の比率は、条件不利地域圏よりも地方中枢拠点都市圏の方が多い。この点は見方を変えると、条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）における U ターン層の割合が相対的に高いことを示しているといえる。このような条件不利地域圏／地方中枢拠点都市圏という地域ごとの若者の居住歴の差異は、本調査の先行調査として位置付けられる「広島 20-30 代住民意識調査（広島調査）」（轡田 2016）（三次市（条件不利地域圏）：土着（定住）11.2%、Uターン 40.2%、転入 46.1%／府中町（地方中枢拠点都市圏）：土着（定住）25.7%、Uターン 15.3%、転入 54.4%）や、「青森 20-30 代住民意識調査（青森調査）」（トランスローカリティ研究会 2018）（むつ市（条件不利地域圏）：土着（定住）23.9%、Uターン 43.6%、転入 29.0%／おいらせ町（地方中枢拠点都市圏）：土着（定住）24.4%、Uターン 35.6%、転入 36.3%）においても、おおむね同様の傾向がみられたことを付言してきた⁵。

また、「居住経験地域（問 9-1）」や「U ターン／転入理由（問 9-2）」、「U ターン希望」については、複数回答であったり非該当者も含まれたりするため正確に把握することはできないが、「問 9」の枝問であるため、少なからぬ影響があるといわざるを得ない。なお、調査原票のエディティングおよびデータクリーニングの際に確認・修正をおこなったうえでの上記 DK・NA の割合である。つまり、調査原票（回答ママの状態）ではさらに多くの「無回答」があったということになる。この点については、調査票作成時点において複数の問題点があげられるが、ここでは大きく次の 2 点について、記しておく。一つは、レイアウトの問題、もう一つは複雑な枝問であったことである。居住歴にかんする一連の設問（枝問、問 9～問 11）は 2 頁（見開きで 1 頁）にわたっているが、紙幅の関係上、「問 9」のみ左側のページ下部に配置され、残りが右側のページに配置された。むろん、DK・NA には「回答拒否」や「読み飛ばし」もなくはなかったものの、圧倒的に「問 9」には回答していないが、（U ターン者や転入者のみが回答する）「問 9-1」や「問 9-2」には回答しているというようなケース、あるいは通算居住年数（問 1）と年齢（F1）が一致しているようなケースが多くみられた。つまり、問 9 の居住歴について回答せずに（あてはまる番号に○を付けずに）、該当する次の設問、土着（定住）層は次頁の「問 12」へ、U ターン／転入層は「問 9-1」へ進んだ可能性が高いと思われる。

⁵ なお、「広島調査」と「青森調査」の居住歴の尋ね方と選択肢は以下ようになっており、本調査の形式とはやや異なる。質問文は「あなたの居住歴について、以下から最も近い選択肢ひとつに○印をつけてください。」（広島調査）、「居住歴について、以下から最も近い選択肢ひとつに○をつけてください。」（青森調査）で、選択肢は共通して「A 今住んでいる地

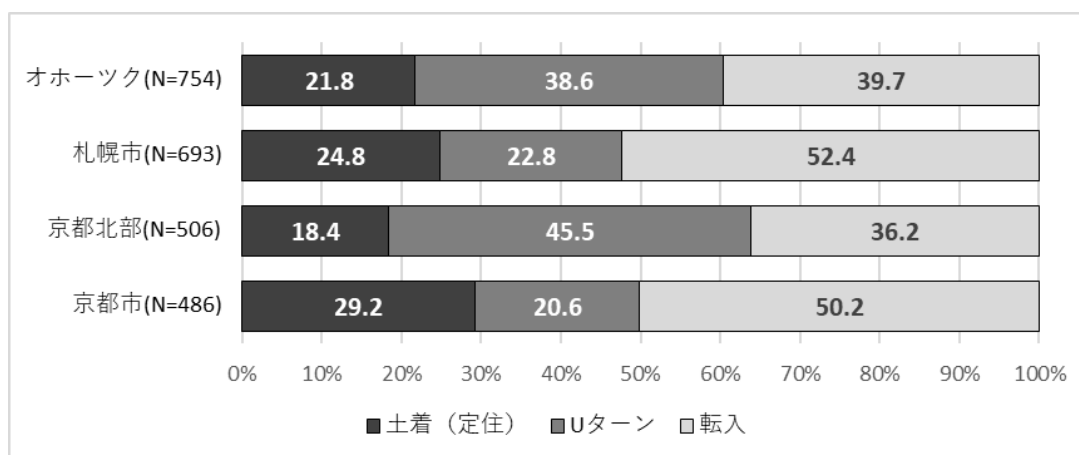


図1 居住歴の単純集計 (単位：%)

(2) 居住歴と基本属性

続いて、それぞれの地域ごとにクロス分析をおこない、居住歴（土着（定住）／Uターン／転入）と基本属性（年代、性別、学歴、婚姻状態）との関連を検討する。

居住歴と年代（20代／30代）とのクロス分析の結果は、表3のとおりである。条件不利地域圏のオホーツクと京都北部においては、両者の間には統計的に有意な関連はみられない。一方、地方中枢都市圏の札幌市と京都市においては、居住歴と年代に統計的に有意な関連がみられ、20代では土着（定住）層が多くUターン層が少ない傾向にあるといえる。

表3 居住歴と年代（20代／30代）のクロス分析

		土着 (定住)	Uターン	転入
オホーツク n.s.	20代(N=289)	24.6	34.6	40.8
	30代(N=452)	20.1	41.4	38.5
札幌市 ***	20代(N=289)	31.9	18.8	49.3
	30代(N=452)	19.9	26.3	53.8
京都北部 n.s.	20代(N=203)	21.7	43.8	34.5
	30代(N=296)	16.2	45.9	37.8
京都市 **	20代(N=198)	37.4	17.2	45.5
	30代(N=284)	23.2	23.2	53.5

オホーツク： $\chi^2(2) = 3.916$, Cramer's V = 0.073, n.s.

札幌市： $\chi^2(2) = 14.215$, Cramer's V = 0.145, $p < .001$

京都北部： $\chi^2(2) = 2.436$, Cramer's V = 0.070, n.s.

京都市： $\chi^2(2) = 11.607$, Cramer's V = 0.155, $p < .01$

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

域が「地元」であり、他の地域で暮らしたことがない／B 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域の学校を卒業（または中退）後、戻ってきた／C 今住んでいる地域が「地元」であり、他の地域で就職後、戻ってきた／D 結婚のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である E 仕事のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である／F 就学のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である／G 住み替えのため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である／H 家族の都合のため今住んでいる地域に移ったが、他の地域が「地元」である／I その他」である。ここでは A を土着（定住）層、B と C を U ターン層、D～H を転入層として集約し、表記している。また、「広島調査」と「青森調査」のいずれも選択肢に「その他」を含まなかったため、合計が 100.0%にならない。

居住歴と性別とのクロス分析の結果は、表 4 のとおりである。京都北部では 8.7 ポイント、京都市は 6.2 ポイント男性の方が女性より土着（定住）層が多いものの、いずれの地域においても、居住歴と性別（男性／女性）との間に統計的に有意な関連は認められなかった。

表 4 居住歴と性別（男性／女性）のクロス分析

		土着（定住）	Uターン	転入
オホーツク n.s.	男性(N=283)	25.8	24.4	49.8
	女性(N=402)	24.4	21.6	54.0
札幌市 n.s.	男性(N=339)	20.1	39.5	40.4
	女性(N=404)	23.0	38.1	38.9
京都北部 n.s.	男性(N=235)	23.0	41.7	35.3
	女性(N=266)	14.7	47.7	37.6
京都市 n.s.	男性(N=201)	32.8	18.9	48.3
	女性(N=278)	26.6	21.9	51.4

オホーツク： $\chi^2(2) = 1.230$, Cramer's V = 0.042, n.s.

札幌市： $\chi^2(2) = 0.952$, Cramer's V = 0.036, n.s.

京都北部： $\chi^2(2) = 5.841$, Cramer's V = 0.108, n.s.

京都市： $\chi^2(2) = 2.299$, Cramer's V = 0.069, n.s.

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

居住歴と学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）とのクロス分析の結果は、表 5 のとおりである。条件不利地域圏のオホーツクと京都北部において、居住歴と学歴に統計的に有意な関連がみられ、大卒・短大卒の土着（定住）層の割合が極端に低い傾向にあるといえる。また、京都北部における大卒・短大卒のUターン層の比率の高さも目を引く。一方、地方中枢都市圏の札幌市と京都市においては、居住歴と年代に統計的に有意な関連はみられない。

表 5 居住歴と学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）のクロス分析

		土着（定住）	Uターン	転入
オホーツク ***	大卒・短大卒(N=291)	6.5	38.8	54.6
	非大卒・短大卒(N=459)	31.4	38.3	30.3
札幌市 n.s.	大卒・短大卒(N=375)	23.7	22.1	54.1
	非大卒・短大卒(N=314)	26.4	23.6	50.0
京都北部 ***	大卒・短大卒(N=375)	5.9	54.5	39.5
	非大卒・短大卒(N=314)	30.9	35.7	33.3
京都市 n.s.	大卒・短大卒(N=339)	28.0	20.9	51.0
	非大卒・短大卒(N=144)	31.9	20.1	47.9

オホーツク： $\chi^2(2) = 77.175$, Cramer's V = 0.321, $p < .001$

札幌市： $\chi^2(2) = 1.212$, Cramer's V = 0.042, n.s.

京都北部： $\chi^2(2) = 53.910$, Cramer's V = 0.328, $p < .001$

京都市： $\chi^2(2) = 0.760$, Cramer's V = 0.040, n.s.

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

居住歴と婚姻状態（既婚／未婚）とのクロス分析の結果は、表 6 のとおりである。条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）と地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）のいずれにおいても居住歴と婚姻状態には統計的に有意な関連がみられ、未婚者では土着（定住）層が多く、既婚者では転入層が多い傾向にあるといえる。

表6 居住歴と婚姻状態（既婚／未婚）のクロス分析

		土着（定住）	Uターン	転入
オホーツク ***	既婚(N=356)	18.5	32.6	48.6
	未婚(N=356)	24.4	43.0	32.6
札幌市 ***	既婚(N=282)	16.3	21.3	62.4
	未婚(N=380)	31.6	22.6	45.8
京都北部 ***	既婚(N=225)	13.3	43.6	43.1
	未婚(N=256)	22.7	46.9	30.5
京都市 **	既婚(N=199)	17.6	22.6	59.8
	未婚(N=264)	36.7	18.9	44.3

オホーツク： $\chi^2(2) = 19.572$, Cramer's V = 0.166, $p < .001$

札幌市： $\chi^2(2) = 23.640$, Cramer's V = 0.189, $p < .001$

京都北部： $\chi^2(2) = 20.684$, Cramer's V = 0.211, $p < .001$

京都市： $\chi^2(2) = 11.241$, Cramer's V = 0.153, $p < .01$

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

(3) 小括

ここまでみてきた北海道と京都の若者たちの居住歴についての分析結果を整理しよう。土着（定住）層／Uターン層／転入層の割合についてみると、①条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）では6割程度、地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）では5割弱が現在住んでいる地域の出身であるということ（逆にいえば4～5割程度は転入層であること）、②他の地域で暮らしたことがない土着（定住）層の比率は条件不利地域圏よりも地方中枢拠点都市圏の方が多いこと、③条件不利地域圏におけるUターン層の割合が高いことが確認された。

また、居住歴と基本属性との関連についてまとめたものが、表7である。一瞥して明らかのように、条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏で傾向が異なっていた。条件不利地域圏では学歴と婚姻状態との関連がみられ、大卒・短大卒では土着（定住）層の割合が小さいことおよび既婚者で転入層の割合が高いことが指摘できる。対して地方中枢拠点都市圏では年代と婚姻状態との関連がみられ、20代および未婚者において土着（定住）層の割合が高いこと、ならびに既婚者では転入層の割合が高いことが指摘できる。

表7 居住歴と基本属性との関連のまとめ

		年代	性別	学歴	婚姻
条件不利地域圏	オホーツク	—	—	◎	◎
	京都北部	—	—	◎	◎
地方中枢拠点都市圏	札幌市	◎	—	—	○
	京都市	○	—	—	◎

注) カイ2乗検定の結果、統計的に有意な差があったものについては「◎」（0.1%水準）、「○」（1%水準）、「△」（5%水準）、統計的有意差がなかったものは「—」と表記。

2. 居住経験地域

「居住経験地域」については、「問9-1：あなたがこれまで暮らしたことがある地域はどこですか。（あてはまるものすべてに○）」で尋ねた（複数回答）。なお、この設問は問9で「2（=Uターン）」または「3（=転入）」と回答した場合のみ該当する枝問である。

選択肢は、現在住んでいる地域（市区町村）に近い圏域・都市から順に、物理的距離がより遠方（あるいは、より包括的なスケール）となるように、5つ設定した。たとえば条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）については、現住市町村を除く条件不利地域圏／近郊の地方中枢拠点都市／地方圏内（北海道地方、関西地方）／国内／海外となっている。

(1) 単純集計

それぞれの地域ごとの単純集計の結果は、以下のとおりである。

まず、単純集計を確認しよう。オホーツクと札幌市の結果は、表8に示したとおりである。前節の図1で示したように、オホーツク管内在住の若者の8割弱が現住地域以外で暮らした経験を有している（土着（定住）21.8%、Uターン38.6%、転入39.7%）。その大半が北海道内であり（現在住んでいる地域以外のオホーツク管内の市町村36.3%、札幌市40.0%、それ以外の北海道内43.4%）、北海道外で暮らしたことがある割合は3割弱だった（北海道以外28.4%、海外2.5%）。

また、札幌市在住の若者の約4分の3が現住地域以外で暮らした経験を有している（土着（定住）24.8%、Uターン22.8%、転入52.4%）。札幌市以外の石狩管内の市町村で暮らしたことがある人が少ないことから（11.8%）、札幌市周辺の地域からの流入よりも、札幌市内での移動（34.4%）や北海道内の全域からの人びとの流入（55.9%）が多いことが読み取れる。また、北海道外で暮らしたことがある人びとも約4割に達している（北海道外39.7%、海外4.4%）。

表8 居住経験地域の単純集計（オホーツク、札幌市）

		(%)	(人)
オホーツク	現在住んでいる市町村を除くオホーツク管内	36.3	(219)
	札幌市	40.0	(241)
	オホーツク管内市町村と札幌市を除く北海道内	43.4	(262)
	北海道以外	28.4	(171)
	海外	2.5	(15)
	N	603	
		(%)	(人)
札幌市	札幌市内の別の地域	34.4	(187)
	札幌市を除く石狩管内市町村	11.8	(64)
	石狩管内市町村を除く北海道内	55.9	(304)
	北海道以外	39.7	(216)
	海外	4.4	(24)
	N	544	

京都北部と京都市の結果は、表9に示したとおりである。京都北部7市町在住の若者の8割以上が現住地域以外で暮らした経験を有している（土着（定住）18.4%、Uターン45.5%、転入36.2%）。そのうちの半数以上が近くの地方中枢拠点都市圏（京都市・大阪市・神戸市とその周辺56.9%）での居住経験を有している一方、京都北部7市町内（23.1%）や上記を除く関西圏内（18.2%）で暮らしたことがある割合が比較的低い。また、関西圏以外で暮らしたことがある人が約3割だったこともふまえると（関西

以外 32.1%、海外 2.2%)、京都北部の若者たちは、関西圏内、それも都市部（地方中枢拠点都市圏）への志向が高いことが想定される。

京都市在住の若者については、現住地域以外で暮らした経験を有する者が約 7 割と、他の 3 地域と比べるとやや少ない（土着（定住）29.2%、U ターン 20.6%、転入 50.2%）。関西圏以外で暮らしたことのある人が半数近く（47.6%）、海外在住経験者も約 1 割おり（8.4%）、他の 3 地域と比べると広域な移動経験を有している人の割合が多い点が特徴的である。また同時に、大阪市・神戸市とその近辺（20.7%）、京都市・大阪市・神戸市とその近辺を除く関西圏内（25.6%）で暮らしたことのある人が比較的少ない一方、京都市とその近辺（38.3%）で暮らしたことのある人が約 4 割みられる。これらの点から、京都市在住の若者については、より広域な地域から流入してくる層と、京都市近辺で移動・定住している層に分かれることが想定される。

表 9 居住経験地域の単純集計（京都北部、京都市）

		(%)	(人)
京都北部	現在住んでいる市町村を除く京都府北部7市町	23.1	(95)
	京都市・大阪市・神戸市とその近辺	56.9	(234)
	上記を除く関西	18.2	(75)
	関西以外	32.1	(132)
	海外	2.2	(9)
N		411	
		(%)	(人)
京都市	現在住んでいる地域を除く京都市とその近辺	38.3	(133)
	大阪市・神戸市とその近辺	20.7	(72)
	上記を除く関西	25.6	(89)
	関西以外	47.6	(165)
	海外	8.4	(29)
N		347	

(2) 居住経験地域と基本属性

続いて、それぞれの地域ごとのクロス集計をおこなった結果から、居住経験地域と基本属性（居住歴、年代、性別、学歴、婚姻状態）との関連を検討する。なおここでは、10 ポイント程度以上の大きな差異がみられる点のみに着目したい。

オホーツクの結果は、表 10 に示したとおりである。オホーツクの結果から複数の地域（圏域）で属性による違いが確認できるのは、居住歴と学歴、婚姻状態である。居住歴別にみると、U ターン層は札幌市での居住経験が(U ターン 46.7%、転入 33.4%)、転入層はオホーツク管内(U ターン 31.6%、転入 40.8%)や北海道内 (U ターン 38.8%、転入 46.8%)、北海道外 (U ターン 21.0%、転入 35.8%)が多い。学歴別にみると、大卒・短大卒層は札幌市 (大卒・短大卒 44.4%、非大卒・短大卒 36.2%)と北海道内 (大卒・短大卒 52.0%、非大卒・短大卒 36.2%)、北海道外 (大卒・短大卒 37.2%、非大卒・短大卒 20.7%)で多い一方、オホーツク管内は非大卒・短大卒層の方が多(大卒・短大卒 28.9%、非大卒・短大卒 42.7%)。婚姻状態別では、既婚者ではオホーツク管内 (既婚 41.2%、未婚 30.4%)、札幌市 (既婚 44.3%、未婚

37.0%)が比較的多い。その他、年代別では札幌市での居住経験(20代34.1%、30代44.3%)、性別では北海道外での居住経験(男性35.7%、女性21.1%)において大きな相違がみられる。

表10 居住経験地域と基本属性のクロス集計(オホーツク)

オホーツク	居住歴		年代		性別		学歴		婚姻	
	Uターン	転入	20代	30代	男性	女性	大卒・短大卒	非大卒・短大卒	既婚	未婚
現在住んでいる市町村を除くオホーツク管内	31.6	40.8	31.9	38.5	35.0	37.5	28.9	42.7	41.2	30.4
札幌市	46.7	33.4	34.1	44.3	36.8	42.3	44.4	36.2	44.3	37.0
オホーツク管内市町村と札幌市を除く北海道内	38.8	46.8	41.6	45.1	44.4	43.5	52.0	36.2	45.9	40.6
北海道以外	21.0	35.8	27.4	28.4	35.7	21.1	37.2	20.7	25.0	31.5
海外	1.7	3.3	2.7	2.2	2.5	2.2	4.0	1.2	1.7	3.3
N	291	297	226	366	277	317	277	323	296	276

注) DK・NAの場合があるため、各変数の合計が一致しない場合がある。

札幌市の結果は、表11に示したとおりである。札幌市の結果から複数の地域(圏域)での居住経験に違いが確認できるのは、居住歴と学歴である。居住歴ごとにみると、北海道内では転入層(Uターン50.0%、転入58.4%)、北海道外ではUターン層(Uターン49.4%、34.7%)の方が多い。学歴別では、札幌市内は非大卒・短大卒(大卒・短大卒28.3%、非大卒・短大卒42.7%)、北海道外は大卒・短大卒(大卒・短大卒48.5%、非大卒・短大卒29.6%)が多くなっている。その他、年代別と婚姻状態別では札幌市内での居住経験(20代27.0%、30代39.5%/既婚42.8%、未婚27.7%)、性別では北海道外での居住経験(男性45.6%、女性35.6%)において差がみられる。

表11 居住経験地域と基本属性のクロス集計(札幌市)

札幌市	居住歴		年代		性別		学歴		婚姻	
	Uターン	転入	20代	30代	男性	女性	大卒・短大卒	非大卒・短大卒	既婚	未婚
札幌市内の別の地域	32.3	34.4	27.0	39.5	31.3	36.6	28.3	41.7	42.8	27.7
札幌市を除く石狩管内市町村	9.5	12.9	11.8	12.0	11.1	12.5	13.3	10.1	14.4	9.7
石狩管内市町村を除く北海道内	50.0	58.4	53.4	57.8	54.4	57.2	53.6	58.3	56.8	55.1
北海道以外	49.4	34.7	36.8	41.0	45.6	35.6	48.5	29.6	40.8	37.5
海外	6.3	3.3	3.4	5.1	3.7	5.0	5.8	2.4	4.8	3.7
N	158	361	204	332	217	320	293	247	250	267

注) DK・NAの場合があるため、各変数の合計が一致しない場合がある。

京都北部の結果は、表12に示したとおりである。京都北部の結果から複数の地域(圏域)での居住経験に違いが確認できるのは、居住歴と性別、婚姻状態である。居住歴ごとにみると、京都北部7市町内(Uターン18.4%、転入34.4%)と関西圏外(Uターン28.2%、転入36.7%)では転入層、京都市・大阪市・神戸市とその近辺における居住経験(Uターン63.9%、47.2%)ではUターン層の方が多。性別では、京都市・大阪市・神戸市とその近辺における居住経験は女性(男性49.7%、女性62.4%)、関西圏外は男性(男性42.9%、女性23.6%)の方が多くなっている。婚姻状態別では、京都市・大阪市・神戸市とその近辺における居住経験は未婚者(既婚50.3%、未婚62.4%)が、関西圏外は既婚者が多い

(既婚 35.6%、未婚 27.8%)。その他、年代別では関西圏以外での居住経験において比較的差がみられる(20代 26.9%、30代 34.9%)。

表 12 居住経験地域と基本属性のクロス集計 (京都北部)

京都北部	居住歴		年代		性別		学歴		婚姻	
	Uターン	転入	20代	30代	男性	女性	大卒・短大卒	非大卒・短大卒	既婚	未婚
現在住んでいる市町村を除く京都府北部7市町	18.4	34.4	26.3	20.9	20.9	24.9	21.1	26.3	26.7	21.1
京都市・大阪市・神戸市とその近辺	63.9	47.2	59.6	55.0	49.7	62.4	57.0	56.7	50.3	62.4
上記を除く関西	15.9	21.7	14.7	20.9	22.6	15.3	21.1	14.6	23.1	13.9
関西以外	28.2	36.7	26.9	34.9	42.9	23.6	33.8	29.2	35.9	27.8
海外	2.6	1.7	1.9	2.4	2.3	2.2	2.1	2.3	2.6	2.1
N	227	180	156	249	177	229	237	171	250	267

注) DK・NAの場合があるため、各変数の合計が一致しない場合がある。

そして、京都市の結果は、表 13 に示したとおりである。京都市の結果から複数の地域(圏域)での居住経験に違いが確認できるのは、居住歴と学歴である。居住歴ごとにみると、大阪市・神戸市とその近辺ではUターン層(Uターン 26.0%、転入 18.3%)、京都市・大阪市・神戸市とその近辺を除く関西圏内(Uターン 20.0%、転入 28.3%)と関西圏以外(Uターン 38.0%、転入 52.1%)では転入層がおおくみられる。学歴ごとでは、京都市その近辺における居住経験は非大卒・短大卒(大卒・短大卒 33.9%、非大卒・短大卒 48.5%)、関西圏以外は大卒・短大卒(大卒・短大卒 51.2%、非大卒・短大卒 38.1%)の方が多。その他、年代別と婚姻状態別では大阪市・神戸市とその近辺での居住経験(20代 15.3%、30代 23.5%/既婚 26.2%、未婚 15.7%)、性別では関西圏以外での居住経験(男性 55.2%、女性 43.8%)においてのみ、属性ごとで差がみられる。

表 13 居住経験地域と基本属性のクロス集計 (京都市)

京都市	居住歴		年代		性別		学歴		婚姻	
	Uターン	転入	20代	30代	男性	女性	大卒・短大卒	非大卒・短大卒	既婚	未婚
現在住んでいる地域を除く京都市とその近辺	35.0	39.2	36.3	39.4	35.1	39.9	33.9	48.5	41.1	36.1
大阪市・神戸市とその近辺	26.0	18.3	15.3	23.5	20.9	20.7	23.4	13.4	26.2	15.7
上記を除く関西	20.0	28.3	25.0	26.2	29.1	23.6	25.8	25.8	24.4	27.1
関西以外	38.0	52.1	49.2	47.1	55.2	43.8	51.2	38.1	48.8	46.4
海外	18.0	4.6	4.8	10.4	6.7	9.6	10.5	2.1	8.3	7.2
N	100	240	124	221	134	208	248	97	168	166

注) DK・NAの場合があるため、各変数の合計が一致しない場合がある。

(3) 4地域間の比較

これまで住んだことのある地域について、他地域と比較した際に特徴的と思われる点について列挙しておこう。4地域それぞれで選択肢が異なるため一概に比較することはできないものの、表 8 と表 9 で示した単純集計を同様のスケール(となるように考慮した選択肢)で並べて再掲したものが表 14 である。

表 14 を概観する限り、「B 中枢拠点都市およびその周辺」（条件不利地域圏で高い）および「D 北海道以外・関西以外」（地方中枢拠点都市圏で高い）については、条件不利地域圏／地方中枢拠点都市圏で異なっているが、「C 上記以外の北海道内・関西内」（北海道で高い）は北海道／京都で大きな差がみられる。また、「A 現在住んでいる市町村・地域を除く圏域内」については京都北部のみ他の 3 地域に比べて低かった。「E 海外」は総じて少ないものの、京都市で比較的多い。このように、これまでに住んだことのある地域については、単純に条件不利地域圏／地方中枢拠点都市圏の区別で説明されるわけではなく、北海道／京都の違いや各地域の特性の影響を考慮する必要があるようである。

表 14 居住経験地域の単純集計（4 地域）

	オホーツク		札幌市		京都北部		京都市	
	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)
A 現住市町村・地域以外の圏域内	36.3	(219)	34.4	(187)	23.1	(95)	38.3	(133)
B 中枢拠点都市およびその周辺	40.0	(241)	11.8	(64)	56.9	(234)	20.7	(72)
C 上記以外の北海道内・関西内	43.4	(262)	55.9	(304)	18.2	(75)	25.6	(89)
D 北海道以外・関西以外	28.4	(171)	39.7	(216)	32.1	(132)	47.6	(165)
E 海外	2.5	(15)	4.4	(24)	2.2	(9)	8.4	(29)
N	603		544		411		347	

あわせて、基本属性（居住歴、年代、性別、学歴、婚姻状態）によって、住んだことのある地域に違いがみられるのかを整理しておこう。表 10～表 13 の居住経験地域と基本属性のクロス集計の結果をもとに、各属性間で 10 ポイント以上の差があった項目のみを抜粋して記載したものが表 15 である。

表 15 を概観して目を引くのは、第一に京都北部を除く 3 地域（オホーツク、札幌市、京都市）において、学歴による違いが顕著にみられる点である。最も狭域である「A 現在住んでいる市町村・地域を除く圏域内」においては、非大卒・短大卒層の方が高いのに対して、（海外を除いて）最も広域の「D 北海道以外・関西以外」での居住経験は大卒・短大卒層の方が高い。つまり、（京都北部を除いて）学歴が低い場合にはより狭域に留まり、大卒・短大卒の学歴を有する者ほど北海道や関西を越えるような広域な移動（居住経験）をする機会が多い傾向が読み取れる。とくにオホーツクにおいては、大卒・短大卒か非大卒・短大卒かによって、オホーツク管内／管外での居住経験の比率に明確な差異がある。

第二に指摘できるのは、北海道や関西を越える広域な移動（居住経験）については、すべての地域で男性の方が女性よりも多いという点である。京都北部における「B 中枢拠点都市およびその周辺（大阪市・神戸市とその近辺）」以外では性別による差異はみられなかったことにくわえて、居住歴と性別のクロス分析でいずれの地域においても統計的に有意な差が認められなかったこと（前節の表 4 を参照）をふまえれば、移動経験そのもの（出身市町村や「地元」を離れるか否か）に性差はないものの、移動範囲は性別によって異なることが示唆される。

第三には、基本属性と居住経験地域との関連において、京都北部がほかの地域とやや異なる特徴がみられる点である。上記でも述べたように学歴の高低と移動（居住経験）の広狭が連関していないことにくわえ、女性や未婚者の方が「B 中枢拠点都市およびその周辺（京都市・大阪市・神戸市とその近辺）」で暮らしたことのあるという割合が高いことが読み取れる。また、居住歴と性別との関連を確認すると前節

の表4に示したとおり、京都北部における女性のUターン層の割合は47.7%と、京都北部のなかでは最も高い値となっている。これらをふまえて示唆されるのは、京都北部においては、学歴の高低にかかわらず近くの都市部へ進学・就職のために移動するものの、未婚のままUターンする女性層の存在が他の3地域と比較すると多く表出していることである。

以上、居住経験地域と基本属性との関連について、4地域を比較するなかで3点ほど着目し、検討をおこなった。いずれも今後より詳細な検討が不可欠なのはいうまでもない。その際、全ての地域で共通するような特徴を描き出すことと同時に、条件不利地域圏/地方中枢拠点都市圏あるいは北海道/京都の差異、各地域固有の状況や特性を念頭に置いた分析が必要となる。

表15 基本属性と居住経験地域の関連まとめ(4地域)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
A 現住市町村・ 地域以外の圏域内	大卒・短大卒<非大卒・短大卒 未婚<既婚	20代<30代 大卒・短大卒<非大卒・短大卒 未婚<既婚	Uターン<転入	大卒・短大卒<非大卒・短大卒
B 中枢拠点都市 およびその周辺	転入<Uターン 20代<30代 非大卒・短大卒<大卒・短大卒		転入<Uターン 男性<女性 既婚<未婚	非大卒・短大卒<大卒・短大卒 未婚<既婚
C 上記以外の 北海道内・関西内	非大卒・短大卒<大卒・短大卒			
D 北海道以外・ 関西以外	Uターン<転入 女性<男性 非大卒・短大卒<大卒・短大卒	転入<Uターン 女性<男性 非大卒・短大卒<大卒・短大卒	女性<男性	Uターン<転入 女性<男性 非大卒・短大卒<大卒・短大卒
E 海外				転入<Uターン

注) 10ポイント以上差があった項目のみを記載した。

3. 現住地域への流入(Uターン/転入)理由

「現住地域への流入(Uターン/転入)理由」については、「問9-2:あなたが現在住んでいる地域に戻ってきた理由、または転入してきた理由は何ですか。最も重要であると考えるものに○をつけてください。(○は1つ)」で尋ねた。なお、この設問も問9で「2(=Uターン)」または「3(=転入)」と回答した場合のみ該当する枝問である。選択肢は7つである(1. 自身の実家があるため(あるいは実家に関わる土地、墓があるため)/2. 自身の就学のため/3. 自身の就職・転職・転勤のため/4. 自身の結婚・同棲のため/5. 上記以外の家族の都合のため/6. 友人・知人がいるため/7. その他)。なお、本章では紙幅の都合上、表16の変数名を用いて図示・記述する。

表 16 現住地域への流入（Uターン／転入）理由の選択肢

選択肢	
実家関連	自身の実家があるため（あるいは実家に関わる土地、墓があるため）
就学関連	自身の就学のため
仕事関連	自身の就職・転職・転勤のため
結婚関連	自身の結婚・同棲のため
家族都合	上記以外の家族の都合のため
友人知人	友人・知人がいるため
その他	その他

(1) 単純集計

それぞれの地域ごとの単純集計の結果を確認しておこう（図 2）。一瞥して明らかなのは、いずれの地域においても仕事関連（自身の就職・転職・転勤のため）が、現在住んでいる地域に流入（Uターン／転入）してきた最も重要な理由としてあげられていることである（オホーツク 40.7%、札幌市 34.5%、京都北部 36.7%、京都市 30.7%）。逆に、友人・知人がいることを最重要としてあげた割合は、いずれの地域も 1%に満たない（オホーツク 0.8%、札幌市 0.9%、京都北部 0.8%、京都市 0.4%）。また、結婚関連（自身の結婚・同棲のため）もいずれの地域においても、10%強という一定の割合であげられていることは見落とせないだろう（オホーツク 12.5%、札幌市 11.6%、京都北部 12.2%、京都市 14.8%）。

対して、条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）と地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）とで差異がみられた流入理由は、実家関連、就学関連である。条件不利地域圏では実家関連（自身の実家があるため（あるいは実家に関わる土地、墓があるため））を最重要の理由とあげた割合が、オホーツクと京都北部ともに、仕事関連に次いで多い（オホーツク 22.0%、京都北部 29.3%）。京都市も実家関連を最重要の流入理由にあげた割合が仕事関連に次いで多いものの、ここでは京都市と札幌市という地方中枢拠点都市圏において、実家関連と就学関連（自身の就学のため）がほぼ同じ割合であったことの方が、特徴として指摘できよう（札幌市：実家関連 12.8%、就学関連 12.1%／京都市：実家関連 18.1%、就学関連 17.3%）。大学などの高等教育機関の数が少ない条件不利地域圏では就学関連は約 7%にとどまっており（オホーツク 7.5%、京都北部 7.2%）、札幌市とは約 5 ポイント、京都市とは約 10 ポイントも異なっている。

家族都合（上記以外の家族の都合のため）については、おおむね地方中枢拠点都市圏で多く（札幌市 23.3%、京都市 14.8%）、条件不利地域圏で少ない傾向にあるように思われる（オホーツク 13.1%、京都北部 14.8%）。ただし、札幌市における割合の多さが際立つ一方、オホーツクと京都市が同じような割合である。この点をふまえると、もう少し詳しく検討する必要があるだろう。そこで以下では、基本属性とのクロス分析をおこなう。

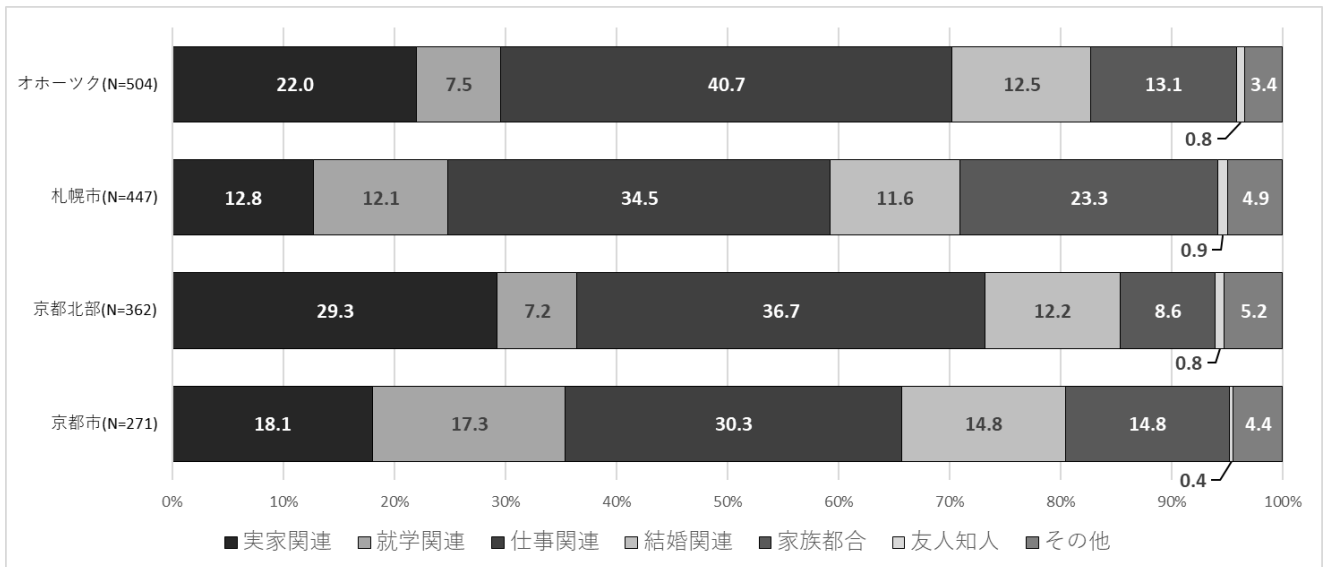


図2 Uターンあるいは転入した理由の単純集計 (単位：%)

(2) 現住地域への流入理由と基本属性

続いてクロス分析をおこない、現在住んでいる地域に流入した理由と基本属性（居住歴、年代、性別、学歴、婚姻状態）との関連を検討する。

現在住んでいる地域への流入理由と居住歴（Uターン／転入）とのクロス分析の結果は、表17のとおりである。4つの地域すべてにおいて、両者の間に統計的に有意な関連がみられる。すべての地域においてUターン層で実家関連が多く、転入層で結婚関連が多い傾向がみられる。また、オホーツクと京都市で就学関連において、オホーツク以外の3地域（札幌市、京都北部、京都市）で仕事関連において、明確にUターン層より転入層の方が高い傾向にある。以上、おおむねいずれの地域においてもUターン層では実家関連が、転入層では仕事関連、結婚関連、就学関連が、現在住んでいる地域への最も重要な流入理由となっているといえる。

表17 現住地域への流入理由と居住歴（Uターン／転入）とのクロス分析

		実家 関連	就学 関連	仕事 関連	結婚 関連	家族 都合	友人 知人	その他
オホーツク***	Uターン(N=121)	29.8	3.3	33.1	6.6	19.8	0.8	6.6
	転入(N=312)	6.4	15.4	34.9	14.1	24.0	0.6	4.5
札幌市***	Uターン(N=241)	41.1	5.8	34.0	4.1	9.1	0.8	5.0
	転入(N=251)	3.2	9.2	48.2	20.7	16.3	0.8	1.6
京都北部***	Uターン(N=203)	46.3	4.4	28.6	4.9	8.4	1.0	6.4
	転入(N=156)	6.4	10.9	48.1	21.8	9.0	0.6	3.2
京都市***	Uターン(N=78)	42.3	5.1	26.9	5.1	15.4	1.3	3.8
	転入(N=190)	7.9	22.6	32.1	17.9	14.7	0.0	4.7

オホーツク： $\chi^2(6)=52.977$, Cramer's V=0.350, $p<.001$

札幌市： $\chi^2(6)=125.105$, Cramer's V=0.504, $p<.001$

京都北部： $\chi^2(6)=85.055$, Cramer's V=0.487, $p<.001$

京都市： $\chi^2(6)=55.615$, Cramer's V=0.456, $p<.001$

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

現在住んでいる地域への流入理由と年代（20代／30代）とのクロス分析の結果は、表18のとおりである。オホーツク、京都北部、京都市の3つの地域では両者の間に統計的に有意な関連がみられる。3地域いずれも20代では就学関連が、30代では結婚関連が多い傾向にあるといえる。仕事関連については、条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）では20代の方が、地方中枢拠点都市圏の京都市では30代の方が多く、逆に家族都合については条件不利地域圏では30代が、京都市では20代の方が多く傾向にある。他方、札幌市では両者の間に統計的に有意な関連はみられなかった。

就学関連については学生が含まれる点で20代が、結婚関連については平均初婚年齢（北海道：男性30.8歳、女性29.5歳／京都府：男性31.5歳、女性30.0歳）⁶に到達する点で30代が多いことが説明できると思われる。対して、仕事関連および家族都合が条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏で異なる点と、札幌市のみ統計的に有意な関連が認められなかった点については一概に説明できないため、今後詳しい検討が求められる。

表18 現住地域への流入理由と年代（20代／30代）とのクロス分析

		実家 関連	就学 関連	仕事 関連	結婚 関連	家族 都合	友人 知人	その他
オホーツク***	20代(N=190)	22.1	13.2	43.7	7.9	8.9	1.6	2.6
	30代(N=306)	22.5	4.2	37.9	15.7	15.4	0.3	0.9
札幌市 n.s.	20代(N=165)	12.7	12.1	34.5	6.7	28.5	1.2	4.2
	30代(N=275)	12.7	12.4	34.2	14.9	19.6	0.7	5.5
京都北部***	20代(N=137)	26.3	14.6	43.8	5.1	5.1	0.0	5.1
	30代(N=220)	31.4	2.7	31.8	16.8	10.5	1.4	5.5
京都市**	20代(N=95)	18.9	26.3	25.3	8.4	18.9	0.0	2.1
	30代(N=175)	17.1	12.6	33.1	18.3	12.6	0.6	5.7

オホーツク： $\chi^2(6)=25.316$, Cramer's $V=0.226$, $p<.001$

札幌市： $\chi^2(6)=10.024$, Cramer's $V=0.151$, n.s.

京都北部： $\chi^2(6)=34.554$, Cramer's $V=0.311$, $p<.001$

京都市： $\chi^2(6)=16.135$, Cramer's $V=0.244$, $p<.01$

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

現在住んでいる地域への流入理由と性別（男性／女性）とのクロス分析の結果は、表19のとおりである。4つの地域すべてにおいて、両者の間に統計的に有意な関連がみられ、男性で仕事、女性で結婚関連と家族都合が多い傾向にあるといえる。

⁶ 都道府県別の平均初婚年齢については、国立社会保障・人口問題研究所ホームページ『人口統計集（2020）』の「表12-35 都道府県、性別平均初婚年齢：1950～2018年」（2021年3月4日取得、http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2020.asp?fname=T12-35.htm&title1=%87%5D%87U%81D%93s%93%B9%95%7B%8C%A7%95CA%93%9D%8Cv&title2=%95%5C12%81%7C35+%93s%93%B9%95%7B%8C%A7%2C%90AB%95%CA%95%BD%8B%CF%8F%89%8D%A5%94N%97EE%81F1950%81%602018%94N)を参照した。

表 19 現住地域への流入理由と性別（男性／女性）とのクロス分析

		実家 関連	就学 関連	仕事 関連	結婚 関連	家族 都合	友人 知人	その他
オホーツク***	男性(N=227)	18.9	8.4	57.3	3.1	8.4	0.9	3.1
	女性(N=270)	24.8	6.7	25.9	20.7	17.4	0.7	3.7
札幌市**	男性(N=181)	13.8	9.9	44.2	9.4	16.0	1.7	5.0
	女性(N=261)	11.9	13.8	27.6	13.4	28.0	0.4	5.0
京都北部***	男性(N=157)	32.5	4.5	49.7	3.2	3.8	1.3	5.1
	女性(N=201)	26.9	9.5	26.4	19.4	11.9	0.5	5.5
京都市**	男性(N=110)	16.4	18.2	43.6	8.2	9.1	0.0	4.5
	女性(N=157)	19.1	17.2	21.0	19.7	17.8	0.6	4.5

オホーツク： $\chi^2(6) = 70.591$, Cramer's $V = 0.377$, $p < .001$

札幌市： $\chi^2(6) = 20.184$, Cramer's $V = 0.214$, $p < .01$

京都北部： $\chi^2(6) = 43.525$, Cramer's $V = 0.349$, $p < .001$

京都市： $\chi^2(6) = 21.162$, Cramer's $V = 0.282$, $p < .01$

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

現在住んでいる地域への流入理由と学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）とのクロス分析の結果は、表 20 のとおりである。札幌市、京都北部、京都市の 3 つの地域では両者の間に統計的有意な関連がみられる。3 地域いずれも大卒・短大卒層では就学関連と仕事関連が、非大卒・短大卒層では実家関連と結婚関連、家族都合が多い傾向にある。他方、オホーツクでは両者の間に統計的に有意な関連はみられなかった。

表 20 現住地域への流入理由と学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）とのクロス分析

		実家 関連	就学 関連	仕事 関連	結婚 関連	家族 都合	友人 知人	その他
オホーツク n.s.	大卒・短大卒(N=246)	11.4	13.0	35.8	11.8	23.6	0.0	4.5
	非大卒・短大卒(N=199)	14.6	11.1	33.2	11.6	22.1	2.0	5.5
札幌市***	大卒・短大卒(N=238)	20.1	10.5	49.2	10.9	7.1	0.0	2.1
	非大卒・短大卒(N=263)	24.0	4.9	32.3	14.1	18.6	1.5	4.6
京都北部*	大卒・短大卒(N=207)	29.0	10.6	36.7	11.6	8.7	1.0	2.4
	非大卒・短大卒(N=152)	30.3	2.6	36.2	13.2	7.9	0.7	0.7
京都市**	大卒・短大卒(N=195)	15.9	21.5	34.4	12.8	10.3	0.5	4.6
	非大卒・短大卒(N=75)	24.0	6.7	20.0	18.7	26.7	0.0	4.0

オホーツク： $\chi^2(6) = 8.227$, Cramer's $V = 0.123$, n.s.

札幌市： $\chi^2(6) = 34.041$, Cramer's $V = 0.261$, $p < .001$

京都北部： $\chi^2(6) = 15.781$, Cramer's $V = 0.210$, $p < .05$

京都市： $\chi^2(6) = 24.078$, Cramer's $V = 0.299$, $p < .01$

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

現在住んでいる地域への流入理由と婚姻状態（既婚／未婚）とのクロス分析の結果は、表 21 のとおりである。4 つの地域すべてにおいて、両者の間に統計的に有意な関連がみられ、既婚者は結婚関連が、未婚者は実家関連と就学関連が多い傾向にある。また、オホーツク以外の 3 つの地域（札幌市、京都北部、京都市）において、未婚者は仕事関連が多い。

他方、家族都合については、オホーツクと京都市では未婚者の方が、札幌市と京都北部では既婚者の方が多い傾向にある。ただし、この点については北海道／京都府、条件不利地域圏／地方中枢拠点都市圏で明確に区分して一概に配偶者や両親と関連付けて説明することが難しいため、今後詳細な検討が求められる。

表 21 現住地域への流入理由と婚姻状態（既婚／未婚）とのクロス分析

		実家 関連	就学 関連	仕事 関連	結婚 関連	家族 都合	友人 知人	その他
オホーツク***	既婚(N=204)	10.3	9.8	35.3	21.6	18.6	0.5	3.9
	未婚(N=222)	14.4	14.0	35.1	1.8	27.5	1.4	5.9
札幌市***	既婚(N=248)	17.3	3.6	37.1	21.8	15.7	1.2	3.2
	未婚(N=227)	26.9	12.8	45.8	2.6	9.7	0.0	2.2
京都北部***	既婚(N=165)	25.5	3.0	32.7	24.8	9.1	1.2	3.6
	未婚(N=176)	31.8	11.4	42.0	0.6	8.5	0.6	5.1
京都市***	既婚(N=129)	11.6	12.4	27.9	27.9	13.2	0.8	6.2
	未婚(N=133)	24.8	21.8	32.3	3.0	16.5	0.0	1.5

オホーツク： $\chi^2(6) = 45.083$, Cramer's V=0.325, $p < .001$

札幌市： $\chi^2(6) = 60.396$, Cramer's V= 0.357, $p < .001$

京都北部： $\chi^2(6) = 52.854$, Cramer's V= 0.394, $p < .001$

京都市： $\chi^2(6) = 41.916$, Cramer's V=0.400, $p < .001$

注) χ^2 検定：「***」は $p < .001$ 、「**」は $p < .01$ 、「*」は $p < .05$ 、「n.s.」は有意差なし。

(3) 小括および4地域間の比較

ここまでの主な結果を整理しよう。現在住んでいる地域に流入（Uターン／転入）してきた最も重要な理由として最も多くあげられていたのは、いずれの地域においても仕事関連（自身の就職・転職・転勤のため）であった。対して、条件不利地域圏（オホーツク、京都北部）では実家関連が次いで多いことが、地方中枢拠点都市圏（札幌市、京都市）では実家関連と就学関連がほぼ同程度の割合となっていることが、異なる点としてあげられよう。

現在住んでいる地域に流入してきた理由と基本属性とのクロス分析の結果を整理したものが、表 22 である。この表をみるかぎり、現在住んでいる地域に流入してきた理由と基本属性との関連性の有無について、いずれの地域においてもおおむねすべての属性で関連があるといえる。そのため、条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏とで明確な違いがみられるとは言い難い。とりわけ居住歴（Uターン層における実家関連の割合が高い）と婚姻状態（既婚者における結婚関連の割合が高い）については、すべての地域で現住地域への流入理由との関連の強さを指摘できる（クラメールの関連係数：[居住歴] オホーツク 0.350、札幌市 0.504、京都北部 0.487、京都市 0.456／[婚姻状態] オホーツク 0.325、札幌市 0.357、京都北部 0.394、京都市 0.400）。むしろ、北海道と京都で異なる（京都の2地域はいずれも関連がある一方で、オホーツクは学歴、札幌市は年代で統計的に有意な差がなかった）。

ただし、関連性の強弱という観点からみると、条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏で異なる傾向がありそうである。条件不利地域圏では性別（クラメールの関連係数：オホーツク 0.377、京都北部 0.349、札幌市 0.214、京都市 0.282）と年代（クラメールの関連係数：オホーツク 0.226、京都北部 0.311、札幌市 0.151、京都市 0.244）との関連が、地方中枢拠点都市圏では学歴との関連が相対的に強いといえる（ク

ラメールの関連係数：札幌市 0.261、京都市 0.299、オホーツク 0.123、京都北部 0.210)。とはいえ、その解釈には留意が必要となる。というのも、性別についてはいずれの地域もおおむね共通の傾向がみられるが（男性は仕事関連、女性は実家関連と結婚関連、家族都合が高い）、年代と学歴については関連の有無も含めて条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏で傾向が異なったりするためである（たとえば仕事関連については条件不利地域圏のオホーツクと京都北部では 20 代の方が高いが、地方中枢拠点都市圏の京都市では 30 代の方が高い一方、家族都合については条件不利地域圏では 30 代の方が高く地方中枢拠点都市圏では 20 代の方が高い）。

表 22 基本属性と現住地域への流入理由との関連まとめ（4 地域）

		居住歴	婚姻	性別	年代	学歴
条件不利地域圏	オホーツク	◎	◎	◎	◎	—
	京都北部	◎	◎	◎	◎	△
地方中枢拠点都市圏	札幌市	◎	◎	○	—	◎
	京都市	◎	◎	○	○	○

注) カイ2乗検定の結果、統計的に有意な差があったものについては「◎」（0.1%水準）、「○」（1%水準）、「△」（5%水準）、統計的有意差がなかったものは「—」と表記。

4. 現住地域における居住年数

「現住地域における居住年数」については、「問 1：現在住んでいる地域で何年暮らしていますか。（通算年数）」で尋ね、「およそ□年」という形式で、回答者全員に数字を記入してもらった。

(1) 平均居住年数

まず、地域ごとに回答者の通算居住年数の平均値や度数分布を確認しておこう。それぞれの地域の平均居住年数は、表 23 に示したとおりである。オホーツクの回答者における現住地域での居住年数の平均が 17.7 年、京都北部の平均が 17.8 年、京都市の平均が 17.2 年、札幌市の平均が 16.5 年である。四分位数の値をふまえると、条件不利地域圏のオホーツクと京都北部では現住地域での平均居住年数が比較的長い一方、地方中枢拠点都市圏の札幌市は比較的 average 居住年数が短いことが読み取れる。京都市については、第 2 四分位数が 17 年と条件不利地域圏のオホーツクと京都北部（20 年）より札幌市（15 年）に近いものの、第 1 四分位数と第 3 四分位数はオホーツクと京都北部と同様であることから、現住地域での居住年数が比較的短い層の方がやや多いものの、居住年数が長い層も一定の割合いるような分布になっていることが想定される。

表 23 現住地域における居住年数の平均（4 地域）

	平均値	標準偏差	四分位数			N
			25%	50%	75%	
オホーツク	17.7	12.4	5	20	28	792
札幌市	16.5	11.2	6	15	25	747
京都北部	17.8	11.8	5	20	28	527
京都市	17.2	12.0	5	17	28	508

それぞれの地域の度数分布(比率)について、図示したものが図3である。このグラフを概観する限り、すべての地域で共通して①1年～5年、②(オホーツクと京都市がやや低い)10年、③20年、④30年の大きく4つの山(約5～8%)を確認することができる。加えて、⑤札幌市と京都市の15年、⑥京都北部の22～23年、⑦オホーツクの35年と、それぞれの地域でも目を引く山が確認できる(4%程度)。ただし、現在住んでいる地域での居住年数は年齢もそうだが、回答者の居住歴(土着(定住)／Uターン／転入)と大きく異なることが想定される。そこで以下では、居住歴ごとに現住地域での居住年数の特徴を確認したい。

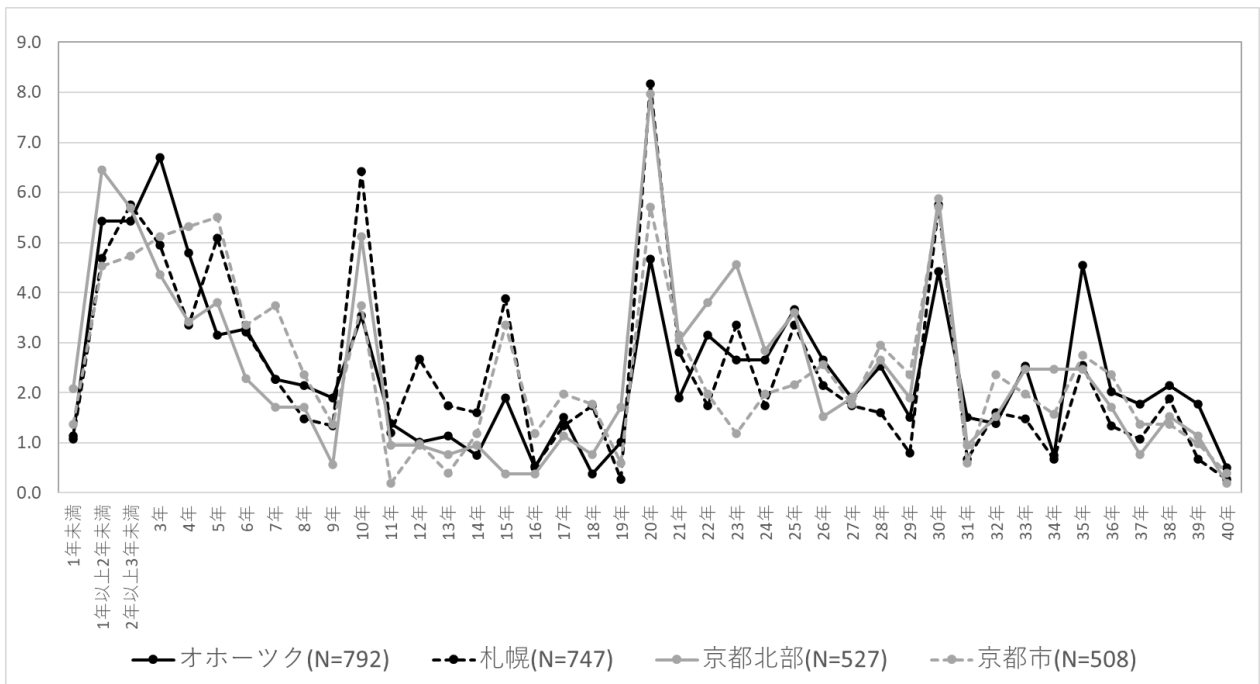


図3 現住地域における居住年数の分布

(2) 居住歴別の現住地域における居住年数

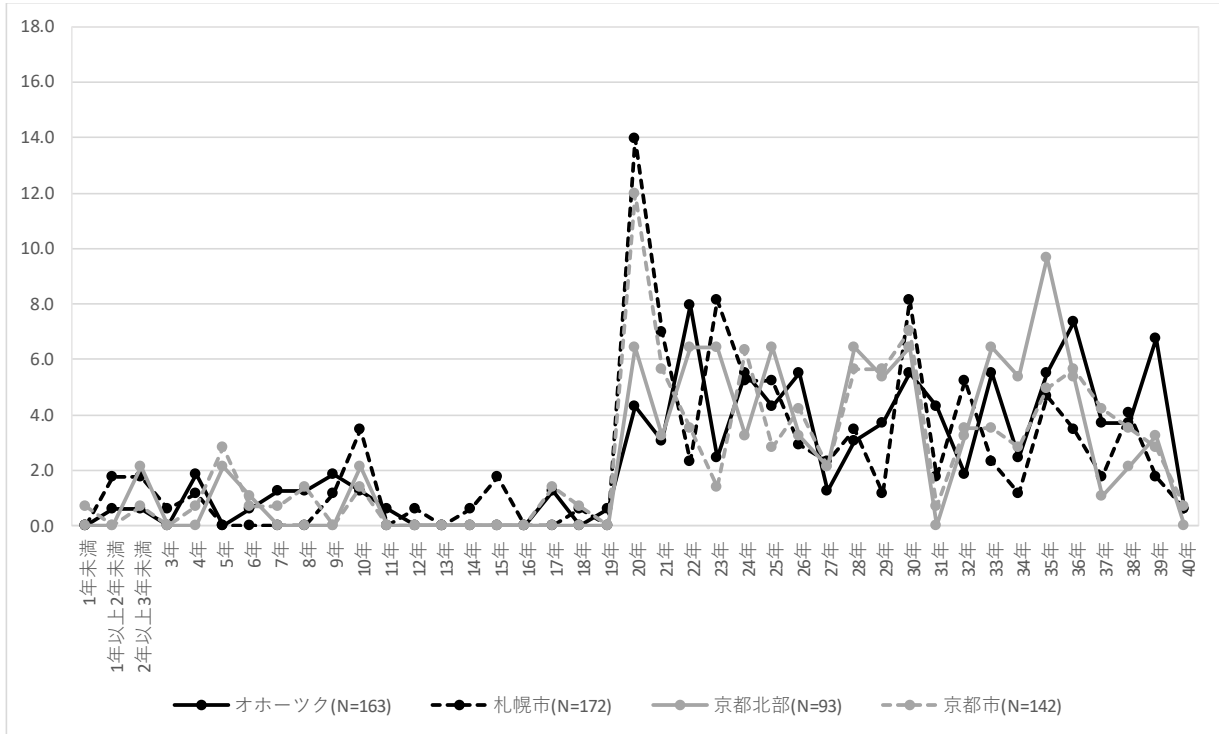
現在住んでいる地域での居住年数について、居住歴(土着(定住)／Uターン／転入)によって異なるのかを確認するために、一元配置分散分析をおこなった結果を表24に示した。いずれの地域においても、土着(定住)層とUターン層、土着(定住)層と転入層、Uターン層と転入層のそれぞれで、現住地域での平均居住年数に統計的に有意な差がある(オホーツク:土着(定住)27.4年、Uターン23.0年、転入7.1年/札幌市:土着(定住)24.8年、Uターン20.2年、転入10.5年/京都北部:土着(定住)27.2年、Uターン22.3年、転入6.6年/京都市:土着(定住)26.3年、Uターン22.9年、転入9.2年)。これらの結果からは、条件不利地域圏のオホーツクと京都北部はほぼ同一の特徴であること、地方中枢拠点都市圏の札幌市と京都市では転入層の平均居住年数が条件不利地域圏の転入層より約2～3年長いこと、札幌市の土着(定住)層とUターン層の平均居住年数は他の3地域に比べるとおよそ2年前後短いことの3点が指摘できるだろう。

表 24 現在住んでいる地域での居住年数についての分散分析表（4 地域）

オホーツク	平均	標準偏差	<i>N</i>	札幌市	平均	標準偏差	<i>N</i>
土着（定住）	27.4	9.1	163	土着（定住）	24.8	8.9	172
Uターン	23.0	10.4	290	Uターン	20.2	11.3	157
転入	7.1	6.6	298	転入	10.5	8.6	363
	17.6	12.4	751		16.2	11.2	692
$F(d.f.) = 371.159 (2, 748), p < .001$				$F(d.f.) = 155.463 (2, 689), p < .001$			

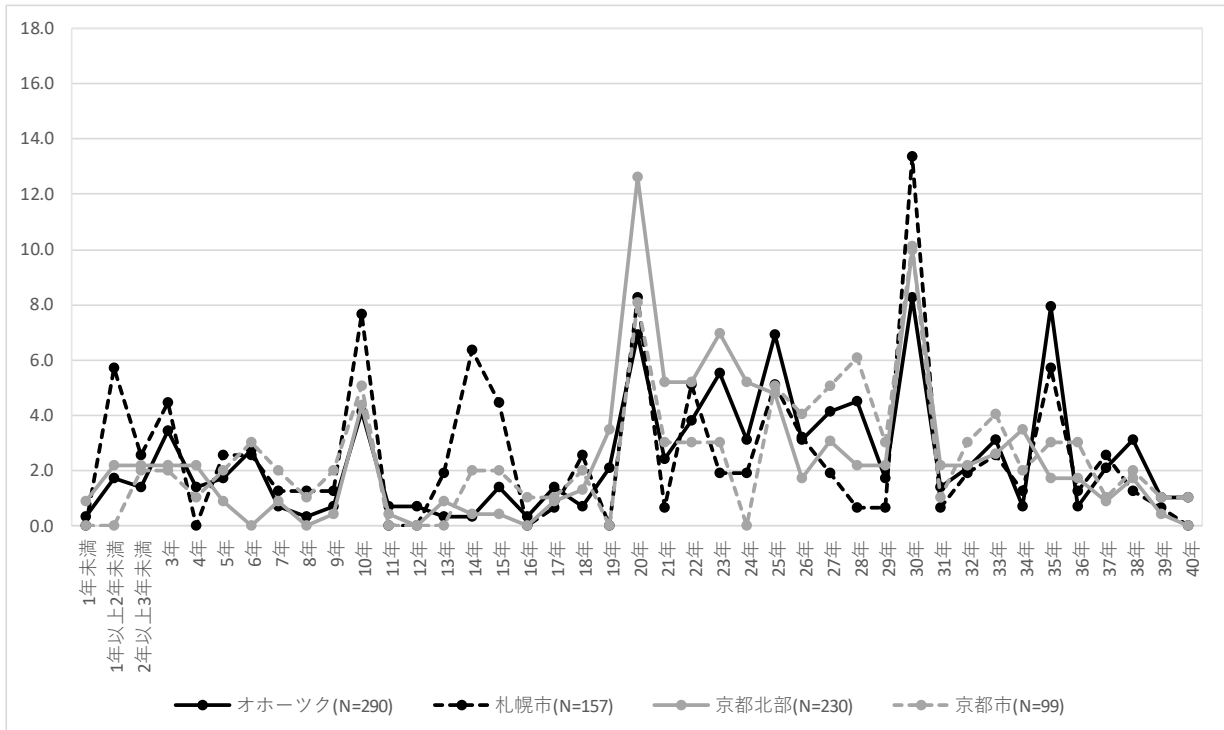
京都北部	平均	標準偏差	<i>N</i>	京都市	平均	標準偏差	<i>N</i>
土着（定住）	27.2	8.3	93	土着（定住）	26.3	8.9	142
Uターン	22.3	9.4	230	Uターン	22.9	10.1	99
転入	6.6	6.4	183	転入	9.2	8.3	242
	17.5	11.7	506		17.0	11.9	483
$F(d.f.) = 264.750 (2, 503), p < .001$				$F(d.f.) = 192.292 (2, 480), p < .001$			

併せて、居住歴（土着（定住）／Uターン／転入）ごとの現在住んでいる地域での居住年数の分布（比率）についてみておきたい。土着（定住）層を図4、Uターン層を図5、転入層を図6にまとめた。土着（定住）については、中枢拠点都市圏の札幌市と京都市で（およそ）20年という今回の調査対象の最年少の年齢層の割合が多くなっている一方、条件不利地域圏のオホーツクと京都北部では現在住んでいる地域での居住年数が30年以上という回答者の比率が比較的多いように思われる。Uターン層については、おおむね20年と30年に2つの山を中心として20年～30年の間が比較的多いが、札幌市でいくつか山が確認できるように、もう少し詳細に検討する必要があるだろう。そして転入層については、条件不利地域圏のオホーツクと京都北部を中心に、5年未満の割合がかなり多いのが特徴的であり、その多くが転勤を中心とした仕事関連を理由に転入してきた層だと思われる。他方、やや小さいが10年（京都北部、札幌市）、15年（京都市）、20年（札幌市）にも山がみられる。これは結婚・同棲といった結婚関連や（主に配偶者の転勤にともなった移動であると思われる）家族都合によって転入してきた層だと考えられる。



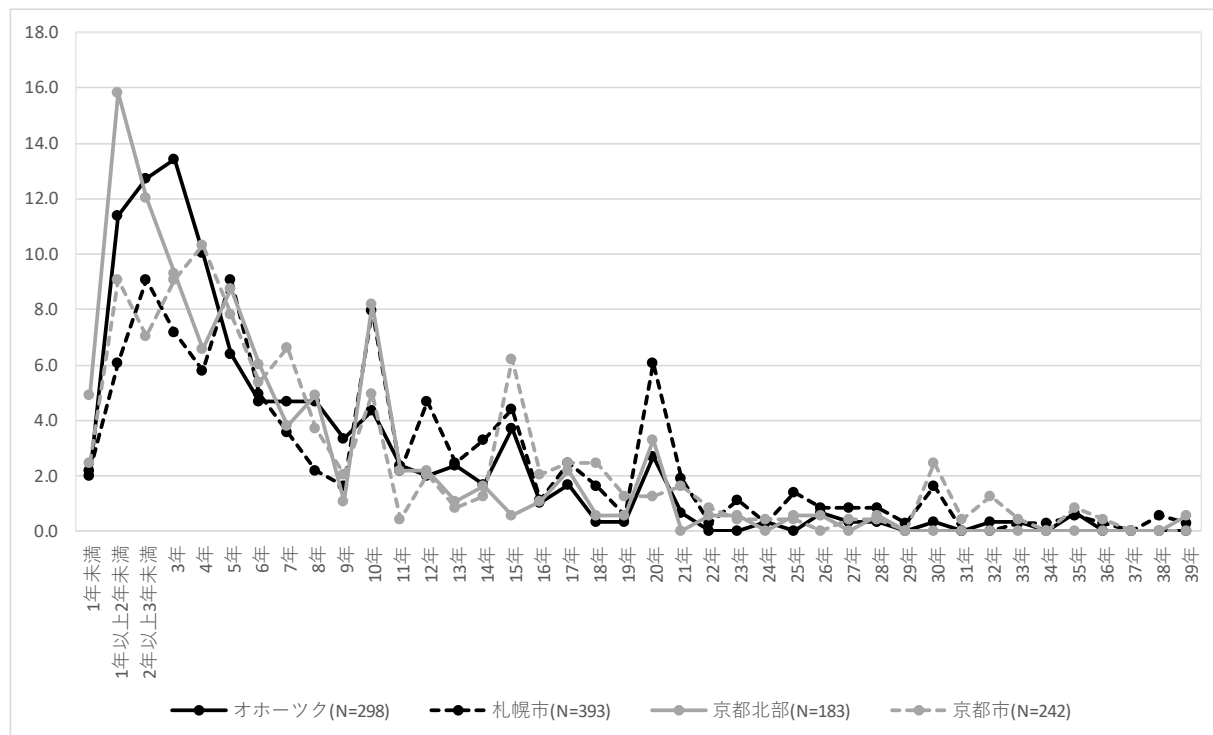
注) 居住歴の「DK・NA」があるため、全体のNとは一致していない。

図4 土着（定住）層の現住地域における居住年数の分布（4地域）



注) 居住歴の「DK・NA」があるため、全体のNとは一致していない。

図5 Uターン層の現住地域における居住年数の分布（4地域）



注) 居住歴の「DK・NA」があるため、全体のNとは一致していない。

図6 転入層の現住地域における居住年数の分布 (4地域)

5. Uターン希望

現在住んでいる地域の出身ではない転入者に、出身地域へのUターン希望の有無を検討する。問9(居住歴にかんする質問)で「3」と回答した転入層(=現在住んでいる地域以外の出身者)のみ該当する枝間で、「問10:あなたは、出身の地域に戻って暮らしたいと思いますか。(○は1つ)」という質問文で、4件法(戻りたい/やや戻りたい/やや戻りたくない/戻りたくない)によって尋ねた。

(1) 単純集計

まず、それぞれの地域ごとの単純集計の結果を確認しておこう(図7)。条件不利地域圏(オホーツク、京都北部)では出身地域に戻りたいという割合の方が多い(オホーツク:戻りたい 23.3%、やや戻りたい 34.2%/京都北部:戻りたい 20.3%、39.5%)。地方中枢拠点都市圏(札幌市、京都市)では逆に戻りたくないという割合が多い(札幌市:戻りたくない 30.2%、やや戻りたくない 28.6%/京都北部:戻りたくない 27.4%、やや戻りたくない 25.8%)。このように、出身地域へのUターン希望については、条件不利地域圏/地方中枢拠点都市圏で異なっており、条件不利地域圏在住の転入層は出身地域へ戻りたいと希望しており、逆に地方中枢拠点都市圏在住の転入層は出身地域に戻りたくないと考えている(あるいは現在住んでいる地域で暮らし続けたいと希望している)傾向があるといえよう。

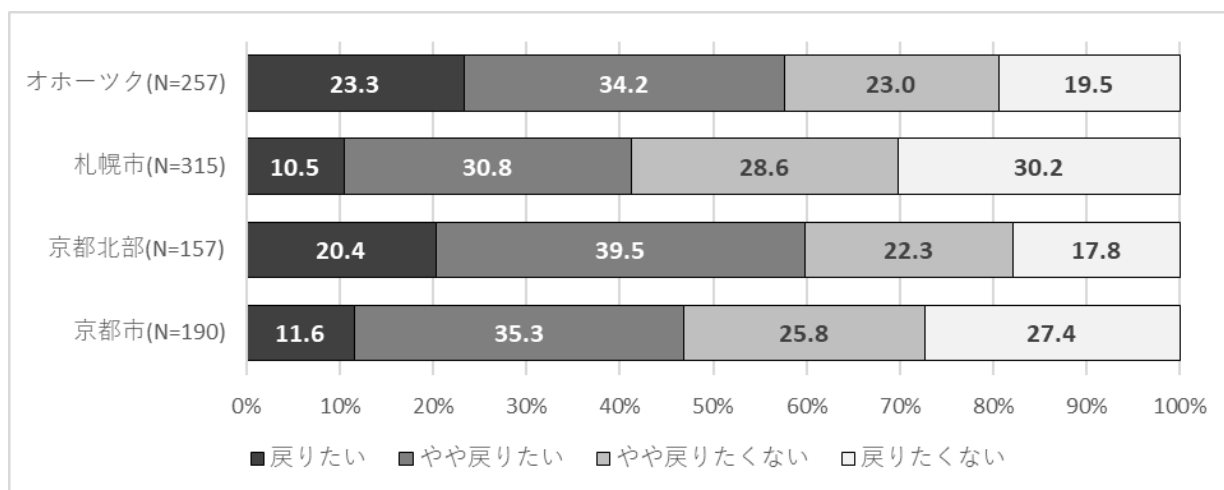


図7 出身地域へのUターン希望 (単位：%)

(2) 基本属性ごとのUターン希望

続いて、基本属性（年代、性別、学歴、婚姻状態）によって出身地域へのUターン希望の傾向が異なるのかを検討しよう。クロス分析の結果は、表25～表28に示した。いずれの地域においても出身地域へのUターン希望と年代、あるいは性別との間に統計的に有意な関連はみられなかった(表25および表26)。また、学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）では札幌市が、婚姻状態（既婚／未婚）では京都市が5%水準で統計的に有意な関連がみられる(表27および表28)。ただし、札幌市は「戻りたい」と「やや戻りたい」の、京都市は「戻りたくない」と「やや戻りたくない」の割合が異なっており、出身地域へのUターンを希望している割合（「戻りたい」と「やや戻りたい」の合計）と出身地域へのUターンを希望していない割合（「戻りたくない」と「やや戻りたくない」の合計）との間に差があるというわけではなかった。つまり、いずれの地域においても、出身地域へのUターン希望については、基本属性（年代、性別、学歴、婚姻状態）によって異なる傾向はないといえる。

表25 Uターン希望と年代（20代／30代）とのクロス分析

		戻りたい	やや戻りたい	やや戻りたくない	戻りたくない
オホーツク n.s.	20代(N=101)	22.8	34.7	25.7	16.8
	30代(N=151)	24.5	35.1	20.5	19.9
札幌市 n.s.	20代(N=118)	11.9	32.2	19.7	26.3
	30代(N=191)	9.4	29.8	28.8	31.9
京都北部 n.s.	20代(N=61)	23.0	37.7	26.2	13.1
	30代(N=96)	18.8	40.6	19.8	20.8
京都市 n.s.	20代(N=68)	13.2	39.7	27.9	19.1
	30代(N=120)	10.8	31.7	25.0	32.5

オホーツク： $\chi^2(3)=1.106$, Cramer's V=0.066, n.s.

札幌市： $\chi^2(3)=1.357$, Cramer's V=0.066, n.s.

京都北部： $\chi^2(3)=2.343$, Cramer's V=0.122, n.s.

京都市： $\chi^2(3)=3.980$, Cramer's V=0.145, n.s.

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

表 26 Uターン希望と性別（男性／女性）とのクロス分析

		戻りたい	やや 戻りたい	やや 戻りたくない	戻りたくない
オホーツク n.s.	男性(N=125)	22.4	33.6	28.0	16.0
	女性(N=127)	25.2	36.2	17.3	21.3
札幌市 n.s.	男性(N=124)	13.7	31.5	24.2	30.6
	女性(N=186)	8.6	30.1	32.3	29.0
京都北部 n.s.	男性(N=77)	22.1	35.1	23.4	19.5
	女性(N=80)	18.8	43.8	21.3	16.3
京都市 n.s.	男性(N=79)	8.9	35.4	31.6	24.1
	女性(N=107)	14.0	33.6	22.4	29.9

オホーツク： $\chi^2(3)=4.440$, Cramer's V=0.133, n.s.

札幌市： $\chi^2(3)=3.599$, Cramer's V=0.108, n.s.

京都北部： $\chi^2(3)=1.272$, Cramer's V=0.090, n.s.

京都市： $\chi^2(3)=3.098$, Cramer's V=0.129, n.s.

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

表 27 Uターン希望と学歴（大卒・短大卒／非大卒・短大卒）とのクロス分析

		戻りたい	やや 戻りたい	やや 戻りたくない	戻りたくない
オホーツク n.s.	大卒・短大卒(N=141)	25.5	30.5	27.0	17.0
	非大卒・短大卒(N=115)	20.9	39.1	17.4	22.6
札幌市*	大卒・短大卒(N=179)	15.1	26.8	29.1	29.1
	非大卒・短大卒(N=133)	4.5	36.1	28.6	30.8
京都北部 n.s.	大卒・短大卒(N=88)	19.3	42.0	26.1	12.5
	非大卒・短大卒(N=69)	21.7	36.2	17.4	24.6
京都市 n.s.	大卒・短大卒(N=137)	11.7	37.2	27.7	23.4
	非大卒・短大卒(N=51)	11.8	29.4	21.6	37.3

オホーツク： $\chi^2(3)=5.528$, Cramer's V=0.147, n.s.

札幌市： $\chi^2(3)=10.284$, Cramer's V=0.182, $p<.05$

京都北部： $\chi^2(3)=4.964$, Cramer's V=0.178, n.s.

京都市： $\chi^2(3)=3.835$, Cramer's V=0.143, n.s.

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

表 28 Uターン希望と婚姻状態（既婚／未婚）とのクロス分析

		戻りたい	やや 戻りたい	やや 戻りたくない	戻りたくない
オホーツク n.s.	既婚(N=150)	26.0	34.0	19.3	20.7
	未婚(N=98)	20.4	36.7	27.6	15.3
札幌市 n.s.	既婚(N=158)	11.4	266.0	30.4	31.6
	未婚(N=145)	9.7	34.5	29.0	26.9
京都北部 n.s.	既婚(N=77)	18.2	41.6	19.5	20.8
	未婚(N=72)	22.2	34.7	27.8	15.3
京都市*	既婚(N=90)	12.2	35.6	17.8	34.4
	未婚(N=94)	11.7	34.0	34.0	20.2

オホーツク： $\chi^2(3)=3.596$, Cramer's V=0.120, n.s.

札幌市： $\chi^2(3)=2.402$, Cramer's V=0.089, n.s.

京都北部： $\chi^2(3)=2.468$, Cramer's V=0.129, n.s.

京都市： $\chi^2(3)=8.130$, Cramer's V=0.210, $p<.05$

注) χ^2 検定：「***」は $p<.001$ 、「**」は $p<.01$ 、「*」は $p<.05$ 、「n.s.」は有意差なし。

6. 進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響

最後に、「進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響」について検討する。これは「F8：あなたにとって、以下の教育は進路決定の参考となりましたか。(あてはまるものすべてに○)」で尋ねた⁷。4つの選択肢から複数回答で選んでもらっている(1. キャリア教育(インターンシップや職業体験活動など)が参考となった/2. ふるさと教育(郷土理解、地域への愛着や誇りを育む教育など)が参考となった/3. キャリア教育もふるさと教育も進路決定の参考とならなかった/4. キャリア教育もふるさと教育も受けたことがない)。ここから、①回答が「1」～「3」か「4」かによってキャリア教育・ふるさと教育と受けたことがあるか(受けた認識・記憶があるか)否か、②回答が「1」～「2」か「3」かによってキャリア教育・ふるさと教育が進路決定の参考になったか否かが区別される。

「進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響」について、地域ごとにまとめたものが表29である。その結果をみると、いずれの地域においても京都府の方がやや多いものの、キャリア教育(インターンシップや職業体験活動など)が進路決定の参考となったという割合がおおよそ20%前後(オホーツク19.6%、札幌市21.1%、京都北部22.4%、京都市24.3%)、ふるさと教育(郷土理解、地域への愛着や誇りを育む教育など)が参考となったという割合は2～5%程度であった(オホーツク3.2%、札幌市2.0%、京都北部5.2%、京都市5.1%)。対して、キャリア教育もふるさと教育も参考とならなかったという割合は条件不利地域圏では20%前後(オホーツク20.1%、京都北部18.8%)だが、地方中枢拠点都市圏ではそれよりも低い(札幌市9.2%、京都市15.3%)。とはいえやはり、キャリア教育もふるさと教育も受けたことがない(あるいは受けたという認識がない)という人びとが、いずれの地域でも共通して半数以上を占めるということが最も目を引く(オホーツク58.1%、札幌市67.9%、京都北部56.0%、京都市58.8%)。

表29 進路決定におけるキャリア教育・ふるさと教育の影響についての度数分布表

	オホーツク (N=408)		札幌市 (N=346)		京都北部 (N=250)		京都市 (N=177)	
	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)
キャリア教育が参考となった	19.6	(80)	21.1	(73)	22.4	(56)	24.3	(43)
ふるさと教育が参考となった	3.2	(13)	2.0	(7)	5.2	(13)	5.1	(9)
キャリア教育もふるさと教育も参考とならなかった	20.1	(82)	9.2	(32)	18.8	(47)	15.3	(27)
キャリア教育もふるさと教育も受けたことがない	58.1	(237)	67.9	(235)	56.0	(140)	58.8	(104)

これらの結果の解釈や考察にあたっては、少なくともキャリア教育やふるさと教育を受けたことがない、あるいは参考とならなかったが大半であるという点のみに注目して、否定的な指摘や評価をおこなう

⁷ この設問については、質問票のF7(あなたの出身高校について教えてください)とF7-2(高校卒業後の進路について教えてください)の選択肢で分岐ミス(指示ミス)があったため、回答者数が少なくなっている。この質問は学歴を問わず全員が回答できる質問であるが、上記の質問の選択肢で分岐先がこの次の質問(F9)となっており、高校進学者かつ高校卒業後就職した回答者に限定した質問項目となってしまう(ただし、高卒後就職した人以外にも回答しているが、本章ではそれもふまえて分析をおこなっている)。

ことは避けなければならない。むしろ、条件不利地域圏においては 20～30 代のうち 3～5%がふるさと教育を参考に進路選択をしている点をいかにとらえるかが重要になるのではないだろうか⁸。というのも、そもそも進路決定の際に参考となる要因自体が多様であることにくわえ、以下の点から必ずしもすべての若者が、学生生活のなかで（有意義な）キャリア教育やふるさと教育を受けてきたわけではないと考えられるからである。

キャリア教育やふるさと教育は、現在の学習指導要領では「総合的な学習の時間」におけるカリキュラムの一つとして位置付けられて実施されているが、総合的な学習の時間が創設されたのは 1999（平成 11）年である⁹。そのため、現在まで初等中等教育（小学校 3～6 年生、中学校 1～3 年生、高等学校 1～3 年生）でおこなわれている¹⁰のだが、20 代はともかく、とくに 30 代半ば以降の人たちは場合によっては学生時代に総合的な学習の時間を認知・経験していない可能性もある。また、創設から現在まで約 20 年が経過しているが、総合的な学習の時間において特定の教科の補充学習や運動会等の準備などと混同された実践がおこなわれている例もあるなど、その位置付けや取り組み方に学校間で差があることが未だに課題としてあげられているように、すべての地域・学校で十分に確立した指導体制・方策が整っているとはいえないのである。さらに、総合的な学習の時間で実施する内容は地域や学校の特色をふまえて学校ごとに異なっており、総合的な学習の時間が適切におこなわれていたとしても、それがキャリア教育やふるさと教育に相当する内容とは限らない¹¹。

以上をふまえると、進路決定におけるキャリア教育やふるさと教育の影響については、地域別や学校種別ごとなど、さらに詳細な検討が必要となるだろう。

【参考文献】

- 藤山浩，2015，『田園回帰 1%戦略：地元にと仕事を取り戻す（シリーズ田園回帰 1）』農山漁村文化協会。
- 轡田竜蔵，2016，『公益財団法人マツダ財団委託研究「広島 20-30 代住民意識調査」報告書（統計分析篇）第 2 版』公益財団法人マツダ財団。
- 文部科学省，2008a，『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』。

⁸ たとえば、過疎集落では流出した人口の 1%が戻ってくることで地域が持続していく可能性があるともいわれているように（藤山 2015）、人口減少や流出が喫緊の課題となっている地域において数%でも選好して条件不利地域圏に住もうとする若者がいるということの意義は、決して小さくないと思われる。

⁹ この段落については、文部科学省（2008a, 2008b, 2009, 2013）を参考にした。

¹⁰ 必要な年間授業時間は、小学校 3 年生～6 年生が各 70 単位時間（＝45 分×70 回）、中学校 1 年生が 50 単位時間 2～3 年生が各 70 単位時間（中学校では 1 単位時間＝50 分）、高等学校では 1～3 年生で合わせて 105～210 単位時間（高等学校では 1 単位時間＝50 分、35 単位時間＝1 単位として 3～6 単位分）とされている。

¹¹ たとえば、高等学校において例示されている学習課題は①横断的・総合的な課題（国際・情報・環境・資源エネルギー、福祉・健康・食・科学技術・地域行政・司法・経済・消費・安全・防災）、②生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題（郷土・都市計画、地域社会、観光、生命・医療、共生、教育・保育）、③人生観、社会奉仕、文化の創造、職業、勤労、アイデンティティ）と、大別して 3 つ、細分すると計 24 あり、キャリア教育やふるさと教育と関連するものもあれば、しないものも含まれている。

文部科学省, 2008b, 『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』.

文部科学省, 2009, 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』.

文部科学省, 2013, 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）：総合的な学習の時間を核とした課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力等向上に関する指導資料』.

トランスローカリティ研究会, 2018, 『「青森 20-30 代住民意識調査」報告書』公益財団法人マツダ財団.

第2章 現住地への評価および出身地域との関係

白石 壮一郎（弘前大学 准教授）

1. はじめに

北海道（札幌市、オホーツク管内）および京都府（京都市、京都北部7市町）の20-30才台の方がたについて、自分の現住地についての評価、および出身地域との現在の関係性について明らかにすることを目的に設問した（問6、問11、問13）。

20-30才台の回答者のなかで、自分の現住地に対する評価は、地方中枢都市（札幌市、京都市）と条件不利地をふくむ地域（オホーツク管内、京都北部7市町）とでどのようにちがうのか。あるいは、ジェンダーや結婚ステイタスなどの変数によってどのようにちがうのか。自分が育った出身地域（中学・高校時代に過ごしたところと定義した）との往来は、現住地が地方中枢都市であるか、条件不利地をふくむ地域であるかによってどのようにちがうのか。また、出身地域の中学・高校自体の友人との関係はどのようなものか。以上のような関心のもとに、設問している。

以下では、設問ごとの回答傾向について、まず単純集計結果についての説明をおこない、ついで、他の変数とのいくつかのクロス集計結果についての説明をおこなう。

2. 現住地に暮らす積極的理由

問6「あなたは現在住んでいる地域に暮らしている積極的な理由はありますか」（複数回答）。

現住地に関する設問であり、回答を4つの調査地ごとに単純集計したものが表2-1である。ここでは「現在住んでいる地域」を現住の市町村と捉えるか、より広い／狭い地理的範囲と想定するかは、回答者

表2-1 現住地に暮らす積極的理由

	% (N)			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
自身の親あるいは祖父母がいること	47.8(380)	42.2(316)	49.5(261)	44.8(229)
自身もしくは家族の持ち家(あるいは土地・墓等)があること	44.0(350)	39.3(294)	49.5(261)	45.6(233)
自身の通う学校があること	5.0(40)	7.9(59)	5.3(28)	9.0(46)
自身の働く職場があること	61.1(486)	50.7(380)	57.5(303)	46.6(238)
配偶者・恋人がいること	33.3(265)	25.8(193)	27.7(146)	23.3(119)
友人がいること	24.0(191)	28.6(214)	19.4(102)	23.3(119)
地域の人たちとの関係がいいこと	11.7(93)	7.7(58)	12.5(66)	8.0(41)
好きな地域であること	16.4(130)	33.4(250)	18.0(95)	28.0(143)
生活上便利であること	13.0(103)	50.6(379)	11.4(60)	46.6(238)
自分のやりたいこと(趣味等)ができること	8.2(65)	14.0(105)	7.8(41)	11.5(59)
行政サービスが優れていること	1.6(13)	3.5(26)	1.7(9)	2.7(14)
子育てをしやすいこと	12.1(96)	12.8(96)	12.1(64)	9.0(46)
その他	4.8(38)	5.1(38)	4.0(21)	3.5(18)
特に積極的な理由はない	4.7(37)	2.8(21)	4.7(25)	3.1(16)

の主観に任されている。住んでいる「理由」はさまざまであろうが、考えられること、つまり実家（定位家族）との関わり、通学・通勤との関わり、配偶者（生殖家族）との関わり、あるいは現住地の社会関係、消費環境、行政サービス、子育て環境などへの肯定的評価を14の選択肢として提示したごく標準的な設問である。14の選択肢は、前半7つの項目がおもに家族（定位家族・生殖家族）、近隣との社会関係、通勤・通学などとの関わりを、後半5つの項目が自分にとってのその地域の利便性（消費、趣味）に対する評価、最後の2項目が「その他、特に積極的な理由はない」という構成になっている（設問には「積極的に」という文言があるものの、選択肢をみて、「理由」というほど強くない「いきさつ」程度に捉えて選択した回答者もいるだろう）。

2-1. 現住地に暮らす理由と通勤・通学、家族、近隣関係

2-1-1. 通勤・通学

まず、前半の7つの項目（家族、通勤・通学、友人関係、近隣関係など）をみていこう。比較的回答が多かった選択肢の多くは、この前半7項目に偏っている。もっとも多かったのは「自身の働く職場があること」である。職場の通勤範囲内に居住する、あるいは居住地の範囲内の職場を選択する、という常識的な結果である。条件不利地域をふくむオホーツク（61.1%）と京都北部（57.5%）とでいずれも6割前後、都市部の札幌市（50.7%）と京都市（46.6%）で5割前後となった。条件不利地をふくむ地方都市部に住む回答者が、都市部に住む回答者よりも「現在住んでいる地域」内に職場がある人が多くふくまれる。ただし、これは「現在暮らしている地域」の範囲を回答者がどう設定しているかについて、札幌市や京都市などの地方中枢都市圏の回答者のほうにバラつきがあることを想定すると、一概には言えない（たとえば、札幌市北区在住者が石狩市まで通勤する場合、回答者が「現在暮らしている地域」を「北区」、「札幌市」、「石狩管内」とそれぞれに想定しうる）。

2-1-2. 定位家族

現住地に暮らしている理由を、回答者自身の定位家族だとする「自身の親あるいは祖父母がいること」と回答した人は、条件不利地域をふくむオホーツク（47.8%）と京都北部（49.5%）とでいずれも5割弱、都市部の札幌市（42.2%）と京都市（44.8%）でそれよりやや少ない割合となった（表2-1）。

子を持つ回答者で、夫婦共働きあるいは単身者で通勤する回答者の場合、幼児の子育てについて、親との同居や近居によって親からの子育てサポートを期待するケースがある。そこで、子の有無と、現住地に暮らしている理由に「自身の親あるいは祖父母がいること」があてはまるとしたかしないかのクロス集計をこころみた（表2-2）。まず、回答者のなかで子がいる人（954人）よりも子がない人（1518人）のほうが、およそ1.5倍の実数であることがわかる。次に、子がいる人といない人とでその回答傾向を比べてみると、子がいる人のなかで「あてはまる」と回答した人の割合（42.1%）は、あてはまらない（選

表2-2 子の有無と「自身の親あるいは祖父母がいること」のクロス表

	% (N)	
	あてはまる	あてはまらない
子がいる	35.3 (402)	41.4 (552)
子はいない	64.7 (738)	58.6 (780)
回答数合計	1140	1332

択せず)と回答した人の割合を下回っている。同じことについて、男女のジェンダーによる回答の傾向のちがいをみると(表2-3)、男性は「あてはまる」の回答率が41.7%だったのに対し、女性は男性よりも16.4ポイント上回る58.1%である。

表2-3 性別と「自身の親あるいは祖父母がいること」のクロス表

性別			% (N)
	あてはまる	あてはまらない	合計
男性	41.7 (489)	44.7 (617)	1106
女性	58.1 (681)	54.9 (757)	1438
その他	0.3 (3)	0.4 (5)	8
合計	1173	1379	2552

一方、家産やイエ制度についての意識を加味した、回答者自身の持ち家、親の持ち家や墓があることを理由とした「自身もしくは家族の持ち家(あるいは土地・墓など)があること」について尋ねた。この設問に対する回答の傾向は、上段の定位家族に関する理由項目(条件不利地を含む地域がやや高く、都市部がやや低い)とはちがっている。もっとも高い割合を示したのが条件不利地を含む京都北部(49.5%)だが、都市部の京都市(45.6%)は条件不利地を含むオホーツク(44.0%)とほぼ並び、京都北部より3.9-5.5ポイント低い。都市部の札幌市(39.3%)はこれらよりさらにやや低くなっている。この傾向が出る背景にどのような要因があるかは、この調査だけでは分からないが、北海道と京都府とのあいだでの墓制や墓にたいする考え方の地域別のちがいがあり、北海道全体はより都市型の傾向がみられると解釈できるかもしれない。

2-1-3. 親密な間柄、近隣関係

現住地に暮らしている理由を、両親や親族のほかの、親密な間柄の社会関係があることと回答する傾向についてはどうか。「配偶者・恋人がいること」「友人がいること」という2つの項目についてみてみよう。「配偶者・恋人がいること」では北海道(オホーツク33.3%、札幌市25.8%)でも京都府(京都北部27.7%、京都市23.3%)でも条件不利地を含む地域のほうが都市部よりも4.4-7.5ポイント上回っている。地域にかかわらず、結婚ステイタス、恋人の有無による回答傾向を表2-4にまとめた。現在結婚している(離婚・死別を除く)回答者の52.2%が現住地にいる理由として「配偶者・恋人がいること」に「あてはまる」と回答しているのに対し、現在恋人がいる回答者で同じ理由を選択したのは27.3%にとどまった。また、男女でみれば、表2-5のように男性は「あてはまる」の回答が19.7%であるのに対し女性は34.7%と回答傾向に男女差がみられた。

表2-4 結婚・恋人ステイタスと「配偶者・恋人がいること」とのクロス表

			% (N)
	あてはまる	あてはまらない	合計
恋人がいる	27.3 (122)	72.7 (325)	100 (447)
結婚している	52.2 (587)	47.8 (537)	100 (1124)

表2-5 性別と「配偶者・恋人がいること」のクロス表

			% (N)
	あてはまる	あてはまらない	合計
男性	19.7 (218)	80.3 (888)	100 (1106)
女性	34.7 (499)	65.3 (939)	100 (1438)
その他	37.5 (3)	62.5 (5)	100 (8)

表2-6 結婚ステイタスと「友人がいること」のクロス表

			% (N)
	あてはまる	あてはまらない	合計
結婚している	22.9 (257)	77.1 (867)	100 (1124)
現在結婚していない	25.2 (362)	74.8 (1073)	100 (1435)

一方、「友人がいること」では北海道(オホーツク 24.0%、札幌市 28.6%)でも京都府(京都北部 19.4%、京都市 23.3%)でも、都市部のほうが条件不利地を含む地域よりも 3.9-4.6 ポイント上回っている。この「友人がいること」の回答傾向について、地域にかかわらず結婚ステイタスやジェンダーが関係するかどうかをみてる。大きな傾向差はみとめられず、結婚ステイタス別(表 2-6)、男女別(表 2-7)いずれにおいても「あてはまる」と回答した人の割合は 20-25%程度にとどまり、結婚ステイタスでは現在結婚していない人が現在結婚している人よりも 4.3 ポイント、男女別では女性のほうが男性よりも 5 ポイント「あてはまる」と回答した割合が大きかった。

表2-7 性別と「友人がいること」のクロス表

			% (N)
	あてはまる	あてはまらない	合計
男性	21.6 (239)	78.4 (867)	100 (1106)
女性	26.6 (382)	73.4 (1056)	100 (1438)
その他	12.5 (1)	87.5 (7)	100 (8)

2-1-4. 地域の社会関係

現住地に暮らしている理由について「地域の人たちとの関係がいいこと」という項目については、選択回答割合自体が高くない(表 2-1)。前段でみた親密な間柄「配偶者・恋人・友人」の項目への選択回答に比べれば、全体的に選択回答割合がどの地域でも 10 ポイント以上低い。条件不利地を含む地域と地方中枢都市部とで比べれば、北海道(オホーツク 11.7%、札幌市 7.7%)、京都府(京都北部 12.5%、京都市 8.0%)ともに条件不利地を含む地域のほうが都市部よりも 4.0-4.5 ポイント高い割合となっている。地域の人たちとのつきあい(地縁)は都市部よりも条件不利地をふくむ地域でのほうが重視されるが、全体的には、地域の人たちとのつきあいよりも、親密な間柄の友人や恋人・配偶者の存在のほうが、現住地に住んでいる積極的な理由として重視されているのである。

2-2. 現住地に暮らす理由と消費・趣味・利便性など

後半の 5 つの項目(自分にとってのその地域の利便性、消費、趣味)は、全体的に選択回答の割合自体

が低く、2割を下回る項目がほとんどだ（表2-1）。そのなかで「生活上便利であること」という、現住地域の利便性一般についての評価の項目については、条件不利地域をふくむ地域と都市部とで選択傾向に顕著な差がみられ、札幌市が50.6%、京都市が46.6%であるのに対し、オホーツク13.0%、京都北部11.4%となっていて、両者のあいだには30ポイント以上の開きがある（北海道は37.6ポイント、京都府は35.2ポイント）。

現住地に暮らす理由として「好きな地域であること」の項目を選択回答したのは、札幌市（33.4%）、京都市（28.0%）と都市部在住回答者の割合が大きく、条件不利地を含む地域であるオホーツク（16.4%）、京都北部（18.0%）をそれぞれ17ポイント、10ポイント上回っている。

「自分のやりたいこと（趣味など）ができること」の選択項目は、20-30才台の独身者には重視される項目だと思われる。現住地に暮らしている理由としての回答割合は、札幌市（14.0%）、京都市（11.5%）と都市部が大きく、条件不利地を含む地域であるオホーツク（8.2%）、京都北部（7.8%）をそれぞれ5.8ポイント、3.7ポイント上回っている。

「子育てをしやすいこと」の選択項目は、既婚の子育て世帯には重要視される項目だと思われる。北海道と京都府では回答傾向が異なっており、オホーツク（12.1%）、札幌（12.8%）、京都北部（12.1%）の回答割合がほぼ並んでおり、京都市（9.0%）だけが3ポイント以上それらを下回る結果となった。

残念ながら、行政サービスに関しては全体の選択項目のなかで選択回答の割合自体がもっとも低かった。札幌市（3.5%）、京都市（2.7%）と都市部の割合が大きく、条件不利地を含む地域はオホーツク（1.6%）、京都北部（1.7%）である。

3. 出身地域を訪れる目的

近年、ある地域の常住者だけではなく、継続的に関わりをもつ人口が注目されている。3節および4節ではとくに、他出子と出身地域との関係の内実についてみていきたい。

問11「あなたは昨年1年間で、出身の地域を訪れましたか」（単一回答）。

自分の出身地域との具体的な往来や出身地域の家族や友人との交流に関する設問であり、自分の出身地域をいちども出ずにずっと暮らしている人（地元定着；問9で1を選択）はあらかじめ回答者から除いてある。「訪れた」と選択回答した回答者には、さらに問11-1として「訪れた目的はなんですか」（複数回答）として、「家族・親戚に会う」、「知人・友人に会う」、「その他」から選択回答をもとめた。

地元定着者であって回答者にならなかった人（非該当）の割合を表3-1からみると、北海道と京都府のそれぞれにおいて、条件不利地をふくむ地域であるオホーツク（57.5%）と京都北部（60.9%）の割合が、都市部である札幌市（43.9%）と京都市（48.1%）よりもどちらも10ポイント以上上回っている。

表3-1 「昨年1年間で出身地域を訪れたか」への回答の集計

	% (N)			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
訪れた	27.3(217)	32.8(246)	25.0(132)	30.5(156)
いちども訪れていない	4.4(35)	8.3(62)	3.6(19)	4.5(23)
非該当	57.5(457)	43.9(329)	60.9(321)	48.1(246)
無回答	10.8(86)	15.0(112)	10.4(55)	16.8(86)

出身地域から現住地に転入して暮らしている人（該当者）のなかで、出身の地域を昨年1年間で「訪れた」を選択した回答者は、条件不利地を含むオホーツク在住回答者のうち86.1%、京都北部在住者のうち87.4%である。都市部では京都市と札幌市とで傾向が異なっており、京都市在住者は条件不利地域をふくむ2地域に近い87.1%が「訪れた」という回答であるのに対し、札幌市在住者が3地域を6-7ポイント下回る79.9%が「訪れた」回答となっている。なお、この設問では無回答が条件不利地域をふくむ2地域で15%程度、都市部2地域では10%程度の割合であった。

3-1. 出身地域を訪れた目的

さて、問11で昨年（2019年）1年間で出身地域を「訪れた」と回答した方がたに、問11-1では「訪れた目的」について「家族・親戚に会う」、「知人・友人に会う」、「その他」からの選択回答をもとめた（複数回答可）。この結果をしめしたのが表3-2である。「家族・親戚に会う（あるいは家族・親族との用事）」を選択した回答者は、札幌市（28.7%）、京都市（27.4%）と都市部在住者の回答割合がやや大きく、条件不利地を含む地域であるオホーツク在住者（25.4%）、京都北部在住者（23.1%）在住回答者をそれぞれ3.3ポイント、4.3ポイント上回っている。

この「家族・親戚に会う（あるいは家族・親族との用事）」を選択した回答者について、地域にかかわらず結婚ステータスとのクロス集計をおこなうと、現在結婚している回答者の選択割合（65.6%）が、そうでない回答者の選択割合（57.5%）を8.1ポイント上回っている（表3-3）。同様に、子の有無を説明変数にもちいた場合にも、子がいる回答者（64%）はいない回答者（61.4%）を3.6ポイント上回っている（表3-4）。

表3-2 出身地域を訪れた目的

	% (N)			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
家族・親戚に会う(あるいは家族・親戚との用事)	25.4(202)	28.7(215)	23.1(122)	27.4(140)
知人・友人に会う(あるいは知人・友人との用事)	13.0(103)	14.3(107)	13.9(73)	11.4(58)
その他	3.9(31)	3.1(23)	3.4(18)	3.9(20)

表3-3 結婚と「家族・親戚に会う（あるいは家族・親戚との用事）」のクロス表

	% (N)			合計
	あてはまる	あてはまらない	無回答	
結婚している	65.6(377)	4.9(28)	29.6(170)	100(575)
未婚・離婚・死別	57.5(299)	7.9(41)	34.6(180)	100(520)

表3-4 子の有無と「家族・親戚に会う」のクロス表

	% (N)			合計
	あてはまる	あてはまらない	無回答	
子がいる	64(293)	5.7(26)	30.3(139)	100(458)
子はいない	61.4(368)	6.8(41)	31.7(190)	100(599)

表3-5 結婚と「知人・友人に会う」のクロス表

	% (N)			合計
	あてはまる	あてはまらない	無回答	
結婚している	28.7 (165)	41.7 (240)	29.6 (170)	100 (1126)
未婚・離婚・死別	33.5 (174)	31.9 (166)	34.6 (180)	100 (520)

「知人・友人に会う（あるいは知人・友人との用事）」の選択傾向はそれほど目立ったものはないが、条件不利地をふくむオホーツク（13.0%）と京都北部（13.9%）に比べれば、都市部である札幌市（14.3%）と京都市（11.4%）とポイント差がわずかながら大きい（表3-2）。この「知人・友人に会う（あるいは知人・友人との用事）」を選択した回答者について、地域にかかわらず結婚ステータスとのクロス集計をおこなうと（表3-5）、現在結婚している回答者（28.7%）よりも、そうでない回答者（33.5%）のほうが「あてはまる」を選択回答している割合が大きく、4.8ポイント上回っている。

「その他」を選択した人はどの地域でも3.1%-3.9%と少ない。「その他」の選択肢に設定された自由記載欄への記入はさらに少なく、各現住地域からの回答実数は、オホーツク21件、札幌市24件、京都市11件、京都北部14件だった。「訪れた目的」として記されていたことは、仕事・出張がどの地域でも多く、ほかに見られたのは葬儀・法事・親族訪問、趣味・レジャー、通院・出産、買い物などであった。

3-2. 出身地域を訪れたときになにをしたか

問11-2では、「訪れたさいに、具体的にあなたは何をしましたか」（自由記述）と尋ねている。前問11-1で「訪れた目的」を尋ねているので内容の重複した質問であるかのように回答者を混乱させたかもしれない。設問の意図は、訪れた当初の目的あるいは主目的は前問で答えてもらっていたとしても、実際にそこでおこなった活動を回顧して、家族と会ってなにをしたか、などを個別に挙げてもらう意図だった。だが、回答者にとって、とくに前問11-1の第3の選択肢である「その他（自由記述）」とは区別しづらかっただろう。

4地域とも、記入率は回答者全体の2割を超えており、問11「あなたは昨年1年間で、出身の地域を訪れましたか」（単一回答）で「はい」と回答した該当者のなかでの記入率は5割を超えている。

問11-2「訪れたさいに、具体的にあなたは何をしましたか」（自由記述）の記述内容から、だれと、どんなことをしたかを抽出するために、回答内容を通覧し、回答者が出身地域を訪れたさいに会った人の関係名称（だれと）や具体的な活動内容（どんなことを）をあらわすキーワードを拾った。表3-6は、関係名称を上段に、下段に5つの活動カテゴリ「親族・イエのこと」「家族のこと」「食、交流」「消費、余暇」「そのほか」に分け、出現頻度を4つの調査地域別にしめたものである。

自由記述なので、あるひとつの記述回答から複数のキーワードが選ばれている。キーワードを選ぶさいに、「帰省した」「のんびりした」「遊んだ」「特にない」など具体的な活動内容を示さないものは除いた。家族、友人など活動をともにした相手がどちらも示されていた場合、たとえば、「友人と会食した」という記述回答からは「友人」「会食」のふたつのキーワードを選んだ。

3-2-1. 親しい人と食事する

4つの調査地域に共通して高い割合を示したのは、関係名称（一緒に過ごした相手）のなかでは「家族」

表3-6 「出身地域を訪れたさいにしたこと（自由記述）」キーワードの出現頻度

		% (N)				
カテゴリ	キーワード	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市	全地域平均 (全数)
関係名称	家族	12.2 (41)	16.6 (64)	14.2 (32)	15.6 (42)	14.7 (179)
	(一緒に過ご した相手)					
	実家	8.0 (27)	10.1 (39)	11.6 (26)	9.3 (25)	9.6 (117)
	親・父母	4.5 (15)	5.7 (22)	3.6 (8)	4.8 (13)	4.8 (58)
	兄弟姉妹	1.2 (4)	2.1 (8)	0.4 (1)	1.9 (5)	1.5 (18)
	祖父母	3.3 (11)	2.8 (11)	2.7 (6)	2.6 (7)	2.9 (35)
	親戚など	3.9 (13)	3.1 (12)	4.0 (9)	6.3 (17)	4.2 (51)
友人、同級生など	13.9 (47)	14.2 (55)	16.4 (37)	13.4 (36)	14.4 (175)	
	知人	0.3 (1)	0.5 (2)	1.8 (4)	0.4 (1)	0.7 (8)
活動内容						
親族、イエのこと	墓参りなど	5.0 (17)	4.7 (18)	4.4 (10)	5.9 (16)	5.0 (61)
	葬儀、法事など	2.1 (7)	2.6 (10)	1.3 (3)	0.7 (2)	1.8 (22)
	盆	0.9 (3)	0.8 (3)	1.3 (3)	1.1 (3)	1.0 (12)
家族のこと	家業、農業、自営	0.9 (3)	0.3 (1)	1.3 (3)	0.0 (0)	0.6 (7)
	通院、見舞いなど	1.2 (4)	0.8 (3)	0.9 (2)	0.4 (1)	0.8 (10)
	出産、出産祝い	0.6 (2)	0.5 (2)	1.3 (3)	1.1 (3)	0.8 (10)
食、交流	食事、会食、外食、BBQ	18.1 (61)	15.8 (61)	16.0 (36)	18.6 (50)	17.1 (208)
	飲み会など	3.0 (10)	1.3 (5)	2.2 (5)	0.4 (1)	1.7 (21)
	学校、同窓会など	0.3 (1)	1.8 (7)	3.6 (8)	3.0 (8)	2.0 (24)
	近所付き合い、地域行事など	1.2 (4)	1.0 (4)	0.9 (2)	1.9 (5)	1.2 (15)
消費、余暇	買物、ショッピング	11.3 (38)	4.9 (19)	8.0 (18)	4.1 (11)	7.1 (86)
	観光、旅行、温泉、ドライブ	3.9 (13)	6.5 (25)	1.8 (4)	6.3 (17)	4.8 (59)
そのほか	仕事、出張、バイトなど	3.6 (12)	3.4 (13)	1.8 (4)	2.2 (6)	2.9 (35)
	犬、猫、ペット	0.9 (3)	0.5 (2)	0.4 (1)	0.0 (0)	0.5 (6)
合計		100.0 (337)	100.0 (386)	100.0 (225)	100.0 (269)	100.0 (1217)

「友人、同級生など」であり、活動内容のなかでは「食事、会食、外食」である。出身地域を訪れて家族と食事をする、友人と会食するといった場面が、一定以上の頻度で想起されていることがわかる。ここでいう「家族」のなかには定位家族・生殖家族が混在している。「自分の家族と」や「実家の父母と」「実家の家族と」「実家で」「夫の実家で」など明確な場合もあるが、既婚の回答者で「家族と食事」という回答など、わざわざ区別して記載しない回答は多い。

「食事、会食、外食」の出現頻度が高かったことは興味深い。実家に帰省しているとすれば実家での食事するのは当然のことである。だが、こうした設問の回答に出現するということは、実家に帰ったときにすることの典型的イベントとして意識され記されているということである。「家族とごはん」「母の手料理を」などの記載からも、そのことが窺える。また、「友人、同級生など」と会食、外食、飲み会をするという回答は多くみられ、少数ながら「祖母と外食」「祖母とお寿司」など祖父母と外食に出かけるという回答もみられた。

3-2-2. 家族、親族、家業

関係名称のなかには、親、父母のほかには祖父母、兄弟姉妹のワードが出てくることもある。カウントするのはいずれもじっさいに会った場合に限っており、たとえば「祖父の墓参り」などの場合には「家族と

過ごす」活動カテゴリに入れていない。祖父母は実家に同居している場合もあるので「家族」の語に含まれた場合もあるだろう。祖父母がワードとして出現する場合は近居などの場合と考えられるが、「祖母を訪ねる」、「祖母と外食」などの回答があった。兄弟姉妹が結婚している場合は、甥や姪をふくむお互いの家族ぐるみでの会食やバーベキューについての記載があった。回答者も兄弟姉妹もお互いに独身の場合でも、きょうだいどうして「妹と小旅行」などの記載がみられた。

「イエ、親族」活動カテゴリのなかでもっとも回答数が多かったのは「墓参り」や「墓掃除」などであり、ついで葬儀・法事などである。「親戚など」カテゴリでは、「親戚で集まった」「親戚と会い、買い物や旅行をした」「親戚の家を挨拶にまわった」「家族や親戚の家で過ごした」などの記載が見られた。実家が農業や自営業の回答者は家業の手伝いが回答に含まれるだろうと予測していたが、その回答数は少なかった。そのほか、回答者自身の定期的な通院や入院している家族の見舞い、里帰り出産、きょうだいの出産祝いなどが回答にみられた。

3-2-3. 交流

家族や友人との食事、会食、外食が多くみられたことはすでに述べた。「飲み会」「学校・同窓会」「近所付き合い・地域行事」などは、いずれも「家族と」ともにおこなうこととは別に考えられている。いずれも実数が少ないのだが、同窓会への参加はオホーツクだけが少なく、ほかの3地域はほぼ並んでいる。近所付き合いや地域行事の回答は京都北部7市町がほかの3地域より少なかった。

3-2-4. 消費、余暇

「買い物、ショッピング」のカテゴリについては、条件不利地をふくむ地域であるオホーツク管内(21.3%)、京都北部7市町(17.6%)が現住地である回答者の回答において、中枢都市部である札幌市(11.0%)、京都市(8.9%)が現住地である回答者の回答においてよりも、その出現頻度がそれぞれ10.3ポイント、8.7ポイント上回っている。これはおそらく、現住地が条件不利地をふくむ地域の回答者が、出身地域あるいは道中の都市部を訪れたさいに買い物をするという傾向があらわれたものだろう。

また、出身地域を訪れてなにをしたか、という設問への回答として「観光、旅行、温泉、ドライブ」などの回答も少なからずあり、地方中枢都市部である札幌市(14.5%)、京都市(13.8%)を現住地とする回答者の回答において、条件不利地をふくむ地域であるオホーツク管内(7.3%)、京都北部7市町(3.9%)が現住地である回答者の回答においてよりも、その出現頻度は7.2ポイント、9.9ポイント上回っている。旅行やドライブは「旅行」「ドライブ」とだけ書かれていた回答もあったが「友人と旅行」「家族とドライブ」などが多く見られた。また、回答者が自身の配偶者に「地元」を案内する「旅行」をしたという回答も複数みられた。

4. 地元の友人との関係

問13「中学・高校時代の知人・友人のなかで個別に(ひとりひとりと)連絡を取り合っていますか」(複数回答)。

出身地域の知人・友人との関係を尋ねる設問である。近年はLINEなどのSNSでグループによって連絡を取り合うケースが増加しており、自らは積極的に発信しなくても地元の友人・知人グループの近況を受信して知ることができる。SNSによるこうした連絡には、受信した情報を注意して目を通して

場合と、ほとんど気にしない場合とがあるし、作成した SNS から発信されず機能停止している場合もある。ここでは、こうした現在の SNS 利用状況のなかで、回答者が出身地域の知人・友人とあえて「個別に（ひとりひとりと）」積極的に連絡をとりあうことがあるかどうか、あるとしたら現在どこに住んでいる相手かを問うている。複数回答の選択項目内容はそれぞれ「出身地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人」「出身地域を離れて別の地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人」「個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人はいない」の3つである。

4-1. 北海道・京都府、および中枢・不利地域別の回答傾向

表 4-1 をみると、まず、「個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人はいない」を選択した回答者の割合は、オホーツク(16.4%)がやや低く、他の3地域は札幌市(19.0%)、京都北部(18.6%)、京都市(19.0%)とほぼ並んでいる。

表4-1 中学・高校時代の友人と個別に（ひとりひとりと）連絡を取り合っているか

	% (N)			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
出身地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人	66.9(532)	63.3(474)	62.6(330)	61.3(313)
出身地域を離れて別の地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人	59.1(470)	54.6(409)	56.4(297)	53.6(274)
個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人はいない	16.4(130)	19.0(142)	18.6(98)	19.0(97)

次に、「出身地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人」を選択した回答者の割合は、どの地域をとっても3つの選択肢のなかでもっとも大きい。地域別の割合をみれば、北海道と京都府では全体的に北海道のほうが高く、各道府では条件不利地をふくむ地域のほうが都市部よりも高い割合である。北海道はオホーツクが66.9%、札幌市が63.3%で3.6ポイント差、京都府は京都北部が62.6%、京都市が61.3%で1.3ポイント差である。

「出身地域を離れて別の地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人」を選択した回答者の割合は、北海道と京都府とではそれほど大きな開きはなく、各道府では条件不利地をふくむ地域のほうが都市部よりも高い割合である。北海道はオホーツクが59.1%、札幌市が54.6%で5.5ポイント差、京都府は京都北部が56.4%、京都市が53.6%で2.8ポイント差である。

4-2. 結婚ステイタス別、および男女別の回答傾向

4-2-1. 結婚ステイタス別

同じ設問について、現住地域にかかわらず「あてはまる」を選択した回答者の割合を結婚ステイタス別にまとめたものが表 4-2 である。まず、中学・高校時代の友人で、個別に（ひとりひとりと）連絡を取り合っている「出身地域に住む友人」がいると回答した人の割合は、現在結婚している人(16.2%)よりも、そうでない人(19.6%)のほうが3.4ポイント高い。次に、個別に（ひとりひとりと）連絡を取り合っている「出身地域を離れた友人」がいると回答した人の割合は、現在結婚している人(57.9%)のほうが、

そうでない人 (55.0%) よりも 2.9 ポイント高い。そして、個別に (ひとりひとりと) 連絡を取り合っている友人はいない、と回答した人の割合は、現在結婚している人 (16.2%) よりもそうでない人 (19.6%) のほうが 3.4 ポイント高い。

表4-2 結婚ステイタスと「個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人」の有無

	% (N)		
	出身地域に住む友人	出身地域を離れた友人	連絡する友人いない
結婚している	16.2 (182)	57.9 (652)	16.2 (182)
未婚・離婚・死別	19.6 (282)	55.0 (791)	19.6 (282)

4-2-2. 男女別

同じ設問について、現住地域にかかわらず「あてはまる」を選択した回答者の割合を男女別にまとめたものが表 4-3 である。まず、中学・高校時代の友人で、個別に (ひとりひとりと) 連絡を取り合っている「出身地域に住む友人」がいると回答した人の割合は、女性 (67.7%) のほうが、男性 (59.1%) よりも 8.6 ポイント高い。次に、個別に (ひとりひとりと) 連絡を取り合っている「出身地域を離れた友人」がいると回答した人の割合だが、これも女性 (62.2%) のほうが、男性 (48.4%) よりも 13.8 ポイント高い。そして、個別に (ひとりひとりと) 連絡を取り合っている友人はいない、と回答した人の割合は、女性 (13.3%) よりも男性 (24.4%) のほうが 11.1 ポイント高い。つまり、自分の現住地、そして相手の友人の現住地が出身地域であるかどうかにかかわらず、女性のほうが男性よりも中学・高校時代の友人で、個別に (ひとりひとりと) 連絡を取り合っている、という傾向がいえそうである。

表4-3 性別と「個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人」の有無

	% (N)		
	出身地域に住む友人	出身地域を離れた友人	連絡する友人いない
男性	59.1 (655)	48.4 (536)	24.4 (270)
女性	67.7 (975)	62.2 (896)	13.3 (191)
その他	62.5 (5)	50.0 (4)	37.5 (3)

第3章 北海道および京都の若者の「地元」意識、キャリア、 きょうだい構成、両親のキャリア

寺地幹人（茨城大学 准教授）

1. はじめに

本章では、北海道および京都の若者の「地元」意識、キャリア、きょうだい構成、両親のキャリアをみていく。2節では「地元」意識、3節ではキャリア（最終学歴、経歴）、4節ではきょうだい構成、5節では両親のキャリア（生活履歴と最終学歴）を扱う。以上の項目について4つの地域を比較し、北海道と京都の違い、また地方中枢拠点都市圏（札幌市および京都市。以下「地方都市」と表記）と条件不利地域圏（オホーツクおよび京都北部。以下「条件不利地域」と表記）の違いに着目して、分析していく。

2. 「地元」意識（現住地に対する「地元」認識、「地元」の範囲）

本節では、「地元」意識に関する項目を分析していくが、該当する項目は2つある。一つは現住地に対する「地元」認識であり、もう一つは「地元」の範囲である。前者を尋ねている項目、Q4「現在住んでいる地域は『地元』といえますか」に対する回答は、以下の図1の通りである。

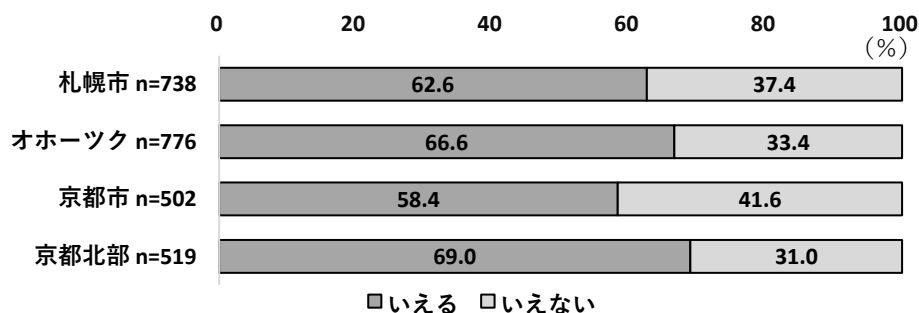


図1 現住地に対する「地元」認識の4地域比較

4つの地域とも、6割弱から7割弱の若者が現住地を「地元」と捉えているといえる。地方都市に比べ条件不利地域の方が、現住地を「地元」と捉えている傾向にある。北海道に比べ京都の方が、地方都市と条件不利地域の間で、現住地を「地元」と捉えている割合の差が大きい。

後者の「地元」の範囲については、Q5「あなたにとって以下の範囲は『地元』と感じられますか」という質問で、「A 出身の小学校区」「B 出身の市町村全体」「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」「D 出身の都道府県全体」「E その他の『地元』と感じられる範囲」にそれぞれに対して「はい」「いいえ」を尋ねている（ただしEは自由記述）。

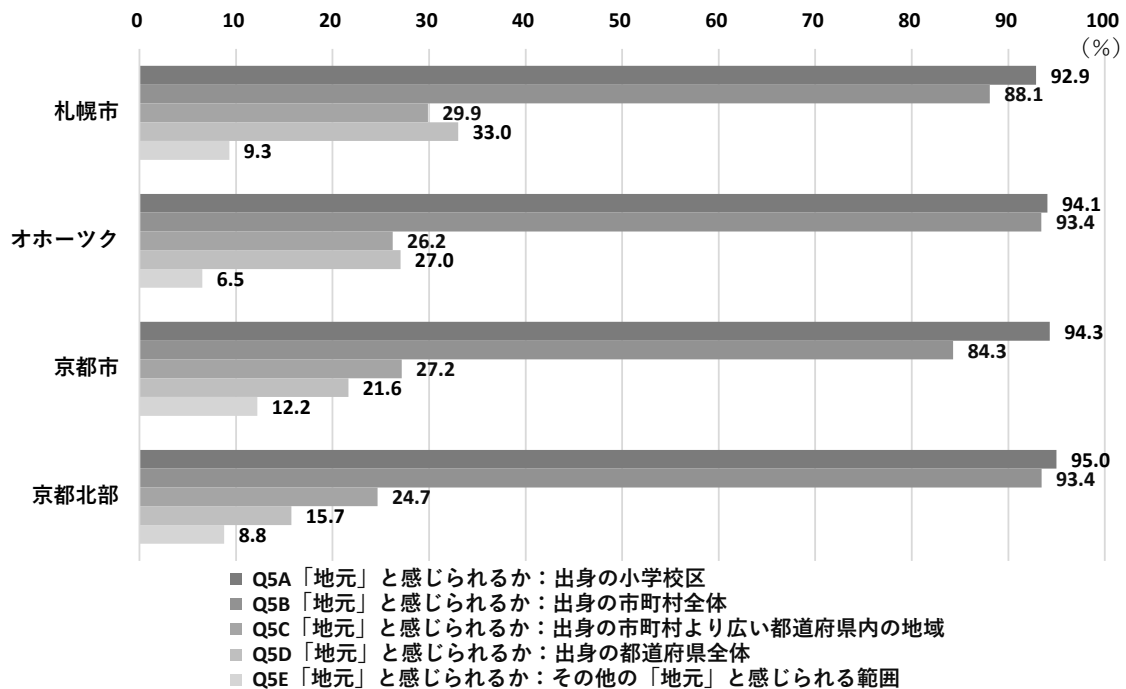


図2 「地元」の範囲の4地域比較¹²

上記の図2の通り、4地域とも、「A 出身の小中学校区」を9割以上の若者が、「B 出身の市町村全体」を8~9割の若者が「地元」と捉えている。ただし、「B 出身の市町村全体」に関しては、地方都市が8割台なのに対し、条件不利地域は9割台と、両者の間に差がみられる。

そして、これらと比較し、「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」「D 出身の都道府県全体」では、「地元」と捉えている若者の割合は1割5分~3割強と、かなり小さくなる。これらに関しては、地方都市と条件不利地域の違いよりも、北海道と京都の違いが特徴的である。北海道の2地域は、「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」の割合よりも「D 出身の都道府県全体」の割合の方が大きい。対して京都の2地域は、「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」の割合の方が「D 出身の都道府県全体」の割合よりも大きく、また北海道の2地域に比べて「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」と「D 出身の都道府県全体」の間の割合の差が大きい(札幌市の差3.1ポイント、オホーツクの差0.8ポイント、京都市の差5.6ポイント、京都北部の差9.0ポイント)。

「E その他の『地元』と感じられる範囲」に関しては、条件不利地域よりも地方都市の方が「はい」と回答した割合が大きく、京都市の若者においては1割以上にA~D以外に「地元」と感じられる範囲が

¹² 「はい」と回答した者の割合を示している。「はい」と「いいえ」を足した、それぞれのnは以下の通りである。

- A：札幌市 731、オホーツク 775、京都市 508、京都北部 519
- B：札幌市 730、オホーツク 775、京都市 503、京都北部 518
- C：札幌市 716、オホーツク 766、京都市 497、京都北部 511
- D：札幌市 715、オホーツク 762、京都市 490、京都北部 502
- E：札幌市 741、オホーツク 785、京都市 508、京都北部 524

ある¹³。

3. キャリア（最終学歴、経歴）

本節では、キャリアに関する項目を分析していくが、該当する項目は大きく分けて最終学歴、経歴（高校通学の有無、進路を考える際の参考情報、高卒後の進路）の2つある。前者のF6「あなたの最終学歴を教えてください」に対する回答は、以下の表1の通りである。

表1 最終学歴の4地域比較（単位：％）

	在学中 (大学 または 大学院)	在学中 (短大 または 高専)	在学中 (専門 学校)	大学卒 または 大学院 卒	短大卒 または 高専卒	専門学 校卒	高卒 (大学 中退も 含む)	中卒 (高校 中退も 含む)	その他	n
札幌市	9.3	0.3	0.8	35.5	9.0	20.0	20.7	3.6	0.8	744
オホーツク	4.1	0.8	0.3	24.2	8.7	20.1	36.3	4.6	1.0	790
京都市	11.4	0.4	0.8	53.1	5.3	9.6	15.4	2.6	1.4	508
京都北部	5.2	0.6	0.6	32.3	11.7	14.9	30.8	3.4	0.6	523

条件不利地域よりも地方都市の方が大学・大学院在籍者や大学・大学院卒業者の割合が大きく、地方都市よりも条件不利地域の方が高卒者の割合が大きい。特に、京都では、京都市と京都北部の大卒者の割合の間に20ポイント以上の開きがある。4つの地域のうち、最も大卒層（院含めた在籍・既卒）の割合が小さいのはオホーツクであり、全体の3割程度なのに対し、京都市は最も大きく6割を超えている。

後者の経歴に関して、関連する項目を確認していく。

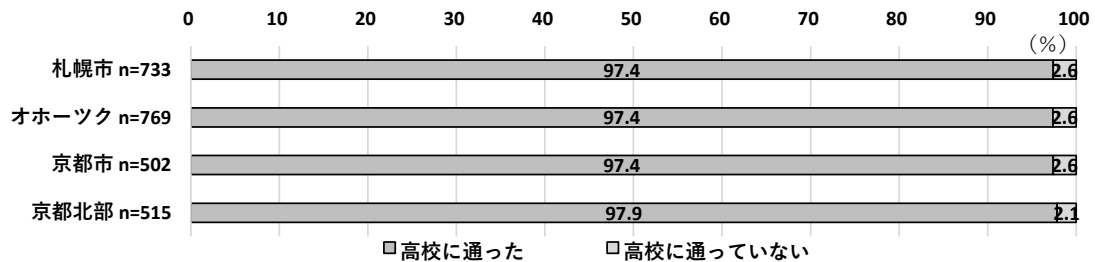


図3 高校通学の有無の4地域比較

まずは高校通学の有無に関して、F7「出身高校について教えてください」で尋ねている。上記の図3の

¹³ これに関して、京都市の自由記述回答を確認したところ、自転車で行ける／最寄り駅からの範囲／京都市内の特定区内／長年住み慣れた地域／住んでいる周辺／関西圏／幼少期の地域／中学校・高校の区域／大学時代の地域／人間関係にかかわる範囲（友人、小さい頃を知っている）など、さまざまな回答が存在した。これらは大まかに、交通手段の多様性、行政区・市域・県域を超えるモビリティ、行政区の独自性、学校機関の多さや多様性および生活圏への隣接など、都市ゆえの特徴に起因する回答と、関西圏ないし京阪神の一体性に起因する回答に、整理できると考えられる。そして同時に、都市ゆえの生活様式の多様さと、さまざまな人がいることによる回答の多様さも、「その他」回答の割合の高さにかかわっている、と推察される。

通り、どの地域も、97%以上の若者が高校に通っていて、地域による違いはみられない。

F7 では「1 高校に通った」と回答した人に出身高校の所在地についても尋ねているが、表 2 の通り、北海道においては札幌市もオホーツクも 9 割以上が道内の高校出身なのに対して、京都における京都府内の高校出身者は、京都市が 6 割台半ば、京都北部が 8 割台半ばとなっており、別の都道府県の高校に通った者や、京都府以外出身の者が一定数いることが推察される。

表 2 出身高校の所在地の 4 地域比較 (単位：%)

	札幌市	オホーツク	京都市	京都北部		札幌市	オホーツク	京都市	京都北部
北海道	91.4	93.1	1.0	0.4	京都府	0.0	0.0	66.7	84.5
青森県	0.7	0.1	0.0	0.0	大阪府	0.4	0.3	4.0	2.4
岩手県	0.6	0.4	0.0	0.0	兵庫県	0.3	0.1	2.9	3.5
宮城県	0.6	0.6	0.0	0.4	奈良県	0.0	0.0	1.9	0.4
秋田県	0.6	0.4	0.0	0.0	和歌山県	0.0	0.0	0.8	0.4
山形県	0.0	0.1	0.0	0.2	鳥取県	0.0	0.0	0.2	0.0
福島県	0.1	0.0	0.0	0.0	島根県	0.0	0.0	0.4	0.0
茨城県	0.0	0.1	1.0	0.2	岡山県	0.0	0.0	1.0	0.4
栃木県	0.0	0.1	0.2	0.2	広島県	0.1	0.1	1.3	0.2
群馬県	0.0	0.3	0.4	0.0	山口県	0.0	0.0	0.6	0.2
埼玉県	0.9	0.7	0.2	0.0	徳島県	0.1	0.0	0.2	0.0
千葉県	0.1	0.3	0.4	0.6	香川県	0.0	0.0	1.0	0.2
東京都	1.3	1.0	1.7	0.2	愛媛県	0.1	0.0	0.2	0.2
神奈川県	0.7	0.7	0.8	0.2	高知県	0.0	0.0	0.4	0.0
新潟県	0.1	0.1	0.6	0.2	福岡県	0.0	0.3	0.6	0.2
富山県	0.3	0.0	0.4	0.2	佐賀県	0.0	0.1	0.2	0.0
石川県	0.0	0.0	0.6	0.2	長崎県	0.0	0.0	0.4	0.8
福井県	0.0	0.0	0.8	0.6	熊本県	0.0	0.0	0.4	0.0
山梨県	0.1	0.0	0.0	0.0	大分県	0.0	0.0	0.6	0.0
長野県	0.0	0.0	0.2	0.0	宮崎県	0.0	0.0	0.6	0.0
岐阜県	0.1	0.0	0.4	0.4	鹿児島県	0.0	0.0	0.6	0.0
静岡県	0.0	0.3	0.4	0.0	沖縄県	0.1	0.0	0.4	0.0
愛知県	0.6	0.4	1.9	0.8	海外	0.0	0.1	0.0	0.0
三重県	0.0	0.0	0.4	0.4	n	685	725	477	491
滋賀県	0.3	0.1	2.5	1.2					

単位：%

F7-1 では「高校卒業後の進学・就職先の地域を考える際、以下をどれだけ考慮しましたか」という質問で、「A 親の希望」「B 高校の先生との相談・アドバイス」「C 自分の成績」「D 実家の経済状況」に対する考慮の度合いを尋ねている。

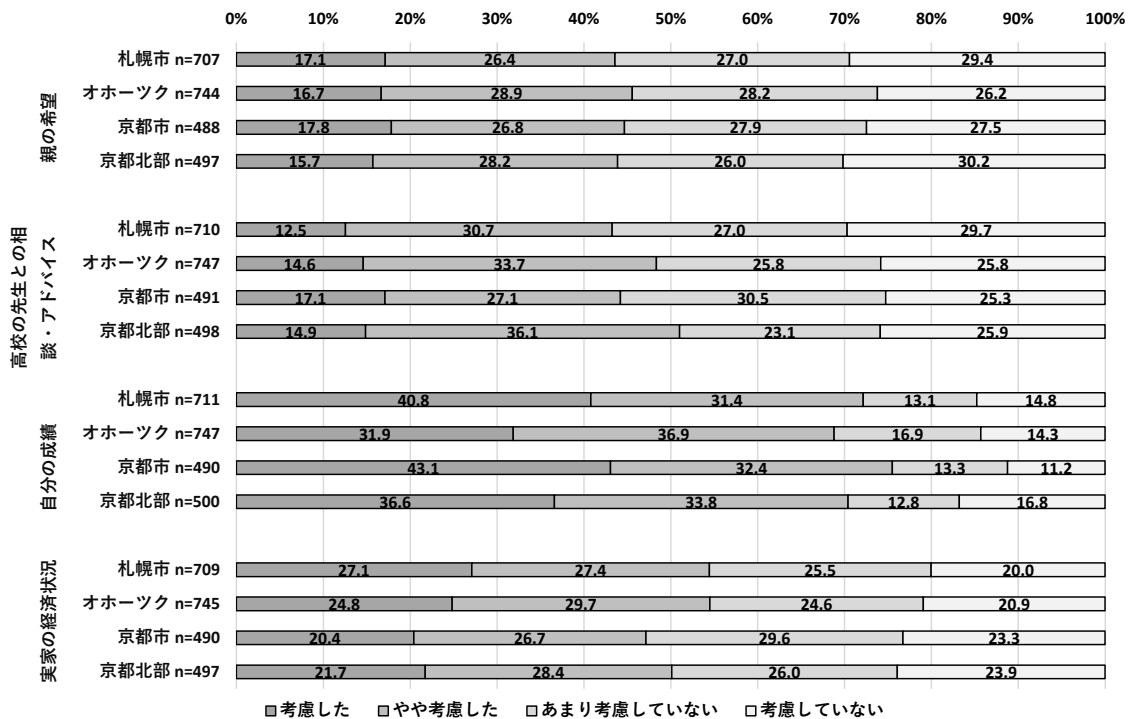


図 4 高卒後の進学先・就職先の地域を考える際の参考情報の 4 地域比較

上記の図 4 の通り、「A 親の希望」に関しては、「考慮した」と「やや考慮した」を合わせた割合が、どの地域も 4 割台となっている。「B 高校の先生との相談・アドバイス」に関しては、「考慮した」と「やや考慮した」を合わせた割合が、北海道・京都ともに、地方都市に比べて条件不利地域で大きくなっている。対して「C 自分の成績」に関しては、北海道・京都ともに、条件不利地域に比べて地方都市で大きくなっている。「D 実家の経済状況」に関しては、「考慮した」と「やや考慮した」を合わせた割合が、地方都市と条件不利地域の違いよりも、北海道と京都の間で異なる（北海道の方が京都に比べて割合が大きい）といえる。

F7-2 では「高校卒業後の進路について教えてください」と尋ねている。

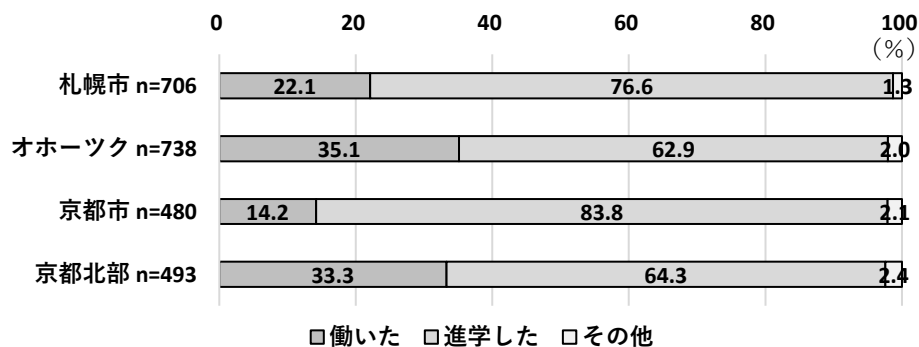


図 5 高校卒業後の進路の 4 地域比較

上記の図 5 の通り、条件不利地域では北海道・京都ともに高卒就職者の割合が 3 割台半ばであるが、地方都市では、京都市（14.2%）に比べて札幌市（22.1%）の方が、高卒就職者の割合が大きくなっている。

る。

F7-2 では「1 働いた」と回答した人に、就職先の所在地を尋ねている。

表 3 高校卒業後働いた人の就職先所在地の都道府県の 4 地域比較 (単位：%)

	札幌市	オホーツク	京都市	京都北部
北海道	90.3	94.6	0.0	1.3
青森県	0.7	0.0	0.0	0.0
宮城県	0.7	0.8	0.0	0.0
茨城県	0.7	0.0	1.6	0.0
埼玉県	0.0	1.2	0.0	0.0
千葉県	0.7	0.0	0.0	0.6
東京都	2.8	1.2	6.5	0.0
神奈川県	2.1	0.4	0.0	0.6
福井県	0.0	0.0	0.0	0.6
静岡県	0.0	0.0	0.0	0.6
愛知県	0.7	0.4	0.0	0.6
滋賀県	0.0	0.0	3.2	0.0
京都府	0.0	0.0	82.3	83.6
大阪府	1.4	0.0	6.5	5.7
兵庫県	0.0	0.4	0.0	5.7
山口県	0.0	0.4	0.0	0.0
長崎県	0.0	0.0	0.0	0.6
沖縄県	0.0	0.4	0.0	0.0
n	144	242	62	159

単位：%

上記の表 3 の通り、北海道においては、地方都市でも条件不利地域でも 9 割以上、就職先が北海道内となっている。対して、京都においては、地方都市でも条件不利地域でも就職先が京都府内の人の割合は 8 割強となっており、京都市は東京都や大阪府に、京都北部は大阪府や兵庫県に、それぞれ 5~7% の人の就職先があった。

同様に、高校卒業後働いた人 (F7-2 で「1 働いた」と回答した人) に対してのみ、「F7-3 現在も同じ仕事をしていますか」と尋ねている。

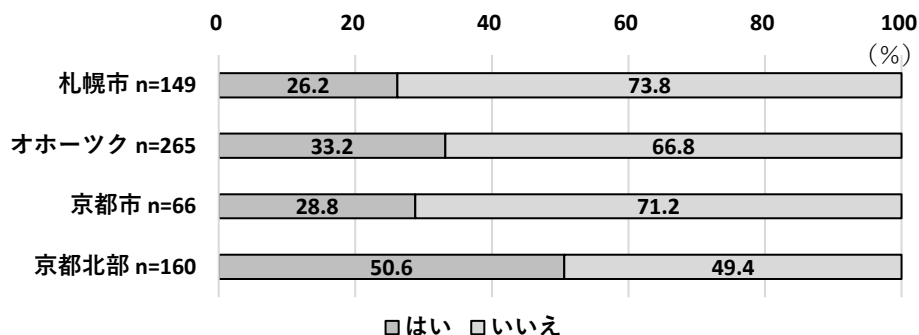


図 6 現在も同じ仕事をしているか否か (高卒後働いた人のみ) の 4 地域比較

上記の図 6 の通り、北海道・京都とも、地方都市では現在も同じ仕事をしている者の割合が 2 割台半

ば～3 割弱で同程度なのに対して、条件不利地域では、オホーツク（33.2%）に比べて京都北部（50.6%）の方が、現在も同じ仕事をしている者の割合が大きい。

4. きょうだい構成

本節では、回答者のきょうだい構成を確認する¹⁴。F9「あなたの兄弟姉妹について、それぞれの人数を教えてください。（0 人のところは「0」と記入してください。）」に対する回答は、以下の表 4～表 7 の通りである。

表 4 兄の人数の 4 地域比較（単位：%）

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	n
札幌市	62.5	32.3	4.7	0.2	0.2	0.2	592
オホーツク	61.6	31.9	5.4	0.6	0.5	0.0	633
京都市	60.3	34.0	5.3	0.5	0.0	0.0	400
京都北部	56.7	35.7	7.1	0.5	0.0	0.0	409

表 5 姉の人数の 4 地域比較（単位：%）

	0人	1人	2人	3人	4人	n
札幌市	61.3	34.2	3.8	0.3	0.3	584
オホーツク	62.6	29.7	6.9	0.6	0.2	637
京都市	64.4	30.7	4.0	1.0	0.0	404
京都北部	59.4	32.8	7.4	0.5	0.0	406

表 6 弟の人数の 4 地域比較（単位：%）

	0人	1人	2人	3人	5人	n
札幌市	66.2	29.9	3.6	0.3	0.0	586
オホーツク	56.6	35.1	7.3	0.9	0.0	641
京都市	61.1	35.0	3.6	0.2	0.0	411
京都北部	56.2	37.5	5.8	0.2	0.2	413

表 7 妹の人数の 4 地域比較（単位：%）

	0人	1人	2人	3人	4人	6人	9人	n
札幌市	62.7	33.5	3.4	0.3	0.0	0.0	0.0	585
オホーツク	59.2	34.1	5.6	0.6	0.3	0.2	0.0	630
京都市	61.0	35.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	400
京都北部	60.9	33.6	4.8	0.0	0.5	0.0	0.3	399

これら 4 つの項目をあわせて集計したきょうだい数は、以下の図 7 の通りである。

¹⁴ 本節での集計の際、無回答は 0 人と区別し、欠損値として扱って除外している。また、きょうだい数やきょうだい構成のタイプ分けにおいて、使用した変数に一つでも無回答が含まれる場合には、欠損値扱いとなっている。

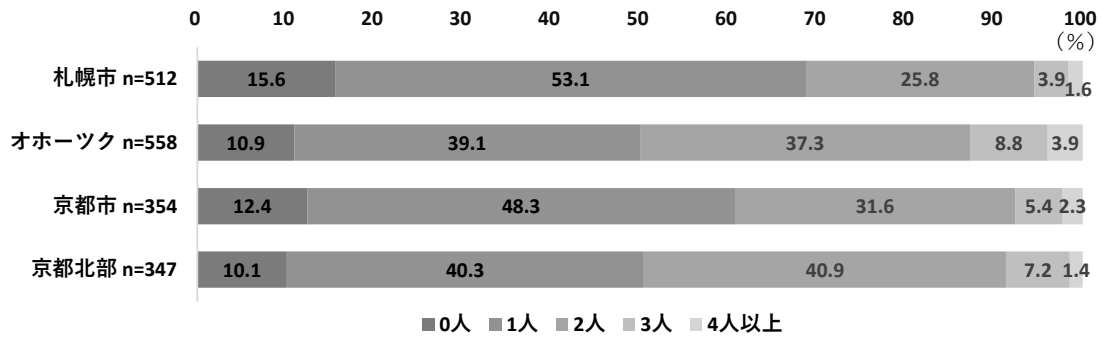


図7 きょうだい数（本人除く）の4地域比較

北海道・京都とも、条件不利地域に比べて地方都市の方がひとりっ子（本人以外のきょうだい0人）の割合が大きく、条件不利地域ほど本人以外のきょうだいが2人ないし3人の割合が大きくなっている。代表値を4地域で確認ごとに確認すると、以下の表8の通りとなり、北海道・京都ともに、条件不利地域の方が地方都市に比べて平均値が大きい。そして京都北部は最頻値が2人となっており、本人含めて3人きょうだいの割合が4割を超えている。

表8 きょうだい数（本人除く）の代表値の4地域比較

	平均値	中央値	最頻値
札幌市 n=512	1.24	1	1
オホーツク n=558	1.58	1.5	1
京都市 n=354	1.37	1	1
京都北部 n=347	1.53	1	2

きょうだい構成における回答者の位置づけ（ひとりっ子、長子、末子、その他）を、4地域ごとに示したものが、以下の図8である。北海道・京都ともに、地方都市の方が条件不利地域に比べて女性のひとりっ子の割合が大きい。対して、回答者が長子である割合は、北海道では条件不利地域（オホーツク）の方が地方都市（札幌市）より大きいが、京都では逆に地方都市（京都市）の方が条件不利地域（京都北部）より大きい。そして回答者が末子である割合は、これと逆に、北海道では地方都市（札幌市）の方が条件不利地域（オホーツク）より大きく、京都では条件不利地域（京都北部）の方が地方都市（京都市）より大きい。

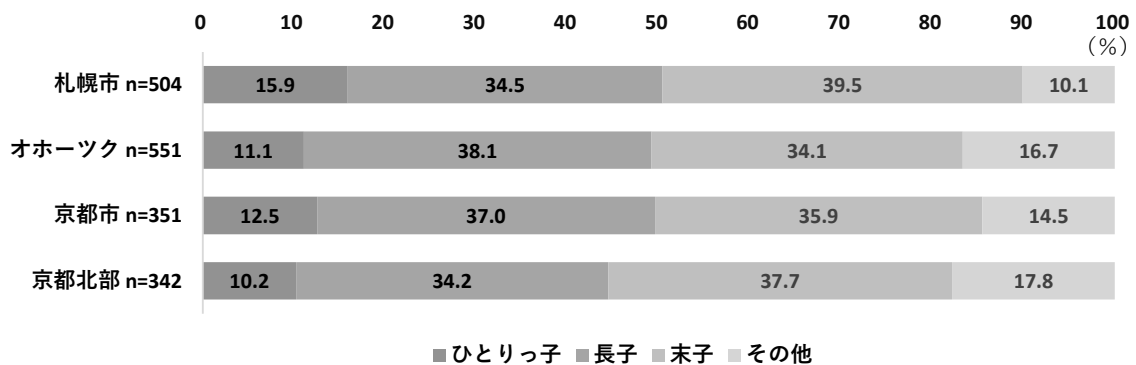


図8 回答者のきょうだい位置（ひとりっ子、長子、末子、その他）の4地域比較

より詳細にきょうだい構成をタイプ分けし、さらに各タイプの割合と回答者本人の性別（男・女）を組み合わせてタイプ分けしたうえで、地域ごとおよび4地域合計の割合を示した結果が、以下の表9である。

表9 きょうだい構成のタイプ分け×本人性別（単位：％）

	札幌市	オホーツク	京都市	京都北部	4地域
男性：ひとりっ子（兄0姉0弟0妹0）	5.4	5.2	5.2	4.4	5.1
男性：兄のみ（兄1姉0弟0妹0）	5.4	4.1	6.6	6.2	5.4
男性：姉のみ（兄0姉1弟0妹0）	9.4	7.2	6.4	6.5	7.5
男性：弟のみ（兄0姉0弟1妹0）	5.0	5.9	5.5	4.7	5.3
男性：妹のみ（兄0姉0弟0妹1）	7.2	6.4	6.4	5.6	6.5
男性：兄姉のみ（兄1姉1弟0妹0）	3.0	2.8	2.3	3.8	2.9
男性：兄1姉1弟1妹0	0.0	0.2	0.0	0.6	0.2
男性：兄0姉1弟1妹0	1.4	1.3	0.3	2.9	1.4
男性：兄0姉1弟1妹1	0.0	0.0	0.3	0.0	0.1
男性：弟妹のみ（兄0姉0弟1妹1）	2.0	5.0	2.3	3.5	3.3
男性：兄弟のみ（兄1姉0弟1妹0）	1.8	2.9	2.0	2.1	2.3
男性：兄妹のみ（兄1姉0弟0妹1）	1.0	2.0	2.3	2.6	1.9
男性：姉妹のみ（兄0姉1弟0妹1）	0.6	1.5	0.6	1.5	1.0
女性：ひとりっ子（兄0姉0弟0妹0）	10.4	5.9	7.2	5.9	7.5
女性：兄のみ（兄1姉0弟0妹0）	9.4	10.3	9.0	10.3	9.8
女性：姉のみ（兄0姉1弟0妹0）	9.2	6.6	6.9	7.0	7.5
女性：弟のみ（兄0姉0弟1妹0）	6.4	9.0	9.0	9.1	8.3
女性：妹のみ（兄0姉0弟0妹1）	10.0	5.5	9.2	6.2	7.7
女性：兄姉のみ（兄1姉1弟0妹0）	3.2	2.9	4.6	3.8	3.5
女性：兄1姉1弟1妹0	0.6	0.4	0.0	0.0	0.3
女性：兄1姉1弟1妹1	0.2	0.6	0.3	0.0	0.3
女性：兄0姉1弟1妹0	1.4	1.7	2.6	1.8	1.8
女性：兄0姉1弟1妹1	0.0	0.7	0.3	0.6	0.4
女性：弟妹のみ（兄0姉0弟1妹1）	4.0	6.3	4.6	5.3	5.1
女性：兄弟のみ（兄1姉0弟1妹0）	1.0	1.1	1.7	2.1	1.4
女性：兄妹のみ（兄1姉0弟0妹1）	1.2	2.4	2.6	1.2	1.8
女性：姉妹のみ（兄0姉1弟0妹1）	1.0	2.2	1.7	2.6	1.8
合計(人)	501	543	346	341	1731

男性のひとりっ子（回答者本人が男性できょうだいなし）の割合は、4つの地域とも4～5%程度だが、女性のひとりっ子（回答者本人が女性できょうだいなし）の割には地域ごとの違いがある。北海道・京都ともに、前述の通り、地方都市の方が条件不利地域に比べて女性のひとりっ子の割合が大きく、札幌市では1割を超えている。また、回答者本人が女性できょうだいが妹のみのタイプも、北海道・京都ともに、地方都市の方が条件不利地域に比べて割合が大きい。

本節の最後に、異性きょうだいの有無について、以下の図9の通り示す。

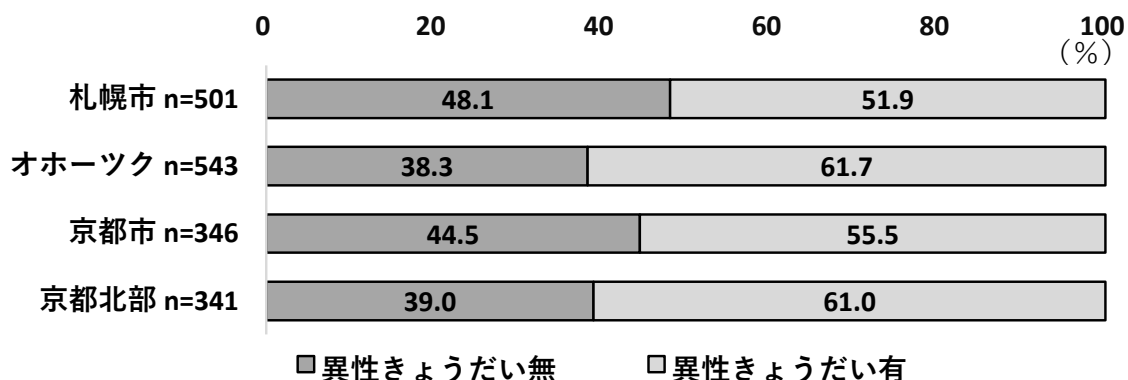


図9 異性きょうだいの有無の4地域比較

北海道・京都ともに、条件不利地域の方が地方都市に比べ、異性きょうだいがいる人の割合が大きい。この結果は、先に示した通り、条件不利地域の方が地方都市に比べてそもそもきょうだい数が多い（平均値が大きい）ことに起因すると、推察される。

5. 両親のキャリア（生活履歴と最終学歴）

本節では、両親のキャリアに関する項目を分析していくが、該当する項目は大きく分けて両親の生活経歴と最終学歴の2つある。前者に関する項目である F11「あなたのご両親は北海道外に出て生活したことがありますか」¹⁵の「A 父親」「B 母親」に対する回答は、以下の図10の通りである。

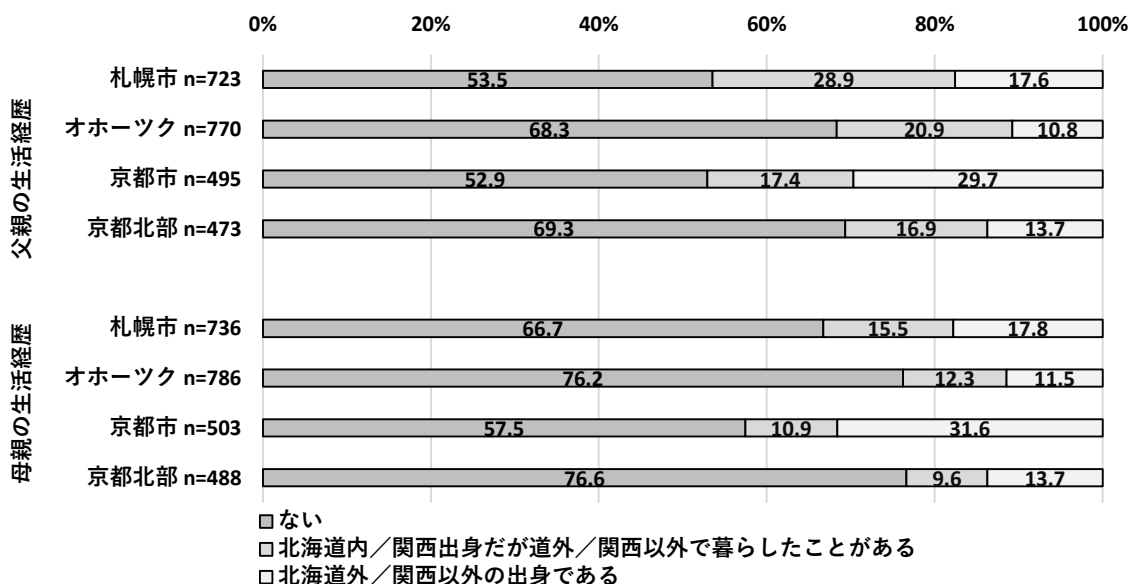


図10 父親と母親の生活経歴の4地域比較

¹⁵ 京都2地域で配布した調査票において、質問文で「北海道外」と誤った記載がなされたが、選択肢は「関西出身だが関西以外で暮らしたことがある」「関西以外の出身である」となっており、回答結果に大きな影響はないと考えられる。

北海道・京都とも、条件不利地域の方が地方都市に比べ、父親と母親の両方において地域外に出て生活したことが「ない」と回答している割合が大きい。更に、父親に比べて母親の方がその割合が大きくなっている。4つの地域の中では、京都市が父親・母親ともに地域外出身（関西以外の出身）の割合が最も大きい。また、京都に比べて北海道の方が、父親・母親ともに地域外（北海道の場合は道外）で暮らしたことがある者の割合が大きい。

後者の両親の最終学歴に関して、F12「あなたのご両親の最終学歴を教えてください」における「A 父親」と「B 母親」の回答は、以下の表10・表11の通りである。

表10 父親の最終学歴の4地域比較（単位：％）

	小学校	中学校	高校	専門学校・各種学校	短大・高専	大学・大学院	わからない	その他	n
札幌市	0.3	6.1	34.6	7.2	2.9	33.4	15.0	0.6	725
オホーツク	0.0	12.5	41.8	9.4	3.9	20.1	11.7	0.5	766
京都市	0.0	5.3	29.9	6.1	1.2	46.9	10.5	0.2	495
京都北部	0.0	7.9	42.6	6.1	2.8	30.3	10.3	0.0	505

表11 母親の最終学歴の4地域比較（単位：％）

	小学校	中学校	高校	専門学校・各種学校	短大・高専	大学・大学院	わからない	その他	n
札幌市	0.3	5.5	42.2	11.5	19.5	10.0	11.0	0.1	730
オホーツク	0.0	8.9	53.8	11.6	10.1	5.7	9.3	0.6	775
京都市	0.0	4.0	34.1	9.3	20.4	23.2	8.7	0.2	504
京都北部	0.2	4.1	42.1	12.3	17.3	13.8	9.9	0.2	513

北海道・京都とも、地方都市の方が条件不利地域に比べ、父親と母親の両方において大学・大学院が最終学歴である者の割合が大きく、高校を最終学歴とする者の割合が小さい。また、北海道の方が京都より、父親においては専門学校・各種学校を最終学歴とする者の割合が、母親においては中学校を最終学歴とする者の割合が、大きい。また、北海道においては母親の最終学歴が専門学校・各種学校である者の割合が、京都においては父親の最終学歴が専門学校・各種学校である者の割合が、地方都市と条件不利地域の間で差がみられない。

6. まとめ

本章で確認できたことを、①4地域の共通性、②北海道と京都の共通性、③北海道と京都の違いないし比較結果、の3つの観点から以下に整理する。今回分析したのは2府県での調査データであり、一般化には慎重であるべきだが、①は都道府県や<地方都市/条件不利地域>関係を越えた状況、②は都道府県間での<地方都市/条件不利地域>関係の共通性、③は都道府県ごとの<地方都市/条件不利地域>関係の違いなどを示している可能性がある。

①4 地域の共通点

- ・「A 出身の小中学校区」を9割以上の若者が、「B 出身の市町村全体」を8～9割の若者が「地元」と捉えている（2節）。
- ・「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」「D 出身の都道府県全体」を「地元」と捉える割合は、1割5分～3割強（2節）。
- ・97%以上の若者が高校に通っている（3節）。
- ・高校卒業後の進学・就職先の地域を考える際に考慮したものに関して、「A 親の希望」に関しては、「考慮した」と「やや考慮した」を合わせた割合が、4割台となっている（3節）。
- ・男性のひとりっ子の割合は、4つの地域とも4～5%程度（4節）。

②北海道と京都の共通点

- ・地方都市に比べ条件不利地域の方が、現住地を「地元」と捉えている傾向にある（2節）。
- ・「B 出身の市町村全体」を「地元」と捉える割合は、地方都市が8割台なのに対し、条件不利地域は9割台（2節）。
- ・条件不利地域よりも地方都市の方が、「E その他の『地元』と感じられる範囲」を「地元」と捉える割合の方が大きい（2節）。
- ・条件不利地域よりも地方都市の方が、大学・大学院在籍者や大学・大学院卒業者の割合が大きく、地方都市よりも条件不利地域の方が高卒者の割合が大きい（3節）。
- ・高校卒業後の進学・就職先の地域を考える際に考慮したものに関して、地方都市よりも条件不利地域の方が「B 高校の先生との相談・アドバイス」を「考慮した」「やや考慮した」割合が大きい。一方、条件不利地域よりも地方都市の方が「C 自分の成績」を「考慮した」「やや考慮した」割合が大きい（3節）。
- ・高卒就職者の割合は地方都市よりも条件不利地域で大きく、条件不利地域で3割台半ばである（3節）。
- ・高卒就職者が現在も初職と同じ仕事をしている割合は、地方都市で2割台半ば～3割弱である（3節）。
- ・条件不利地域よりも地方都市の方が、ひとりっ子の割合が大きく、条件不利地域ほど本人以外のきょうだいが2人ないし3人の割合が大きくなっている。また、条件不利地域の方が地方都市に比べてきょうだい数の平均値が大きい（4節）。
- ・条件不利地域よりも地方都市の方が、女性のひとりっ子の割合や、回答者本人が女性できょうだいが妹のみの割合が大きい（4節）。
- ・地方都市よりも条件不利地域の方が、異性きょうだいがいる人の割合が大きい（4節）。
- ・条件不利地域の方が地方都市よりも、父親と母親の両方において地域外に出て生活したことが「ない」と回答している割合が大きい（5節）。
- ・地方都市の方が条件不利地域よりも、父親と母親の両方において大学・大学院が最終学歴である者の割合が大きく、高校を最終学歴とする者の割合が小さい（5節）。

③北海道と京都の違いないし比較結果

- ・北海道に比べ京都の方が、地方都市と条件不利地域の間で、現住地を「地元」と捉えている割合の差が

大きい (2 節)。

- ・北海道の 2 地域は、「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」よりも「D 出身の都道府県全体」を「地元」と捉える割合の方が大きい。対して京都の 2 地域は、「D 出身の都道府県全体」よりも「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」を「地元」と捉える割合の方が大きく、また北海道の 2 地域に比べて「C 出身の市町村より広い都道府県内の地域」と「D 出身の都道府県全体」の間の割合の差が大きい (2 節)。
- ・高校に通った人の高校所在地に関して、北海道においては札幌市もオホーツクも 9 割以上が道内の高校出身なのに対して、京都における京都府内の高校出身者は、京都市が 6 割台半ば、京都北部が 8 割台半ばとなっている (3 節)。
- ・高校卒業後の進学・就職先の地域を考える際に考慮したものに関して、北海道の方が京都よりも、「D 実家の経済状況」を「考慮した」「やや考慮した」割合が大きい (3 節)。
- ・高卒就職者の割合に関して、地方都市では、京都市 (14.2%) に比べて札幌市 (22.1%) の方が、高卒就職者の割合が大きくなっている (3 節)。
- ・高卒就職者の就職先所在地に関して、北海道においては 2 地域とも 9 割以上が北海道内となっているのに対し、京都においては 2 地域とも就職先が京都府内の人の割合は 8 割強であった (3 節)。
- ・高卒就職者が現在も初職と同じ仕事をしている割合に関して、条件不利地域では、オホーツク (33.2%) に比べて京都北部 (50.6%) の方が、現在も同じ仕事をしている者の割合が大きい (3 節)。
- ・回答者が長子である割合は、北海道では条件不利地域 (オホーツク) の方が地方都市 (札幌市) より大きい、京都では逆に地方都市 (京都市) の方が条件不利地域 (京都北部) より大きい。そして回答者が末子である割合は、これと逆に、北海道では地方都市 (札幌市) の方が条件不利地域 (オホーツク) より大きく、京都では条件不利地域 (京都北部) の方が地方都市 (京都市) より大きい (4 節)。
- ・北海道外ないし関西圏外で親が暮らしたことがある割合は、父親と母親ともに、北海道の方が京都よりも大きい (5 節)。
- ・北海道の方が京都より、父親においては専門学校・各種学校を最終学歴とする者の割合が、母親においては中学校を最終学歴とする者の割合が、大きい。また、北海道においては母親の最終学歴が専門学校・各種学校である者の割合が、京都においては父親の最終学歴が専門学校・各種学校である者の割合が、地方都市と条件不利地域の間で差がみられない (5 節)。

以上の①～③の観点を踏まえながら、回答者の基本属性による各項目の回答結果の違いをみる分析や、地域特性をより一層考慮した解釈を行うことが、今後の課題となる。

第4章：地域についてどのように感じているか／地域の愛着の範囲

井戸 聡（愛知県立大学 准教授）

1. はじめに

この章では、地域についてどのように感じているか（問7）と地域の愛着の範囲（問8）についての分析を行う。ここではそれぞれ4地域ごとの特徴や違いのほか、京都地域圏（京都市と京都北部）、北海道地域圏（札幌市とオホーツク）という地方ごとの2つの地域グループと、地方中枢拠点都市圏（京都市と札幌市）、条件不利地域圏（京都北部とオホーツク）という都市性と条件不利性によって区分される2つの地域グループのあいだでの比較が着目すべき観点となりうる。京都地域圏／北海道地域圏は地方よりの共通性や差異を、地方中枢拠点都市圏／条件不利地域圏は都市と条件不利地域の共通性や差異について考える素材とすることを想定することができるだろう¹⁶。

2. 地域についてどのように感じているかについて

問7では「あなたの関わっている地域についてどのように感じているか」について10項目の質問を行った。表1-1から表1-10は、問7Aから問7Jまでの回答分布を表にまとめたものである。

表1-1

問7A：総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	11.8	48.5	32.1	7.6	100.0
札幌市	42.6	46.9	8.9	1.6	100.0
京都北部	9.9	54.3	27.4	8.4	100.0
京都市	32.1	55.2	11.4	1.4	100.0

表1-2

問7B：今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	19.3	40.1	27.1	13.6	100.0
札幌市	39.1	40.7	15.5	4.7	100.0
京都北部	21.9	40.3	28.8	9.0	100.0
京都市	30.3	45.4	19.2	5.1	100.0

¹⁶ 地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏については、轡田（『地方暮らしの幸福と若者』（2017））が提唱する地方圏の区分に依拠している。

表 1-3

問7C：20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	25.4	40.1	18.3	16.2	100.0
札幌市	31.7	39.9	19.4	9.1	100.0
京都北部	30.7	38.7	18.1	12.4	100.0
京都市	24.6	38.2	26.0	11.2	100.0

表 1-4

問7D：今後、地域活動に積極的に参加したい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	7.1	27.3	45.9	19.7	100.0
札幌市	5.0	25.0	51.8	18.2	100.0
京都北部	8.2	34.4	41.3	16.1	100.0
京都市	3.9	31.6	45.1	19.4	100.0

表 1-5

問7E：現在住んでいる地域にいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	8.2	25.9	44.4	21.5	100.0
札幌市	6.9	21.3	47.4	24.4	100.0
京都北部	9.3	31.4	40.4	18.9	100.0
京都市	6.7	28.8	41.1	23.5	100.0

表 1-6

問7F：隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	7.3	29.3	41.0	22.4	100.0
札幌市	4.6	22.5	47.4	25.6	100.0
京都北部	8.4	36.6	36.8	18.1	100.0
京都市	7.3	30.2	41.4	21.2	100.0

表 1-7

問7G：休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	28.7	43.8	22.5	4.9	100.0
札幌市	21.5	41.8	30.1	6.6	100.0
京都北部	25.2	47.1	24.6	3.1	100.0
京都市	16.0	44.8	34.6	4.5	100.0

表 1-8

問7H：現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	13.1	42.6	34.6	9.8	100.0
札幌市	14.7	35.7	37.7	11.9	100.0
京都北部	11.3	39.3	38.9	10.5	100.0
京都市	12.2	32.6	40.7	14.5	100.0

表 1-9

問7I：現在住んでいる地域よりも大きな街で暮らしたい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	20.5	30.6	34.7	14.3	100.0
札幌市	5.7	16.6	46.9	30.9	100.0
京都北部	15.8	27.7	40.1	16.4	100.0
京都市	4.5	15.9	48.9	30.7	100.0

表 1-10

問7J：田舎暮らしをしたい（％）					
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	合計
オホーツク	8.2	28.3	41.0	22.5	100.0
札幌市	6.7	25.7	38.4	29.1	100.0
京都北部	10.9	31.6	38.5	19.0	100.0
京都市	7.1	29.7	36.0	27.3	100.0

表 1-1 から表 1-10 までを概観してみると、大まかにいくつかの傾向のパターンがあることがわかる。

まず、条件不利地域圏よりも地方中枢拠点都市圏のほうが肯定回答の割合が高いという回答傾向が京都地域圏と北海道地域圏で共通するパターンである。つまり京都地域圏と北海道地域圏のどちらにおいても地方中枢拠点都市のほうが条件不利地域よりも肯定的であるパターンである。これに当てはまるのは、問 7A「総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足してる」、問 7B「今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたい」の 2 つの設問についてであった。2 つの設問は居住地についての総合的な満足や将来的な居住の希望に関わるものであり、条件不利地域よりも地方中枢拠点都市のほうが居住地として満足感が得られやすく、将来的な居住地として肯定的に捉えられている（図 1、図 2）。

つまり、地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏の差異として、地方中枢拠点都市圏のほうが条件不利地域圏よりも居住地に総合的な満足感や将来的な居住の希望を抱く割合が高いという違いを想定することができる。

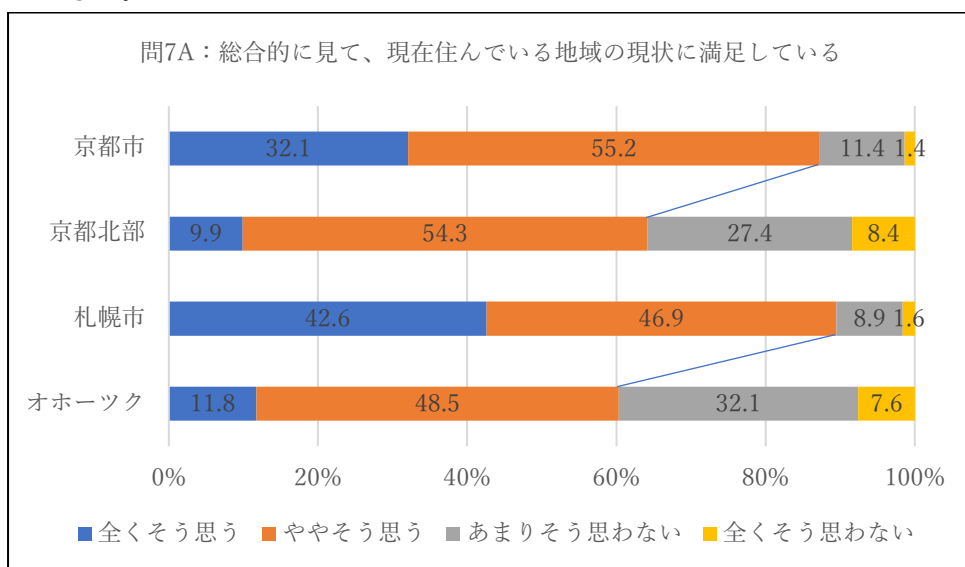


図 1

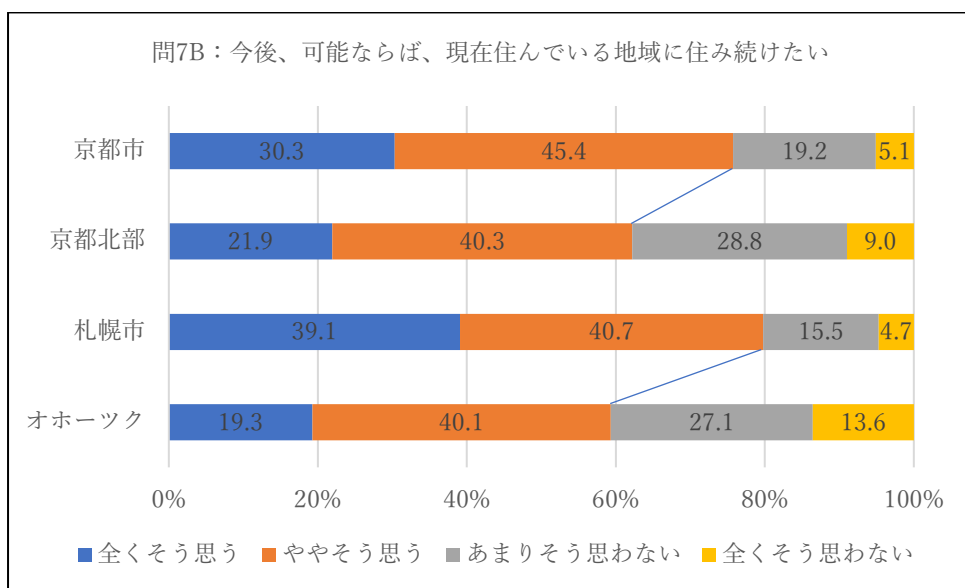


図 2

次に、条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏との差が京都地域圏と北海道地域圏で逆転するパターンである。このパターンに当てはまるのは問7C「20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う」である。図3では、京都地域圏で地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏で肯定回答の割合が高い。北海道地域圏はそれが逆転し、地方中枢拠点都市圏のほうが条件不利地域圏よりも肯定回答の割合が高い。京都地域圏では京都市よりも京都北部のほうが将来的に同じ場所に住み続けていると思っている割合が高く、北海道地域圏ではその逆で、札幌市のほうがオホーツクよりも将来的に同じ場所に住み続けていると思っている（図3）。

これは、地方のあいだでの差異として、京都地域圏と北海道地域圏の違い、つまり、京都地域圏では条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも将来的に住み続けていると考えている一方、北海道地域圏では地方中枢拠点都市圏のほうが条件不利地域圏に対して将来的に住み続けていると考えているという傾向の違いとして想定することができる。

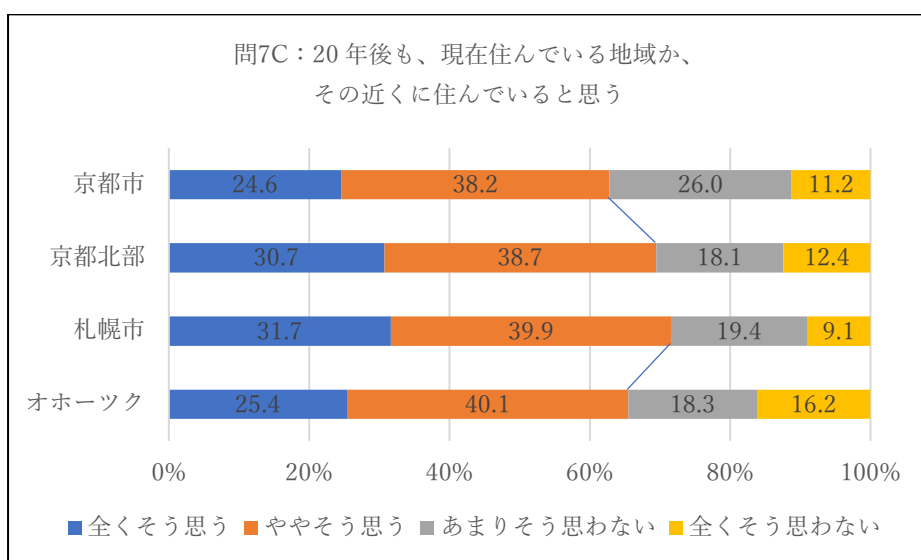


図3

さらに、地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏のほうが肯定回答の割合が高いという回答傾向が京都地域圏と北海道地域圏で共通するパターンである。つまり京都地域圏と北海道地域圏のどちらにおいても条件不利地域のほうが地方中枢拠点都市よりも肯定的であるパターンである。これに当てはまるのは、問7の質問項目の残り全てである。つまり、問7D「今後、地域活動に積極的に参加したい」、問7E「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」、問7F「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」、問7G「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」、問7H「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ」、問7I「現在住んでいる地域よりも大きな街で暮らしたい」、問7J「田舎暮らしをしたい」の7項目である（図4～10）。

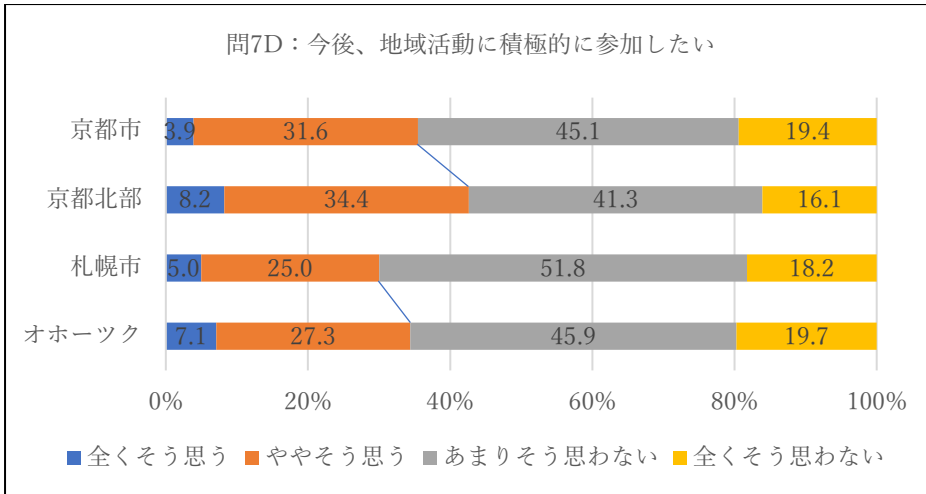


図 4

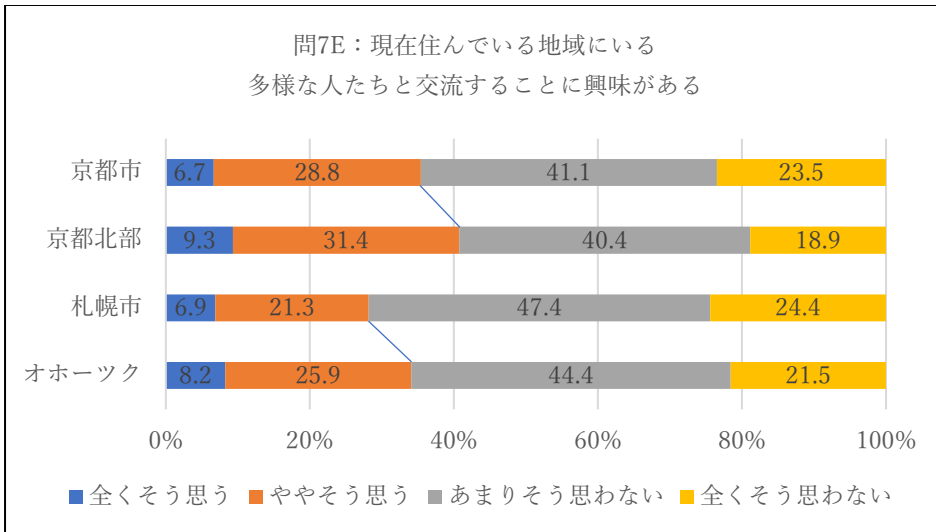


図 5

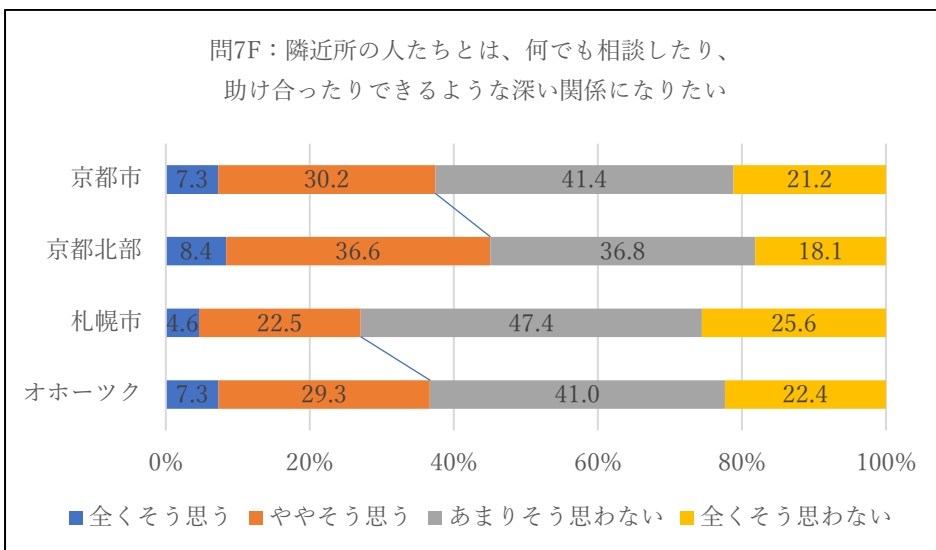


図 6

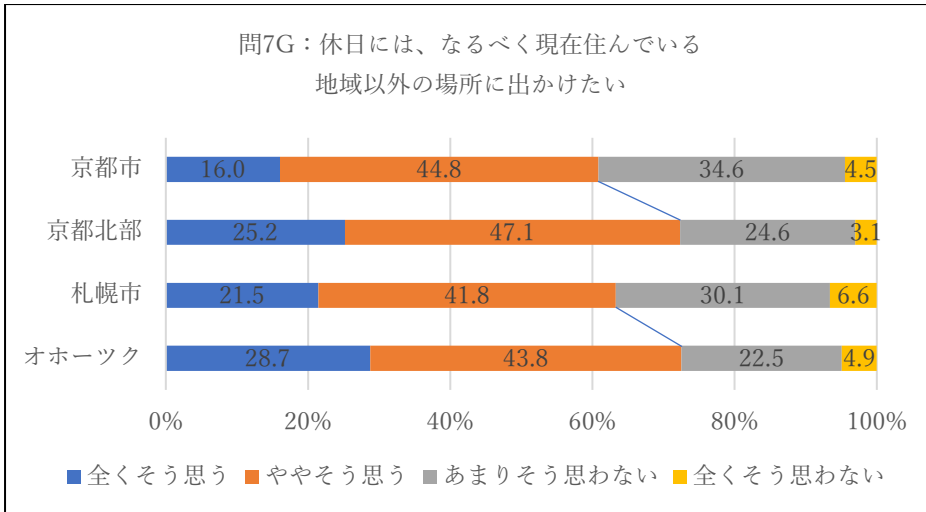


図 7

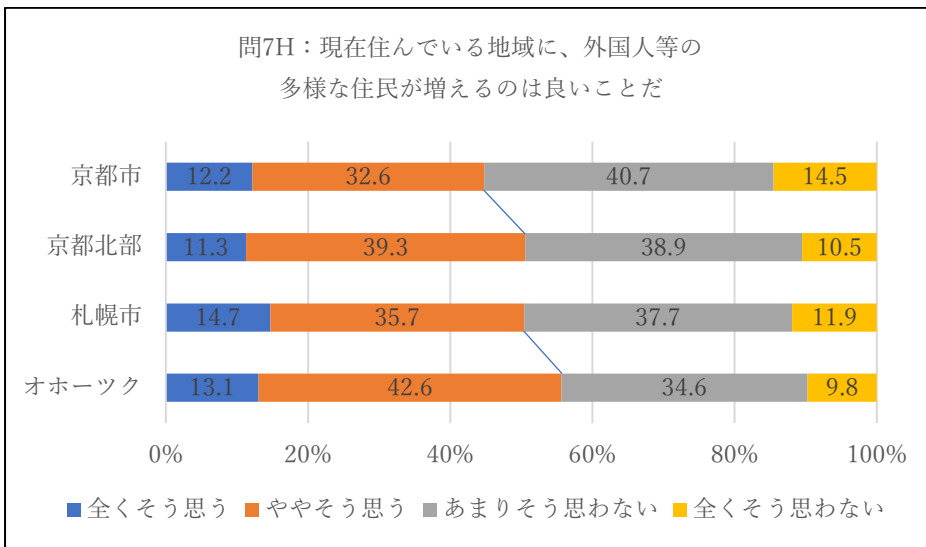


図 8

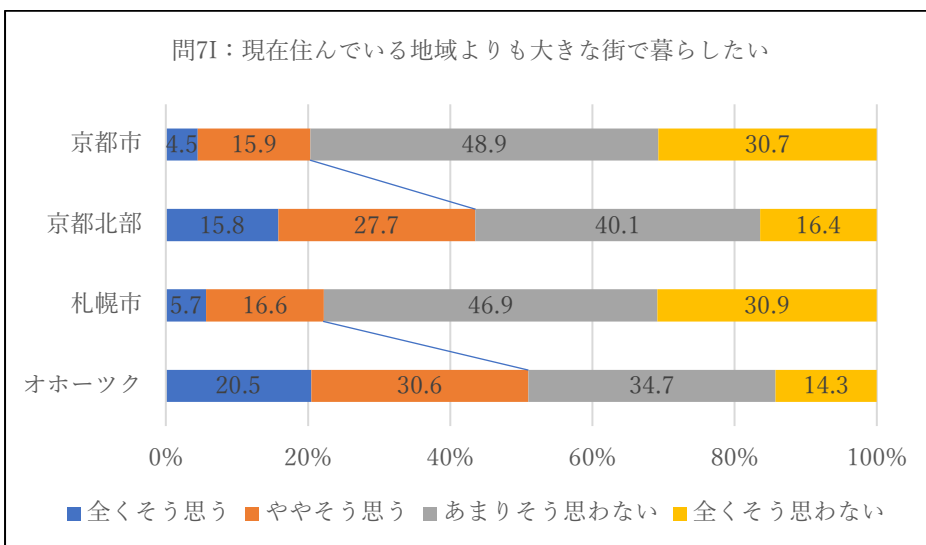


図 9

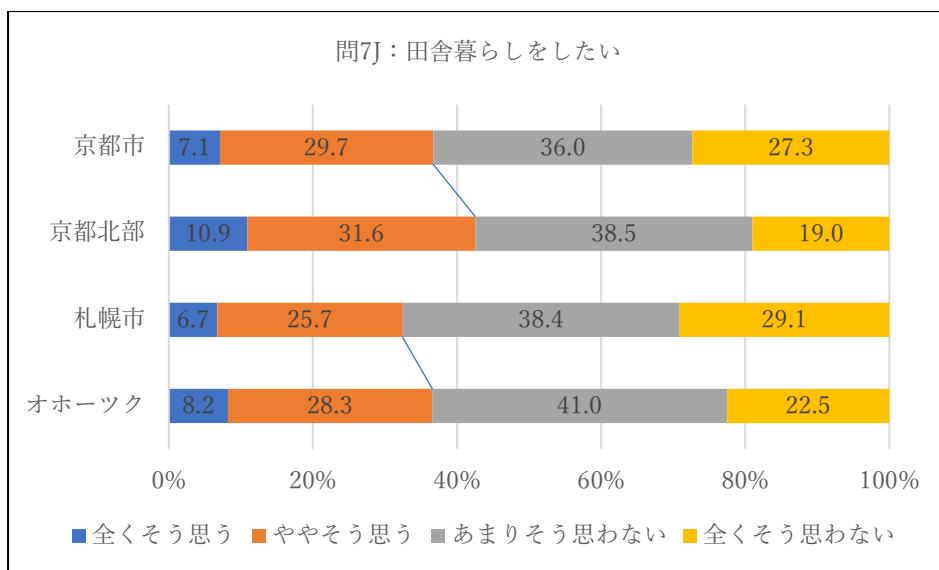


図 10

そのなかでもさらにいくつかのパターンに分かれる。

まず、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高いが、肯定回答の割合自体がそもそも高くない、あるいは低い質問項目である。これに該当するのは、問 7D「今後、地域活動に積極的に参加したい」(図 4)、問 7E「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」(図 5)、問 7F「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」(図 6)、問 7J「田舎暮らしをしたい」(図 10) である。

これらのすべての質問項目で肯定回答の割合は 50%以下となっている。また、すべての質問項目で条件不利地域圏と地方中枢拠点都市圏の肯定回答が割合の差は、目に見えて大きなものとはなっていない。さらに、これらのすべての質問項目で京都地域圏のほうが北海道地域圏よりも(地方中枢拠点都市圏、条件不利地域圏ともに) わずかではあるが肯定回答の割合が高い。

これらの質問項目を個別に確認していくと、問 7D「今後、地域活動に積極的に参加したい」(図 4)、すなわち、地域活動の参加意識について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。問 7E「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある」(図 5)、つまり、多様性のある交流意識について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。問 7F「隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい」(図 6)、つまり、近隣との関係意識について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。問 7G「休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい」(図 7)、つまり、休日の居住地からの外出意向について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。問 7H「現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ」(図 8)、つまり、地域住民の多様性意識について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。問 7J「田舎暮らしをしたい」(図 10)、つまり、田舎暮らし意

識について、条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも肯定回答の割合が高く、北海道地域圏よりも京都地域圏のほうが肯定回答の割合が高い。

次に、上記のパターン、つまり、地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏のほうが肯定回答の割合が高いという回答傾向が京都地域圏と北海道地域圏で共通するパターンと共通するが、地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏での肯定回答の割合に目に見えて大きな差があるものである。これに該当するのは、問 7I「現在住んでいる地域よりも大きな街で暮らしたい」(図 9) である。より大きな街で暮らしたいという意識は、京都地域圏においても北海道地域圏においても地方中枢拠点都市圏で肯定回答の割合がかなり低く、それと比較して、地方中枢拠点都市圏においてかなり高くなっている。

3. 地域の愛着の範囲について

問 8 では「現在住んでいる地域の範囲についての愛着」に関して、4つの居住地域範囲のカテゴリ（「近所（現在住んでいる小学校区）」、「お住まいの市町村」（※京都市は「京都市」、札幌市は「札幌市」となっている）、「お住まいの地域」（※京都市および京都北部は「京都府」、札幌市は「石狩管内全体」、オホーツクは「オホーツク管内全体」となっている）、「お住まいの地方」（※京都市および京都北部は「関西」、札幌市およびオホーツクは「北海道全体」となっている））について質問を行った。

4つの調査対象地域（京都市、京都北部、札幌市、オホーツク）ごとに、4つの居住地域範囲カテゴリへの愛着についての回答の割合を図 11~14 に示している。

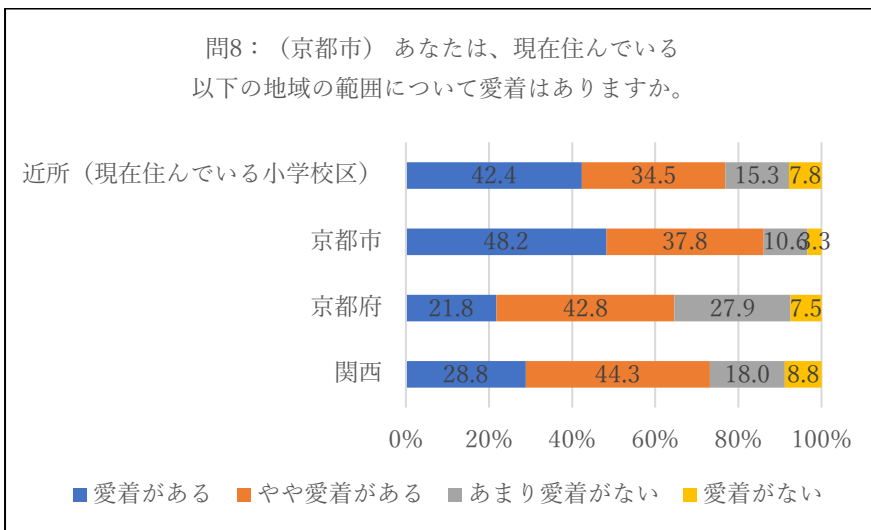


図 11

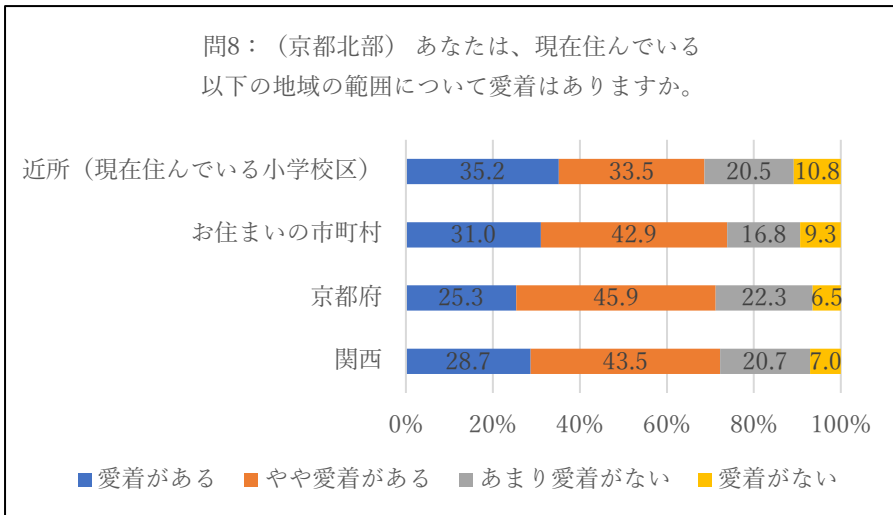


図 12

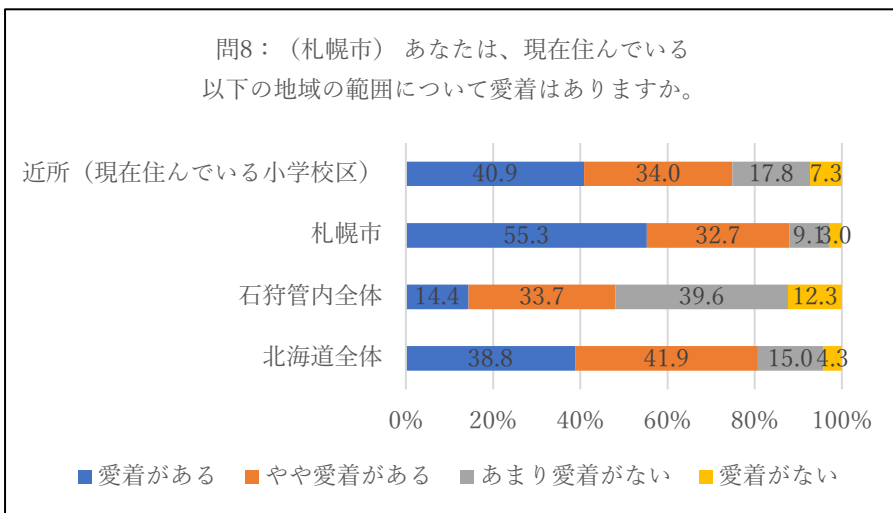


図 13

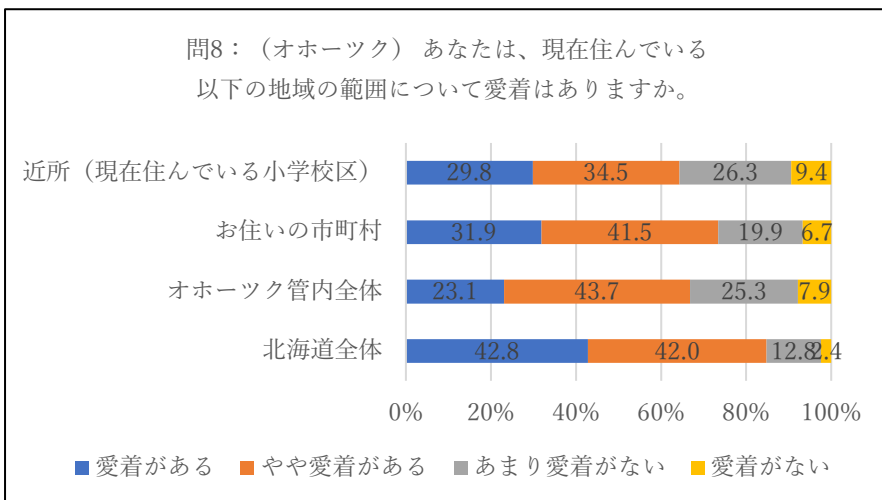


図 14

4つの調査対象地域のなかで、京都市、京都北部、札幌市の3地域で「お住まいの市町村」（京都市は「京都市」、札幌市は「札幌市」）に対する肯定回答の割合が、他の範囲カテゴリに比べて高かった（図11～13）。なかでも京都市、札幌市は他の範囲カテゴリよりも目に見えて大きな差が確認できる（図11、13）。京都北部はその他の範囲カテゴリとはっきりとした大きな差は確認できない（図12）。

また、オホーツクでは「北海道全体」に対する肯定回答の割合が、他の範囲カテゴリよりも高かった（図14）。

4つの調査対象地域を個別に確認していく。

京都市では、「京都市」（86.1%）の肯定回答の割合がいちばん高く、次いで「近所（現在住んでいる小学校区）」（76.9%）、「関西」（73.1%）、「京都府」（64.6%）の順に続く。「京都府」についての肯定回答の割合が、4つの範囲カテゴリの中ではいちばん低いが、それでも64.6%と低いとはいえない（図11）。

京都北部は、「お住まいの市町村」の肯定回答の割合がいちばん高いが、それに次ぐ「関西」の肯定回答の割合も高く、それぞれの割合の差はわずかである。それぞれの肯定回答の割合は「お住まいの市町村」が73.9%、「関西」が72.2%である。「京都府」（71.2%）、「近所（現在住んでいる小学校区）」（68.7%）と続くが、いずれもはっきりとした大きな差があるとは判断しづらい。なお、肯定回答のなかで「やや愛着がある」を除き、「愛着がある」だけの回答の割合を比較すると、最も高い割合であるのは「近所（現在住んでいる小学校区）」（35.2%）であり、次いで「お住まいの市町村」（31.0%）、「関西」（28.7%）、「京都府」（25.3%）の順となる（図12）。

札幌市は、「札幌市」（88.0%）の肯定回答の割合がもっとも高い。それに「北海道全体」（80.7%）、「近所（現在住んでいる小学校区）」（74.9%）、「石狩管内全体」（48.1%）が続く。他の3つの範囲カテゴリに比べ、「石狩管内全体」の肯定回答の割合の低さははっきりしている（図13）。

オホーツクは、他の3つの調査対象地域とは違い、「北海道全体（お住まいの地方）」（84.8%）の肯定回答の割合がもっとも高い。次いで「お住まいの市町村」（73.4%）、「オホーツク管内全体」（66.8%）と続き、これも他の3つの調査対象地域と異なり、「近所（現在住んでいる小学校区）」（64.3%）がもっとも低い結果となっている。ただし、「愛着がある」のみの回答の割合でみると、「近所（現在住んでいる小学校区）」（29.8%）の割合はもっとも低いわけではなく、いちばん割合の低いのは「オホーツク管内全体」（23.1%）となっている（図14）。

4つの調査地域における、それぞれの居住地域範囲カテゴリに対する愛着の平均の比較をしたものが表2である。

表2 地域の愛着（平均値）

居住地域範囲カテゴリ	調査地域	平均値	多重比較			N
近所 (現在住んでいる小学校区)	京都市	3.11	京都北部**	札幌市---	オホーツク***	510
	京都北部	2.93		札幌市**	オホーツク---	526
	札幌市	3.09			オホーツク***	741
	オホーツク	2.85				788
分散分析のF検定		F値11.837 有意確率0.000				
お住まいの市町村 (京都市・札幌市)	京都市	3.31	京都北部***	札幌市---	オホーツク***	510
	京都北部	2.96		札幌市***	オホーツク---	525
	札幌市	3.40			オホーツク***	740
	オホーツク	2.99				790
分散分析のF検定		F値46.972 有意確率0.000				
お住まいの地域 (京都府・石狩管内全体 ・オホーツク管内全体)	京都市	2.79	京都北部---	札幌市***	オホーツク---	509
	京都北部	2.90		札幌市***	オホーツク---	525
	札幌市	2.50			オホーツク***	738
	オホーツク	2.82				789
分散分析のF検定		F値26.807 有意確率0.000				
お住まいの地方 (関西・北海道全体)	京都市	2.93	京都北部---	札幌市***	オホーツク***	510
	京都北部	2.94		札幌市***	オホーツク***	526
	札幌市	3.15			オホーツク*	742
	オホーツク	3.25				790
分散分析のF検定		F値22.973 有意確率0.000				

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 (---は有意ではないことを示す)

※多重比較について、近所、お住いの市町村、お住いの地方ではLSD（最小有意差）を、お住いの地域ではGames-Howellを使用している

居住地域の範囲カテゴリのなかで、「近所（現在住んでいる小学校区）」と「お住いの市町村」（京都市は「京都市」、札幌市は「札幌市」）において、京都市と札幌市の平均値が京都北部、オホーツクに対して有意に高い。「近所」「お住いの市町村」という居住地域範囲カテゴリに対する愛着は、地方中枢拠点都市圏のほうが条件不利地域圏よりも高いという結果となった。

その一方で、「お住いの地域」（京都市、京都北部は「京都府」、札幌市は「石狩管内全体」、オホーツクは「オホーツク管内全体」）に関しては、京都市と京都北部、オホーツクとのあいだに有意な差は確認できなかったが、京都市と札幌市のあいだと、京都北部と札幌市のあいだ、さらに札幌市とオホーツクのあいだには有意差が確認でき、札幌市に比べて京都市のほうが、京都市に比べて京都北部のほうが、札幌市に比べてオホーツクのほうが平均値が高い。平均値をみると条件不利地域圏のほうが地方中枢拠点都市圏よりも「お住いの地域」に対する愛着の平均値が高いが、北海道地域圏では有意な差である一方で、京都地域圏では有意な差ではない。つまり、北海道地域圏では地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏で有意な差となっているが、京都地域圏では有意な差とはいえない。

「お住まい地方」（京都市、京都北部では「関西」、札幌市、オホーツクでは「北海道全体」）に関する愛着の平均は、オホーツクがもっとも高く、次いで札幌市、京都北部、京都市の順に続く。オホーツクと札幌市のあいだには有意な差が認められ、札幌市と京都北部のあいだにも有意な差が確認できる。しか

し、京都北部と京都市のあいだでは有意な差とはなっていない。つまり、北海道地域圏では地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏で、「お住いの地方」（北海道全体）に対する愛着の平均が高い。また京都地域圏では地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏で、「お住いの地方」（関西）に対する愛着の平均は高いものの、地方中枢拠点都市圏よりも条件不利地域圏のほうが有意に愛着があるとはいえない。また北海道地域圏のほうが京都地域圏よりも「お住いの地方」（北海道全体・関西）への愛着が有意に高いといえよう。

【参考文献】

轡田竜蔵 2017 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房

第5章 趣味縁と地域社会

岩田 考（桃山学院大学 教授）

本章では、血縁や、地縁、社縁（会社など勤め先に基づくつながり）とは異なる人々の結びつきである趣味を介した地域における人々の結びつき（趣味縁）について分析を行う。地域社会にとって、趣味縁がいかなる意味をもつものであるのか、ということの一端を明らかにしたい。

趣味を介した結びつきに着目するには、地域における結びつきの中心となってきた血縁や、地縁、社縁などとは異なる特質を持っているという議論にもとづいている。例えば、地方の若者を対象とした研究の中で轡田竜蔵（2017）は、「趣味縁には、異質な人をたちへの関心や付き合いを広げる効果があるという点で、他の種類の地域活動・社会活動と区別される」（轡田 2017:122）と述べている。さらに、『『趣味関係のグループの活動』への参加度の高さは、『社会問題や政治に関心があり、知識を得ようと心掛けている』傾向の強さに対しても説明力があり、社会・政治への参画のきっかけという点でも注目される』（轡田 2017:122）とも指摘している。

また、浅野智彦（2011）は、社会関係資本論などをふまえ、趣味縁が公共性や社会参加に関連しているかどうかを東京都杉並区の16歳から29歳の若者を対象とした調査から検討している。趣味集団への参加が募金や不買運動など支払を経由するような政治参加の経験の有無と関連していること、さらに趣味集団も含めて複数の集団への所属（多元的な所属）が公共性・社会参加により深く関わっていることを明らかにしている（浅野 2011:119）。

なお、本稿の分析においては、地方の多様性をどのようにとらえるのかという点にも注目する。我々が青森で行った「青森 20-30 代住民意識調査」の報告書では、轡田（2017）が地域社会の多様性をとらえる類型として提示した「条件不利地域圏／地方中枢拠点都市圏」という類型化についても若干の検討を加えた（岩田 2018）。

今回の4地域は、必ずしもこの類型に沿うものとは言えない面がある。轡田（2017）の区分に基づけば、「地方中枢拠点都市圏」とは、「30万人以上の基準を満たす都市雇用圏（三大都市圏以外）」であり、「条件不利地域圏」は『『地方中枢拠点都市圏』から外れる地方圏の地域』である（轡田 2017:61-2）。また、轡田（2018:4）は、この類型化を『地方圏の「まち—いなか」関係』を捉えるモデルであるとも指摘している。

今回の調査地の一つである「京都市」は、三大都市圏である「大阪圏」（あるいは「近畿圏」）に含まれており、「地方」と見なすことには問題がある。また、「京都北部」には7つの市（福知山市・舞鶴市・綾部市・宮津市・京丹後市）と2つの町（伊根町・与謝野町）が含まれ、かなり広範な地域となっている。

「オホーツク（管内）」も、3つの市（北見市・網走市・紋別市）と14の町（美幌町・津別町・斜里町・清里町・小清水町・訓子府町・置戸町・佐呂間町・遠軽町・湧別町・滝上町・興部町・雄武町・大空町）と1つの村（西興部村）からなる非常に広い地域である。市町村という枠組みを超えて連携する地域全体をとらえるために選定されたものではあるが、様々な特性をもった地域を含むものになっている。

「京都市」に関しては、「地方」の「まち」とするのは問題があるかもしれないが、「まち」であることは確かである。また、東京への一極集中が進んだ現在においては、三大都市圏といっても、東京圏と大阪

圏や名古屋圏を完全に同一の土俵でみていくこともできない。したがって、今回の調査においても「(地方の) まちといなか」という枠組みはある程度保持されている。すなわち、本章では「札幌市」と「京都市」は「(地方の) まち」、「オホーツク」と「京都北部」は「(地方の) いなか」であるという観点から検討していきたい。

1. 地域活動・社会活動への関わり

(1) 地域活動・社会活動への関わりへの全般的傾向

まず地域活動・社会活動への関わりについてみてみよう。活動は、地域における活動に限定しない形で質問を行っている。

図1に示したように、4つの地域全体でみると、地域活動・社会活動へ関わりをもっている者（「積極的な関わり」「一般的な関わり」「消極的な関わり」）の割合が最も高いのは、「職場参加としての地域活動・社会活動」48.3%であった。次いで「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動」41.74%、「趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動」41.70%となっている。他方、関わりをもっている者の割合が最も低いのは、「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」15.2%であった。

また、積極的に関わっている者の割合が高いのは、「スポーツ関係のグループ活動」9.4%、「趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動」9.1%で、趣味的な活動となっている。積極的に関わりをもっている者の割合が最も低いのも、関わりをもっている者と同様に「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」で2.0%であった。

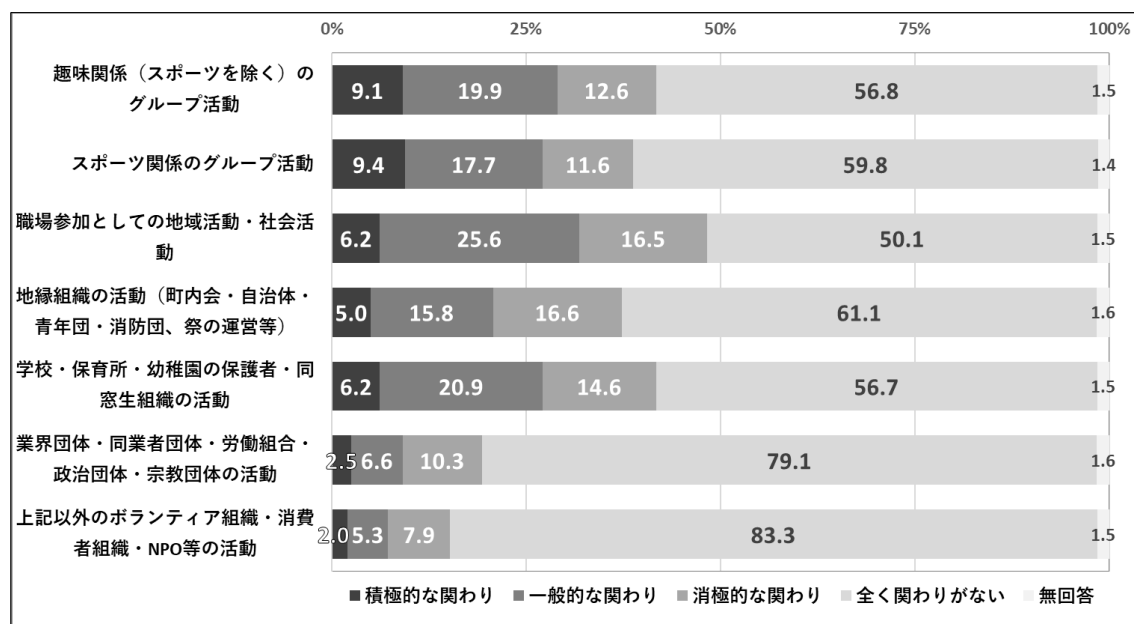


図1 地域活動・社会活動への関わり（4地域計 N=2585）

(2) 地域別にみた地域活動・社会活動（全般）への関わり

次に、地域別にみた地域活動・社会活動への関わり全般についてみてみよう。地域別にみた各活動への関わりについては次の項で分析する。

図2に示しように、図1の7つの活動のいずれかに「関わりあり」が最も高いのは「オホーツク」

(79.5%)、最も低いのは「札幌市」(71.8%)となっている。無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、札幌市で「関わりあり」が低い傾向にある。「京都市」(77.8%)も「京都北部」(79.8%)に比べるとやや割合は低くなっているが、都市部(まち)のほうが都市部以外(いなか)よりも「関わりあり」の割合が低い傾向にあるとまでは言えない。

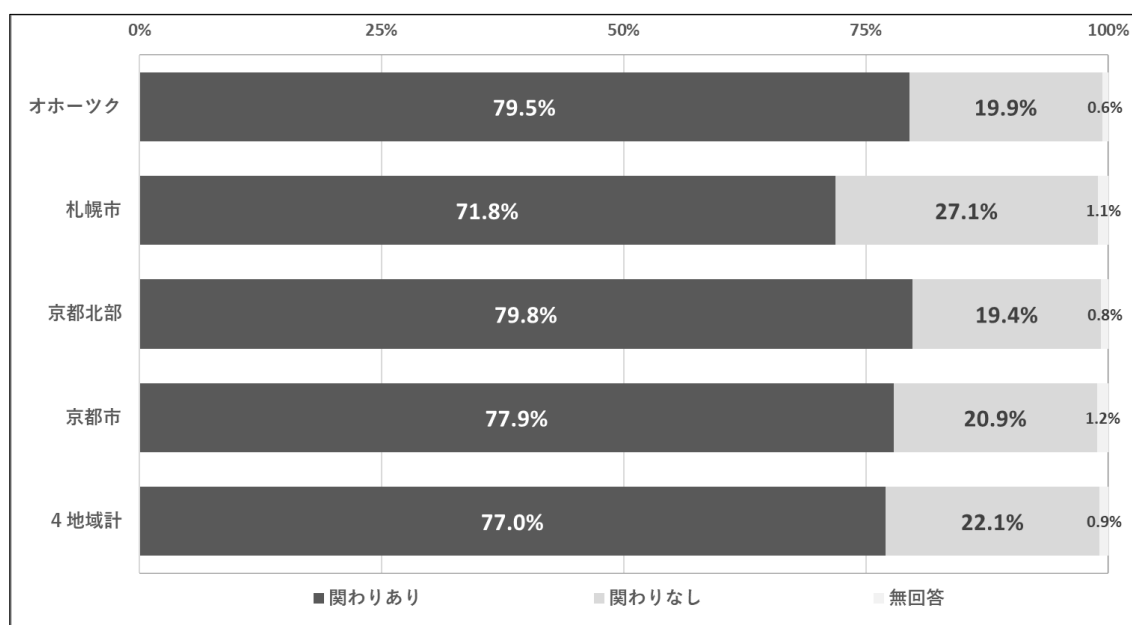


図2 地域活動・社会活動との関わり(4地域別)

注) 各地域の回答者数は、オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部=530、京都市 N=511。
無回答を除いた χ^2 検定では1%水準で有意差あり。

さらに、地域別にみた地域活動・社会活動への「積極的な関わり」についてみてみよう。図3は、地域別に、図1の7つの活動のいずれかに「積極的な関わり」を持っている者の割合である。最も割合が高いのは「京都北部」(28.1%)、最も低いのは「札幌市」(21.5%)となっている。無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、「関わりあり」と同様に、札幌市で「積極的な関わり」を持っている者の割合が低い傾向にある。今回の調査結果からすると、「札幌市」の20代から30代は他の地域に比べて地域活動・社会活動が低調なようである。「関わりあり」同様に、「京都市」(26.6%)も「京都北部」(28.1%)に比べて、やや割合は低くなっているが、都市部以外(いなか)よりも都市部(まち)のほうが「積極的な関わり」を持つものが少ない傾向にあるとまでは言うことはできない。

「京都市」は3三大都市圏(国土交通省¹⁷:東京圏・大阪圏・名古屋圏)に含まれ、札幌のような「地方中枢都市」¹⁸(国土交通省:札幌、仙台、広島、福岡・北九州)とは異なる特質を持つと見た場合に、札

¹⁷ 国土交通省の用語解説ページ (<https://www.mlit.go.jp/yougo/j-t2.html>) の「地方中核都市圏」の説明の記述に基づく(2021年3月1日閲覧)。

¹⁸ 国土交通省の用語解説ページ (<https://www.mlit.go.jp/yougo/j-t2.html>) の「地方中枢都市圏」の説明の記述に基づく(2021年3月1日閲覧)。

幌のような「地方中枢都市」において地域活動・社会活動が低調という傾向にあるかどうかは改めて検証する必要があるだろう。

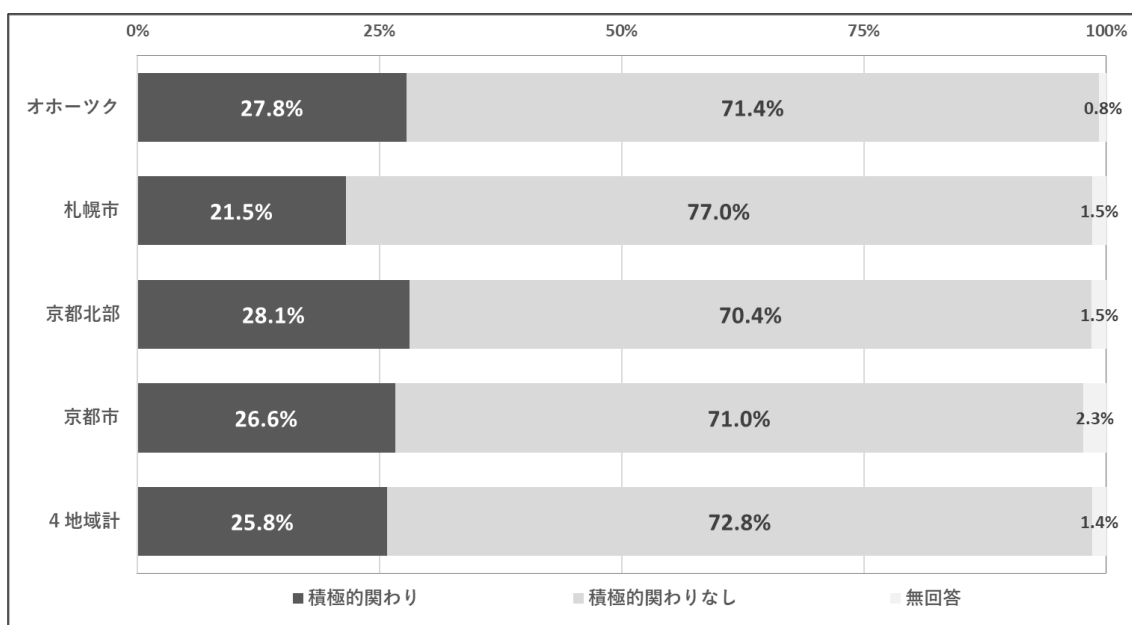


図3 地域活動・社会活動への積極的関わり（4地域別）

注）各地域の回答者数は、オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部=530、京都市 N=511。
無回答を除いた χ^2 検定では5%水準で有意差あり。

(3) 地域別に見た各地域活動・社会活動への関わり

① 趣味縁的な活動

これまでみてきたように、本調査では趣味にかかわるような活動として2つの活動についてたずねている。4地域別に2つの活動をみてみよう。

表1に示したように、「趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動」は、無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差は見られなかった。

表1 趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動（4地域別）

調査地域	趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動					無回答	合計
	積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない			
オホーツク	度数	68	158	98	459	12	795
	調査地域の%	8.6%	19.9%	12.3%	57.7%	1.5%	100.0%
札幌市	度数	65	125	95	453	11	749
	調査地域の%	8.7%	16.7%	12.7%	60.5%	1.5%	100.0%
京都北部	度数	49	120	66	286	9	530
	調査地域の%	9.2%	22.6%	12.5%	54.0%	1.7%	100.0%
京都市	度数	54	112	68	271	6	511
	調査地域の%	10.6%	21.9%	13.3%	53.0%	1.2%	100.0%
合計	度数	236	515	327	1469	38	2585
	調査地域の%	9.1%	19.9%	12.6%	56.8%	1.5%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 5%水準で有意差なし。

他方、「スポーツ関係のグループ活動」では有意差がみられた。調整済み残差からすると、「京都北部」で「一般的な関わり」(22.1%)が高く、「全く関わりがない」(55.5%)の割合は低くなっている。都市部と(まち)と都市部以外(いなか)という枠組みで見た場合、明確な傾向を読み取ることは難しい。

表2 スポーツ関係のグループ活動(4地域別)

			スポーツ関係のグループ活動					合計
			積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない	無回答	
調査地域	オホーツク	度数	77	149	93	468	8	795
		調査地域の%	9.7%	18.7%	11.7%	58.9%	1.0%	100.0%
札幌市	札幌市	度数	65	109	84	480	11	749
		調査地域の%	8.7%	14.6%	11.2%	64.1%	1.5%	100.0%
京都北部	京都北部	度数	53	117	55	294	11	530
		調査地域の%	10.0%	22.1%	10.4%	55.5%	2.1%	100.0%
京都市	京都市	度数	49	83	68	305	6	511
		調査地域の%	9.6%	16.2%	13.3%	59.7%	1.2%	100.0%
合計	合計	度数	244	458	300	1547	36	2585
		調査地域の%	9.4%	17.7%	11.6%	59.8%	1.4%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 5%水準で有意差あり。

②社縁・地縁的な活動

社縁的あるいは地縁的といえる活動についてみてみよう。

表3のように、「職場参加としての地域活動・社会活動」では、無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、「札幌市」で「積極的な関わり」(2.5%)や「一般的な関わり」(20.4%)が低く、「全く関わりがない」(60.7%)が高くなっている。「オホーツク」は、「積極的な関わり」(8.4%)、「一般的な関わり」(29.3%)、「消極的な関わり」(19.1%)がいずれも割合が高く、「全く関わりがない」(41.6%)が低くなっており、「職場参加としての地域活動・社会活動」に関わっている人が多いことがわかる。

表3 職場参加としての地域活動・社会活動(4地域別)

			職場参加としての地域活動・社会活動					合計
			積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない	無回答	
調査地域	オホーツク	度数	67	233	152	331	12	795
		調査地域の%	8.4%	29.3%	19.1%	41.6%	1.5%	100.0%
札幌市	札幌市	度数	19	153	112	455	10	749
		調査地域の%	2.5%	20.4%	15.0%	60.7%	1.3%	100.0%
京都北部	京都北部	度数	41	172	83	224	10	530
		調査地域の%	7.7%	32.5%	15.7%	42.3%	1.9%	100.0%
京都市	京都市	度数	33	105	79	286	8	511
		調査地域の%	6.5%	20.5%	15.5%	56.0%	1.6%	100.0%
合計	合計	度数	160	663	426	1296	40	2585
		調査地域の%	6.2%	25.6%	16.5%	50.1%	1.5%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 5%水準で有意差あり。

この結果からは、北海道においては、都市部（まち）よりも都市部以外（いなか）のほうが、「職場参加としての地域活動・社会活動」に関わっている人が多い傾向にあると言えよう。都市部以外（いなか）のほうが、仕事にかかわり、包括的なコミットメントを要求されるということかもしれない。「積極的な関わり」の割合は相対的には高いとはいえ10%未満であり、「消極的な関わり」の割合も高く、そのような関わりを望まない人にとっては、仕事関係のしがらみが多いということになるかもしれない。

しかし、表4のように、仕事にかかわるものも含む「業界団体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動」では、無回答を除き χ^2 検定を行っても、地域別に統計的に有意な差はみられなかった。労働組合などセーフティネット的な役割をもつ活動も含まれており、都市部以外（いなか）の厳しい雇用環境からすると、憂慮すべき結果といえるかもしれない。

表4 業界団体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動（4地域別）

調査地域	業界団体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動					無回答	合計
	積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない			
オホーツク	度数	19	59	90	613	14	795
	調査地域の%	2.4%	7.4%	11.3%	77.1%	1.8%	100.0%
札幌市	度数	14	33	72	620	10	749
	調査地域の%	1.9%	4.4%	9.6%	82.8%	1.3%	100.0%
京都北部	度数	14	41	56	407	12	530
	調査地域の%	2.6%	7.7%	10.6%	76.8%	2.3%	100.0%
京都市	度数	17	38	47	404	5	511
	調査地域の%	3.3%	7.4%	9.2%	79.1%	1.0%	100.0%
合計	度数	64	171	265	2044	41	2585
	調査地域の%	2.5%	6.6%	10.3%	79.1%	1.6%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では5%水準で有意差あり。

次に、地縁的な活動についてみてみよう。表5に示したように、「地縁組織の活動（町内会・自治体・青年団・消防団、祭の運営等）」では、無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、「京都北部」で「積極的な関わり」(9.2%)や「一般的な関わり」(24.0%)が高く、「全く関わりがない」(49.9%)が非常に低くなっている。「札幌市」は、「積極的な関わり」(2.0%)や「一般的な関わり」(9.2%)がかなり低く、「全く関わりがない」(72.2%)が非常に高くなっている。「京都市」は「積極的な関わり」(2.7%)の割合が低く、「オホーツク」は「積極的な関わり」(6.3%)が高くなっている。北海道でも京都でも、都市部（まち）よりも都市部以外（いなか）で地縁に基づくような活動に参加している割合が高いことがわかる。

学校など教育機関を媒介とした「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動」も無回答を除いて χ^2 検定を行うと、地域別に統計的に有意な差がみられた。教育機関を媒介とした関係も地縁的側面を持つものといえる。調整済み残差からすると、「京都北部」は、「一般的な関わり」(28.9%)の割合が高く、「消極的な関わり」(11.7%)や「全く関わりがない」(52.6%)の割合が低くなっている。「オホーツク」は、「積極的な関わり」(7.8%)や「一般的な関わり」(23.8%)の割合が高く、「全く関わりがない」(52.2%)がかなり低くなっている。

「京都市」については明確とはいえないが、都市部（まち）よりも都市部以外（いなか）で活動に参加

している割合が高い傾向は、「地縁組織の活動（町内会・自治体・青年団・消防団・祭の運営等）」とある程度共通している。

以上の調査結果からすると一般的なイメージのとおり、地縁的結びつきは都市部（まち）よりも都市部以外（いなか）で強く、そのよう関係に基づく活動も活発であるといえよう。

表5 地縁組織の活動（町内会・自治体・青年団・消防団・祭の運営等）（4地域別）

			地縁組織の活動（町内会・自治体・青年団・消防団・祭の運営等）					合計
			積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない	無回答	
調査地域	オホーツク	度数	50	123	142	467	13	795
		調査地域の%	6.3%	15.5%	17.9%	58.7%	1.6%	100.0%
	札幌市	度数	15	68	113	541	12	749
		調査地域の%	2.0%	9.1%	15.1%	72.2%	1.6%	100.0%
	京都北部	度数	49	127	85	259	10	530
		調査地域の%	9.2%	24.0%	16.0%	48.9%	1.9%	100.0%
	京都市	度数	14	90	89	312	6	511
		調査地域の%	2.7%	17.6%	17.4%	61.1%	1.2%	100.0%
合計		度数	128	408	429	1579	41	2585
		調査地域の%	5.0%	15.8%	16.6%	61.1%	1.6%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表6 学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動（4地域別）

			学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動					合計
			積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない	無回答	
調査地域	オホーツク	度数	62	189	116	415	13	795
		調査地域の%	7.8%	23.8%	14.6%	52.2%	1.6%	100.0%
	札幌市	度数	42	106	115	474	12	749
		調査地域の%	5.6%	14.2%	15.4%	63.3%	1.6%	100.0%
	京都北部	度数	27	153	62	279	9	530
		調査地域の%	5.1%	28.9%	11.7%	52.6%	1.7%	100.0%
	京都市	度数	29	93	85	298	6	511
		調査地域の%	5.7%	18.2%	16.6%	58.3%	1.2%	100.0%
合計		度数	160	541	378	1466	40	2585
		調査地域の%	6.2%	20.9%	14.6%	56.7%	1.5%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

③ ボランティア・NPO などの活動

最後に、地縁や社縁など従来からあるつながりに基づく活動とは異なる側面をもつボランティアやNPOなどの活動についてみてみよう。表7のように、「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」について、無回答を除いて地域別に χ^2 検定を行うと、統計的な有意差がみられた。調整済み残差をみると、「京都市」で「積極的な関わり」（4.3%）の割合が高くなっている。また、「札幌市」で、「積極的な関わり」（0.7%）の割合が低く、「全く関わりがない」（86.1%）の割合が高い。都市部（まち）のほうが社縁や地縁などに限定されない多様なつながりに基づく活動が行われているような印象もあるが、必ずしもそうとは言えないようである。

表7 上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動（4地域別）

			上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動					合計
			積極的な関わり	一般的な関わり	消極的な関わり	全く関わりがない	無回答	
調査地域	オホーツク	度数	11	48	65	658	13	795
		調査地域の%	1.4%	6.0%	8.2%	82.8%	1.6%	100.0%
	札幌市	度数	5	38	51	645	10	749
		調査地域の%	0.7%	5.1%	6.8%	86.1%	1.3%	100.0%
	京都北部	度数	13	28	50	428	11	530
		調査地域の%	2.5%	5.3%	9.4%	80.8%	2.1%	100.0%
	京都市	度数	22	22	39	423	5	511
		調査地域の%	4.3%	4.3%	7.6%	82.8%	1.0%	100.0%
合計		度数	51	136	205	2154	39	2585
		調査地域の%	2.0%	5.3%	7.9%	83.3%	1.5%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差なあり。

2. 趣味の状況

(1) 趣味の有無

前項でみたように、地域活動や社会活動における「積極的な関わり」では、スポーツや趣味に基づく活動の割合が高くなっていった。本項では、回答者の趣味自体についてみてみることにしよう。

図4は、趣味をもっているかどうかをたずねた結果を示している。4地域全体でみると、「趣味がある」と回答した者が77.4%、「趣味はない」20.8%となっている。4人に3人は何らかの趣味をもっているということになる。

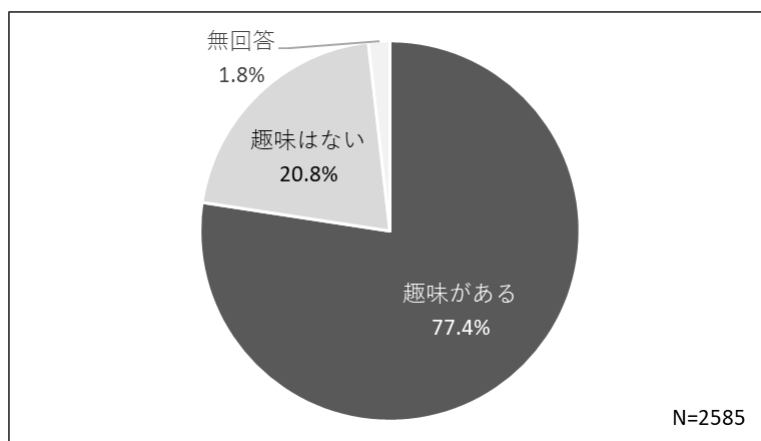
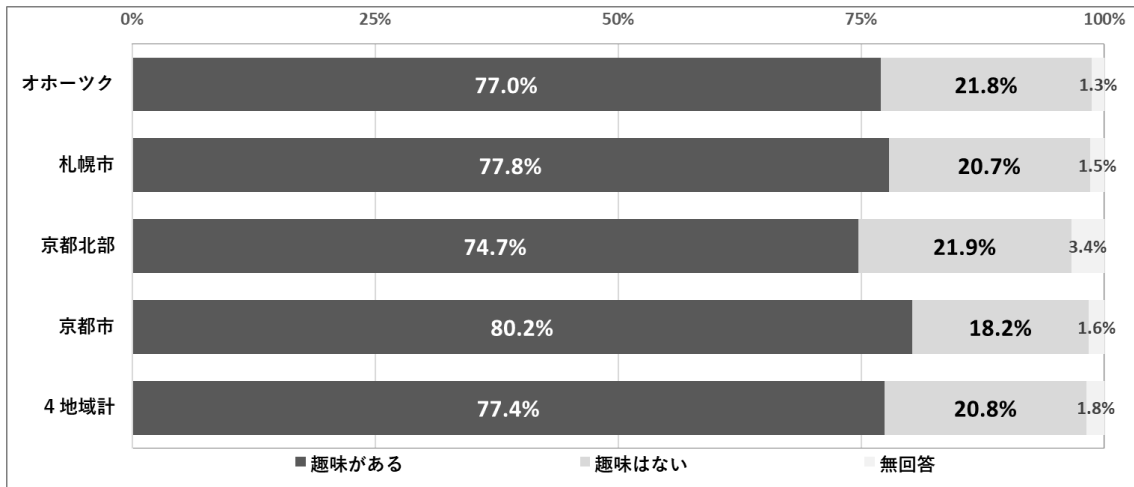


図4 趣味の有無（4地域計）

4地域別にみると、統計的に有意差はないが（無回答を除く χ^2 検定）、「京都市」で「趣味がある」が80.2%で割合が若干高くなっている。次いで、「札幌市」も77.8%と2番目に「趣味がある」の割合が高くなっている。「オホーツク」(77.0%)や「京都北部」(74.7%)より、都市部（まち）である「京都市」や「札幌市」のほうが割合が高くなっているものの、統計的に有意な差ではなく、都市部（まち）のほうが趣味を持っている者が多いとまでは言えない。

図5 趣味の有無（4地域別）



注) 各地域の回答者数は、オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部 = 530、京都市 N=511。
4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定では 5%水準で有意差なし。

(2) 地域における趣味を介したつながりの可能性

今回の調査では、回答者の負担を考えて、残念ながら具体的な趣味の内容についてはたずねていない。しかし、趣味に関わる項目について2つ質問をしているので、それらをもておくことにしよう。

地域で趣味に基づいて何らかの活動をするためには、趣味が同じ人が地域にいることが前提となる。そのため、「あなたにとって最も大切な趣味と同じ趣味をもつひとが、現在住んでいる地域」いるかどうかをたずねた。図6に示したように、地域にそのような人がいると回答した人は51.1%（「たくさんいる」12.8%「少しいる」38.4%）と過半数を超えている。実際に一緒に活動するかどうかは別として、趣味に基づく活動がなされる基盤はある程度あるようである。

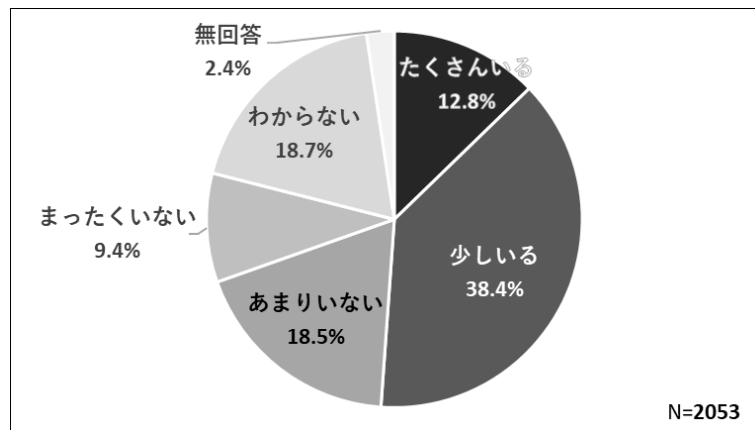


図6 趣味が同じ人が地域にいるか（4地域計）

表8に示したように、4地域別で無回答を除いて χ^2 検定を行うと統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、「京都北部」で「たくさんいる」(9.4%)の割合が低く、札幌市「たくさんいる」

(15.3%)の割合が高くなっている。また、「京都市」の「少しいる」(34.5)が他の地域に比べて割合が低い。

「札幌市」と「京都市」で「たくさんいる」割合が高くなっているが、都市部(まち)のほうが同じ趣味をもつ人が「たくさんいる」と感じているという明確な傾向があるとまでは言えない。都市部(まち)である京都市と札幌市は人口が多く密度も高いため、Fischer(1976=1996)が指摘するように、実際に同じ趣味をもっている人がいる可能性は高いと考えられるが、そのような人がいると必ず認知できるわけではない。

サービスと施設の供給において都市の有利さが生じるのは、都市の多様な制度を支えるのに十分な顧客——顧客の臨界量——を手中に収めることができるためであると述べた。特定関心集団の分析も同じ理論をたどる。大きな人口が狭い地域に集中すると、特殊な娯楽や主義主張やライフスタイルをもった人びとが定期的集まることができるようになる。(Fischer1976=1996:158)

現在の暮らしの中では、都市部(まち)のほうが都市部以外(いなか)に比べて、趣味に基づくつながりをつくる主観的な可能性が非常に大きなわけでは必ずしもないようである。

表8 趣味が同じ人が地域にいるか(4地域別)

			最も大切な趣味と同じ趣味をもつ人が、現在住んでいる地域にいるか					合計	
			たくさんいる	少しいる	あまりいない	まったくいない	わからない		無回答
調査地域	オホーツク	度数	76	237	130	51	116	12	622
		調査地域の%	12.2%	38.1%	20.9%	8.2%	18.6%	1.9%	
札幌市		度数	91	230	101	54	108	12	596
		調査地域の%	15.3%	38.6%	16.9%	9.1%	18.1%	2.0%	
京都北部		度数	39	180	63	46	72	14	414
		調査地域の%	9.4%	43.5%	15.2%	11.1%	17.4%	3.4%	
京都市		度数	56	141	85	41	87	11	421
		調査地域の%	13.3%	33.5%	20.2%	9.7%	20.7%	2.6%	
合計		度数	262	788	379	192	383	49	2053
		調査地域の%	12.8%	38.4%	18.5%	9.4%	18.7%	2.4%	

注) 4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定では5%水準で有意差あり。

(3) 趣味関係の親しい人

さらに、実際に趣味関係の親しい人が、どのようなところにいるかについてもたずねている。図7に示したように、「現在住んでいる地域」が27.9%で最も割合が高くなっている。「趣味関係(スポーツを除く)のグループ活動」と関わっている人は約5割であったが、約3割の人が趣味を介して現在住んでいる地域で親密な関係を形成していることがわかる。

図8に示したように、地域別に無回答を除いて χ^2 検定を行うと、「そのような人はいない」以外すべてで統計的に有意な差がみられた。「現在住んでいる地域」は「札幌市」(32.7%)で最も割合が高くなっている。しかし、次いで割合が高いのは、都市(まち)である「京都市」ではなく「オホーツク」(30.1%)であった。都市部以外(いなか)よりも都市部(まち)のほうが、趣味を介した親密な関係も形成されやすいとは言えないようである。

ただし、「京都市」が大阪圏(近畿圏)の一部であるという特性が影響している可能性がある。それは、

「現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域」や「片道1時間以上にかかるが、日帰りで会える距離にある地域」¹⁹に親しい人がいる割合が高くなっているためである。「京都北部」も「片道1時間以上にかかるが、日帰りで会える距離にある地域」の割合は高い。

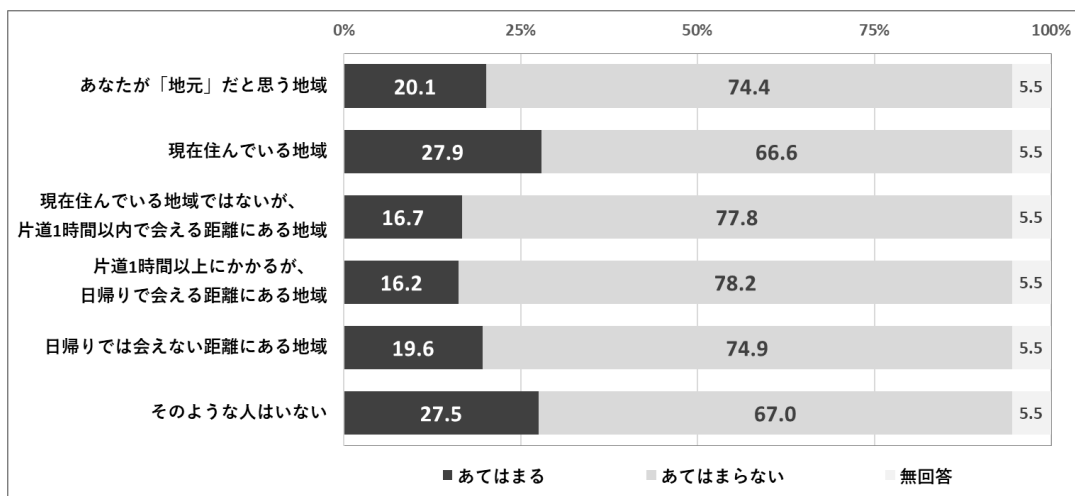


図7 趣味関係の親しい人がどこに住んでいるか（4地域計 N=2585）

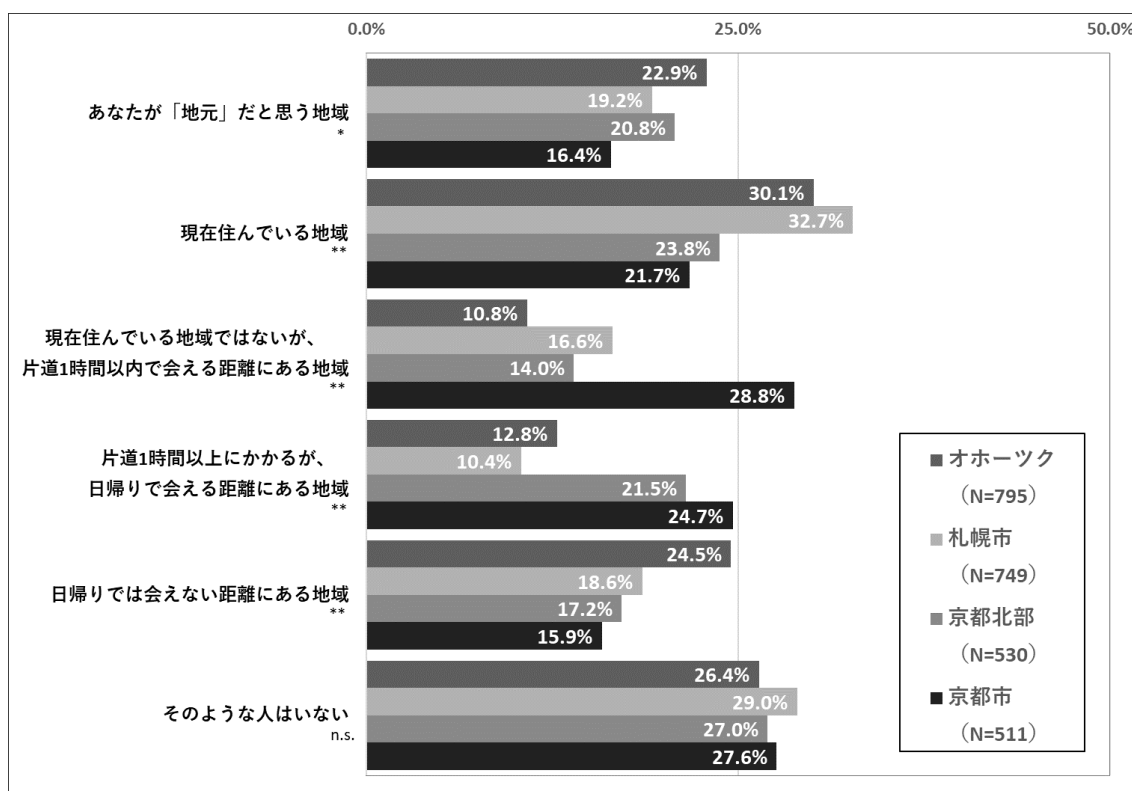


図8 趣味関係の親しい人がどこに住んでいるか（4地域別）

¹⁹ 「現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域」と「片道1時間以上にかかるが、日帰りで会える距離にある地域」という選択肢では、1時間が重複しており、選択肢の設定としては適切なものではなかった。今後の調査においては十分注意したい。

注) * : p<0.05、** : p<0.01、n.s. : Not significant (4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定)

このことは、「地方のまちといなか」という枠組みで、そのパターンを見出そうという試みとしては、大阪圏（近畿圏）の一部である「京都市」を調査対象地としたことが必ずしもよい選択とはいえないことを示している。しかし他方で、「大都市・地方のまち・地方のいなか」というような構造を考えていくうえで示唆的な結果と言えるかもしれない。

3. 自身の現状に対する評価と趣味縁

本稿で趣味を介した関係に注目している理由の一つは、轡田(2017:122)も指摘するように、「趣味縁には、異質な人をたちへの関心や付き合いを広げる効果がある」ということにあった。今回の調査においても、そのような傾向はみられるのであろうか。

まず、現在築いている自身の関係や自身の現状をどのように評価しているのかという点のみてみよう。

(1) 現在築いている自身の関係に対する評価

図9のように、4地域をあわせてみると、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」に肯定的な回答をしている人は、62.2%（「全くそう思う」18.4%+「ややそう思う」43.8%）で半数を超えている。それに対して、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」に肯定的な回答をしている人は、40.7%（「全くそう思う」10.8%+「ややそう思う」29.9%）で半数に満たない。多様な人々との交流よりも、身近な人々との良好な関係を評価する人々のほうが多くなっている。

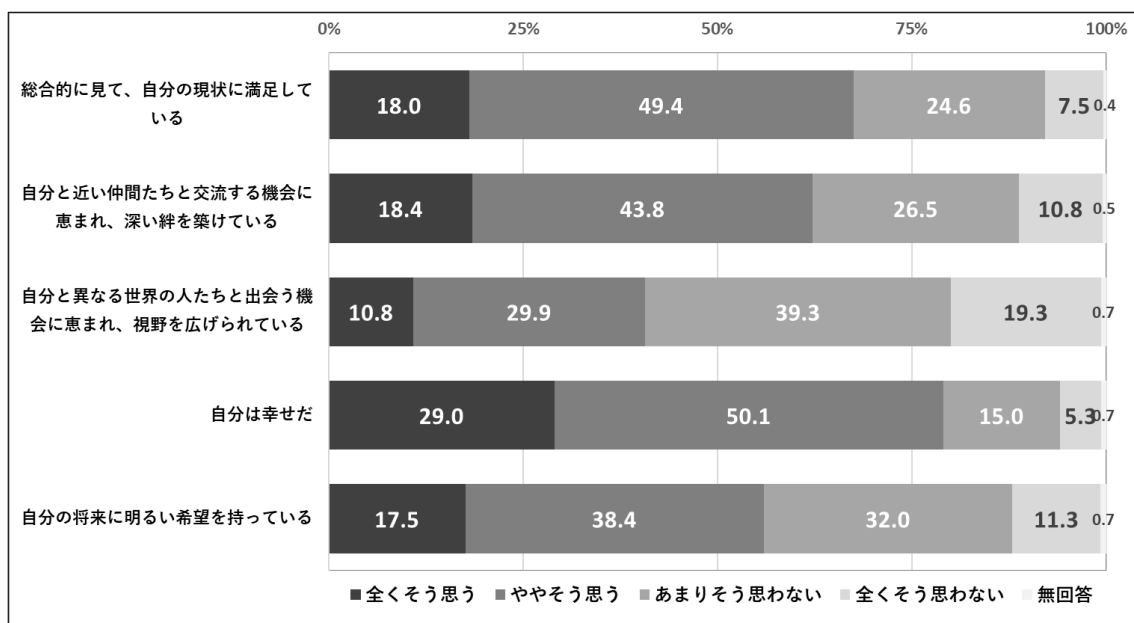


図9 自身の現状に対する評価（4地域計 N=2585）

ただし、両者は、身近な人々との交流か、多様な人々との交流か、という対立するような関係にあるのではない。表9に示したように、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」と肯定的に解答している人のほうが、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げら

れている」を肯定する割合も高くなっている。豊かな関係を築くことができている人とそうではない人で格差が生みだされている可能性がある。

表9 身近な人々との交流と多様な人々との交流

			自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている	全くそう思う	度数	191	145	117	22	475
		行の%	40.2%	30.5%	24.6%	4.6%	100.0%
	ややそう思う	度数	66	485	455	123	1129
		行の%	5.8%	43.0%	40.3%	10.9%	100.0%
	あまりそう思わない	度数	15	110	397	162	684
		行の%	2.2%	16.1%	58.0%	23.7%	100.0%
	まったくそう思わない	度数	7	32	47	192	278
		行の%	2.5%	11.5%	16.9%	69.1%	100.0%
合計	度数	279	772	1016	499	2566	
	行の%	10.9%	30.1%	39.6%	19.4%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 5%水準で有意差あり。

さらに、現在築いている自身の関係や現在の自身の状況に対する評価を4地域別にみてみよう。図10のように、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」は、無回答を除いて χ^2 検定を行うと、統計的に有意な差がみられた。調整済み残差からすると、積極的に肯定（「全くそう思う」）する割合が、「京都北部」（14.2%）で低く、「京都市」（21.7%）でやや高くなっている。

都市部以外（いなか）のほうが、濃密な関係が形成されているようなイメージがあるが、むしろ逆の結果になっている。阿部真大（2018）は、『地方には濃密な人間関係があるので、人間関係の薄い都会に比べて貧困の問題は深刻ではない』というおしつけ地方論²⁰に対して」（阿部 2018:3-4）、映画『そのみにて光り輝く』を対抗表象として、「貧困は、周囲に親しい人がいても、むしろいるからこそ、陥ることがある」（阿部 2018:51）ということ論じている。今回の結果は、阿部とは異なる形で、地方のイメージとは異なるものとなっている。

また、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」は、「京都市」で「全くそう思う」（13.7%）の割合がやや高いが、統計的な有意差はみられない。都市部（まち）のほうが、多様な人々と出会う機会が多いように思われるが、今回の結果ではそのような明確な傾向を見いだすことはできない。

²⁰ 阿部（2018:3）によれば、「おしつけ地方論」とは、「大都市の人々がつくる地方に対する一方的かつ支配的な表象」である。具体的には、「地方には濃密な人間関係があるので、人間関係の薄い都会に比べて貧困の問題は深刻ではない」以外に、「地方の若者は収入が低くとも周囲との経済格差のことなど気にせずにはっぴーに過ごしている」、「地方の仕事は、ローカルな地域コミュニティに根ざしたものである」、「地方の文化は、東京の劣化コピーであったり、その土地のローカルな伝統に根ざしたものである」などをあげている。

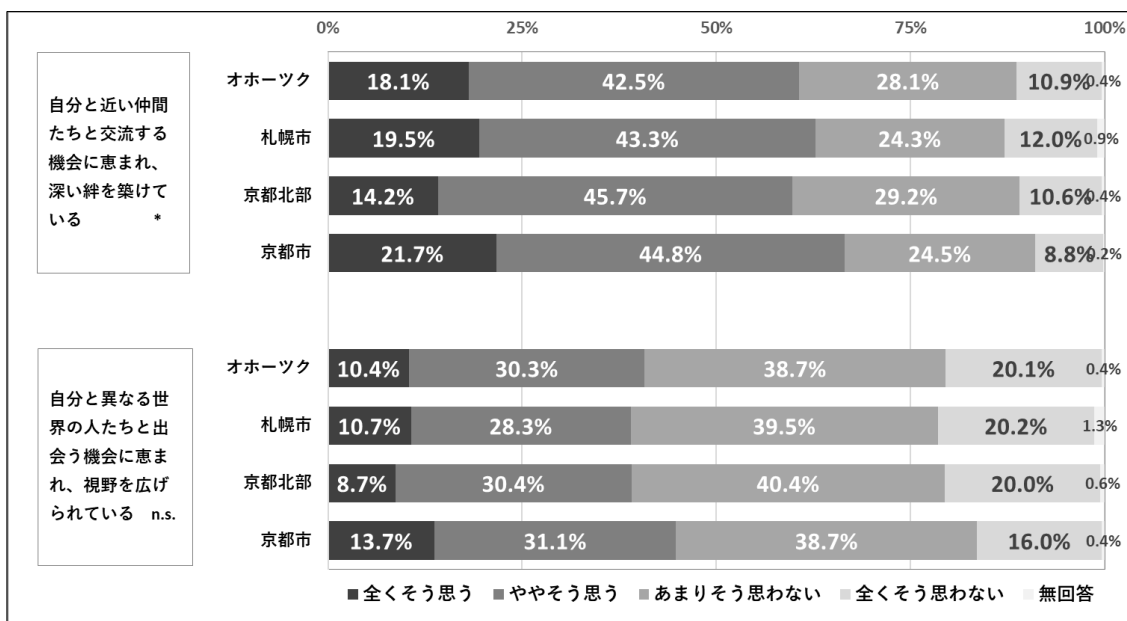


図 10 自身の現状（対人関係）に対する評価（4地域別）

注）各地域の回答者数は、オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部 = 530、京都市 N=511。

* : $p < 0.05$ 、** : $p < 0.01$ 、n.s.: Not significant（4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定）

(2) 自身の現状に対する評価

次に、現在の自身の状況をどのように評価しているのかという点をみてみよう。前掲した図 9 に示したように、自身の状況に関する 3 つの評価について、次のような回答がみられた。「総合的に見て、自身の現状に満足している」を肯定する者が 67.5%（「まったくそう思う」18.0%+「ややそう思う」49.4%）、「自分は幸せだ」79.0%（「まったくそう思う」29.0%+「ややそう思う」50.1%）、「自分の将来に明るい希望を持っている」55.9%（「まったくそう思う」17.5%+「ややそう思う」38.4%）となっている。自身の生活を肯定的に評価する人が、いずれも過半数より多くなっている。

我われが 2018 年に青森で行った調査では、残念ながら回収率が非常に低くなってしまった。その反省から、今回の調査では、北海道の 2 地区のみではあるが、回収率をあげるために訪問回収を行った（京都の 2 地区とは回収率に 10 ポイント以上差があり、結果を解釈する際には留意する必要がある）。それは、単に回収率をあげるものとしてだけでなく、地域の実情を知るフィールド・ワークとしての側面を持つものであった。この取り組みの中で、都市部（まち）である「札幌市」でも、「オホーツク」に比べれば少ないものの非常に厳しい生活を送っていると思われる人々がいるという現実も目の当たりにした²¹。阿部真大 (2018) が、「おしつけ地方論」に対する対抗表象としてとりあげた映画『そのみにて光り輝く』

²¹ 調査の効率という観点からすれば、調査会社にすべて依頼等するほうが賢明な選択と言えるだろう。しかしながら、今回の訪問回収は、本当に地道な取り組みではあるが、社会調査としても、地域研究としても、非常に意味ある試みであったと考える。社会学的な研究においても、わかりやすい効率性の追求やはなやかなメディア露出が重視される風潮の中で、実践するのは難しい。研究代表の羽瀨一代をはじめ井戸聡・白石壮一郎・成田凌・木村絵里子ら、このような取り組みに賛同した調査メンバーには、長年にわたって社会調査にたずさわってきた者として、同じ研究会のメンバーではあるが心から敬意を表したい。また、訪問回収に対応していただいた回答者の方には、心からお礼申し上げる。

で、ヒロインが住む海辺のバラック小屋と同じような住環境に出くわすこともあった（映画の舞台は函館である）。そのような方の中には、仕事などに追われ余裕がないという理由で調査への協力を断る方もいた²²。そのような点をふまえると、現在の自身の現状に対する評価は高くなっているように思われる。

さらに、現在の自身の状況に対する評価を4地域別にみてみよう。図11に示しように、3つの評価いずれも、無回答を除いて χ^2 検定を行うと統計的に有意な差がみられた。「総合的に見て、自分の現状に満足している」は、調整済み残差からすると、「全くそう思う」と積極的に肯定する割合が「京都北部」(14.9%)で低くなっている。また、「あまりそう思わない」という否定する割合が「オホーツク」(27.3%)でやや高くなっている。

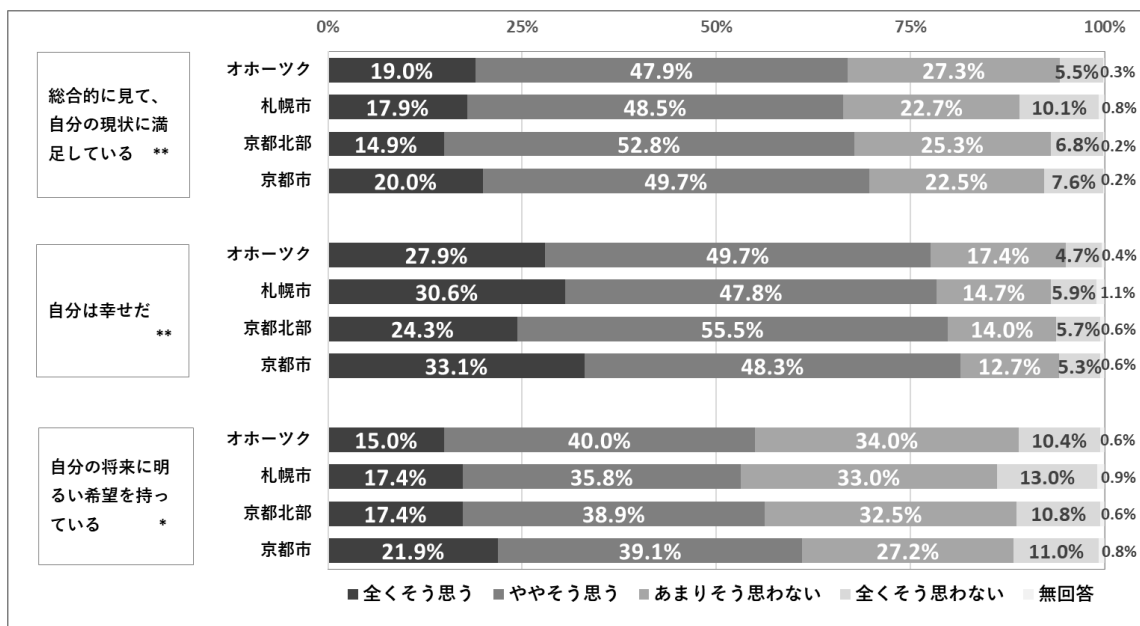


図11 自身の現状（満足度・幸福度など）に対する評価（4地域別）

注）各地域の回答者数は、オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部=530、京都市 N=511。

* : p<0.05、** : p<0.01、n.s.: Not significant（4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定）

「自分は幸せだ」は、「京都北部」で「全くそう思う」(24.3%)という積極的に肯定する割合が低く、「ややそう思う」(55.5%)の割合が高くなっている。また、「京都市」で「全くそう思う」(33.1%)の割合が高く、「オホーツク」で「あまりそう思わない」(17.4%)がやや高くなっている。

「自分の将来に明るい希望を持っている」は、「京都市」で「全くそう思う」(21.9%)の割合が高く、「あまりそう思わない」(27.2%)の割合が低くなっている。また、「オホーツク」で、「全くそう思う」(15.0%)の割合が低い。

全体としては、自身の現状に対する評価は「京都市」で高く、「京都北部」や「オホーツク」で低い。

²² 今回の訪問回収で、経済的な余裕の無さ以外に、障がいや病気のために協力を断られることも少なくなかった。もちろん、障がいがあったり、病気療養中であつたりしても協力してくださる方もいたが、調査に回答していただけないことで、その方たちの声が結果に反映されなくなってしまう。プライバシーに対する意識の高まりなど、その他にも回収率をあげることを困難にしている要因は多い。しかしながら、回答者の方の負担をできるだけ減らすなど、少しでも多くの方に協力していただけるような調査を追求していくことの重要性を再認識する経験となった。

都市部（まち）と都市部以外（いなか）で明確な差があるとまでは言えないが、都市部以外（いなか）のほうが自身の現状を肯定的に評価する者は少なくなっている。

阿部真大（2018）は、大都市の人々がつくる地方に対する一方的かつ支配的な表象である「おしつけ地方論」の一つとして「地方の若者は収入が低くとも周囲との経済格差のことなど気にせずにはっぴーに過ごしている」という点を批判的にとりあげ、「地方には周囲との経済格差に敏感に反応しながら、妬みやそねみ、やり場のない苛立ちを抱えた若者がいる」という対抗表象を提示している。ここでは、経済的な格差などの点まで踏み込むことはできないが、都市部以外（いなか）のほうが満足度や幸福度は低い可能性がある。

（3）地域活動・社会活動への関わりと自身の現状に対する評価

次に、地域活動・社会活動への関わりと現在築いている自身の関係や現在の自身の状況に対する評価との関係についてみてみよう。

表 10 と表 11 は、図 1 でみた 7 つの活動いずれかに「積極的な関わり」をもっているかどうかと、現在築いている自身の関係に対する評価との関係をもっている。地域活動・社会活動（全般）に「積極的な関わり」があるほど、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」でも「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」でも肯定する割合が高くなっている。

表 10 地域活動・社会活動（全般）への積極的関わりと身近な人々との交流

	自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている				合計	
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない		
地域活動・社会稼働（積極的）	積極的な関わりあり 度数	203	322	122	17	664
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	30.6%	48.5%	18.4%	2.6%	
積極的な関わりなし	度数	267	801	554	258	1880
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	14.2%	42.6%	29.5%	13.7%	100.0%
合計	度数	470	1123	676	275	2544
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	18.5%	44.1%	26.6%	10.8%	100.0%

注）無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表 11 地域活動・社会活動（全般）への積極的関わりと多様な人々との交流

	自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている				合計	
	全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない		
地域活動・社会稼働（積極的）	積極的な関わりあり 度数	128	255	232	48	663
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	19.3%	38.5%	35.0%	7.2%	
積極的な関わりなし	度数	146	509	774	447	1876
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	7.8%	27.1%	41.3%	23.8%	100.0%
合計	度数	274	764	1006	495	2539
	地域活動・社会稼働（積極的）の %	10.8%	30.1%	39.6%	19.5%	100.0%

注）無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表 12 は、7つの活動いずれかに「積極的な関わり」をもっているかどうかと、自身の現状に対する評価（「自分は幸せだ」との関係）をみている。地域活動・社会活動（全般）に「積極的な関わり」があるほど、「自分は幸せだ」を積極的に肯定する割合が高くなっている。表は省略するが、自身の現状に対する評価である「総合的に見て、自分の現状に満足している」と「自分の将来に明るい希望を持っている」でも同様な傾向になっている。

表 12 地域活動・社会活動（全般）への積極的関わりと自身の現状に対する評価

		自分は幸せだ				合計
		全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
地域活動・社会稼働（積極的）	積極的な関わりあり	度数 262	320	63	18	663
	地域活動・社会稼働（積極的）の%	39.5%	48.3%	9.5%	2.7%	100.0%
	積極的な関わりなし	度数 475	965	318	118	1876
	地域活動・社会稼働（積極的）の%	25.3%	51.4%	17.0%	6.3%	100.0%
合計	度数	737	1285	381	136	2539
	地域活動・社会稼働（積極的）の%	29.0%	50.6%	15.0%	5.4%	100.0%

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

より詳細に、7つの地域活動・社会活動への関わり方と、現在築いている自身の関係（2項目）や自身の現状に対する評価（3項目）との関係についてクロス集計してみても、基本的には同様な傾向が見いだされる。各地域活動・社会活動へ関わり方が積極的であるほど、肯定的な評価をする割合が高まる。

例えば、表 13 と表 14 のように、本稿のテーマである趣味にかかわる 2つの活動をみると、「趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動」も、「スポーツ関係のグループ活動」も関わり方の積極さが高いほど、「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」を肯定する傾向がみられる。表は省略したが、多様な人々の交流だけでなく、身近な人々との交流でも同様な傾向となっている。両活動への関わり方が積極的なほど、「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」を肯定する割合が高まる。

表 13 趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動と多様な人との交流

			自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動	積極的な関わり	度数	59	95	67	15	236
		行の%	25.0%	40.3%	28.4%	6.4%	100.0%
	一般的な関わり	度数	72	209	192	40	513
		行の%	14.0%	40.7%	37.4%	7.8%	100.0%
	消極的な関わり	度数	28	108	142	48	326
		行の%	8.6%	33.1%	43.6%	14.7%	100.0%
	全く関わりがない	度数	116	351	604	393	1464
		行の%	7.9%	24.0%	41.3%	26.8%	100.0%
合計	度数	275	763	1005	496	2539	
	行の%	10.8%	30.1%	39.6%	19.5%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表 14 スポーツ関係のグループ活動と多様な人との交流

			自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
スポーツ関係のグループ活動	積極的な関わり	度数	38	96	94	16	244
		行の%	15.6%	39.3%	38.5%	6.6%	100.0%
	一般的な関わり	度数	63	151	188	56	458
		行の%	13.8%	33.0%	41.0%	12.2%	100.0%
	消極的な関わり	度数	31	116	111	40	298
		行の%	10.4%	38.9%	37.2%	13.4%	100.0%
	全く関わりがない	度数	143	402	613	385	1543
		行の%	9.3%	26.1%	39.7%	25.0%	100.0%
合計	度数	275	765	1006	497	2543	
	行の%	10.8%	30.1%	39.6%	19.5%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

また、表 15 と表 16 に示したように、「趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動」も、「スポーツ関係のグループ活動」も関わり方が積極的なほど、「総合的に見て、自分の現状に満足している」を肯定する割合が高い。表は省略したが、自身の現状に対する評価である他の 2 項目「自分は幸せだ」と「自分の将来に明るい希望を持っている」との関係でも、同様な傾向となっている。

このように、趣味縁は、身近な人々との交流や多様な人々との交流を促進し、自身の現状に対する評価を高めるといえる。ただし、先にも述べたように、このような傾向は、趣味にかかわるような地域活動だけでなく、その他の地域活動・社会活動にもあてはまる。趣味縁が特別というわけではない。

ただし、「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO 等の活動」と「総合的に見て、自分の現状に満足している」の関係だけ、やや異なっている。無回答を除いた χ^2 検定で、唯一有意差（危険率 5% 水準）がみられない。

表 15 趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動と自身の現状に対する評価

			総合的に見て、自分の現状に満足している				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動	積極的な関わり	度数	61	119	45	11	236
		行の%	25.8%	50.4%	19.1%	4.7%	100.0%
	一般的な関わり	度数	96	276	116	27	515
		行の%	18.6%	53.6%	22.5%	5.2%	100.0%
	消極的な関わり	度数	51	167	87	22	327
		行の%	15.6%	51.1%	26.6%	6.7%	100.0%
	全く関わりがない	度数	254	696	384	132	1466
		行の%	17.3%	47.5%	26.2%	9.0%	100.0%
合計	度数	462	1258	632	192	2544	
	行の%	18.2%	49.4%	24.8%	7.5%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表 16 スポーツ関係のグループ活動と自身の現状に対する評価

			総合的に見て、自分の現状に満足している				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
スポーツ関係のグループ活動	積極的な関わり	度数	54	127	52	11	244
		行の%	22.1%	52.0%	21.3%	4.5%	100.0%
	一般的な関わり	度数	99	234	104	21	458
		行の%	21.6%	51.1%	22.7%	4.6%	100.0%
	消極的な関わり	度数	59	153	77	11	300
		行の%	19.7%	51.0%	25.7%	3.7%	100.0%
	全く関わりがない	度数	250	747	398	150	1545
		行の%	16.2%	48.3%	25.8%	9.7%	100.0%
合計	度数	462	1261	631	193	2547	
	行の%	18.1%	49.5%	24.8%	7.6%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差あり。

表 17 に示したように、「全く関わりがない」者よりも、「積極的な関わり」がある者のほうが、「総合的に見て、自分の現状に満足している」を肯定する割合（「全くそう思う」＋「ややそう思う」）が低くなっている。なお、現在の自身の状況に対する評価「自分は幸せだ」「自分の将来に明るい希望を持っている」でも、このような傾向がみられないわけではないが明確なものではない。

「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO 等の活動」に積極的に関わっている人の中には、自分の現状に満足していない人もおり、そのことが活動を行う原動力となっているのかもしれない。「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO 等の活動」は、他の地域活動・社会活動とは異なる特質をもっている可能性がある。

表 17 ボランティア組織・消費者組織・NPO 等の活動と自身の現状に対する評価

			総合的に見て、自分の現状に満足している				合計
			全くそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	
上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO 等の活動	積極的な関わり	度数	10	22	15	4	51
		行の%	19.6%	43.1%	29.4%	7.8%	100.0%
	一般的な関わり	度数	30	68	31	7	136
		行の%	22.1%	50.0%	22.8%	5.1%	100.0%
	消極的な関わり	度数	46	114	38	7	205
		行の%	22.4%	55.6%	18.5%	3.4%	100.0%
	全く関わりがない	度数	377	1053	547	174	2151
		行の%	17.5%	49.0%	25.4%	8.1%	100.0%
合計	度数	463	1257	631	192	2543	
	行の%	18.2%	49.4%	24.8%	7.6%	100.0%	

注) 無回答を除いた χ^2 検定では 1%水準で有意差なし。

4. 地域にあってほしいもの

最後に、地域に「あってほしいもの」という点について試してみることしましょう。今回の調査では、「現在住んでいるところの近く（最もよく利用する交通手段で 30 分以内で行けるところ）に、以下のようなものがあってほしいと思いますか」という質問に対して、図 12 のように 16 の選択肢をあげ、あてはま

るものすべてを選択してもらった。各地域に、既にそれらのものがあるかどうかとも同時に質問すべきところだが、残念ながら質問の数を抑えるために、今回の調査ではたずねていない。

(1)「地域にあってほしいもの」の全般的傾向

図12のように、4地域をあわせてみると、選択率が高かったのは、「ショッピングモールなどの大型商業施設」66.4%、次いで「コンビニ」57.3%となっている。逆に、選択率が低かったのは、「コミケのような同人誌の即売会イベント」7.4%、「パチンコ・パチスロの大型店」8.6%であった。

先にみたように、趣味を持っている人は約8割と非常に多い。しかしながら、趣味にかかわるようなものやイベントが身近な地域にあってほしいと思う割合はあまり高くない。「ライブハウス」(9.8%)や、「野外音楽フェス」(11.4%)、「コミケのような同人誌の即売会イベント」(7.4%)、「プロ・スポーツチーム」(10.1%)といずれも10%前後である。今回の調査では、具体的な趣味の内容については質問することができなかったが、音楽(演奏・鑑賞)や、スポーツ(競技・観戦)、マンガやアニメなどを趣味としている層は一定程度いると思われるが、以下の橘木(2019:10)の指摘にあるように、地域活性化の文脈で取り上げられるようなものを身近な地域にほしいと思う者は多くないようである。趣味縁に基づく地域でのつながりを活性化しようとする試みを行う場合には留意が必要である。

地方の活性化には、スポーツの発展がもっとも有効な政策である。…(中略)…人々がスポーツに興じること、他人の行うスポーツ競技を観戦すること、この二つの行為が地方の活性化に貢献する。(橘木 2019:10)

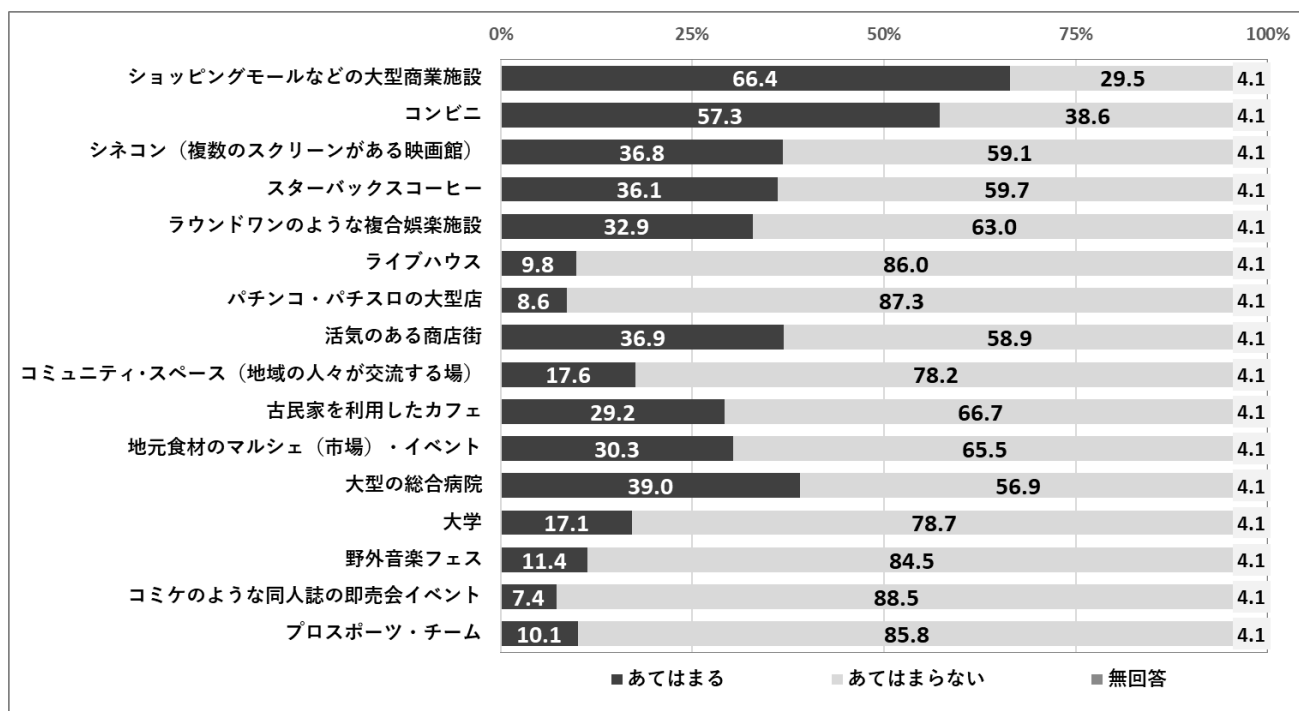


図12 地域にあって欲しいもの (4地域計 N=2585)

(2) 地域別にみた「地域にあってほしいもの」

4つの地域別にみると、図13のように、無回答を除いた χ^2 検定で統計的に有意な差がみられた項目は16のうち9つであった。

有意差がみられた商業的な施設は、「コンビニ」、「スターバックスコーヒー」、「ラウンドワンのような複合娯楽施設」である。「コンビニ」は、調整済み残差からみると、「京都北部」(44.9%)や「オホーツク」(47.5%)に比べて、「京都市」(69.1%)と「札幌市」(68.2%)で選択率がかなり高くなっている。都市部(まち)ほうが「コンビニ」は多いと思われるが、生活の一部となっており、必須のものと思われるのかもしれない。「スターバックスコーヒー」は、「京都北部」(29.6%)で選択率が低く、「京都市」(41.5%)で選択率が高くなっている。「コンビニ」と同様に、既に多くある「京都市」で選択率が高くなっている。しかし、「ラウンドワンのような複合娯楽施設」は、「オホーツク」(46.5%)で選択率が高く、「札幌市」(24.4%)と「京都市」(22.9%)で選択率が低くなっている。「コンビニ」や「スターバックスコーヒー」とは異なる傾向となっており、娯楽施設の少なさから求められている側面があるのかもしれない。

(3) 地域活動・社会活動への関わりと「地域にあってほしいもの」

近年の地域社会やまちづくりに関する議論では、「ショッピングモール」や「コンビニ」は、地域にとってネガティブな側面をもつものとしてとりあげられることも少なくない。例えば、三浦展(2004:4)は、「都市部でも農村部でも、地域固有の歴史、伝統、価値観、生活様式をもったコミュニティが崩壊し、代わって、ちょうどファーストフードのように全国一律の均質的な生活環境が拡大」することを「ファスト風土化」と呼び、社会的な病理であると指摘している。そして、「ショッピングセンター」は「ファスト風土化」の一つの象徴とされる。また、木下斉(2015:1333-1349)のように、実践的なまちづくりに関する議論でも、利益が中央の本社に吸い上げられ地域経済内で循環しないこと、スタッフの多くがパートタイマーなどで良質な雇用をうみださないことなどから、全国チェーンのショッピングセンターや、コンビニ、コーヒーショップは地域活性化に結びつかないものとされる²³。

地域でまちづくりに関わっている人たちと接していても、「ショッピングモール」等を排除すべきものとする傾向は非常に強いように感じる。今回の調査で、そのような傾向はみられるのであろうか。

ここでは、特に近年のまちづくり的な活動を行っている人が多いと思われる「ボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」に積極的に関わっているかどうかによって「地域にあってほしいもの」に差があるかどうかをみてみよう。ただし、「ボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」に積極的に関わっている者が少ないため、十分な分析とは言えない。

図14をみてわかるように、「ショッピングモールなどの大型商業施設」や「スターバックスコーヒー」

²³ ただし、木下(2015:1357-1366)は以下のようにも指摘しており、全国チェーンの商業施設を完全に排除すべきと論じているわけではない。

もちろん、全国チェーン店や地元外資本のレストランを全て排除せよという話では ありません。どんな資本であろうが、寂れたまちにとって、 出店は歓迎すべきことでしょう。

しかし、 大事なのは、 そういう店に対抗出来るような店を地元資本でもつくること。そこに健全な競争が起きれば、 地元経済にもプラスに働きます。(木下 2015:1366-7)

では、「積極的な関わりあり」の人の選択率が確かに低くなっている。逆に、「コミュニティ・スペース（地域の人々が交流する場）」では、「積極的な関わりあり」の人の選択率が高くなっている。統計的に有意な差ではないが、「古民家を利用したカフェ」や「地元食材のマルシェ（市場）イベント」も同様な傾向にある。

この結果は、様々な地域で行われている近年のまちづくりの活動が特定の人々のみを引き付け、その他の人々を巻き込むことに必ずしも成功しているとはいえない状況の一旦を説明するものといえるかもしれない。両者の間には、消費などの志向性やそれに関わって地域に何を求めるかという点で隔たりが存在していると考えられる。

例えば、「ショッピングモール」について言えば、地域に関するインタビューを行っているとき、子育て世代の多くの親にとっては、とても魅力的ものと認識されていることがわかる。小さな子どもを連れていても、買い物等が非常にしやすい環境を実現しているからである。東浩紀は、ショッピングモールの可能性として、「新しいコミュニティ」、「新しい開放性」、「新しい普遍性」の3つの点をあげ、以下のように述べている。

コミュニティについては、郊外やネットといった「現代的なコミュニティ」と、駅前商店街に代表されるようなおじいちゃん、おばあちゃんの「顔が見えるコミュニティ」との対立が重要です。コミュニティというと、前者だけが問題視されるけど、それでいいか。開放性については、監視カメラに囲まれ空調も整っている「セキュリティ」の空間と、だれも管理しておらずホームレスも入れるようなアナーキーな空間のどちらが本当に「開放的」なのか、あるいはだれにとって開放的なのかという問題。最後に普遍性というのは、グローバル化がつくり出した世界中でどこでも同じようなサービスが受けられる現状を、新しい普遍性として捉えられないかという論点。思えば、ショッピングモールというのは、人々が政治も文化も宗教も共有しないまま、互いに調和的に振る舞い、何かを共有しているような気になれる空間です。（東・大山 2016:21-22）

ショッピングモールが、東が指摘するような可能性を本当に持つものであるかどうかは、さらに検証する必要があるが、教条的に排除するような姿勢は、多くの人々をまちづくりに巻き込むことに失敗するという帰結をもたらす可能性がある。

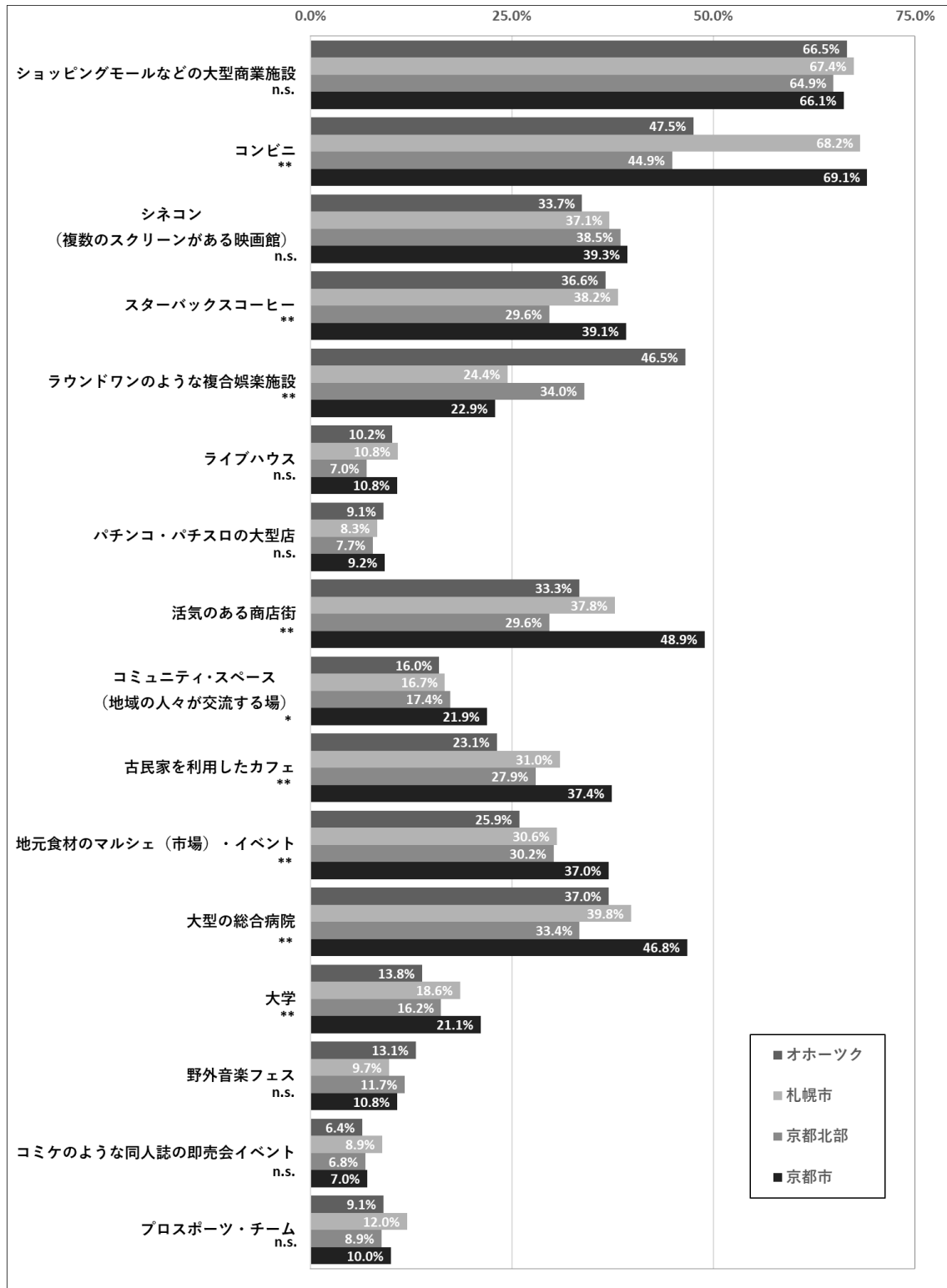


図 13 地域にあって欲しいもの（4地域別）

注）無回答も含む割合。オホーツク N=795、札幌市 N=749、京都北部=530、京都市 N=511。

* : $p < 0.05$ 、** : $p < 0.01$ 、n.s.: Not significant（4地域を対象とし無回答を除いた χ^2 検定）

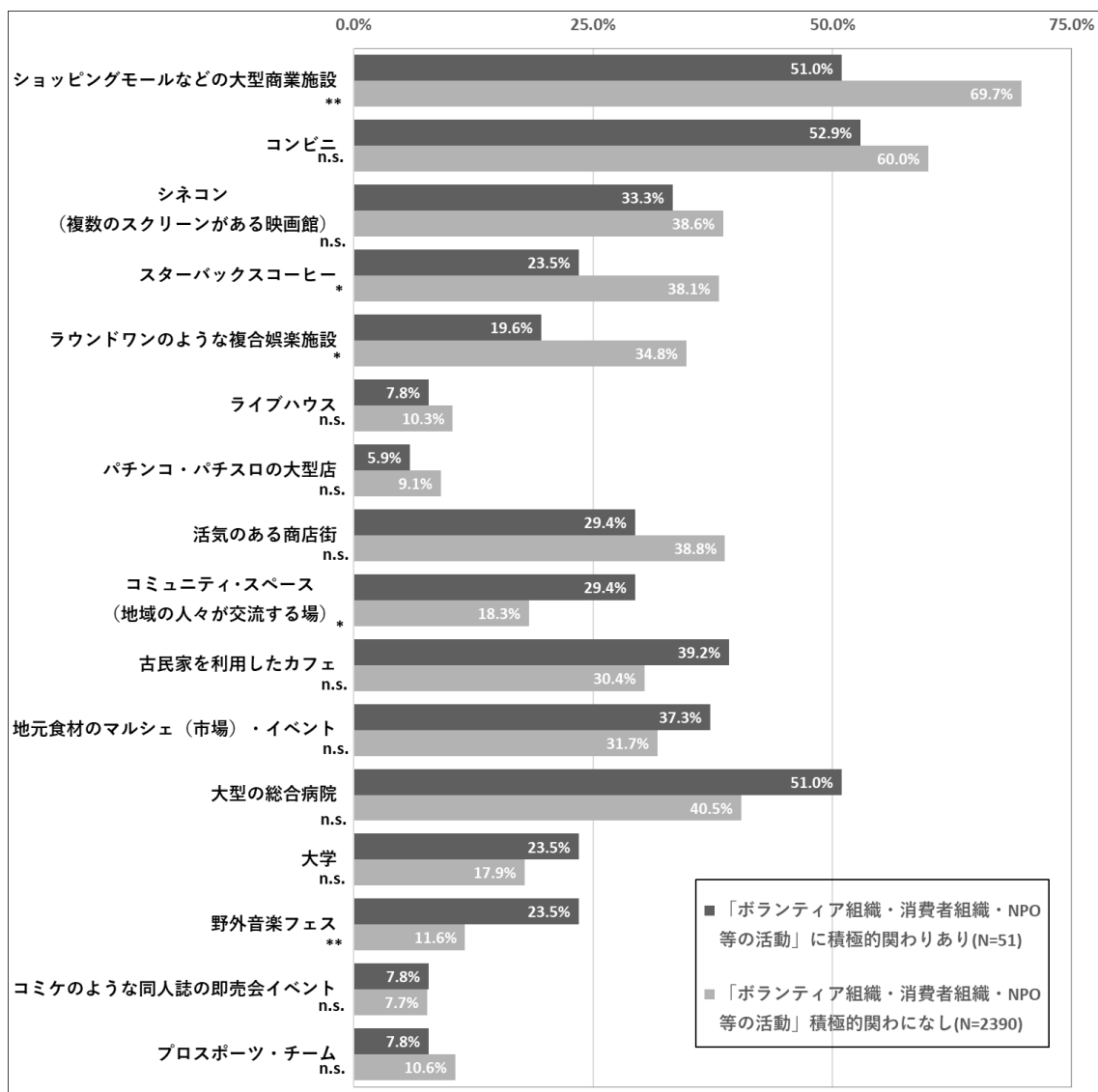


図 14 ボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動と地域にあって欲しいもの
注) * : p < 0.05、** : p < 0.01、n.s. : Not significant (無回答を除いた χ^2 検定)

5. まとめ

本章では、地域における趣味を介したような人々の結びつきについて分析を行ってきた。これまでの結果をまとめると次のようになる。

- (1) 地域活動・社会活動 (4 地域計) で、関わりをもっている割合が最も高いのは「職場参加としての地域活動・社会活動」48.3%である。逆に、最も割合が低いのは「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」15.2%であった。
- (2) 地域活動・社会活動 (4 地域計) で、積極的に関わっている者の割合が高いのは、「スポーツ関係のグループ活動」9.4%、「趣味関係(スポーツを除く)のグループ活動」9.1%で、趣味に関わる活動となっている。逆に、最も低いのは、「上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」で2.0%

である。

- (3) 7つの地域活動・社会活動のいずれかに「関わり」を持っている者の割合が最も高いのは「オホーツク」(79.5%)、最も低いのは「札幌市」(71.8%)である。「京都市」(77.8%)も「京都北部」(79.8%)に比べるとやや割合は低いが、調整済み残差などからすると、都市部(まち)のほうが都市部以外(いなか)よりも「関わりあり」の割合が低い明確な傾向があるとまではいえない。
- (4) 7つの地域活動・社会活動のいずれかに「積極的な関わり」を持っている者の割合が、最も割合が高いのは「京都北部」(28.1%)、最も低いのは「札幌市」(21.5%)となっている。「札幌市」の20代から30代は他の地域に比べて地域活動・社会活動が低調なようである。ただし、都市部以外(いなか)よりも都市部(まち)のほうが「積極的な関わり」を持つものが少ないとまではいえない。
- (5) 「趣味関係(スポーツを除く)のグループ活動」は、地域別で統計的な有意差は見られない。「スポーツ関係のグループ活動」については、有意差が見られるものの、都市部と(まち)と都市部以外(いなか)という枠組みで見た場合、明確な傾向を読み取ることは難しい。
- (6) 「職場参加としての地域活動・社会活動」は、北海道において、都市部(まち)よりも都市部以外(いなか)のほうが、関わっている人が多い傾向にある。しかし、仕事にかかわるものも含む「業界団体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動」では、地域別に有意な差はみられない。
- (7) 「地縁組織の活動(町内会・自治体・青年団・消防団・祭の運営等)」では、北海道でも京都でも、都市部(まち)よりも都市部以外(いなか)で活動に参加している割合が高い。「学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動」も、「京都市」については明確とはいえないが、都市部(まち)よりも都市部以外(いなか)で活動に参加している割合が高い。地縁的結びつきは都市部(まち)よりも都市部以外(いなか)で強いといえる。
- (8) 「ボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」について、「京都市」で「積極的な関わり」(4.3%)の割合が高いが、「札幌市」では「積極的な関わり」(0.7%)の割合が低い。北海道と京都で共通した都市部(まち)と都市部以外(いなか)の傾向を見いだすことはできない。
- (9) 4地域全体で趣味の有無をみると、「趣味がある」と回答した者が77.4%と約8割となっている。地域による有意差はみられない。
- (10) 自分と同じ趣味をもつ人が現在住んでいる地域にいる者は51.1%で過半数を超えている。実際に一緒に活動するかどうかは別として、趣味に基づく活動がなされる基盤はある。地域別にみると、有意差はみられるものの、都市部(まち)と都市部以外(いなか)で明確な傾向があるとは言えない。
- (11) 趣味関係の親しい人は、「現在住んでいる地域」にいる割合が最も高い(27.9%)。約3割の人が趣味を介して現在住んでいる地域で親密な関係を形成している。地域別に統計的な有意な差はあるが、都市部(まち)と都市部以外(いなか)で趣味を介した親密な関係の地域での形成されやすさに明確な傾向はない。「京都市」が大阪圏(近畿圏)の一部であるという特性が影響している可能性がある。
- (12) 「自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている」は、地域別には有意差がみられない。「自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている」は、京都において都市部以外(いなか)よりも都市部(まち)において肯定的な回答の割合が高い。
- (13) 自身の現状に対する評価は「京都市」で高く、「京都北部」や「オホーツク」で低い。明確な傾向とまではいえないが、都市部以外(いなか)のほうが自身の現状を肯定的に評価する者は少なくなっている。

- (14) 趣味縁に基づく地域活動・社会活動は、身近な人々との交流や多様な人々との交流を促進し、自身の現状に対する評価を高める。ただし、このような傾向は、その他の地域活動・社会活動にもあてはまる。趣味縁が特別というわけではない。
- (15)「地域にあってほしいもの」を4地域計でみると、「ショッピングモールなどの大型商業施設」66.4%、次いで「コンビニ」57.3%で選択率が高くなっている。趣味にかかわるような施設やイベントが身近な地域にあってほしいと思う割合はあまり高くない。
- (16)「ショッピングモールなどの大型商業施設」や「スターバックスコーヒー」では、「ボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動」に「積極的な関わりあり」の人の選択率が低い。逆に、「コミュニティ・スペース（地域の人々が交流する場）」では、「積極的な関わりあり」の人の選択率が高い。統計的に有意な差ではないが、「古民家を利用したカフェ」や「地元食材のマルシェ（市場）イベント」も同様な傾向にある。

今回の分析からも、趣味縁が地域の活性化において重要な役割を果たしうることが確認された。趣味縁に基づく地域活動・社会活動においては、積極的に関わっている者の割合が他の活動よりも高くなっている。また、同じ趣味をもつ人が地域にいる割合は半数を超え、趣味に基づく活動がなされる基盤が存在している。実際に、約3割の人が趣味を介して現在住んでいる地域で親密な関係を形成している。

さらに、趣味縁に基づく地域活動・社会活動は、多様な人々との交流や身近な人々との交流を促進し、自身の現状に対する評価を高める。趣味縁は、人々の地域での生活を豊かにする側面をも持つと考えられる。

ただし、趣味にかかわるような施設やイベントが身近な地域にあってほしいと思う割合は必ずしも高くない。趣味縁に基づいて地域でのつながりを活性化しようとする試みを行う場合には留意が必要である。

最後に、「地方の都市部（まち）と都市部以外（いなか）」という枠組みの有効性について簡単にまとめておこう。今回の調査では、地域差がみられる項目は少なくなかったが、地方の都市部（まち）と地方の都市部以外（いなか）で、必ずしも明確な傾向がみられたわけではなかった。

ただし、北海道においては、都市部（まち）よりも都市部以外（いなか）のほうが、地域活動・社会活動が全般的に活発という傾向があるなど、枠組みが有効な部分もみられた。京都が「地方」ではないことによって（三大都市圏という特殊性によって）、「京都市」と「京都北部」では、北海道ほど明確な傾向がみられなかった可能性もある。

今後、調査対象地域を増やすことによって、「地方の都市部（まち）と都市部以外（いなか）」という枠組みの有効性をさらに検証していく必要がある。ただし、その前に、今回の調査のより詳細な分析が必要である。今回の地域対象地域は非常に広範であり、地域を分けるなどしてより精緻な分析を試みたい。

【参考文献】

- 阿部真大 2018 『「地方ならお金がなくても幸せでしょ」とか言うな!』朝日新書
- 浅野智彦 2011 『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店
- 東浩紀・大山顕 2016 『ショッピング・モールから考えるーユートピア・バックヤード・未来都市』幻冬舎
- Fischer, Claude S., 1976, *The urban experience*, New York: Harcourt Brace Jovanovich (=1996 松本康・前田尚子訳『都市的経験ー都市生活の社会心理学』未来社)
- Fischer, Claude S., 1982, *To dwell among friends: personal networks in town and city*, Chicago: University of Chicago Press (=2002 松本康・前田尚子訳『友人のあいだで暮らすー北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社)
- 岩田考 2018 『『自身の人生』『日本社会・政治』『学歴・年収』から見たむつ市・おいらせ町の若者』トランスローカリティ研究会『「青森 20-30 代住民意識調査」報告書』公益財団法人マツダ財団
- 木下斉 2015 『稼ぐまちが地方を変えるー誰も言わなかった 10 の鉄則 (Kindle 版.)』NHK 出版
- 轡田竜蔵 2017 『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房
- 轡田竜蔵 2018 「地方暮らしの若者のバリエーションを捉えるー青森 20-30 代調査と広島 20-30 代調査の比較から」トランスローカリティ研究会『「青森 20-30 代住民意識調査」報告書』公益財団法人マツダ財団
- 片岡栄美 2019 『趣味の社会学』青弓社
- 松田美佐 2002 「モバイル社会のゆくえ」岡田朋之・松田美佐『ケータイ学入門ーメディア・コミュニケーションから読み解く現代社会』有斐閣
- 三浦展 2004 『ファスト風土化する日本ー郊外化とその病理』洋泉社
- 橋本俊詔 2019 『「地元チーム」がある幸福ースポーツと地方分権』集英社

第6章 家族との関係と地域差

羽瀧一代（弘前大学 教授）

0. はじめに

本章では、20-30代の若者が親しい人とどのような関係を結んでいるのか、分析していく。20-30代の若者の世帯のあり方、居住地を確認したうえで、関係に対する満足度がどのようなものか報告する。

1 定位家族と親戚の居住地

まず定位家族と親戚の居住地を確認しつつ、地方における若者の居住状況を把握することを目的とする。定位家族との同居や近隣居住の親戚ネットワークの存在は、個々人の生活に関わるサポートとの関連において重要である。また子が結婚し生殖家族を形成している場合には、夫婦の役割分業やライフワークバランスとも関係する。たとえば、子育てサポート、家事サポートなどを両親や親戚に頼ることは多いだろう。定位家族や親戚からのサポートが得られない場合には、夫婦のどちらかが家事や育児を専門する必要性に迫られることにもなる。したがって、定位家族や親戚の居住地がどの程度、地理的に離れているのか、ということは夫婦の働き方などとともにプライベート領域におけるジェンダー問題に大きな影響を与えている。

また独身者にとっても居住は重要な問題である。既存の研究においては、一人暮らしであるか否かということが恋愛交際に影響を及ぼしていることがわかっている。現在、結婚の契機は恋愛が9割以上を占めている。20-30代の若者にとって恋愛交際の可能性の有無はそのまま結婚可能性の有無へとつながるだろう。地方の若年独身者が親と同居しているかどうかを確認することは、個々人の家族形成の可能性の有無、さらには少子化問題のゆくえを検討するうえでも重要である。

表1 親の居住地（地域別）

%	父親				母親			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
同居している	27.6	31.4	36.2	32.9	32.3	34.6	37.6	35.0
近く（1時間以内）の地域	39.5	34.7	34.0	29.9	37.7	33.9	35.2	31.8
日帰りで会うことができる地域	16.0	18.8	20.9	22.7	14.6	16.7	19.7	20.1
日帰りではいけない遠方の地域	16.9	18.2	8.9	14.5	15.4	14.8	7.5	13.1
N	681	628	450	441	746	711	492	488

親の居住地について、同居から日帰りではいけない遠方の地域での居住までの4段階で尋ねている（表1）。その結果、3割強の若者は親と同居していることがわかった。また地域によって、親との住まい方が異なることもわかった（ χ^2 検定 父親： $p<.001$ 母親 $p<.005$ ）。両親ともに親同居率は京都北部がもっとも高く、オホーツクで低い。オホーツクでは、近居率が高い。京都北部では、他地域と比較して親の住まいが近い傾向がみられた。

次に世帯人数について確認していこう。全体平均は3.02人であった。地域別にみた1世帯あたりの平均値は、京都北部が3.26人、ついでオホーツクが3.11人、京都市が2.88人、札幌市が2.84人であった。

北海道、京都府ともに政令指定都市のほうが政令指定都市ではない地域よりも世帯人数の平均値は低い (T 検定 $p < .001$)。親の住居が近いことと関連して京都北部の世帯平均人数が高いことがわかる。

次に年齢層・婚姻別にみた親との同居率を確認してみよう。

表 2 親との同居率 (地域別・年齢層×婚姻状況)

% (N)	父親				母親			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
オホーツク	44.6(95)	57.3(75)	1.7(1)	5.2(14)	54.5(127)	59.2(90)	0.0(0)	6.6(19)
札幌市	50.6(122)	49.3(68)	0.0(0)	2.5(5)	58.8(153)	51.6(83)	0.0(0)	3.4(8)
京都北部	53.4(78)	53.4(78)	10.3(4)	9.9(16)	58.6(92)	61.5(67)	12.2(5)	9.6(17)
京都市	56.5(87)	46.5(46)	3.3(1)	5.8(9)	62.9(107)	46.8(52)	6.1(2)	4.7(8)

20代の既婚者について、北海道では親との同居がほとんどみられないのに対して、京都では親との同居が少ないながらある (表 2)。また 30代独身者の親同居率は政令指定都市で低く、条件不利地域圏において高いことがわかる。20代独身者の親同居率が政令指定都市で高く、条件不利地域圏において低いことから、地方の都市部よりも条件不利地域圏において 30代以上の離家が難しいことが推測される。離家が結婚可能性を高めることを鑑みるならば、高齢になればなるほど、結婚可能性が低下するのは一般的な傾向としてあると思われるが、都市部よりも条件不利地域圏のほうがさらにその傾向が強まるという仮説が導出できる。このような地域的な条件が、それぞれの地域居住者の結婚行動に影響している可能性がある。

第 8 章で詳細を記述しているが、地域によって結婚状況は異なっている。オホーツク、京都北部の婚姻率は高い。条件不利地域圏においては、都市部よりも結婚可能性の年齢の影響が強いのであれば、結婚に意欲のある若者は結婚に向けた活動を早くからおこなっている可能性もあるだろう。この点に関しては、今後、分析を深めて別稿で結果を示していきたい。

2 関係満足度

次に、親しい人との関係を確認したい。とくに家族関係を中心に分析の結果を確認していこう。家族関係としては、母親、父親、配偶者、子供との関係について「満足している」から「満足していない」までの 4 件法で満足度を尋ねている。またこれに関わる項目として、次元が異なるが「家事 (育児・介護を含む) の分担」の満足度も尋ねている。さらに家族外の親しい人として友人関係の満足度も項目として設定した。

家族、友人といった親しい人との関係満足度について地域差はなかった (単純集計表 Q14 参照)。地域に関わらず、概ね 9 割が「満足している」「まあ満足している」と回答している。既存の若者研究においては、親しい人との人間関係満足と関連する属性としてはジェンダー、年齢などが想定されてきた。概ね、女性のほうが男性よりも人間関係スキルが高く、親しい人との関係満足度も高い傾向が既存調査で指摘されてきた。また年齢については 30代と 40代の友人関係満足度が低い傾向もわかっている。日本人の平均初婚年齢が 30 歳前後であり、家族形成をおこなうことによって多忙となり、30代と 40代のライフステージにおいては、友人との関係構築よりも家族関係を優先させる傾向があるためであろう。

全国調査や都市の若者調査などでは上記のような傾向が示されてきたが、地方の 20代 30代にもこの

ような傾向はあてはまるのだろうか。

まず4地域全体の傾向を確認してみたい。その結果、母親との関係 (χ^2 検定 $p<.005$)、子供との関係 (χ^2 検定 $p<.05$)、友人関係 (χ^2 検定 $p<.05$) において、女性のほうが男性よりも満足度がやや高かった。また母親との関係 (χ^2 検定 $p<.001$)、父親との関係 (χ^2 検定 $p<.001$)、子供との関係 (χ^2 検定 $p<.05$)、友人関係 (χ^2 検定 $p<.005$) において、20代のほうが30代よりも満足度が高かった。このように本調査でも、全国調査や都市の若者調査で指摘されてきた結果と同様の傾向が確認された。

これらの傾向はどのような地域でも同じ傾向を示すのだろうか。それとも、地域によって差がみられるのだろうか。

まずジェンダーについて確認していこう。母親との関係について、オホーツクで男女差がみられた(表3)。女性のほうが男性よりも満足度が高い (χ^2 検定 $p<.05$)。それ以外の地域においては、有意な差がみられなかった。次に子供との関係について、札幌市で男女差がみられた(表4)。女性のほうが男性よりも満足度が高い (χ^2 検定 $p<.05$)。それ以外の地域においては、親密な人間関係満足度の男女差はなかった。友人関係の満足度には、地域別に確認するとジェンダーによる有意な差はなかった。

表3 地域別にみた母親との現在の関係とジェンダー

		自分の母親との現在の関係				
%		満足している	まあ満足している	あまり満足していない	満足していない	N
オホーツク	女性	59.7	31.7	6.4	2.2	404
	男性	49.0	40.6	7.2	3.3	335
札幌市	女性	58.8	31.6	5.5	4.1	415
	男性	55.7	35.7	5.2	3.4	291
京都北部	女性	56.9	35.1	3.8	4.2	262
	男性	48.0	46.7	3.1	2.2	229
京都市	女性	55.6	36.1	4.9	3.5	288
	男性	51.8	41.7	5.5	1.0	199

表4 地域別にみた子供との現在の関係とジェンダー

		子供との現在の関係				
%		満足している	まあ満足している	あまり満足していない	満足していない	N
オホーツク	女性	65.3	30.2	3.0	1.5	199
	男性	61.7	30.8	4.5	3.0	133
札幌市	女性	59.7	35.7	3.2	1.3	154
	男性	58.4	25.7	8.9	6.9	101
京都北部	女性	54.3	39.7	6.0	0.0	116
	男性	60.0	30.5	7.4	2.1	95
京都市	女性	64.7	26.9	7.6	0.8	119
	男性	63.0	27.8	7.4	1.9	54

次に年齢について確認していこう。母親との関係について、オホーツク (χ^2 検定 $p<.005$) と京都北部 (χ^2 検定 $p<.01$) で満足度の年齢による差がみられた。両地域ともに20代のほうが30代よりも満足度が高い。札幌市と京都市では差がなかった。父親との関係について、オホーツクで満足度の年齢による差がみられた (χ^2 検定 $p<.05$)。20代のほうが30代よりも満足度が高い。さらに子供との関係について、オホーツクで満足度の年齢による差がみられた (χ^2 検定 $p<.05$)。友人関係満足度については札幌市の20代は30代よりも満足度が高い (χ^2 検定 $p<.05$)。

これらの結果から、親密な人間関係の満足度に対してジェンダーや年齢による差が及ぼす影響が地域によって異なる可能性が示された（表5）。親密な人間関係の満足度は、個人の幸福と関連している。地域によって、これらの属性が影響するかどうか異なるのであれば、個人の幸福にあたる影響も地域によって異なるのではないかと推察できるだろう。

表5 地域別にみた親密な人間関係満足度とジェンダー・年齢層との関連

	オホーツク		札幌市		京都北部		京都市	
	ジェンダー	年齢層	ジェンダー	年齢層	ジェンダー	年齢層	ジェンダー	年齢層
自分の母親との現在の関係	女性	20代				20代		
自分の父親との現在の関係		20代						
配偶者との現在の関係								
友人関係				20代				
子供との現在の関係	女性	20代						

最後に家族関係とかかわり家事分担の満足度を確認しておこう（表6）。家事分担の満足度に地域差、年齢層による差はない。いっぽうでジェンダー差はみられた。女性は男性よりも家事分担の満足度が低い（ χ^2 検定 $p<.001$ ）。男性の88.5%が家事分担に満足している（「満足している」+「まあ満足している」）のに対して、満足している女性は79.8%であった。地域別にジェンダー差を確認したところオホーツクにおいて有意な差が確認された（ χ^2 検定 $p<.05$ ）。それ以外の地域では有意な差がみられなかった。

表6 地域別にみた家事分担の満足度とジェンダー

%		家事分担の満足度				N
		満足している	まあ満足している	あまり満足していない	満足していない	
オホーツク	女性	30.6	50.5	13.8	5.1	297
	男性	30.2	59.5	8.6	1.8	222
札幌市	女性	32.0	48.5	13.2	6.3	272
	男性	41.5	46.4	7.1	4.9	183
京都北部	女性	28.5	51.6	16.1	3.8	186
	男性	36.9	51.8	9.9	1.4	141
京都市	女性	32.8	43.8	17.4	6.0	201
	男性	39.3	47.7	8.4	4.7	107

表5で示したように、オホーツク地域においてはジェンダーや年齢層という属性が人間関係満足度に影響を及ぼしている項目がいくつかみられた。家事分担についてもオホーツクにおいてジェンダー差が影響を及ぼしている。しかし人間関係満足度とは異なり女性の満足度が低いという結果であった。他地域の女性の回答率を確認するならば、満足していない（「あまり満足していない」+「満足していない」）と回答する率はオホーツクの女性よりも上回っているものの、男性との比較において有意な差はみられない。

オホーツクにおいて男女差がみられるという結果をさらに考えてみよう。地域特有の生業構造が関わっている可能性も考えられる。つまりワークライフバランスとの関係を検討する必要があるだろう。さらにいうならば、地域社会の高齢者問題への対応や家族の状況によって、家事負担の度合いが異なる。例えば、要介護者が家族内にいる場合といない場合では状況がまったく異なるため、男女の単純な比較は難しい。また家事分担はプライベート領域におけるジェンダーの平等の問題ももちろんであるが、家族

状況実質的な生計をどのように支えているのか、どのような生業を営んでいるのかということとも関わる。引き続き、家族状況や生業形態を加味した研究が必要である。

第7章 コミュニケーションの状況

羽瀧一代 (弘前大学 教授)

0. はじめに

本章では、20-30代の若者が親しい人々との程度コミュニケーションをおこなっているのか確認していく。まず家族とのコミュニケーションを確認する。さらにメディアを利用したコミュニケーション状況も同様に確認する。

1 家族とのコミュニケーション

家族内でのコミュニケーションについては、メディアを利用したコミュニケーション、ショッピングや食事、旅行といった家族内親睦を深める行動の二つの側面から質問をおこなった。コミュニケーションの頻度を尋ねているが、地域による差はみられなかった。コミュニケーション状況は婚姻状況との連関が強い。そこで4地域まとめて年齢層・婚姻別の結果を示したい。表1は、年齢層・婚姻別に家族と電話などでおしゃべりする頻度を示している。その結果、既婚者のほうが独身者よりも頻繁に家族とメディアでおしゃべりしていることがわかった (χ^2 検定 $p<.001$)。とくに30代独身の頻度が少ないようである。

表1 家族と電話などでおしゃべりする

%	電話など声でおしゃべりする			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日のおこなう	36.7	29.6	50.8	48.6
週に何回かおこなう	13.3	17.2	23.2	21.9
月に何回かおこなう	25.8	22.4	17.3	19.0
年に数回おこなう	9.6	12.1	2.2	5.0
ほとんどおこなわない	14.6	18.7	6.5	5.5
N	616	406	185	923

表2 家族とのソーシャルメディアでのやりとり

%	LINEなどで言葉やスタンプやり取りする			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日のおこなう	20.7	11.0	56.8	45.1
週に何回かおこなう	41.7	29.8	30.6	38.2
月に何回かおこなう	23.5	25.4	9.8	10.9
年に数回おこなう	4.2	9.5	1.6	1.3
ほとんどおこなわない	9.9	24.4	1.1	4.6
N	617	410	183	921

表2は、家族とのソーシャルメディアでのやりとりの頻度を示している。この結果も既婚者が独身者よりも頻繁にやりとりをしていることがわかった (χ^2 検定 $p<.001$)。とくに20代既婚者は半数以上が「毎日のようにおこなっている」と回答しており、利用が多いことがわかる。

表3 家族とのショッピング

%	一緒にショッピングに出かける			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日のようにおこなう	2.9	2.9	10.3	7.7
週に何回かおこなう	15.9	14.0	45.4	41.5
月に何回かおこなう	37.5	30.5	33.0	37.2
年に数回おこなう	32.5	32.2	9.2	10.7
ほとんどおこなわない	11.2	20.3	2.2	2.9
N	618	413	185	919

次に家族とショッピングに出かける頻度を確認する(表3)。これも既婚者が独身者よりも頻繁に家族とショッピングにでかけているということがわかる (χ^2 検定 $p<.001$)。20代既婚者の親同居率は政令指定都市で低く、条件不利地域圏において高いことがわかる。とくに30代独身者の家族とのショッピング頻度が低い。

表4 家族と食事に出かける

%	一緒に食事に出かける			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日のようにおこなう	2.6	2.4	8.1	4.8
週に何回かおこなう	9.5	7.8	25.9	21.2
月に何回かおこなう	37.2	29.4	45.9	52.1
年に数回おこなう	40.8	42.2	17.8	18.7
ほとんどおこなわない	9.9	18.2	2.2	3.3
N	618	412	185	920

家族と食事に出かける頻度も同様の傾向がみられた(表4)。既婚者の頻度が多く、独身者の頻度は少ない (χ^2 検定 $p<.001$)。とくに30代独身者は家族と食事に出かける頻度が少なく、「ほとんどおこなわない」という回答も18.4%と際立って高率である。

最後に、家族と旅行に出かける頻度を確認しておきたい(表5)。旅行も他の行動と同様の傾向が確認できた (χ^2 検定 $p<.001$)。独身者の半数以上は「ほとんどおこなわない」と回答しているが、既婚者は60%以上が「年に数回おこなう」と回答している。とくに30代既婚者は70.7%が「年に数回おこなう」と回答している。

この結果は、次のようにまとめられるだろう。独身者にとっての家族は定位家族が主として想定されるだろうが、既婚者にとっての家族は生殖家族も加わってくる。つまり家族に対するマネジメント責任の有無が独身者と既婚者の差を生み出している。また高齢になるにしたがって、独身者の家族とのコミュニケーション行動の頻度が減少していることから、20代から30代にかけての離家にともない自立し

たライフスタイルを形成しているのではないかと考えられる。

表5 家族と旅行に出かける

%	一緒に旅行に出かける			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日のおこなう	1.3	0.5	7.0	3.5
週に何回かおこなう	1.1	0.5	2.2	1.4
月に何回かおこなう	3.2	1.2	3.2	4.2
年に数回おこなう	40.3	34.3	63.2	70.7
ほとんどおこなわない	54.0	63.5	24.3	20.1
N	618	411	185	919

2 メディア・コミュニケーション

次に、親しい人とのコミュニケーションを確認したい。本調査では、ソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS) を利用したコミュニケーションについて質問をおこなっている。親密性の地理的範囲が拡大している現代において、また近年生じたようなパンデミックなどの問題状況が生じた際においてもメディアは重要なコミュニケーション手段となる。

第6章で少しふれた、両親が「日帰りではいけない遠方の地域」に居住しているような人々がこの例として考えられる。さらに、このような親しい人間関係が遠距離にある場合だけでなく、近距離の親密性を維持するためにも SNS 利用はありうるだろう。以下、SNS の利用と連絡する親しい相手との地理的距離と連絡頻度とを確認していく。

まず、SNS を利用していない若者は全体の 5.1% であった。約 95% の若者が何らかの SNS を利用している。また 60% 以上の若者が「人間関係を維持する」ために SNS を利用しているようである。SNS の利用についても、地域による差がみられないため、以下、4 地域をまとめて示す。

表6 「地元」と感じる地域の親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

%	「地元」と感じる地域の親しい人			
	20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日	13.0	4.3	4.3	3.6
週に1回以上	26.3	20.8	20.9	19.4
月に1回以上	24.9	24.3	27.3	27.6
半年に1回以上	19.8	23.5	27.3	28.1
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	7.6	15.7	13.9	13.8
そのような親しい人はいない	8.5	11.3	6.4	7.4
N	800	485	187	860

表6に示したとおり、「地元」と感じる地域の親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりをしたりする頻度は、20代独身者がもっとも多い (χ^2 検定 $p < .001$)。「そのような親しい人はいない」人は30代独身者がもっとも多い。

表7 現在住んでいる地域の親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

	%	現在住んでいる地域の親しい人			
		20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日		15.8	5.3	4.3	5.3
週に1回以上		31.7	27.2	24.1	27.0
月に1回以上		22.2	27.4	28.3	28.8
半年に1回以上		10.4	15.0	13.9	13.0
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない		8.4	13.0	12.8	10.5
そのような親しい人はいない		11.6	12.1	16.6	15.3
N		799	486	187	860

表7は、現在住んでいる地域の親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりをしたりする頻度を示している。20代独身者の頻度をもっとも多く、「そのような親しい人はいない」人は20代既婚者をもっとも多い (χ^2 検定 $p<.001$)。

表8に示したとおり、日帰りで会える距離にいる親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりをしたりする頻度も、同様であった。20代独身者の頻度をもっとも多い (χ^2 検定 $p<.001$)。そして「そのような親しい人はいない」人は20代既婚者をもっとも多い。

表8 日帰りで会える距離にいる親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

	%	日帰りで会える距離にいる親しい人			
		20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日		11.8	4.1	3.2	2.4
週に1回以上		24.7	16.5	14.5	12.0
月に1回以上		26.9	24.9	28.0	30.4
半年に1回以上		14.3	25.7	26.3	28.1
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない		9.4	12.8	7.5	13.9
そのような親しい人はいない		12.9	16.0	20.4	13.2
N		798	486	186	858

表9 日帰りで会えない距離にいる親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

	%	日帰りで会えない距離にいる親しい人			
		20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日		8.2	2.1	3.2	1.6
週に1回以上		15.9	10.5	11.2	6.0
月に1回以上		23.5	20.7	22.5	17.7
半年に1回以上		25.7	26.9	32.1	41.9
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない		11.5	18.4	14.4	18.8
そのような親しい人はいない		15.2	21.5	16.6	14.0
N		797	484	187	857

表 10 ネットで知り合い、直接会ったことのある親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

	%	ネット上で知り合い、直接会ったことのある親しい人			
		20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日		4.2	1.6	2.1	0.9
週に1回以上		7.3	6.4	2.7	2.3
月に1回以上		8.4	7.4	4.3	4.2
半年に1回以上		7.4	6.4	9.1	4.9
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない		9.9	12.6	10.2	9.6
そのような親しい人はいない		62.8	65.6	71.7	78.0
N		795	486	187	854

表 10 は、ネットで知り合い、直接会ったことのある親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりをしたりする頻度を示している。20 代独身者の頻度がもっとも多く、「そのような親しい人はいない」人は 30 代既婚者がもっとも多い (χ^2 検定 $p<.001$)。

表 11 ネットで知り合い、ネット上のみで付き合いのある親しい人と SNS で連絡・おしゃべり

	%	ネット上で知り合い、ネット上のみで付き合いのある親しい人			
		20代独身	30代独身	20代既婚	30代既婚
毎日		5.5	2.7	1.1	1.0
週に1回以上		9.4	6.8	6.4	2.4
月に1回以上		7.8	8.8	3.2	4.4
半年に1回以上		5.6	5.8	5.9	3.5
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない		10.2	11.7	9.1	10.0
そのような親しい人はいない		61.5	64.2	74.3	78.6
N		797	312	187	858

表 11 は、ネットで知り合い、ネット上のみで付き合いのある親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりをしたりする頻度を示している。20 代独身者の頻度がもっとも多く、「そのような親しい人はいない」人は 30 代既婚者がもっとも多い (χ^2 検定 $p<.001$)。

以上から、SNS で親しい人とコミュニケーションを頻繁におこなっているのは 20 代独身者であることがわかる。年齢が若いから SNS の利用を頻繁におこなうのではない。同じ 20 代でも婚姻状況が異なれば、ライフスタイルも異なっており、SNS 利用に差がみられるのだろう。

コミュニケーションの項目において、単純集計レベルでは目立った地域差が確認できなかった。別稿では、親密な人間関係が地理的にどの範囲に分布しているのかということ、地域による分布の相違、メディアを利用したコミュニケーション行動、親密な人間関係に対する満足度や幸福感との関連を分析していく予定である。

第8章 北海道・京都の若者における恋愛と婚活、結婚

木村絵里子（日本女子大学人間社会学部 助教）

1. はじめに

本章では、トランスローカリティ研究会によって2020年に実施された北海道・京都地域の20-30代を対象にした調査のデータから、婚姻状況（f2）、婚姻年齢（f2-1）、配偶者の出身地（f2-2）、既婚者の子の有無（f4）と、独身者の恋愛行動（f3-1）、結婚観（f3）、婚活の具体的な方法（q16）について検討する。

詳細な分析は別稿にゆずるとして、ここでは、主にこれらの項目と地域変数との関連について見ていきたい。具体的な調査対象地域としては、北海道・札幌市、北海道・オホーツクと京都府・京都市、京都府・京都北部の7市町村の4地域である。トランスローカリティ研究会では、札幌市と京都市を都市部（まち）として、オホーツクと京都北部を非都市部（いなか）として位置づけている。

2. 婚姻状況

2-1. 婚姻率

最初に、全体の婚姻状況について確認したい（f2「現在、あなたは結婚されていますか」）。婚姻状況を示した下記の表1によると、既婚者は44%、離婚・死別経験者は4.3%、未婚者は51.7%となっている。2018年に実施された青森調査（トランスローカリティ研究会）の未婚者の割合は54.8%であった（木村2018）。今回の未婚率は、青森調査よりも若干低くなっているものの、それほど大きくは変わらないといえる。

表1.婚姻状況（全体、SA）

	%
結婚している	44.0
離婚・死別した	4.3
結婚したことはない	51.7
N	2561

では、このような婚姻状況と地域差はどのように関連しているのだろうか。人数の少ない離婚・死別者は除外して分析を行った。その結果を表2に示した。

χ^2 検定の結果、統計的に有意な差が見られた。調整済み残差からすると、北海道のオホーツクの既婚率が50.3%と高く、未婚率が49.7%と低くなっている。札幌市の既婚率の低さ（42.1%）・未婚率の高さ（57.9%）と対照的である。ただし、京都北部の既婚率は47.1%、京都市の既婚率は43.6%であり、未婚率とともにこれらの間には特徴があると言えない。

京都では、必ずしも都市部のほうが、既婚率が低い傾向にあるわけではないようだ。これらは、今後、国勢調査の結果と照らし合わせながら精査する必要があるだろう。

表2. 婚姻状況と調査地域のクロス集計

			婚姻状況		N	χ^2 検定
			結婚している	結婚したことはない		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	50.3%	49.7%	751	0.010
		調整済み残差	2.9	-2.9		
札幌市	調査地域の%	42.1%	57.9%	715		
	調整済み残差	-2.4	2.4			
京都北部	調査地域の%	47.1%	52.9%	497		
	調整済み残差	.6	-.6			
京都市	調査地域の%	43.6%	56.4%	488		
	調整済み残差	-1.1	1.1			
合計		調査地域の%	45.9%	54.1%	2451	

2-2. 結婚年齢

次に、結婚年齢について確認する (f2-1「結婚されている方にお尋ねします。結婚されたのはいつ頃ですか」)。下記の表3に示したように、最小値は16歳、最大値は39歳で、平均結婚年齢は27.12歳となっている²⁴。

表3. 結婚年齢の記述統計量 (全体)

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
結婚年齢	1102	16.00	39.00	27.1289	3.97011

表4. 地域別平均結婚年齢

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
オホーツク	370	26.7000	4.08570	.21241	26.2823	27.1177	16.00	37.00
札幌市	294	27.3095	3.83038	.22339	26.8699	27.7492	17.00	38.00
京都北部	227	26.9295	3.88489	.25785	26.4214	27.4376	19.00	39.00
京都市	211	27.8436	3.95802	.27248	27.3065	28.3808	20.00	39.00
合計	1102	27.1289	3.97011	.11959	26.8942	27.3635	16.00	39.00

地域別の平均結婚年齢は表4の通りである。オホーツクは26.70歳、札幌市は27.30歳、京都北部は26.92歳、京都市は27.84歳である。いずれも都市部(まち)に比べて都市部以外(いなか)のほうが、平均結婚年齢が低くなっているものの、Tukeyの多重比較の結果によると、関連が見られたのはオホーツクと京都市の間のみであった(1%水準の有意差、表は省略)。平均結婚年齢においても、今回のデータからは、北海道および京都における都市部(まち)と都市部以外(いなか)の間に共通する特徴は見いだせなかった。

²⁴ 14歳という回答が1ケース確認されたが、除外して分析を行った。

2-3. 配偶者の出身地

本調査では、配偶者の出身地域についてたずねている（f2_2「配偶者の出身地はどこですか」）（既婚者のみ、SA）。表5～8に4つの地域の度数分布表を示した。いずれの地域でも、現在住んでいるところが配偶者の出身地である割合が最も高くなっている。

表5. 配偶者の出身地（オホーツク）

	%
現在お住いの市町村	50.9
お住いの市町村以外のオホーツク管内	19.6
オホーツク管内の北海道内	22.8
北海道外	6.6
合計	377

表6. 配偶者の出身地（札幌市）

	%
札幌市	45.2
札幌市以外の石狩管内	7.3
石狩管内以外の北海道内	30.9
北海道外	16.6
合計	301

表7. 配偶者の出身地（京都北部）

	%
現在お住いの市町村内	45.9
お住いの市町村以外の京都府北部7市町	16.7
京都府以外の関西	18.5
関西以外	18.9
合計	233

表8. 配偶者の出身地（京都市）

	%
京都市	41.7
京都市以外の京都府内	12.3
京都府以外の関西	19.9
関西以外	26.1
合計	211

2-4. 子の有無

続いて、既婚者の子どもの有無についても見ておこう（f4「お子さんはいらっしゃいますか」）。表9にあるように、既婚者のうち77.0%が、子どもがいると回答している。以下の表10では地域別に示した。京都北部の既婚者の子どもを有する者の割合が最も高く（79.8%）、京都市の他と比べてやや低くなっている（72.3%）。しかし、統計的に有意な差は確認されなかった。

表9. 子どもの有無（既婚者のみ、SA）

	%
いない	23.0
いる	77.0
N	1124

表 10. 子どもの有無と調査地域のクロス集計

			子の有無		N	χ^2 検定
			いない	いる		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	20.7%	79.3%	377	0.153
		調整済み残差	-1.3	1.3		
札幌市	調査地域の%	24.6%	75.4%	301		
	調整済み残差	.8	-.8			
京都北部	調査地域の%	20.2%	79.8%	233		
	調整済み残差	-1.1	1.1			
京都市	調査地域の%	27.7%	72.3%	213		
	調整済み残差	1.8	-1.8			
合計		調査地域の%	23.0%	77.0%	1124	

3. 独身者の恋愛行動と結婚観、婚活方法

次に、独身者の恋愛行動と結婚についての考え方、そして婚活の具体的な手段・方法について確認する。

3-1. 独身者の恋愛交際状況

まず恋愛に関する項目について見ていく。本調査では、独身者を対象に、現在の恋愛交際の状況や恋愛交際経験についてたずねた（f3-1「現在結婚されていない方のみにお尋ねします。現在、あなたには、付き合っている恋人がいますか」）。その結果をまとめたのが下記の表 11 である。現在恋人と交際中の者は 32.4%、過去に恋人がいたことがあるが現在はいない者は 41.6%で、これらを足し合わせた恋愛交際経験者の割合は 74.0%である。前述の青森調査における恋愛交際経験率は 69.7%であった（木村 2018）。本調査の割合は、青森調査のそれと大きな違いは見られない。

表 12 は、恋愛行動と地域差のクロス集計である。この表にあるように、とりわけ都市部の京都市の恋人保有率が高く（34.8%）、恋愛交際未経験者の割合が低くなっている（22.3%）。しかし、有意差は確認されなかった。青森調査でも同様である。

表 11. 現在の恋愛交際の状況（独身者のみ、SA）

	%
恋人がいる	32.4
今はいないが、過去にいたことがある	41.6
恋人がいたことはない	26.0
N	1381

表 12. 恋愛行動と調査地域のクロス集計

		恋愛行動			N	χ^2 検定
		恋人がいる	今はいないが、 過去にいたこと がある	恋人がいたこ とはない		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	30.8%	42.7%	26.5%	0.641
		調整済み残差	-8	.5	.3	
	札幌市	調査地域の%	33.6%	40.0%	26.4%	
		調整済み残差	.7	-.8	.2	
	京都北部	調査地域の%	30.0%	41.4%	28.6%	
		調整済み残差	-.9	-.1	1.1	
	京都市	調査地域の%	34.8%	42.9%	22.3%	
		調整済み残差	1.0	.5	-1.6	
合計	調査地域の%	32.4%	41.6%	26.0%	1381	

3-2. 独身者の結婚観

本調査では、独身者に対して結婚についての考え方（結婚観）についてたずねている（f3「現在結婚されていない方のみにお尋ねします。あなたは結婚について、どのようにお考えですか」）。その結果を表 13 に示した。「理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」との回答が最も高く（47.1%）、次に「ある程度の年齢までに結婚するつもり」（40.7%）、「一生結婚するつもりはない」（12.2%）が続く。前述の青森調査でも同様の項目を設けており、「理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」は 46.4%、「ある程度の年齢までに結婚するつもり」は 43.6%、「一生結婚するつもりがない」は 10.1%であった。ほぼ同じような傾向にあると言えるだろう。

表 13. 結婚についての考え方（独身者のみ、SA）

	%
ある程度の年齢までに結婚するつもり	40.7
理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない	47.1
一生結婚するつもりはない	12.2
合計	1413

下記の表 14 は、この結婚についての考え方と調査地域のクロス集計である。京都北部の「ある程度の年齢までに結婚するつもり」は割合が 45.1%と最も高く、オホーツクと京都市では半数近くが「理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と回答している。しかし、検定の結果は、非有意であった（青森調査でも同じ）。

表 14. 結婚についての考え方と調査地域のクロス集計

		結婚についての考え方			N	χ^2 検定
		ある程度の年齢 までに結婚する つもり	理想の結婚相手が見 つかるまでは結婚し なくてもかまわない	一生結婚する つもりはない		
調査地域	オホーツク	調査地域の %	37.6%	49.5%	12.9%	0.363
		調整済み残差	-1.5	1.2	.5	
札幌市	調査地域の %	40.6%	46.1%	13.4%	434	
		調整済み残差	-.1	-.5	.9	
京都北部	調査地域の %	45.1%	42.7%	12.2%	286	
		調整済み残差	1.7	-1.7	.0	
京都市	調査地域の %	40.8%	49.5%	9.7%	289	
		調整済み残差	.1	.9	-1.5	
合計	調査地域の %	40.7%	47.1%	12.2%	1413	

3-3. 婚活の方法

次に、結婚相手を探すための婚活（結婚活動）の具体的な方法を確認する。本調査では、「あなたは、結婚相手との出会いを求めて以下のことをしたことがありますか。既婚者の場合は現在の配偶者と出会う前にしたことについてお答えください」（q16）という質問で、婚活の具体的な方法について複数回答形式でたずねた（青森調査ではたずねていない）。独身者だけではなく既婚者にもたずねているため、既婚者の回答も下記の表 15 に示した。

独身者と既婚者を合わせた全体のなかで最も高かったのは、「結婚相手は探していない（探したことがない）」（45.4%）である。次に「友人、親、親族に紹介を頼む」（27.2%）、「婚活サイト、マッチングアプリの利用」（10.8%）と続く。結婚相手との出会いのために地方自治体や民間企業による婚活サービス（婚活パーティー、イベント）や SNS を利用する者はごくわずかとなっている。

表 15. 婚活の方法（%、MA）

	全体	独身	既婚
合コン・コンパ・飲み会への参加	38.2	28.5	49.0
友人、親、親族に紹介を頼む	27.2	22.1	32.9
地方自治体による婚活サービスの利用（婚活パーティ、イベントなどへの参加）	4.6	5.0	4.2
民間企業による婚活サービスの利用（婚活パーティ、イベントなどへの参加）	7.4	7.5	7.4
SNS（Facebook、Twitterなど）の利用	8.3	7.3	8.6
婚活サイト、マッチングアプリの利用	10.8	15.3	4.9
その他	2.7	1.8	3.4
結婚相手は探していない（探したことがない）	45.4	58.5	35.7
N	2464	1271	1073

表 15 にあるように独身者においても、「結婚相手は探していない（探したことがない）」が最も高く（58.5%）、「合コン、コンパ、飲み会への参加」（28.5%）、「友人、親、親族に紹介を頼む」（22.1%）、「婚活サイト、マッチングアプリの利用」（15.3%）が続く。既婚者で最も高いのは、「合コン・コンパ、飲み

会への参加」(49.0%)である。次に高いのは「結婚相手は探していない(探したことがない)」であり(35.7%)、具体的な婚活を行ったというよりも学校や職場などでの「自然な出会い」から結婚へと至ったことが推察される。次が「友人、親、親族に紹介を頼む」(32.9%)であった。

これらの婚活の方法における地域差について見ておこう。ここでは、具体的な方法のなかでは最も割合の高かった「合コン、コンパ、飲み会への参加」と「友人、親、親族に紹介を頼む」のみ、確認しておきたい(表16、17)。また、独身者のみとし、既婚者については省略する。

表16によれば、合コン参加率は京都北部の参加率が最も高く(28.1%)、札幌市が最も低い(25.6%)。ただし、統計的に有意な差は確認されなかった。

次の表17の友人、親、親族への紹介依頼と調査地域のクロス集計においては、0.1%水準の有意差が見られた。京都北部では、友人、親、親族に結婚相手の紹介を頼むという割合が30.8%で最も高くなっている。一方、札幌市は、16.9%と最も低い。全体の傾向としては、都市部(まち)よりも非都市部(いなか)のほうが友人、親、親族に結婚相手の紹介を頼むという割合が高いものの、調整済み残差からすると、特徴的なのは先の京都北部と札幌市の2地域のみである。

表16. 合コン等への参加の有無と調査地域のクロス集計

			合コン・コンパ・飲み会への参加		N	χ^2 検定
			あてはまらない	あてはまる		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	72.2%	27.8%	356	0.111
		調整済み残差	.3	-.3		
	札幌市	調査地域の%	74.4%	25.6%	402	
		調整済み残差	1.5	-1.5		
	京都北部	調査地域の%	65.6%	34.4%	250	
		調整済み残差	-2.3	2.3		
	京都市	調査地域の%	71.9%	28.1%	263	
		調整済み残差	.1	-.1		
合計	調査地域の%	71.5%	28.5%	1271		

表17. 友人等に紹介依頼の有無と調査地域のクロス集計

			友人、親、親族に紹介を頼む		N	χ^2 検定
			あてはまらない	あてはまる		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	80.1%	19.9%	356	0.000
		調整済み残差	1.2	-1.2		
	札幌市	調査地域の%	83.1%	16.9%	402	
		調整済み残差	3.0	-3.0		
	京都北部	調査地域の%	69.2%	30.8%	250	
		調整済み残差	-3.7	3.7		
	京都市	調査地域の%	75.3%	24.7%	263	
		調整済み残差	-1.1	1.1		
合計	調査地域の%	77.9%	22.1%	1271		

下記の表 18 は、「結婚相手は探していない」あるいは「結婚相手を探したことがない」と調査地域のクロス集計である。10%水準であるものの、有意差が確認された。京都北部の「結婚相手を探していない（探したことがない）」は 51.6%と、他の地域と比べて最も低くなっている。先の結婚に対する考え方（表 14）でも、非有意であったが、京都北部の「ある程度の年齢までに結婚するつもり」の割合が 45.1%と高かった。京都北部では、友人、親、親族に結婚相手の紹介を頼む割合も高く、こうしたネットワークを駆使しながら積極的に結婚相手を探す傾向が見て取れる。しかしながら、先の表 2 で確認したように、京都北部の既婚率は有意に高いわけではない。積極的な婚活が必ずしも結果（既婚率）に結びついているというわけではなさそうである。

表 18. 結婚相手探しの有無と調査地域のクロス集計

			結婚相手は探していない (探したことがない)		N	χ^2 検定
			あてはまらない	あてはまる		
調査地域	オホーツク	調査地域の%	39.9%	60.1%	356	0.072
		調整済み残差	-.7	.7		
	札幌市	調査地域の%	38.3%	61.7%	402	
		調整済み残差	-1.6	1.6		
	京都北部	調査地域の%	48.4%	51.6%	250	
		調整済み残差	2.5	-2.5		
	京都市	調査地域の%	41.8%	58.2%	263	
		調整済み残差	.1	-.1		
合計	調査地域の%	41.5%	58.5%	1271		

4. まとめ

以上、本章では、北海道・京都地域の 20-30 代を対象にした調査のデータから、婚姻状況 (f2)、婚姻年齢 (f2-1)、既婚者の子の有無 (f4)、配偶者の出身地 (f2-2) と、独身者の恋愛行動 (f3-1)、結婚観 (f3)、婚活の具体的な方法 (q16) と地域変数との関連について確認してきた。

統計的に有意な地域差が見られたのは、まず北海道のオホーツクの既婚率の高さ (50.3%)・未婚率の低さ (49.7%)、そして札幌市の既婚率の低さ (42.1%)・未婚率の高さ (57.9%) であった。ただし京都では、このような未/既婚率と地域差の関連は確認されなかった。前述の青森調査でも、都市部 (まち) のおいらせ町と非都市部 (いなか) のむつ市の未/既婚率の間に関連は見られなかった。つまり、都市部だから未婚率が低い (高い)、非都市部だから既婚率が低い (高い) ということは一概には言えないようである。

地域別の平均結婚年齢では、オホーツク (26.70 歳) と京都市 (27.84 歳) の間に関連が見られたが、やはり平均結婚年齢においても、今回のデータからは、北海道および京都における都市部 (まち) と都市部以外 (いなか) の間に共通する特徴は見いだせなかった。

そして前節で述べたように、京都北部において特徴的だったのが、結婚相手を探すための具体的な方法 (友人、親、親族に紹介を頼む) や結婚相手探しという項目であった。友人や親などのネットワークを利

用しながら積極的に結婚相手を探す傾向が確認された。

前述の青森調査では、都市部（まち）のおいらせ町とともに非都市部（いなか）のむつ市の婚姻状況は移動歴との関連があり、ずっと地元で暮らしている層の未婚率が最も高くなっていた。また、むつ市では、移動歴のある者のほうが、友人数が多く、また恋愛経験を持つ者が多い傾向にあった。すなわち、親密な関係性は、地理的な状況に規定されているといえる。本章では、これらの分析は行わなかったが、今後は移動歴別のネットワークの広がりなどを着目しながら、都市部（まち）と非都市部（いなか）についてのより詳細な分析を行っていきたい。

【参考文献】

木村絵里子 2018 「むつ市・おいらせ町の未婚率および独身者の恋愛行動と結婚観」『青森 20-30 代調査報告書』 http://mzaidan.mazda.co.jp/publication/index_s9.html トランスローカリティ研究会

第9章 京都と北海道の若者の仕事と収入

阿部真大（甲南大学 教授）

1. はじめに

本章では、京都と北海道の若者の仕事と収入について見ていく。第2節ではフェイスシート（F13 から F15）、第3節では、問12（C）、問22、問23を分析する。

京都市、札幌市を「都市部」、京都市北部、オホーツクを「地方部」とし、その間の比較をベースに分析を行う。

2. 調査結果①（フェイスシート）

2-1. 就業形態と雇用形態

地域別に就業形態と雇用形態（F13）をまとめたものが、以下の表1である。

表1 就業形態と雇用形態

	京都市		京都北部		札幌市		オホーツク	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
仕事を主にしている、正規雇用（フルタイム）の仕事で収入を得た	273	54.3	324	63.3	395	53.5	429	55.5
仕事を主にしている、自営業主またはその家族従業員として収入を得た	34	6.8	17	3.3	12	1.6	66	8.5
仕事を主にしている、会社経営者または役員として収入を得た	8	1.6	3	0.6	11	1.5	12	1.6
仕事を主にしている、パート・アルバイト・派遣・有期契約の非正規雇用の仕事で収入を得た	67	13.3	67	13.1	109	14.7	109	14.1
家事を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしている収入を得た	17	3.4	21	4.1	41	5.5	30	3.9
通学を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もしている収入を得た	25	5	11	2.1	41	5.5	9	1.2
家事を主にしている、仕事で収入を得ていない	42	8.3	42	8.2	73	9.9	81	10.5
通学を主にしている、仕事で収入を得ていない	28	5.6	14	2.7	33	4.5	17	2.2
家事も通学もしておらず、仕事で収入も得ていない	9	1.8	13	2.5	24	3.2	20	2.6
合計	503	100	512	100	739	100	773	100

・仕事を主にしている正規雇用者と非正規雇用者の割合は、正規雇用者を100人とする、京都市で24.5人、京都北部で20.7人、札幌市で27.6人、オホーツクで25.4人と、都市部の方が高かった。

・自営業に従事する人の割合は、京都市（6.8%）、オホーツク（8.5%）が高く、京都北部（3.3%）、札幌市（1.6%）で低く、京都と北海道で対照的な結果となった。

・学生の割合は、京都市（10.5%）、札幌市（10.0%）が高く、京都北部（4.9%）、オホーツク（3.4%）で低く、都市部の方が高かった。

・家事を主にして、仕事で収入を得ていない者の割合は、京都市（8.3%）、京都市北部（8.2%）、札幌市（9.9%）、オホーツク（10.5%）と、北海道が京都よりも高かった。

2-2. 仕事の種類

地域別に仕事の種類（F14）をまとめたものが、以下の表2である。

表2 仕事の種類

	京都市		京都北部		札幌市		オホーツク	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
管理（会社・団体などの課長以上）	8	1.9	8	1.8	12	2	4	0.6
専門・技術（教員、技術者、弁護士、医師、看護師等）	118	28.2	96	22.1	160	26.8	154	23.9
事務（係長以下の一般事務、会計事務、営業関連事務等）	74	17.7	60	13.8	110	18.4	99	15.4
販売（販売員、レジ係、不動産仲介人、金融、保険営業員等）	46	11	46	10.6	89	14.9	70	10.9
サービス（介護職、美容師、調理人、飲食店主、家政婦（夫）、等）	78	18.6	69	15.9	113	18.9	97	15.1
保安（警察官、消防員、警備員、看守、自衛官等）	7	1.7	23	5.3	9	1.5	19	3
農林漁業（農業、林業、漁業の従事者）	1	0.2	4	0.9	3	0.5	76	11.8
生産工程（製品の製造・加工処理・検査、機械の組み立て・整備等）	23	5.5	64	14.7	17	2.8	40	6.2
輸送・機械運転（トラック・鉄道・建設機械の運転手）	10	2.4	10	2.3	7	1.2	17	2.6
建設・採掘（土木・電気工事従業者、とび工、配管工等）	11	2.6	19	4.4	31	5.2	20	3.1
運搬・清掃・包装（郵便・新聞配達、倉庫業者、引越業者、清掃、ごみ収集、製品包装作業等）	9	2.1	16	3.7	22	3.7	18	2.8
その他	34	8.1	20	4.6	24	4	30	4.7
合計	419	100	435	100	597	100	644	100

・管理、専門・技術、事務、販売といったホワイトカラー職とサービス職が大半を占めていることは4地域に共通であったが、その割合は、すべての職種において、都市部が地方部を上回った。

・対照的に、非ホワイトカラー職種については、地方部の方が多く、特に、京都北部における生産工程（14.7%）、オホーツクにおける農林漁業（11.8%）の割合の大きさが目立った。

仕事を主にしている者に絞って仕事の種類をまとめたものが、以下の表3である。

表3 仕事の種類（仕事を主にしている者）

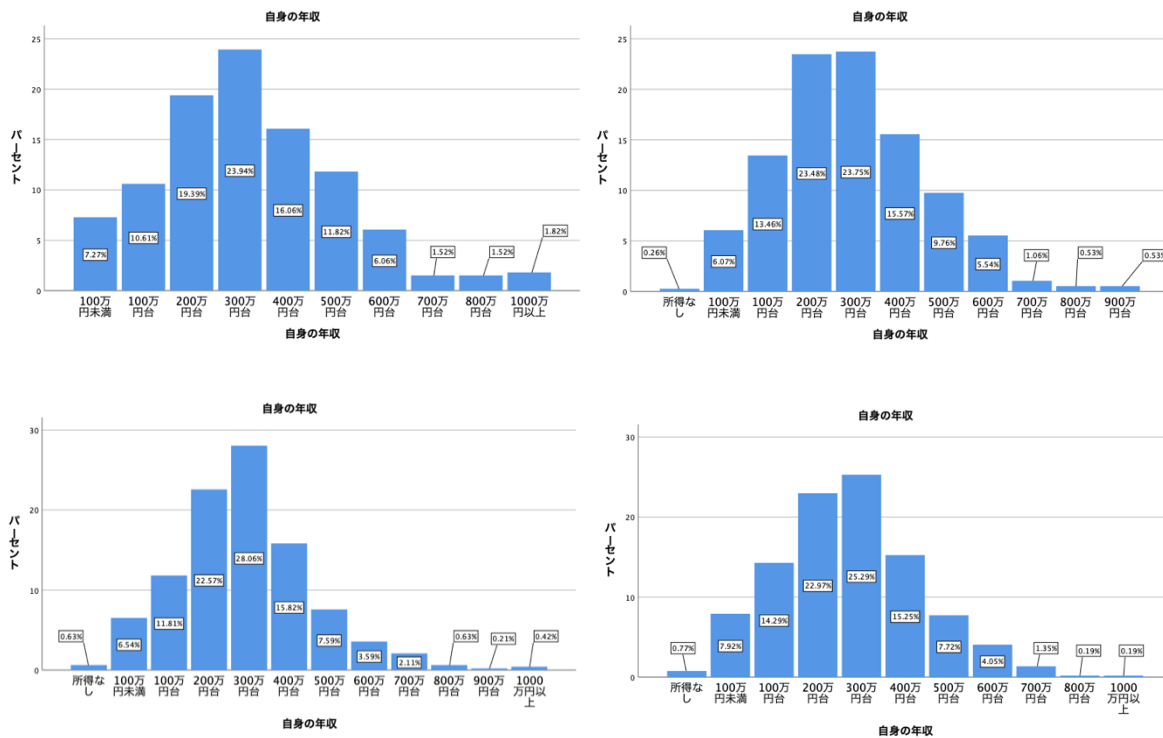
	京都市		京都北部		札幌市		オホーツク	
	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント	度数	パーセント
管理（会社・団体などの課長以上）	8	2.1	8	2	12	2.3	4	0.7
専門・技術（教員、技術者、弁護士、医師、看護師等）	113	29.7	92	22.8	144	27.6	149	24.8
事務（係長以下の一般事務、会計事務、営業関連事務等）	63	16.6	56	13.9	102	19.5	95	15.8
販売（販売員、レジ係、不動産仲介人、金融、保険営業員等）	41	10.8	41	10.2	71	13.6	65	10.8
サービス（介護職、美容師、調理人、飲食店主、家政婦（夫）、等）	65	17.1	59	14.6	92	17.6	84	14
保安（警察官、消防員、警備員、看守、自衛官等）	7	1.8	23	5.7	9	1.7	19	3.2
農林漁業（農業、林業、漁業の従事者）	1	0.3	3	0.7	2	0.4	69	11.5
生産工程（製品の製造・加工処理・検査、機械の組み立て・整備等）	22	5.8	63	15.6	15	2.9	39	6.5
輸送・機械運転（トラック・鉄道・建設機械の運転手）	10	2.6	10	2.5	5	1	17	2.8
建設・探掘（土木・電気工事従業者、とび工、配管工等）	11	2.9	19	4.7	31	5.9	20	3.3
運搬・清掃・包装（郵便・新聞配達、倉庫業者、引越業者、清掃、ごみ収集、製品包装作業等）	9	2.4	14	3.5	20	3.8	15	2.5
その他	30	7.9	15	3.7	19	3.6	25	4.2
合計	380	100	403	100	522	100	601	100

・仕事以外を主にしている者を除くと、4地域ともに「管理、専門・技術、事務」の割合は増加し、「販売、サービス」の割合は減少した。

2-3. 個人年収／世帯年収

個人年収（F15-A）に関して、仕事を主にする正規雇用者と非正規雇用者について、地域ごとに見たのが、図1である。

図1 仕事を主にする正規雇用者と非正規雇用者の個人年収
 (京都市 (上左)・京都北部 (上右)・札幌市 (下左)・オホーツク (下右))



・いずれの地域においても最も多い割合を占めたのが300万円台で、200万円台、400万円台がそれに続いた。200万円台から400万円台が6割程度(京都市(59.39%)、京都北部(62.8%)、札幌市(66.45%)、オホーツク(63.51%))を占めるボリュームゾーンであった。

・年収が300万円未満の雇用者の割合は、京都市(17.88%)、京都北部(19.79%)、札幌市(18.98%)、オホーツク(22.98%)であり、都市部、地方部ともに北海道よりも京都の方が高く、京都、北海道ともに、都市部よりも地方部の方が高かった。

世帯年収（F15-B）に関して、学生を除き、世帯構成人数ごとに見たのが、表4である。

表4-1. 世帯構成人数ごとの世帯年収（京都市）

世帯構成人数	所得なし	100万円未満	100万円台	200万円台	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	合計
1	1	0	6	21	16	8	11	6	2	1	0	4	76
	0.2%	0.0%	1.5%	5.1%	3.9%	2.0%	2.7%	1.5%	0.5%	0.2%	0.0%	1.0%	18.6%
2	0	5	2	7	10	13	9	8	11	4	6	13	88
	0.0%	1.2%	0.5%	1.7%	2.5%	3.2%	2.2%	2.0%	2.7%	1.0%	1.5%	3.2%	21.6%
3	0	0	1	6	13	10	13	14	10	12	8	25	112
	0.0%	0.0%	0.2%	1.5%	3.2%	2.5%	3.2%	3.4%	2.5%	2.9%	2.0%	6.1%	27.5%
4	0	1	1	3	13	10	13	6	9	12	12	14	94
	0.0%	0.2%	0.2%	0.7%	3.2%	2.5%	3.2%	1.5%	2.2%	2.9%	2.9%	3.4%	23.0%
5	1	1	0	0	5	1	3	5	3	3	1	2	25
	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	1.2%	0.2%	0.7%	1.2%	0.7%	0.7%	0.2%	0.5%	6.1%
6	0	0	0	1	2	1	2	0	0	0	1	1	8
	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.5%	0.2%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	2.0%
7	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
8	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
合計	2	7	10	38	59	44	53	39	37	32	28	59	408
	0.5%	1.7%	2.5%	9.3%	14.5%	10.8%	13.0%	9.6%	9.1%	7.8%	6.9%	14.5%	100.0%

表4-2. 世帯構成人数ごとの世帯年収（京都北部）

世帯構成人数	所得なし	100万円未満	100万円台	200万円台	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	合計
1	1	2	4	15	17	12	9	4	1	0	1	0	66
	0.2%	0.5%	0.9%	3.5%	4.0%	2.8%	2.1%	0.9%	0.2%	0.0%	0.2%	0.0%	15.6%
2	0	0	3	5	16	9	7	8	4	4	1	3	60
	0.0%	0.0%	0.7%	1.2%	3.8%	2.1%	1.7%	1.9%	0.9%	0.9%	0.2%	0.7%	14.2%
3	0	1	6	6	15	16	19	11	8	11	5	10	108
	0.0%	0.2%	1.4%	1.4%	3.5%	3.8%	4.5%	2.6%	1.9%	2.6%	1.2%	2.4%	25.5%
4	0	2	3	2	13	11	20	12	14	10	15	11	113
	0.0%	0.5%	0.7%	0.5%	3.1%	2.6%	4.7%	2.8%	3.3%	2.4%	3.5%	2.6%	26.7%
5	1	0	1	2	8	8	2	11	2	4	2	7	48
	0.2%	0.0%	0.2%	0.5%	1.9%	1.9%	0.5%	2.6%	0.5%	0.9%	0.5%	1.7%	11.3%
6	0	0	0	0	3	4	1	1	2	2	1	2	16
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.9%	0.2%	0.2%	0.5%	0.5%	0.2%	0.5%	3.8%
7	0	1	1	0	1	1	3	0	1	0	1	2	11
	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.2%	0.2%	0.7%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%	0.5%	2.6%
8	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
合計	2	6	18	30	74	61	61	48	32	31	26	35	424
	0.5%	1.4%	4.2%	7.1%	17.5%	14.4%	14.4%	11.3%	7.5%	7.3%	6.1%	8.3%	100.0%

・京都において、ボリュームゾーンである単身世帯から5人世帯の年収を見ると、単身世帯の中央値は、300万円台（京都市）／300万円台（京都北部）、2人世帯の中央値は、500万円台（京都市）／

400万円台（京都北部）、3人世帯の中央値は、600万円台（京都市）／500万円台（京都北部）、4人世帯の中央値は、600・700万円台（京都市）／600万円台（京都北部）、5人世帯の中央値は、600万円台（京都市）／600万円台（京都北部）であり、地方部より都市部の方が若干、高かった。

表4-3. 世帯構成人数ごとの世帯年収（札幌市）

世帯構成人数	所得なし	100万円未満	100万円台	200万円台	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	合計
1	4	2	7	36	28	19	13	2	5	3	0	2	121
	0.7%	0.3%	1.2%	6.0%	4.7%	3.2%	2.2%	0.3%	0.8%	0.5%	0.0%	0.3%	20.3%
2	0	0	7	11	17	19	17	14	14	9	6	5	119
	0.0%	0.0%	1.2%	1.8%	2.8%	3.2%	2.8%	2.3%	2.3%	1.5%	1.0%	0.8%	19.9%
3	2	3	10	9	19	28	26	18	19	8	7	17	166
	0.3%	0.5%	1.7%	1.5%	3.2%	4.7%	4.4%	3.0%	3.2%	1.3%	1.2%	2.8%	27.8%
4	0	1	0	0	11	19	21	17	20	16	14	15	134
	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	1.8%	3.2%	3.5%	2.8%	3.4%	2.7%	2.3%	2.5%	22.4%
5	0	1	2	2	1	8	7	10	6	3	5	6	51
	0.0%	0.2%	0.3%	0.3%	0.2%	1.3%	1.2%	1.7%	1.0%	0.5%	0.8%	1.0%	8.5%
6	2	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	5
	0.3%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%
7	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
合計	9	7	27	58	77	94	84	61	64	39	32	45	597
	1.5%	1.2%	4.5%	9.7%	12.9%	15.7%	14.1%	10.2%	10.7%	6.5%	5.4%	7.5%	100.0%

表4-4. 世帯構成人数ごとの世帯年収（オホーツク）

世帯構成人数	所得なし	100万円未満	100万円台	200万円台	300万円台	400万円台	500万円台	600万円台	700万円台	800万円台	900万円台	1000万円以上	合計
1	3	3	8	20	42	17	10	4	2	1	0	0	110
	0.5%	0.5%	1.2%	3.1%	6.4%	2.6%	1.5%	0.6%	0.3%	0.2%	0.0%	0.0%	16.8%
2	0	0	8	14	21	24	18	11	4	7	6	5	118
	0.0%	0.0%	1.2%	2.1%	3.2%	3.7%	2.7%	1.7%	0.6%	1.1%	0.9%	0.8%	18.0%
3	0	2	6	9	18	25	41	20	13	5	6	15	160
	0.0%	0.3%	0.9%	1.4%	2.7%	3.8%	6.3%	3.1%	2.0%	0.8%	0.9%	2.3%	24.4%
4	0	0	5	6	18	27	23	29	14	11	8	18	159
	0.0%	0.0%	0.8%	0.9%	2.7%	4.1%	3.5%	4.4%	2.1%	1.7%	1.2%	2.7%	24.3%
5	0	0	3	4	3	9	15	15	10	4	5	12	80
	0.0%	0.0%	0.5%	0.6%	0.5%	1.4%	2.3%	2.3%	1.5%	0.6%	0.8%	1.8%	12.2%
6	1	0	1	1	2	1	2	0	2	0	1	5	16
	0.2%	0.0%	0.2%	0.2%	0.3%	0.2%	0.3%	0.0%	0.3%	0.0%	0.2%	0.8%	2.4%
7	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3
	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.5%
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
9	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	3
	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.5%
合計	4	5	32	54	105	103	110	80	45	29	27	61	655
	0.6%	0.8%	4.9%	8.2%	16.0%	15.7%	16.8%	12.2%	6.9%	4.4%	4.1%	9.3%	100.0%

・北海道において、ボリュームゾーンである単身世帯から5人世帯の年収を見ると、単身世帯の中央値は、300万円台（札幌市）／300万円台（オホーツク）、2人世帯の中央値は、500万円台（札幌市）／400万円台（オホーツク）、3人世帯の中央値は、500万円台（札幌市）／500万円台（オホーツク）、4人世帯の中央値は、600万円台（札幌市）／600万円台（オホーツク）、5人世帯の中央値は、600万円台（札幌市）／600万円台（オホーツク）であり、地方部より都市部の方が若干、高かった。

3. 調査結果②（質問項目）

3-1. 仕事つながりの親しい人の住む地域

「あなたにとって親しい人についてお尋ねします。次のような間柄の親しい人はどこにお住まいですか」（問12）の「仕事つながりの親しい人の住む地域」（C）については、表5のような結果となった。

表5. 仕事つながりの親しい人の住む地域（%）

	仕事つながりの親しい人の住まい			
	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
あなたが「地元」だと思う地域	13.0	27.1	15.7	26.1
現在住んでいる地域	32.8	45.4	46.8	54.3
現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域	37.8	22.3	26.5	12.9
片道1時間以上かかるが、日帰りで会える距離にある地域	17.4	15.5	9.0	12.1
日帰りでは会えない距離にある地域	6.0	6.6	10.0	13.0
そのような人はいない	17.0	12.4	15.0	14.2

・「地元」や現在住んでいる地域に仕事つながりの親しい人が住んでいる割合は、北海道、京都ともに地方部が都市部を上回った。

・一方、遠方に仕事つながりの親しい人が住んでいる割合は、地方部が都市部を上回ることもあり、一概に都市部の人々の仕事の範囲の方が広範囲であるとは言えないことも分かった。

・「そのような人はいない」と答えた人の割合は、北海道、京都ともに都市部が地方部を上回った。

3-2. 現在の仕事について

「あなたは仕事についてどう感じていますか」（問22-1）に対する回答については、表6のような結果となった。

表6. 総合的に見て、自分の仕事に現状に満足している（%）

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	15.5	10.3	11.1	12.1
ややそう思う	48.5	53.2	50.7	50.8
あまりそう思わない	27.6	29.2	29.1	31.3
全くそう思わない	8.4	7.3	9.1	5.9

- ・都市部、地方部ともに、6割ほどの人が、総合的に見て、自分の仕事に現状に満足していた。
- ・京都市の方が京都北部よりも二極化が進んでいた。

表 7. 給料や報酬に満足している (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	11.1	8.5	9.4	13.0
ややそう思う	40.6	42.7	39.1	43.0
あまりそう思わない	33.3	35.6	36.1	31.3
全くそう思わない	15.0	13.3	15.4	12.7

- ・都市部、地方部ともに、5割ほどの人が、給料や報酬に満足しているが、オホーツクのみ、満足度が若干、高かった。
- ・京都市の方が京都北部よりも二極化が進んでいた。

表 8. 現在の職場の人間関係に満足している (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	21.7	16.3	21.4	19.5
ややそう思う	50.4	56.4	50.2	52.7
あまりそう思わない	19.5	21.3	20.2	20.0
全くそう思わない	8.4	6.0	8.2	7.8

- ・都市部、地方部ともに、7割ほどの人が、現在の職場の人間関係に満足していた。
- ・京都市の方が京都北部よりも二極化が進んでいた。

表 9. 自分は「やりがい」がある仕事をしている (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	29.4	23.6	22.4	21.9
ややそう思う	43.7	50.9	44.5	48.7
あまりそう思わない	20.2	18.1	24.7	23.7
全くそう思わない	6.7	7.3	8.3	5.7

・京都においては7割強、北海道においては7割弱の人が自分は「やりがい」がある仕事をしていると思っていた。

・京都市の方が京都北部よりも強く「やりがい」を感じている人が多かった。

表 10. 現在住んでいる地域には魅力的な仕事の選択肢がある (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	8.6	4.1	10.5	5.6
ややそう思う	37.2	16.8	32.6	14.9
あまりそう思わない	42.1	53.8	42.5	53.0
全くそう思わない	12.1	25.3	14.5	26.5

・京都、北海道ともに、都市部と地方部の差が大きかった。都市部では4割強の人が魅力的な仕事の選択肢があると思っているのに対し、地方部では2割強の人しかそうは思っていなかった。

表 11. 今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望持っている (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	14.0	9.0	9.8	8.5
ややそう思う	37.9	34.7	33.3	32.4
あまりそう思わない	36.5	44.1	42.7	44.0
全くそう思わない	11.6	12.2	14.3	15.0

・明るい希望を持っている人に関しては、京都においては、都市部（51.9%）と地方部（43.7%）の差が大きかった。一方、北海道においては、都市部（43.1%）と地方部（40.9%）の差は小さかった。

表 12. 今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンス求めて転職しようという考えを持っている (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	19.0	16.4	20.4	16.7
ややそう思う	31.0	33.9	34.7	31.2
あまりそう思わない	28.6	28.8	26.7	27.5
全くそう思わない	21.4	21.0	18.3	24.6

・転職を考えている人に関しては、京都においては、都市部（50.0%）と地方部（50.3%）の差は小さかった。一方、北海道においては、都市部（55.1%）と地方部（47.9%）の差は大きかった。

3-3. コロナウィルスの流行と在宅勤務

「今春以降の新型コロナウイルス流行の影響によって、あなたの在宅勤務の時間は増えましたか」(問 22-2) に対する回答については、表 13 のような結果となった。

表 13. コロナウィルスの流行と在宅勤務 (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
増えた	37.2	20.5	28.5	12.2
変わらない	58.7	75.9	67.7	83.4
減った	2.3	2.2	2.2	2.4
もともと在宅勤務のみ	1.8	1.5	1.6	1.9

・コロナウィルスの流行によって在宅勤務が増えた人の割合は、地方部（京都北部（20.5%）、オホーツク（12.2%））よりも都市部（京都市（37.2%）、札幌市（28.5%））の方が高かった。

・一方、コロナウィルスの流行によって在宅勤務が変わらない人の割合は、都市部（京都市（58.7%）、札幌市（67.7%））よりも地方部（京都北部（75.9%）、オホーツク（83.4%））の方が高かった。

4. 仕事に関わる価値観

「すべての方にお尋ねします。あなたの仕事に関わる価値観はどのようなものですか」(問 23) に対する回答については、以下のような表 14 となった。

表 14. 満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわない (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	17.6	14.0	16.0	15.0
ややそう思う	31.2	30.6	31.5	33.8
あまりそう思わない	35.5	41.2	36.2	38.5
全くそう思わない	15.8	14.2	16.4	12.7

・都市部、地方部ともに、5割弱ほどの人が、満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわないと思っていた。

表 15. やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわない (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	7.1	5.0	4.1	4.4
ややそう思う	27.1	22.2	27.1	20.2
あまりそう思わない	46.8	52.3	45.4	50.3
全くそう思わない	19.0	20.5	23.3	25.0

・前問(表 14)と比較すると、全体的に肯定する人は少なかったが、都市部の方が地方部よりも肯定する人は多く、都市部と地方部の差が見られた。

表 16. 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	2.0	1.3	1.2	2.7
ややそう思う	10.7	8.7	10.2	8.1
あまりそう思わない	32.9	37.0	34.6	40.7
全くそう思わない	54.5	53.0	54.0	48.5

・性別役割分業についての保守的な意見に関しては、都市部、地方部ともに1割ほどの肯定にとどまった。

表 17. 夫が妻と同じくらい家事や育児をするのはあたりまえのことだ (%)

	京都市	京都北部	札幌市	オホーツク
全くそう思う	29.1	28.8	27.4	22.4
ややそう思う	43.9	42.0	42.0	47.1
あまりそう思わない	23.1	23.8	23.4	25.6
全くそう思わない	4.0	5.4	7.2	4.8

・前問（表 16）と比較すると、保守的な意見に関しては、都市部、地方部ともに 7 割ほどの人が肯定しており、性別役割分業についての意見の中にはグラデーションがあることが推察される。

第 10 章 国家と地域に対する社会・政治意識から見た

京都府・北海道の若者

竹内 陽介（名古屋大学大学院 博士後期課程）

1. はじめに

本章では「社会観・規範意識（問 24）」、および「国家と地域に対する政治意識（問 25）」の回答を分析する。「社会観・規範意識」は 4 つの調査対象地域（京都市内・京都府北部 7 市町・札幌市内・オホーツク管内：以下、4 地域）ごとに差異が出るのではなく、学歴や経済階層といった個人属性による種差があると仮定して作成した項目である。一方「国家と地方に対する政治意識」は、轡田(2017)の枠組みである地方中枢拠点都市圏（京都市内・札幌市内）と、条件不利地域圏（京都北部 7 市町・オホーツク管内）で差が見られると仮定して作成した。これは一般的に都市部よりも農山漁村地域のほうが政治家との接触が多く、また地方政治の動員構造に影響を受けやすいとされてきたことを踏まえている（居安 1983:77）。ただし、こうした都市部と農山漁村地域における政治意識や参加度合いに関する差異は徐々に消失していく傾向にあり（三船 2008: 186-194; 蒲島ほか 2020: 177-8）、とりわけ近年の若年層における政治意識はこうした現象をより先鋭に示す可能性がある。したがって設問作成時は「社会観や規範意識の差異は地域間で見られないが、各種政治意識に関しては地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏の間で差異が見られる」と予測していた。他方で、若年層の政治意識を検討する関係上、もはや居住地域（都市規模）に起因する差異は消失している可能性もあり、居住地域以外の学歴や階層といった、従来から政治意識と相関するとされてきた属性項目のみが説明力を持つ（地域ごとの差異はない）可能性もある。これらを踏まえつつ、以下ではまず 4 地域と各設問のクロス集計を分析していく。

2. 社会・政治意識の 4 地域比較

(1) 4 地域の「社会観・規範意識（問 24）」

「社会観・規範意識」について、地域別に見たものが表 1 である。7 項目のうち、3 項目で有意差があるという結果になった。まず問 24A・24B・24C は対象者の日本社会に対する評価（社会観）を尋ねる項目である。いずれの項目も地域別で大きな差は見られないが、問 24A の「日本は、安全で安心して暮らせる国だ」のみ、5%水準で有意であった。これは京都市内で「全くそう思う・ややそう思う」の回答が多い結果を反映したものだろう。個別の項目をみると「日本は、安全で安心して暮らせる国だ」に対しては約 8 割が肯定的な回答をしているが、「日本はこつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だ」と「日本は弱い立場とされる人々が手厚く保護されている国だ」に関しては、どの地域でも回答が二分される結果となっている。4 地域の若者にとって日本は安心・安全ではあるが、努力では埋められない差異を感じたり、弱者保護にあまり積極的でないと感じたりする若者が半数存在している。

次いで問 24D・24E・24F・24G は規範意識の質問である。問 24D は権威主義に関する質問であり、どの地域も 7 割程度が「全くそう思わない・あまりそう思わない」と回答している。

問 24E は競争原理に基づく社会に対する賛否を問う質問だが、どの地域でも回答は二分されており、

別の説明変数を検討する必要がある。問 24F は伝統主義に関する質問であり、ここでも回答は二分されている。なお、5%水準で有意であるが、これはオホーツク管内で伝統主義に対する否定的な回答がやや多くなっているからである。また最も肯定的な回答をする傾向にあるのは京都府北部であり、したがって都市規模による差異とは言い難い。より細かな個別地域の傾向が反映されているのか、あるいは居住する若年層の属性的な差異によって説明されるのか、ここでは分からない。

問 24G は愛国心に関する質問であり、7~8 割程度が肯定的な回答をしている。またこの項目のみ 0.1%水準で有意という結果が出ている。これは愛国心が相対的に京都府で強く、北海道で弱いという結果を反映したものだが、どのような要因から説明可能であるのかは後に個人属性を使用した分析から検討する。

表 1 4 地域の「社会観・規範意識」(問 24)

		全く そう 思わない	あまり そう 思わない	やや そう 思う	全く そう 思う	計
問24A：日本は、安全で安心して暮らせる国だ*	オホーツク管内	1.5%	15.3%	59.3%	23.9%	100.0%
	札幌市内	2.0%	16.0%	54.8%	27.2%	100.0%
	京都府北部	2.5%	18.1%	54.5%	25.0%	100.0%
	京都市内	2.5%	11.0%	54.9%	31.6%	100.0%
問24B：日本はこつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だ	オホーツク管内	9.3%	38.0%	41.6%	11.2%	100.0%
	札幌市内	10.2%	39.6%	39.6%	10.5%	100.0%
	京都府北部	7.3%	39.7%	43.7%	9.4%	100.0%
	京都市内	8.8%	39.1%	40.7%	11.4%	100.0%
問24C：日本は弱い立場とされる人々が手厚く保護されている国だ	オホーツク管内	9.9%	46.3%	33.8%	10.0%	100.0%
	札幌市内	11.9%	40.2%	37.5%	10.4%	100.0%
	京都府北部	9.4%	44.6%	36.1%	9.9%	100.0%
	京都市内	12.0%	41.7%	33.4%	13.0%	100.0%
問24D：権威のある人々にはつねに敬意をはらわなければならない	オホーツク管内	19.0%	52.1%	24.3%	4.6%	100.0%
	札幌市内	21.6%	48.6%	25.9%	3.8%	100.0%
	京都府北部	19.3%	46.5%	29.8%	4.4%	100.0%
	京都市内	22.2%	47.4%	25.8%	4.5%	100.0%
問24E：貧富の格差が大きくても、自由に競争し、成果に応じて分配される社会がよい	オホーツク管内	8.3%	42.2%	38.4%	11.1%	100.0%
	札幌市内	9.7%	42.2%	38.4%	9.7%	100.0%
	京都府北部	10.5%	41.5%	37.5%	10.5%	100.0%
	京都市内	9.7%	36.6%	42.5%	11.3%	100.0%
問24F：伝統やしきたりにはなるべく従うほうがよい*	オホーツク管内	8.3%	46.9%	40.8%	4.1%	100.0%
	札幌市内	8.8%	42.6%	43.5%	5.1%	100.0%
	京都府北部	11.5%	36.6%	45.8%	6.1%	100.0%
	京都市内	7.5%	43.7%	43.1%	5.7%	100.0%
問24G：国を愛する心を持つことは大切だ***	オホーツク管内	3.9%	23.1%	53.7%	19.3%	100.0%
	札幌市内	6.4%	16.9%	56.2%	20.5%	100.0%
	京都府北部	4.2%	15.7%	59.7%	20.5%	100.0%
	京都市内	6.1%	15.5%	52.4%	26.1%	100.0%

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。

(2) 4 地域の「国家と地域に対する政治意識（問 25）」

「国家と地域に対する政治意識」について、地域別に見たものが表 2 である。7 項目のうち、3 項目で有意差があるという結果となった。

まず問 25A は「総合的な日本政治に対する満足度」を尋ねたものだが、どの地域でも 7 割強が不満を持っているという結果となった。これは全国平均と比較しても変わらない数値である（河野・荒牧 2017）。

次に問 25B と問 25C は、それぞれ「日本／住んでいる自治体の政治や社会問題に対する関心」を尋ねたものだが、関心が低い人がおよそ半数であり、また問 25B が 1%水準で有意という結果となった。これは京都市内で「あてはまる・ややあてはまる」の割合が高いからである。次いで札幌市内が高く、最も低いのは京都府北部であることを考え合わせると、日本に対する政治的・社会的関心はひとまず地方中枢拠点都市圏で高い傾向があると言える。また問 25C は有意差が見られない結果となった。すなわち条件不利地域に住んでいるという要因だけで自治体の政治や社会に対する関心が顕著に高まるとは言えない。むしろ国家の政治や社会問題に対する関心は地方中枢拠点都市圏のほうが高い状況にある。

問 25D と問 25E はそれぞれ「国／自治体の選挙には積極的に参加している」と考えるかを尋ねており、どちらも 5%水準で有意であった。「あてはまる」と「ややあてはまる」を足し合わせると、最も「積極的に参加している」と考える人が多いのは、国の選挙の場合は京都市内、次いでオホーツク管内である。一方、自治体選挙の場合はオホーツク管内が最も高く、次いで京都北部であった。この結果からは次のような仮説が考えられる。すなわち一般的に政治関心が高く、政治参加に積極的なのは高学歴層である。したがって地域ごとの学歴構成を反映する形で地方中枢拠点都市圏において政治や社会問題への関心、および投票への積極性が高くなる。しかし自治体の選挙に関しては投票へと人々を向かわせる政治の地方的な文化（蒲島 1988）が残っているため、条件不利地域圏の方が積極性は高くなるのではないか。この点に関しては後に別の変数との関連で検討する。

最後に問 25F と問 25G である。これはそれぞれ「日本の政治や社会問題／住んでいる地域の政治や社会問題」に対する対象者の有効性感覚を明らかにする質問である。質問作成時は、条件不利地域圏において、とりわけ身近な居住地域への有効性感覚が高まると想定していた。すなわち人口規模の小さな自治体ほど影響を与えやすく、若者の政治的・社会的な自己有力感が平均的に高くなるのではないかと考えていたのである。しかし両質問の回答結果を分析すると、共に有意ではなく、「あてはまる」と「ややあてはまる」を足し合わせると、どの地域もおよそ 7 割の対象者が日本／住んでいる地域に対して、「有効性感覚がない／弱い」という結果となった。有効性感覚も地域ごとの差異は見られないため、有効性感覚の強弱を腑分けする別の変数を探することで、分析する必要がある。

表2 4地域の「国家と地域に対する政治意識」(問25)

		あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	計
問25A: 総合的に見て、日本の政治に満足している	オホーツク管内	22.6%	50.6%	24.2%	2.5%	100.0%
	札幌市内	23.8%	47.5%	25.9%	2.8%	100.0%
	京都府北部	21.7%	48.8%	27.0%	2.5%	100.0%
	京都市内	26.7%	48.1%	23.0%	2.2%	100.0%
問25B: 日本の政治や社会問題に関心があり、知識を得ようと心がけている**	オホーツク管内	12.8%	38.7%	40.1%	8.5%	100.0%
	札幌市内	12.8%	36.7%	39.6%	10.9%	100.0%
	京都府北部	13.2%	41.7%	37.5%	7.6%	100.0%
	京都市内	10.0%	32.5%	42.9%	14.5%	100.0%
問25C: 住んでいる地域の政治や社会問題に関心があり知識を得ようと心がけている	オホーツク管内	13.0%	43.3%	37.5%	6.2%	100.0%
	札幌市内	14.0%	41.2%	37.3%	7.5%	100.0%
	京都府北部	14.0%	44.6%	36.2%	5.2%	100.0%
	京都市内	11.4%	40.5%	40.9%	7.3%	100.0%
問25D: 国の選挙には積極的に参加している*	オホーツク管内	9.6%	21.9%	31.7%	36.8%	100.0%
	札幌市内	12.9%	21.2%	29.2%	36.7%	100.0%
	京都府北部	15.5%	20.0%	31.9%	32.6%	100.0%
	京都市内	14.3%	16.9%	32.9%	35.9%	100.0%
問25E: 自治体の選挙には積極的に参加している*	オホーツク管内	9.7%	21.9%	32.7%	35.7%	100.0%
	札幌市内	14.1%	23.4%	27.9%	34.6%	100.0%
	京都府北部	15.1%	19.5%	31.4%	33.9%	100.0%
	京都市内	15.5%	20.8%	29.4%	34.3%	100.0%
問25F: 自分は日本の政治や社会問題に対して、影響を与えることはできない	オホーツク管内	6.1%	20.1%	39.0%	34.9%	100.0%
	札幌市内	7.8%	19.2%	42.1%	30.9%	100.0%
	京都府北部	7.3%	20.7%	36.9%	35.1%	100.0%
	京都市内	9.0%	22.8%	39.1%	29.1%	100.0%
問25G: 自分は住んでいる地域の政治や社会問題に対して、影響を与えることはできない	オホーツク管内	6.4%	22.5%	40.0%	31.1%	100.0%
	札幌市内	7.0%	20.3%	43.2%	29.5%	100.0%
	京都府北部	8.3%	22.1%	39.3%	30.3%	100.0%
	京都市内	8.8%	23.2%	42.0%	25.9%	100.0%

注: 質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。

ここまでは各設問に焦点を当てつつ、4地域ごとの回答傾向の有意差に目配りしてきた。結果として14項目中6つの項目で有意差が見られたが、地域ごとの差異は数値上、さほど大きくはなく、かつそれがいかなる要因に影響を受けているのか検討が必要である。

したがって以下では質問項目ごとに、どのような変数によって差異が説明されるのかを分析する。とりわけ社会観・規範意識については、有意差や相関関係がみられた年齢(F1A)、性別(F1B)、最終学歴(F6)、世帯年収(F15B)といった基底的な属性変数との関連を検討する。政治意識に関しては居住年数(問1)や、トランスローカルな若者の移動とその影響に対する関心を踏まえ、居住歴(問9)を属性変数として加え、検討を進める。

3. 属性別にみた政治・社会意識の分析

(1) 社会観

表3は問24A・問24B・問24Cとの間に有意差や相関関係の見られた性別（男／女）、年齢、学歴（大卒／非大卒）、世帯年収ごとに関係を見たものである。これを見ると、性別では男性のほうが女性よりも楽観的な社会観を持つ傾向があることがわかり、また北海道のほうが京都府よりも性別による差異が見られる項目が多い。

年齢に関しては全体的に有意差のある項目は少ないが、部分的にみられるように、年齢が低いほど「日本は、安全で安心して暮らせる地域だ」（札幌市内）と考える傾向が見られ、また同様に「日本は、こつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だ」（京都市内）と考える傾向があった。

学歴はとりわけ問24A「日本は、安全で安心して暮らせる地域だ」と関連が強く、大卒者（在学含む）は非大卒者（在学含む）よりも日本社会を楽観的に捉える傾向が見られた。

最後に世帯年収が高いことは、社会に対する楽観的な見通しを持つことと関連している。すなわち経済的な階層の高さと社会に対する楽観的・肯定的な捉え方との間には、相関関係がある。

表3 属性別にみた社会観

		問24A：日本は、安全で安心して暮らせる国だ	問24B：日本は、こつこつ努力すれば成功するチャンスのある国だ	問24C：日本は弱い立場とされる人々が手厚く保護されている国だ
性別 男／女 (χ^2 検定)	オホーツク管内		女性<男性**	女性<男性***
	札幌市内	女性<男性***	女性<男性*	女性<男性***
	京都府北部			女性<男性*
	京都市内		有意差あり	有意差あり
年齢（実数） (相関係数)	オホーツク管内			
	札幌市内	高<低**		
	京都府北部			
	京都市内		高<低*	
学歴（在学含む） 大卒／非大卒 (χ^2 検定)	オホーツク管内	非大卒<大卒***		非大卒<大卒**
	札幌市内	非大卒<大卒***	有意差あり	
	京都府北部	有意差あり		
	京都市内	非大卒<大卒**	非大卒<大卒**	
世帯年収（階級値） (相関係数)	オホーツク管内			低<高*
	札幌市内	低<高**		低<高*
	京都府北部		低<高*	
	京都市内	低<高*		低<高**

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定、および相関分析の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。「有意差あり」は10%水準で有意であったものである。

(2) 規範意識

表4は問24D・問24E・問24F・問24Gと性別、年齢、学歴、世帯年収の関連を見たものである。まず性別から見ると、男性のほうが女性よりも「貧富の格差が大きくても、自由に競争し、成果に応じて配分される社会がよい」（問24E 競争原理）と考える傾向にあることが分かる。また札幌市内で女性よりも

男性のほうが「国を愛する心を持つことは大切だ」（問 24G）と考える傾向がある。

年齢については相関関係が弱い、年齢が低いほうが「権威主義」（問 24D）により親和的である（札幌市内・京都北部）。なお、「伝統主義」（問 24F）や「愛国心」に関して相関が見られないのは、4 地域ともに 20 代前半が相対的に「伝統主義」や「愛国心」に親和的であるが、年齢が上がるにつれて若干その傾向が弱まり、30 代後半で再び 20 代前半と同程度の数値に戻る結果によるものと考えられる。

学歴について見ると、京都市内において学歴の相対的な高さが競争原理・伝統主義・愛国心と関連性を持つ。世帯年収と規範意識の相関関係は、総じて世帯年収が高いほうが競争原理、およびその他保守的な価値観とやや親和的であるという傾向を示している。

従来であれば年齢の低さや学歴や世帯年収に表される社会階層の高さは権威主義や伝統主義とは親和性の相対的に低い属性であったはずだが、近年こうした傾向が逆転しており（友枝 2015）、その特徴が本調査データからも確認されたと言える。

表 4 属性別にみた規範意識

		問24D：権威のある人 びとはつねに敬意を はらわなければならない	問24E：貧富の格差が大 きくても、自由に競争 し、成果に応じて分配 される社会がよい	問24F：伝統やしきたり にはなるべく従うほう がよい	問24G：国を愛する心 を持つことは大切だ
性別 男/女 (χ^2 検定)	オホーツク管内		女性<男性***	有意差あり	
	札幌市内		女性<男性***		女性<男性**
	京都府北部		有意差あり		
	京都市内	有意差あり	女性<男性**		
年齢（実数） (相関係数)	オホーツク管内				
	札幌市内	高<低**	高<低*		
	京都府北部	高<低**			
	京都市内				
学歴（在学含む） 大卒/非大卒 (χ^2 検定)	オホーツク管内				
	札幌市内				有意差あり
	京都府北部		有意差あり		
	京都市内		非大卒<大卒*	非大卒<大卒*	有意差あり
世帯年収（階級値） (相関係数)	オホーツク管内		低<高*	低<高*	低<高*
	札幌市内				
	京都府北部		低<高**		
	京都市内	低<高**	低<高*		

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定、および相関分析の結果として、それぞれ***が 0.1%水準、**が 1%水準、*が 5%水準で有意であることを示す。「有意差あり」は 10%水準で有意であったものである。

(3) 政治満足度と政治・社会関心

表 5 は問 25A・問 25B・問 25C と有意差や相関関係の見られた属性との関連を表したものである。まず性別については顕著な傾向がみられた。問 25A「総合的に見て、日本の政治に満足している」については、全体的に否定的な意見を持つ人が多いこともあり、有意差はさほど顕著ではない。しかし「日本/住んでいる地域の政治や社会問題に対する関心」を尋ねた問 25B・問 25C は性別によって顕著な差が見られた。

第一に、女性よりも男性のほうが政治や社会問題に対する関心が高いという結果になった。これは一般的な傾向であり、本科研における過去の調査でも同様の結果が見られた(岩田 2018)。

第二に、地方中枢拠点都市圏（京都市内・札幌市内）と条件不利地域圏（京都府北部・オホーツク管内）の間に差が見られる。条件不利地域圏では有意差がよりはっきりと見られる傾向にあり、特にオホーツク管内では男女差が大きくなっている。問 25B・問 25C の質問に対して、「あてはまる」と「ややあてはまる」を選択した割合を合算し、男女差を見てみると、特に問 25B の回答においてオホーツク管内では男女に 22.7%の差がある。一方で札幌市内ではこの差が 9.7%となっている。

第三に問 25C について、京都市内は他の地域とは異なり有意差が見られず男女の関心が拮抗している（男性：49.5%，女性：47.1%）。京都市内の「日本の政治と社会問題への関心」（問 25B 男性：65.9%，女性：51.3%）は他地域と同様に男女差が顕著だが、「住んでいる地域の政治や社会問題」となると、京都市内でのみ男女差が小さくなるのである。

次に年齢との相関関係を見ていくと、日本社会や住んでいる地域に対する関心の高さは、年齢の高さと相関関係がある。とりわけ条件不利地域圏における問 25C の回答は、年齢の高さとより顕著な相関関係がある。条件不利地域のほうが、住んでいる地域の公共課題に関心にいざなわれていく傾向、すなわち政治的社会化が加齢とともに促進されやすい可能性が示唆される。

学歴もわかりやすい関連性が見られる。まず北海道では非大卒者よりも大卒者のほうが「日本の政治に満足している」傾向にあった。加えて問 25B・問 25C との関連をみると、非大卒者よりも大卒者のほうが政治や社会問題に関心を持つ傾向が顕著であった。

世帯年収の結果は興味深い。というのも「日本の政治に満足」（問 25A）する傾向は地方中枢拠点都市圏の相対的に世帯年収が高い人に見られる。一方で条件不利地域圏では世帯年収の高さは「住んでいる地域の政治や社会問題への関心」（問 25C）と相関するのである。相関係数に着目する限りではあるが、都市部の経済階層の高い若者と対照的な、公共課題や争点に関心を寄せる、地方の経済階層の高い若者の存在が示唆されるデータである。

最後に居住年数と居住歴である。札幌市内における居住年数ごとの有意差以外は説明力に乏しい変数に見えるが、単純にそうとも言い切れない。有意差こそ出ていないが、長期<短期<中期の順に政治関心が高くなる傾向は見られる。

居住歴においても同様に、有意差こそ確認できないものの、「ずっと地元」<「I ターン」<「U ターン」の順に政治関心が高くなる傾向が見られた。

表5 属性別にみた政治満足度・政治／社会問題関心

		問25A：総合的に見て、日本の政治に満足している	問25B：日本の政治や社会問題に関心があり、知識を得ようと心がけている	問25C：住んでいる地域の政治や社会問題に関心があり、知識を得ようと心がけている
性別 男／女 (χ^2 検定)	オホーツク管内		女性<男性***	女性<男性**
	札幌市内	女性<男性**	女性<男性*	女性<男性**
	京都府北部		女性<男性***	女性<男性*
	京都市内		女性<男性*	
年齢(実数) (相関係数)	オホーツク管内			低<高**
	札幌市内		低<高*	低<高*
	京都府北部		低<高*	低<高**
	京都市内	高<低*		
学歴(在学含む) 大卒／非大卒 (χ^2 検定)	オホーツク管内	非大卒<大卒**	非大卒<大卒***	非大卒<大卒*
	札幌市内	非大卒<大卒***	非大卒<大卒***	非大卒<大卒***
	京都府北部		非大卒<大卒***	非大卒<大卒**
	京都市内		非大卒<大卒**	非大卒<大卒**
世帯年収(階級値) (相関係数)	オホーツク管内		低<高**	低<高**
	札幌市内	低<高*		
	京都府北部			低<高**
	京都市内	低<高**		
居住年数(階級値) 短期／中期／長期 (χ^2 検定)	オホーツク管内			
	札幌市内	長期<短期<中期*	長期<短期<中期**	長期<短期<中期*
	京都府北部			
	京都市内	中期<長期<短期*		
居住歴 地元／U／I (χ^2 検定)	オホーツク管内	有意差あり		
	札幌市内			
	京都府北部			
	京都市内			

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定、および相関分析の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。「有意差あり」は10%水準で有意であったものである。

なお、居住年数はそれぞれ短期：5年以内、中期：6年以上20年未満、長期：21年以上で階級分けを行った。居住歴における「地元」は「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない」、「U(ターン)」は「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた」、「I(ターン)」は「現在住んでいる地域以外の出身である」に対応している。居住歴に関しては客観的に移動経歴を特定したり、UIターンの定義を行ったりしておらず、回答者の主観的な「出身地域」の捉え方に依存する指標である。

(4) 投票への積極性と有効性感覚

表6は問25D・問25E・問25F・問25Gと有意差や相関関係の見られた属性との関連を示したものである。まず性別について5%水準で有意差が見られたのは京都府北部における「国の選挙に積極的」(問25D)と「自治体の選挙に積極的」(問25E)である。ともに女性よりも男性のほうが投票に積極的に参加していると考えられる傾向が見られた。

次に有意差が確認できたものとして、札幌市内における有効性感覚がある。有効性感覚は「日本の政治や社会問題に対して」(問25F)と、「自分の住んでいる地域の政治や社会問題に対して」(問25G)があり、札幌市内ではともに男性よりも女性で有効性感覚が弱い結果となった。なお、問25F・問25Gは他の質問項目とは異なり、質問が否定形であるため逆順になることに注意してほしい。

年齢に関しては京都府北部のみ、「国／自治体の選挙に積極的」と相関関係が見られた。すなわち年齢が高いほど、選挙には積極的に参加していると考えられる傾向が確認された。この相関が京都府北部にのみ見られるということは、京都府北部では加齢に伴って選挙の参加へと住民が水路付けられていくのかもしれない。

学歴との関連における全体的な傾向として、非大卒よりも大卒のほうが、自身が「選挙に積極的に参加している」と考える傾向が見られた。また有効性感覚についても全体的な傾向として、大卒よりも非大卒のほうが「影響を与えることができない」と考える傾向にあることが分かった。ただし京都市内のみ学歴と有効性感覚の相関が見られず、とりわけ「住んでいる地域の政治や社会問題に対して」(問25G)は、学歴差がほとんどなかった。京都市内における有効性感覚の特徴を説明する個人属性はさしあたり見つからないが、これは4地域の中で最も大都市中心部に近い京都市内の特徴と言えるのではないかと考えられる。

世帯年収との相関関係は、先に見た政治・社会関心とよく似た特徴を示している。すなわち条件不利地域圏において、世帯年収が高いことは、選挙に対して積極的であることと相関関係がある、ということである。この結果をやや敷衍して解釈するならば、条件不利地域圏において公的な事柄に関心を持ち、選挙に積極的なのは、相対的に経済階層の高い人々であり、そうした人々が発信力を有する状況が想定される。他方で、地方中枢拠点都市圏では世帯年収は有意ではなく、学歴の高さが主に政治関心や選挙への積極性と高い関連性を持つ。この解釈を行うことは本報告書では困難であるため、今後の検証課題とする。

最後に居住年数と居住歴との関連性を見ていく。まず選挙への積極性に関しては札幌市内のみ、短期<長期<中期の順に積極的だと考えていることが分かった。この傾向は国の選挙に対してだけでなく、自治体の選挙においても同様であった。一方で有効性感覚については短期<中期<長期の順番に有効性感覚が弱くなっていく傾向が北海道では見られる。すなわちずっと地元に住んでいる人が、相対的に有効性感覚が弱い傾向にある。

居住歴との関連について、まず京都市内・京都府北部では地元<I<Uの順番で選挙に積極的であると考える傾向が見られる。一方、オホーツク管内では地元<U<Iの順番に有効性感覚が強くなる傾向が確認された。京都における地付きの若者の、選挙に対する消極性と、オホーツク管内に住む地付きの若者の有効性感覚が弱さに、一貫した説明が与えられるかどうかは、若者のトランスローカルな移動に関心を持つ本研究において重要な論点であり、「ずっと地元」の若者が政治的に不活発である要因は一考に値するだろう。最後に、オホーツク管内ではIターンが、相対的に有効性感覚が強い。以上の点は居住歴と属性の関係を検討することで解釈可能かもしれない。したがって次節ではこれらを含め、地域ごとの回答者属性の特徴を分析する。

表 6 属性別にみた投票への積極性・有効性感覚

		問25D：国の選挙には積極的に参加している	問25E：自治体の選挙には積極的に参加している	問25F：自分は日本の政治や社会問題に対して、影響を与えることができない	問25G：自分は住んでいる地域の政治や社会問題に対して、影響を与えることができない
性別 男/女 (χ^2 検定)	オホーツク管内				
	札幌市内	有意差あり		男性<女性***	男性<女性*
	京都府北部	女性<男性*	女性<男性**		
	京都市内				
年齢(実数) (相関係数)	オホーツク管内				
	札幌市内				
	京都府北部	低<高**	低<高**		
	京都市内				
学歴(在学含む) 大卒/非大卒 (χ^2 検定)	オホーツク管内	非大卒<大卒*		大卒<非大卒***	大卒<非大卒***
	札幌市内	非大卒<大卒***	非大卒<大卒***	大卒<非大卒**	大卒<非大卒***
	京都府北部	非大卒<大卒***	非大卒<大卒***	大卒<非大卒***	大卒<非大卒***
	京都市内	非大卒<大卒***	非大卒<大卒***		
世帯年収(階級値) (相関係数)	オホーツク管内	低<高**	低<高**		
	札幌市内			有意差あり	
	京都府北部	低<高*	低<高**		
	京都市内				
居住年数(階級値) 短期/中期/長期 (χ^2 検定)	オホーツク管内			短期<中期<長期*	短期<中期<長期*
	札幌市内	短期<長期<中期*	有意差あり	有意差あり	有意差あり
	京都府北部				
	京都市内				
居住歴 地元/U/I (χ^2 検定)	オホーツク管内			有意差あり	I<U<地元*
	札幌市内				
	京都府北部	地元<I<U*	地元<I<U*	地元<U<I*	
	京都市内	地元<I<U*			

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定、および相関分析の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。「有意差あり」は10%水準で有意であったものである。

なお、居住年数はそれぞれ短期：5年以内、中期：6年以上20年未満、長期：21年以上で階級分けを行った。居住歴における「地元」は「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない」、「U(ターン)」は「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた」、「I(ターン)」は「現在住んでいる地域以外の出身である」に対応している。居住歴に関しては客観的に移動経歴を特定したり、UIターンの定義を行ったりしておらず、回答者の主観的な「出身地域」の捉え方に依存する指標である。

4. 地域ごとの属性的な偏り

ここまでの分析は、政治・社会意識の地域間の差異や、地域内における属性に起因する差異を明らかにするものであった。本節では最後に、説明変数として用いてきた、4地域と各種属性のクロス分析を行い、地域ごとの特徴をおさえる。

4地域と上述の分析で使用した、性別(男/女)、年齢(5歳ごとの階級分け)、学歴(大卒/非大卒)、世帯年収(所得なし~1000万円以上)、居住年数(5年以内/6年以上20年以内/21年以上)、居住歴(ずっと地元/Uターン/Iターン)のクロス集計を行ったところ、性別・年齢を除く項目で、1%水準以下で有意であった(性別・年齢は有意ではなかった)。なお個人年収と4地域のクロス集計は10%水準で有意であり、世帯年収(1%水準で有意)のほうが地域ごとの差異を見やすい結果となった。

(1) 学歴構成の差異

まず地域ごとの学歴構成を表7に示す。学歴構成が4地域で大きく異なることが確認できる。すなわち回答者のうち、京都市内では64.2%が大卒以上（在学含む）であり、次いで札幌市内が44.5%である。最も大卒以上の比率が少ないのはオホーツク管内で28.1%となっており、京都市内とは2倍以上もの差がある。京都市内は際立って大卒率が高く、したがって政治・社会意識における京都市内の特徴は、この大卒率の多さに起因するものと考えられる。この点については最後にまとめて言及する。

表7 4地域ごとの学歴構成***（大卒／非大卒）

	大卒以上（在学含む）	非大卒（在学含む）	計
オホーツク管内	28.1%	71.9%	100.0%
札幌市内	44.5%	55.5%	100.0%
京都府北部	37.2%	62.8%	100.0%
京都市内	64.2%	35.8%	100.0%

(2) 世帯年収の差異

世帯年収の地域ごとの構成を図1に示した。質問紙では所得なしから1000万以上まで、（100万未満を含む）100万円ごと、計12件で階級分けをしている。

まず特徴的なのは京都市内である。京都市内は世帯年収800万円以上が29.7%と多く、1000万円以上も14.8%と際立って多い。平均的に世帯年収が高めという特徴を持っている。それ以外の地域は平均的にあまり差がなく、標準偏差に多少の違いはあるものの類似している。4地域ごとに記述統計を確認すると京都市内だけが高く、残りの3地域はほぼ同じであった。なお、平均世帯年収は高い順に札幌市内、京都府北部、オホーツク管内である。

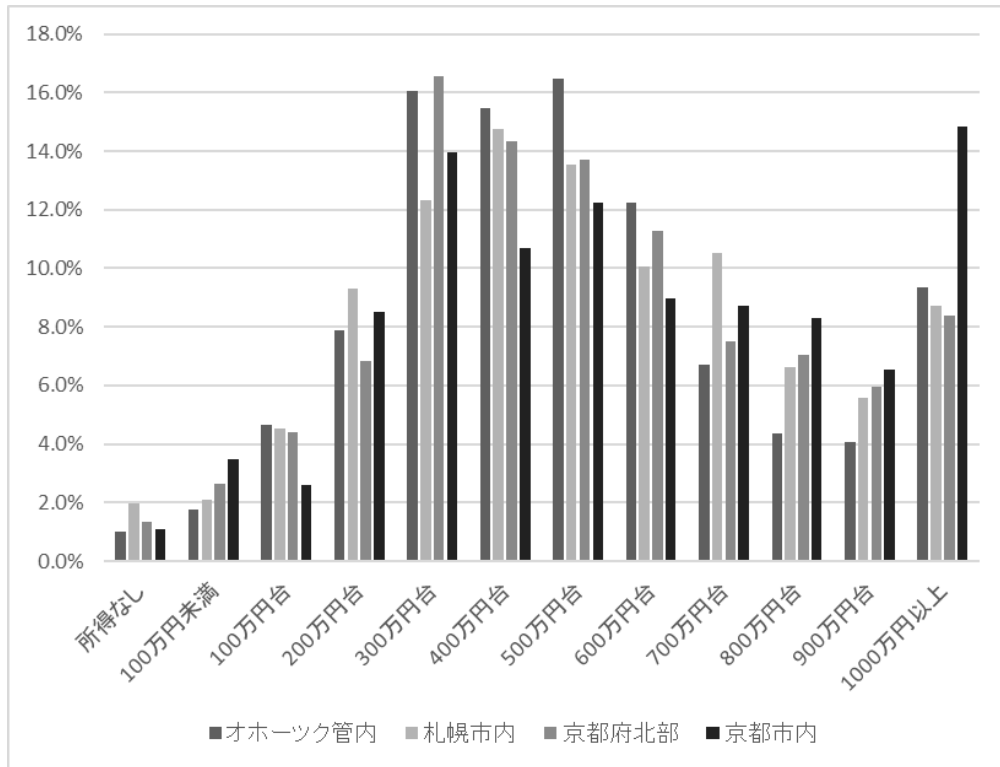


図1 4地域の世帯年収

(3) 居住年数と居住歴の差異

地域ごとの居住年数の割合を示したものが図2である。この図はそれぞれの地域における若年層の流動性を表している。記述統計を確認すると平均居住年数が最も短いのは札幌市内で16.5年であった（小数点第2位を四捨五入）。次いで京都市内が17.2年、オホーツク管内が17.7年、僅差で京都府北部が17.8年と最長であった。

以上のことを別の角度から表しているのが図3である。これは4地域の主観的な（表5・6下の注を参照）居住歴別構成割合をグラフ化したものだ。京都市内と札幌市内において回答者の半分は「現在住んでいる地域以外の出身である」（Iターン）と回答している。またIターンに比べればずっと少ないが、次いで「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない」（ずっと地元）が多い。これは轡田（2017: 138）が指摘するように、各種機能が集積する京都市内や札幌市内において、ライフコース上、必ずしも移動が必須ではないからだと思定される。対照的に京都府北部やオホーツク管内では相対的に「現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた」（Uターン）が多く、ずっと地元で過ごしている人は少数派である。これは進学や就職といった移行期において、機会を得るための移動（流出）が発生しやすいからだと考えられる。

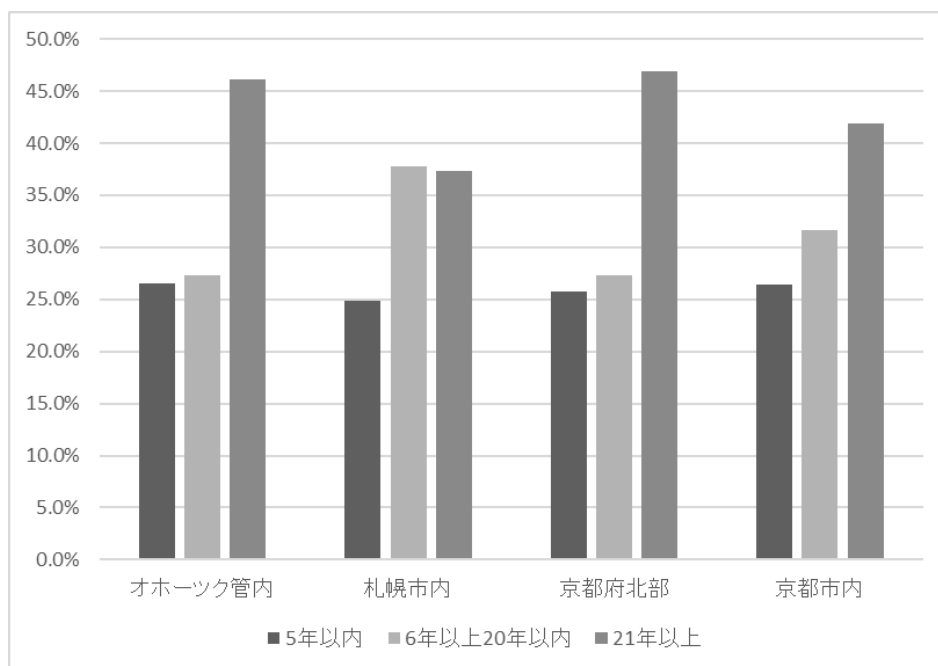


図2 4地域の居住年数

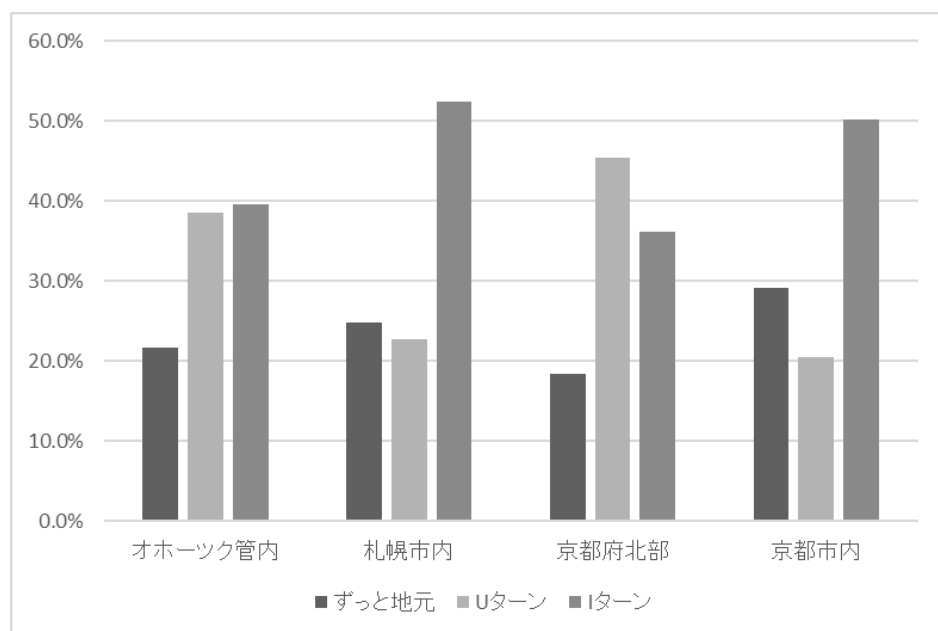


図3 4地域の居住歴

地方に暮らす若者たちの多くがトランスローカルに移動しているという実態、それから4地域の居住歴別構成割合を明らかにしてきたが、最後に居住歴別の学歴構成を、地域別に分けて見ておきたい。

(4) 地域別に見た居住歴ごとの学歴構成

表8は地域別に居住歴と学歴の関連を示したものである。この表からはまず、オホーツク管内と京都府北部の「ずっと地元」に住んでいる人の、顕著な非大卒割合の高さが読み取れる。またオホーツク管内

では大卒率は U ターン < I ターンとなっているが、京都府北部では U ターンと I ターンの大卒率はほぼ同じである。オホーツク管内においては U ターン者に占める大卒者の割合が低いことがうかがえる。

第二に、札幌市内と京都市内は移動類型ごとの学歴差があまり見られない。これは先にも述べたが、轡田(2017: 138)が指摘する次のロジックが働く結果と考えられる。すなわち進学や就職機会が限定的な地域から移動しないことはそのまま高卒程度の学歴へと結びつくが、進学先や就職機会の多い地域においては移動しなくとも大学等、各種学校に進学できる。移動しないままの進路選択が可能であるため、表 8 のような結果が見られるのであろう。

以上を踏まえて表 7 と図 3 を再度見てみると、地域ごとに学歴構成が異なる理由がより鮮明に理解できる。すなわち地域社会の学歴構成とは、当該地域における居住歴（移動類型）別割合とそれら内部の学歴構成の特徴を反映させたものと考えられる。

表 8 4 地域別の居住歴と学歴の関連

	居住歴	大卒以上 (在学含む)	非大卒 (在学含む)	計
オホーツク管内***	ずっと地元	7.9%	92.1%	100.0%
	Uターン	23.0%	77.0%	100.0%
	Iターン	45.8%	54.2%	100.0%
札幌市内	ずっと地元	42.4%	57.6%	100.0%
	Uターン	45.6%	54.4%	100.0%
	Iターン	45.5%	54.5%	100.0%
京都府北部***	ずっと地元	6.5%	93.5%	100.0%
	Uターン	45.2%	54.8%	100.0%
	Iターン	45.9%	54.1%	100.0%
京都市内	ずっと地元	57.7%	42.3%	100.0%
	Uターン	69.0%	31.0%	100.0%
	Iターン	66.8%	33.2%	100.0%

注：質問文の末尾にある「*」は χ^2 検定の結果として、それぞれ***が0.1%水準、**が1%水準、*が5%水準で有意であることを示す。

5. 考察

本章は「社会観や規範意識の差異は地域間で見られないが、各種政治意識に関しては地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏の間で差異が見られる」と考え、検討を行ってきた。

まず第2節では4地域と問24「社会観・規範意識」、および問25「国家と地域に対する政治意識」に対する回答をクロス集計し、地域間で回答傾向に差異が見られるかを確認した。その結果、14項目中6項目で有意差が見られた。ただしこの結果が個人属性と関連しない地域的な差異なのか、あるいは個人属性によって十分に説明できそうなのか、検討の余地があった。

したがって第3節では個人属性を変数としたクロス分析と相関分析を行い、関連性を検討した。この分析によって、地域間、および地域内の差異が生じる要因がある程度説明することができた。

最後に4地域における回答者属性の特徴を把握し、地域ごとに差異が発生する要因を検討するために、学歴・世帯年収・居住年数・居住歴を用いて分析を行った。以上の分析を踏まえ、興味深い結果を示した問25と諸変数の関連を中心に、若干の考察を述べる。

第一に、4地域の中で際立って大卒者が多く、世帯年収も高い京都市内の回答傾向について考えてみたい。京都市内は上述のとおり、大卒者の多さ、世帯年収の高さという点に大きな特徴があり、したがってこの属性と関連する政治・社会意識においても特徴的な傾向を示していた。例えば地域ごとにクロス分析を行った問24A「日本は、安全で安心して暮らせる国だ」は5%水準で有意であったが、これは京都市内において肯定的な回答が相対的に多い結果を反映したものであると思われる。問24Aに対する肯定的な回答は、大卒者の多さや世帯年収の高さと関連するものであったため、京都市内の回答が有意差を作り出したのである。

他方で、京都市のもう一つの特徴が政治関心の高さである。これは大卒者であることと、政治関心が関連性を持つがゆえの特徴と捉えられる。実際に「日本／住んでいる地域の政治や社会問題への関心」はともに京都市内が最も強く、問25Bの有意差はこれによって説明可能であろう。しかしそうした大卒者の多さに起因する政治関心の高さは、表2で取り上げているように、選挙に対する積極性や、有効性感覚の高さと直接的に結びついていない。「選挙」への積極性と「有効性感覚」の強さにおいては、京都市内の値は他の3地域とさほど変わらないのである。しかしこれは京都市の大卒者の際立った多さを考えると不自然である。「選挙」への積極性も、「有効性感覚」の強さも、大卒者であることと有意に関連しているはずだからだ。

自治体選挙においては大卒者の相対的に少ない京都府北部やオホーツク管内の方がむしろやや積極的な傾向さえ見られた。これが第二の論点である。条件不利地域圏の自治体において、世帯年収の高さと「日本／住んでいる地域の政治や社会問題への関心」(問25B・問25C)「国／自治体の選挙への積極性」(問25D・問25E)の間には相関関係が見られたが、なぜ京都市内や札幌市内では見られないのだろうか。逆に京都市内と札幌市内の場合、世帯年収の高さは「総合的に見て、日本の政治に満足」(問25A)と相関関係を持っていた。こうした結果の解釈には慎重であるべきだが、本章の冒頭に立てた「政治意識に関する地方中枢拠点都市圏と条件不利地域圏の間の差異」を表わすデータではないかと考えられる。また表6に記載したように、京都府北部では年齢の高さと「投票には積極的に参加している」という考えは相関関係を持っている。こうした結果一年齢の高さ、大卒以上の学歴、世帯収入の多さ、といった社会階層の高低に関連する変数が、政治関心や投票参加の変数と地域ごとに異なる関連の仕方をすることは、

どのように解釈できるのだろうか。条件不利地域圏では社会階層の高さは政治関心や政治参加への積極性と関連するが、地方中枢拠点都市圏では大卒以上の学歴が日本の政治や社会問題への関心と関連しても、住んでいる地域の公共的な事柄への関心や投票参加とは関連しない理由を探索しなければならない。

ごく素朴に仮説を立てるならば、条件不利地域圏では社会階層の高さは職場や趣味縁、地縁組織への積極的な参加（問 18）と関連する一方で、地方中枢拠点都市圏ではそうした関連が見られないのではないか。試みに見てみると世帯収入と各種団体活動への積極性は、条件不利地域圏において関連性を持つが、中枢拠点都市圏では関連性が弱い、見られない。したがって地域の中間集団を媒介しながら政治関心を高め、投票行動へと結びついていく地方の「地方」と、そうした関連の弱い地方「都市」との間には、政治へと若年層を結び付けていくメゾ・レベルの差異が存在しているのだと仮定できる。こうした点はより複雑な分析を行うことによって部分的には実証可能であるし、ミクロな政治的社会化のプロセスについては質的な調査によって明らかにしていくことも必要だろう。本報告書を踏まえ、これらは今後の課題としたい。

【参考文献】

居安正, 1983, 「地域組織と選挙」 間場寿一編『地域政治の社会学』 55-88.

岩田考, 2018, 「『自身の生活』『日本社会・政治』『学歴・年収』から見たむつ市・おいらせ町の若者」 羽瀨一代『「青森 20-30 代住民意識調査」報告書』 公益財団法人マツダ財団寄付研究, 69-84.

蒲島郁夫, 1988, 『政治参加』 東京大学出版会.

蒲島郁夫・境家史郎, 2020, 『政治参加論』 東京大学出版会.

河野啓・荒牧央, 2017, 「参院選における有権者の意識——『参院選後の政治意識・2016』調査から(1)」 NHK 放送文化研究所 (2021 年 3 月 6 日取得, https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20170201_8.pdf).

轡田竜蔵, 2017, 『地方暮らしの幸福と若者』 勁草書房.

三船毅, 2008, 『現代日本における政治参加意識の構造と変動』 慶応義塾大学出版会.

友枝敏雄編, 2015, 『リスク社会を生きる若者たち——高校生の意識調査から』 大阪大学出版会.

第11章 地域評価・生活満足度・感染症流行の影響

羽瀧一代（弘前大学 教授）

0. はじめに

本章では、地域評価、生活満足度、そして感染症の流行がどのような影響を与えているのか、確認していきたい。生活満足度については、本研究のプレ調査でおこなった青森調査（2018）や本研究会メンバーである轡田がおこなった広島調査（2014）の知見との比較を意識して分析していこう。これらの調査から、地方の都市部と周辺部とを比較した際、居住地域に対する評価に格差があることが指摘されてきた。それと関連して、収入などの経済、大学などの高等教育卒業者の割合などの学歴等に地域間格差がみられる。ところが、このような格差があるいっぽうで、居住者の生活満足については地域間格差がないということがわかっている。本章ではこの点を確認してみたい。

先行する広島調査からは6年、青森調査からは2年が経過している。調査対象地が異なることはもちろんであるが、サンプリング中に感染症が流行する事態となったため社会状況はかなり異なる。感染症流行は地域評価や生活満足度に影響を与えている可能性があるかもしれない。本調査対象地域において、感染症流行前のデータがないため、広島や青森と単純に比較することは難しいかもしれないことを念頭におきながら、結果を読みたいと思う。

これらのことから調査項目に感染症の影響を尋ねる項目を追加している。実査の時期は6月から9月であったため、感染第1波が収束した時期と重なっている。その後、第2波が秋から冬の時期に起こったが、その直前の状況を把握したデータとしてみてほしい。

感染症の拡大によって、地方回帰が起こるのではないかと期待する向きもあるが、これについてはまだまだ未知数である。今回は、地方の20-30代の若者に対して感染症流行の初期にどのような影響があったのかを知るにとどまるが、同じ地方であっても都市部と周辺部において影響は異なるかどうかなどが分析できるだろう。

1 地域評価

第4章でとりあげたとおり、大都市（政令指定都市）圏と条件不利地域圏では、現在の居住地域に対する評価に差がある。とくに北海道では、札幌市の若者の地域満足度が高く、住み続けたいという意欲が高かった。いっぽうで条件不利地域圏の若者は、休日の過ごし方においても地域外への志向が強く、またより大きな街に住みたいという意向をもつ者が半数程度いることがわかった

それでは、そもそも彼らは現住地域をどのような規模のまち/いなかであると評価しているのか確認しておきたい。自身が居住している地域はどのような規模のまち/いなかであると評価しているのだろうか。

表1 居住地域の評価

%	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
「大都市」の中心部	0.9	17.0	0.9	14.2
「大都市」の周辺部	1.5	54.8	3.8	49.6
「地方」の中心部	34.0	21.4	26.2	24.0
「地方」の周辺部	63.6	6.8	69.0	12.2
N	789	747	526	508

オホーツク、京都北部では「地方」の周辺部と評価している若者がもっとも多く、札幌市と京都市では「大都市」の周辺部と評価している若者が多かった（表1）。この結果から、オホーツクと京都北部をまとめて「条件不利地域圏」、札幌市と京都市を「政令指定都市」として、地域評価を確認してみよう。この質問項目を設定した際、政令指定都市の居住者は居住地域を「大都市」と考え、条件不利地域圏の居住者は「地方」と考えているとの仮説をもっていた。

表2 居住地と居住地域の評価

%	条件不利地域圏	政令指定都市
「大都市」の中心部	0.9	15.9
「大都市」の周辺部	2.4	52.7
「地方」の中心部	30.9	22.5
「地方」の周辺部	65.8	9.0
N	1315	1255

表2では、条件不利地域圏居住者と政令指定都市居住者が居住地域をどのように評価しているのか示している。条件不利地域圏居住者が「地方」の中心部、もしくは「地方」の周辺部と「地方」と評価しているのに対して、政令指定都市居住者は「大都市」の周辺部が最もボリュームがあるものの、「大都市」の中心部や「地方」の周辺部という評価にもある程度の回答がみられ、分散が大きい。

このことから、条件不利地域圏は「地方」であると評価されているといえるが、政令指定都市であっても、「地方」と評価する割合が3割を超えており、政令指定都市の内部にもさまざまな地域があるということがわかる。このことは若者の地域志向と表現する際に、政令指定都市などの大都市も地方と想定した表現である可能性を示している。

また地域評価は主観的なものであるため、居住経験によって、感じ方が異なるのかもしれない。そこで、政令指定都市居住者の居住歴と地域評価の関係を確認してみよう。

表3 政令指定都市居住者の居住歴と居住地域の評価

%	現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない	現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた	現在住んでいる地域以外の出身である
「大都市」の中心部	11.3	12.8	18.3
「大都市」の周辺部	49.8	55.6	52.5
「地方」の中心部	27.0	22.6	19.8
「地方」の周辺部	11.9	8.9	7.4
N	311	257	606

その結果、政令指定都市の定住者は、自身の居住地を「地方」として評価する傾向があることがわかった。その一方で移住者は「大都市」として評価している。これは、移住者の居住地域が市内のなかでも中心部に偏っている²⁵可能性や、人口密度や公共サービス、消費文化などの観点からみて移住者の出身地域よりも現住地域が都会であるからという可能性が考えられる。

2 生活満足度

次に、生活満足度を確認していこう。「総合的に見て、今の生活に満足している」という質問項目を設定している。図1に示すとおり、京都と北海道の20-30代若者の生活満足度は高い。京都市では77.2%、京都北部では74.8%、札幌市では75.8%、オホーツクでは75.2%が生活に満足している（「そう思う」＋「ややそう思う」）。道府内における地域間での差はみられなかった。

同じ項目を先行する青森調査でも尋ねている。広島（三次市では70.2%、府中町では68.4%）や青森（むつ市では60.8%、おいらせ町では65.4%）の若者の6割から7割が「生活に満足している」と回答している（トランスローカリティ研究会、2018）。北海道と京都府の生活満足度は、先行する青森調査と比較しても肯定率が高い。また広島調査と比較しても、道府ともに生活に満足している若者が多いといえる。

これは、青森調査や広島調査で確認してきた結果と同様の傾向を示している。第3章と第9章で確認したとおり、道府内のまちといなかの間にある世帯年収や学歴などの格差が大きいにも関わらず、生活満足度には差がみられないのである。青森調査でも広島調査でも、まちのほうが世帯年収も高く、高い学歴をもつ若者が多く居住しているのであるが、生活満足度はいなかと差がみられないのである。

²⁵ 訪問回収をおこなった際、札幌市のなかでもマンションやアパートなどの貸家が多い地域と貸家の少ない地域があることがみてとれた。移住者の場合、持ち家やマンションなどを購入することもありうるだろうが、20代から30代の若者については借家に住む選択が大きいのではないかと考えている。

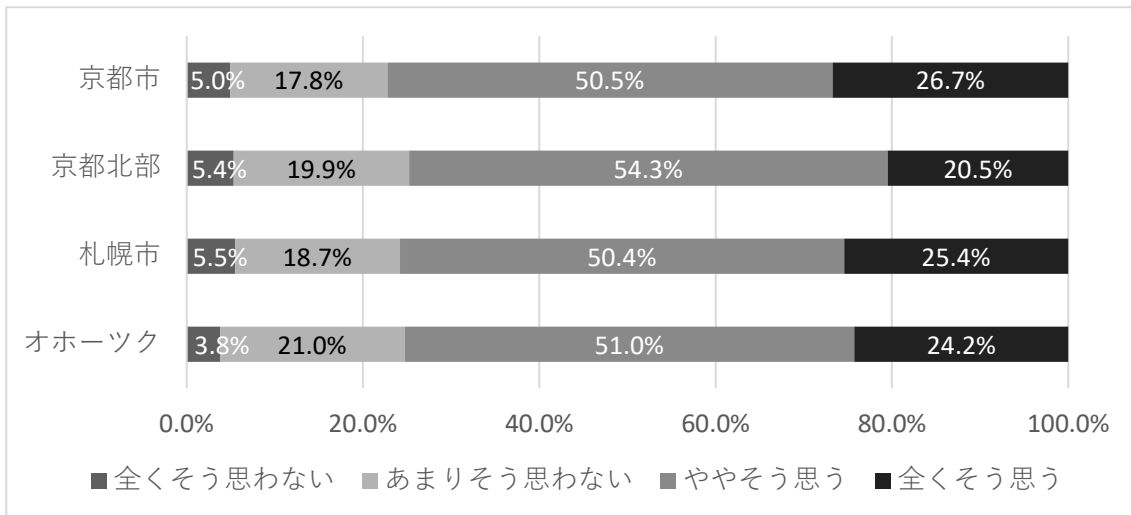


図1 「総合的に見て、今の生活に満足している」(地域別)

2つ目に「毎日の生活が『楽しい』と感じられる」かどうか、地域別に確認してみよう(図2)。京都市では、京都北部、オホーツクと比較すると生活が「楽しい」と感じている若者が多い(χ^2 検定 $p < .005$)。まちといなかという観点で比較するならば、京都市と京都北部のあいだに差がみられる。札幌市とオホーツクとのあいだには大きな差はみられなかった。

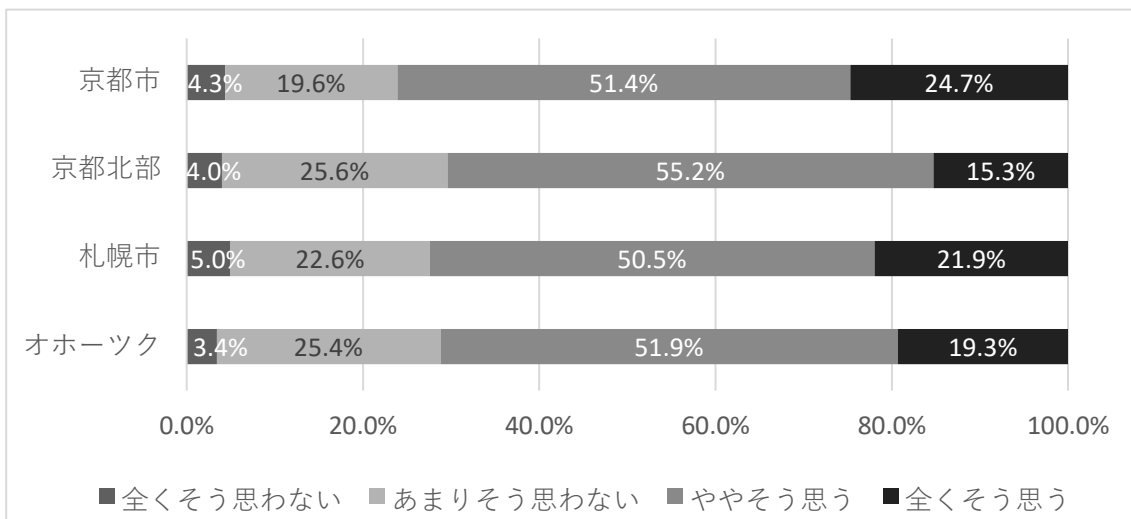


図2 「毎日の生活が『楽しい』と感じられる」(地域別)

3つ目に「金銭的に余裕のある生活を送っている」かどうかを確認する(図3)。これについては、若干ではあるが道府ともまちといなかのあいだに差があった(χ^2 検定 $p < .05$)。居住者の主観としても、都市居住者のほうが金銭的に余裕のある生活を送っていると感じているようである。第9章で紹介した世帯収入の差と関連していることを示しているのだろう。

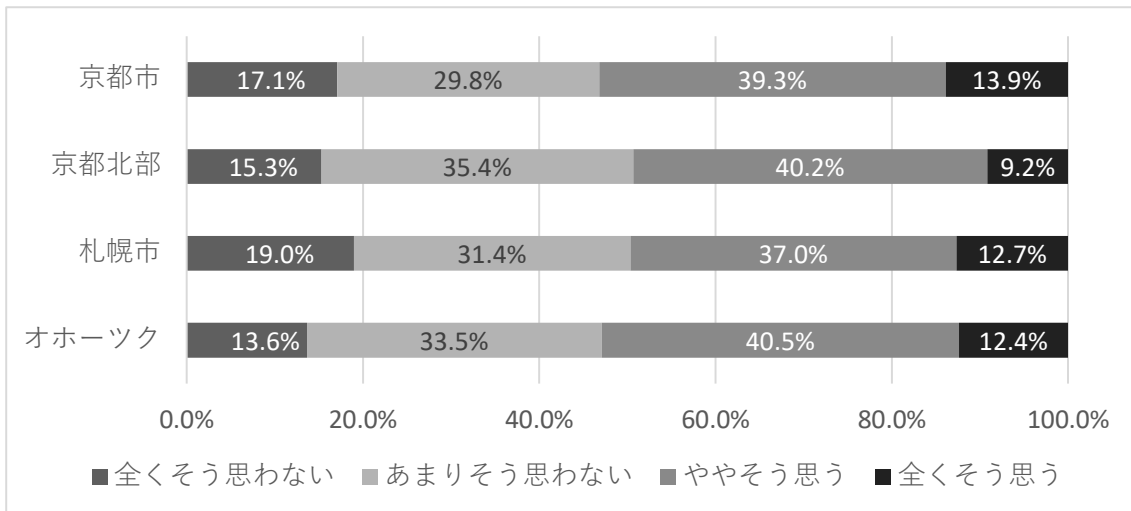


図3 「金銭的余裕のある生活を送っている」(地域別)

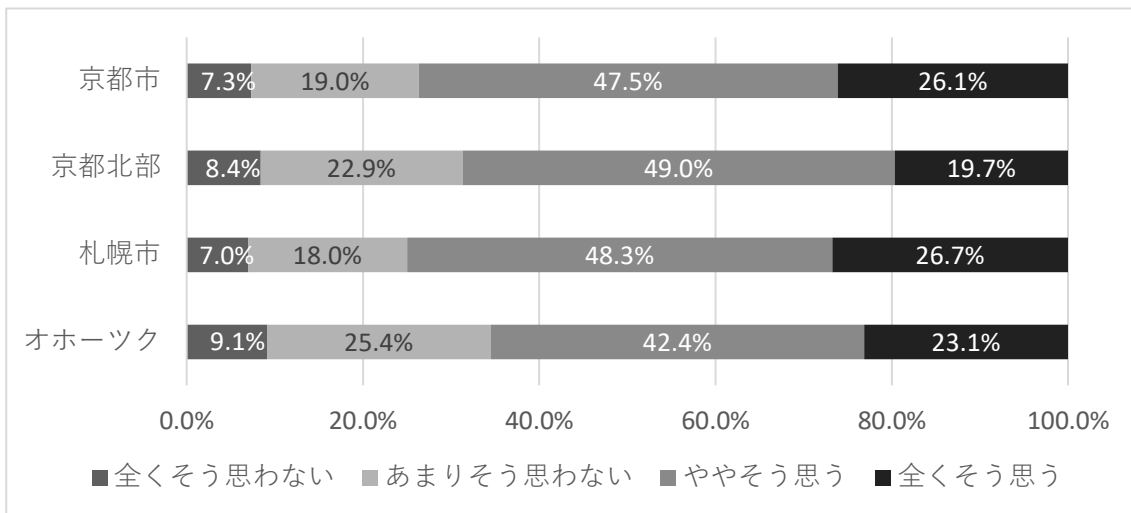


図4 「現在の住居に満足している」(地域別)

最後に住居満足度について確認してみよう(図4)。都市居住者のほうが現在の住居に満足している(χ^2 検定 $p<.005$)。住居満足度はおそらく地域に対する評価と連動している。20-30代の若者や子育て世代が暮らしやすい生活環境が整っているのは都市であり、住居といった際には暮らしに関わるサービスへのアクセスの良さが住居に対する満足度にも反映されているのではないかと推察できる。

3 感染症流行の影響

最後に感染症流行の影響について、示しておく。表4では、感染症流行の影響があった項目をマルチアンサーで回答してもらったものの集計を示している。すべての地域において、影響の大きい順に「学業あるいは仕事」「生活習慣」「友人関係」であった。

またすべての項目で政令指定都市居住者のほうが「影響あり」と回答している率が高い。とくに京都市においては収入に影響があったとする若者が30.1%であり、群を抜いている。また「学業あるいは仕事」、「生活習慣」に関しても京都市への影響が大きいことがわかる。

表4 感染症流行の影響

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
学業あるいは仕事	33.6(267)	42.9(321)	38.7(204)	46.6(238)
家族関係	14.0(111)	17.0(127)	17.1(90)	19.2(98)
友人関係	23.4(186)	29.6(222)	27.3(144)	31.5(161)
健康	7.9(63)	10.3(77)	6.5(34)	11.5(59)
人生設計	6.8(54)	10.8(81)	9.3(49)	10.6(54)
生活習慣	33.8(269)	39.9(299)	37.2(196)	42.5(217)
収入	17.2(137)	23.9(179)	21.3(112)	30.1(154)
その他	5.5(44)	6.1(46)	6.3(33)	4.1(21)
特に影響はなかった	24.8(197)	15.8(118)	20.1(106)	14.7(75)

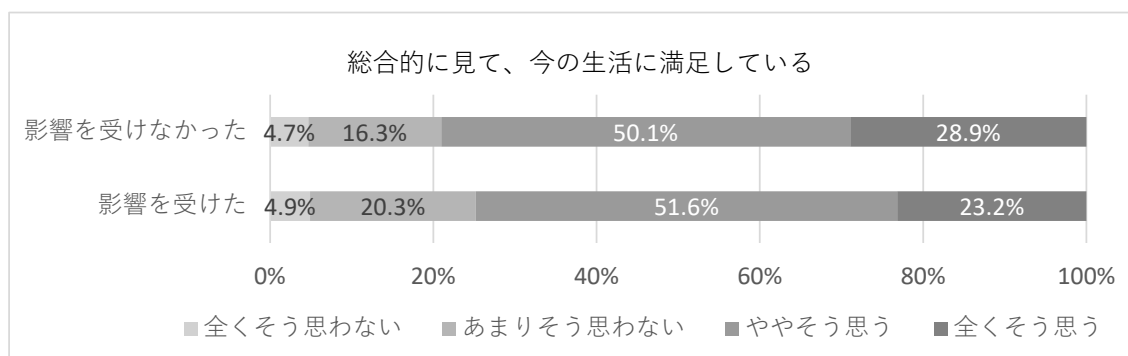


図5 感染症流行の影響の有無と生活満足度

図5は感染症流行の影響の有無と前項で確認してきた生活満足度との関連を示している。生活満足度に対して弱い連関ではあるが差がみられた (χ^2 検定 $p<.05$)。感染症流行の影響を受けた人は、そうでない人よりも生活満足度が低い結果となった。さらに感染症の影響のなかでもどの項目が生活満足度と関係しているのか、確認しておこう。

「学業あるいは仕事」、「家族関係」、「友人関係」、「生活習慣」に対する感染症流行の影響は、生活満足度と関連がみられなかった。一方で、「健康」、「人生設計」、「収入」への影響は、生活満足度と関連がみられた。図6は健康への影響の有無と生活満足度との関連を示したグラフである。健康に影響があった人のほうが、生活に満足していないという回答が1割程度多い (χ^2 検定 $p<.001$)。

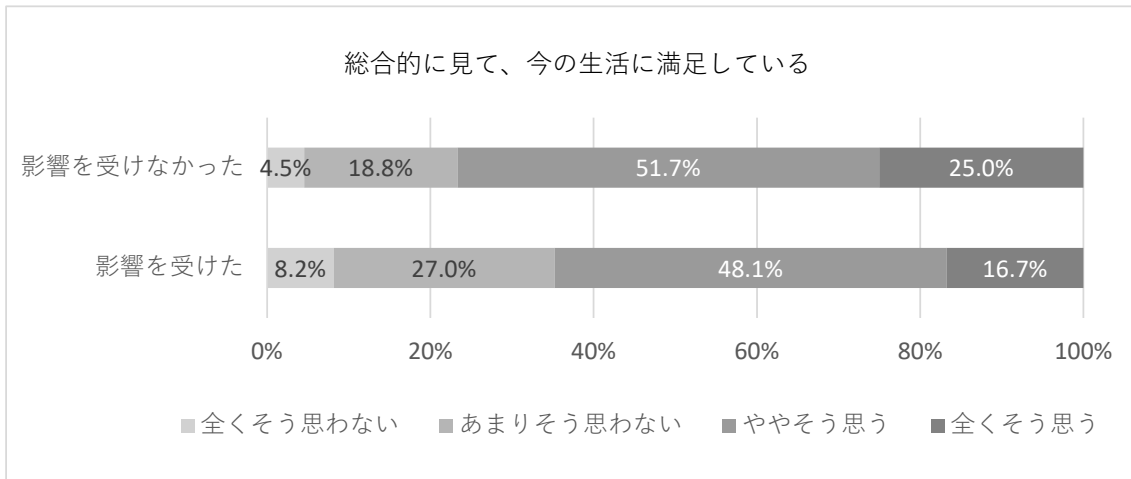


図6 健康への影響の有無と生活満足度

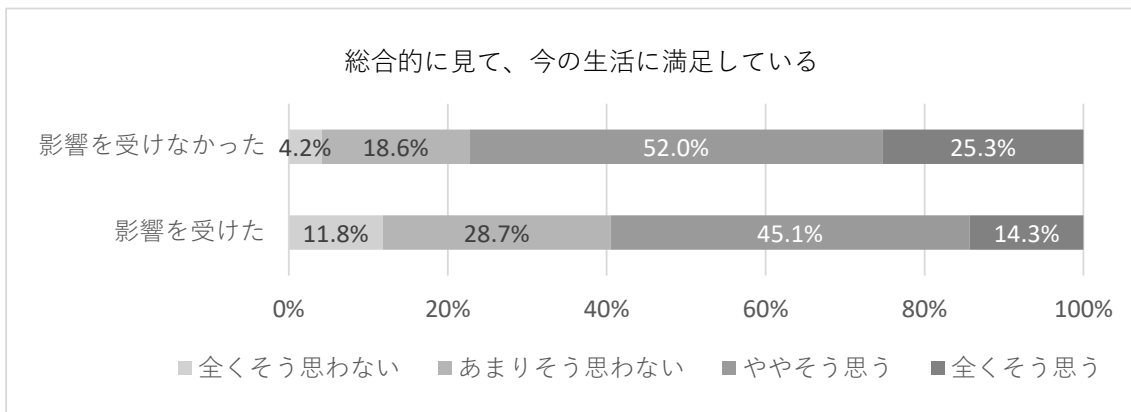


図7 人生設計への影響の有無と生活満足度

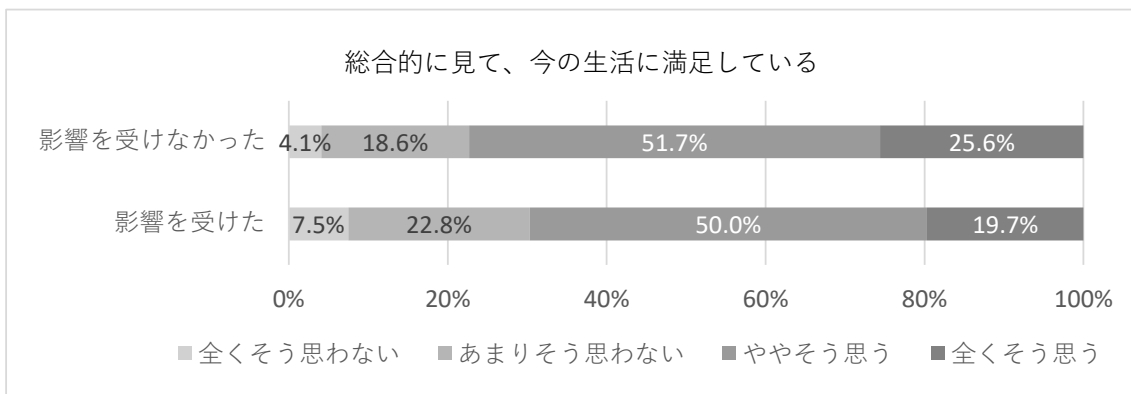


図8 収入への影響の有無と生活満足度

図7では人生設計への影響と生活満足度の関連を示している。こちらは人生設計に影響があった人は影響を受けなかった人と比較して2割弱程度、生活に満足していないと回答する率が高い (χ^2 検定 $p<.001$)。

図8では収入への影響と生活満足度との関連を示している。収入に影響があった人は影響を受けな

った人と比較して1割弱程度、生活に満足していないと回答する率が高い (χ^2 検定 $p<.001$)。

4 まとめ

地方在住の20-30代若者が現住地域をどの程度の規模のまち/いなかであると認識しているのか確認した。その結果、条件不利地域圏居住者は現住地域を「地方」(いなか)という認識しているが、政令指定都市居住者の場合、「大都市」(まち)の中心から「地方」(いなか)の周辺までさまざまな認識があり、分散が大きかった。

地方の政令指定都市と条件不利地域圏とを比較した際、世帯年収や学歴などに差がみられたにもかかわらず、居住者の生活満足度には地域間格差がないということが本調査でも明らかになった。これは、先行する青森調査、広島調査でも同様の結果であった。これらを総合するならば、地方在住の若者の生活満足度には都市規模による地域間格差がないと結論できそうである。

また感染症流行が総合的な生活満足度に影響を与えていた。とくに「健康」「人生設計」「収入」に影響を受けた層の満足度は低い。「健康」「人生設計」「収入」に影響があった層というのは、どのような若者であるのか別稿でさらに分析を深めていく予定である。

【参考文献】

- 轡田竜蔵 2016『平成 26 年度 公益財団法人マツダ財団委託研究「広島 20-30 代住民意識調査」報告書 (統計分析篇)【第2版】』公益財団法人マツダ財団
- トランスローカリティ研究会 2018『「青森 20 -30 代住民意識調査」報告書』公益財団法人マツダ財団

単純集計表

主要調査結果（地域別）

注）DK=Don't Know NA=No Answer

0-1 新型コロナウイルス流行の影響による移動制限によって、通常の生活と比べてどのようなことでマイナスの影響を受けましたか。（MA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
学業あるいは仕事	33.6(267)	42.9(321)	38.7(204)	46.6(238)
家族関係	14.0(111)	17.0(127)	17.1(90)	19.2(98)
友人関係	23.4(186)	29.6(222)	27.3(144)	31.5(161)
健康	7.9(63)	10.3(77)	6.5(34)	11.5(59)
人生設計	6.8(54)	10.8(81)	9.3(49)	10.6(54)
生活習慣	33.8(269)	39.9(299)	37.2(196)	42.5(217)
収入	17.2(137)	23.9(179)	21.3(112)	30.1(154)
その他	5.5(44)	6.1(46)	6.3(33)	4.1(21)
特に影響はなかった	24.8(197)	15.8(118)	20.1(106)	14.7(75)

0-2 新型コロナウイルス流行の影響で日常的な移動範囲は変わりましたか。（SA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
とても狭くなった	19.5(155)	26.7(200)	26.6(140)	26.2(134)
狭くなった	56.1(446)	55.9(419)	54.8(289)	55.8(285)
変わらない	23.4(186)	16.4(123)	18.2(96)	17.4(89)
広がった	0.4(3)	0.4(3)	0.4(2)	0.2(1)
DK. NA	0.6(5)	0.5(4)	0.0(0)	0.4(2)

0-3 新型コロナウイルス流行の影響を受ける前、2019年（前年）の1年間で、以下の地域にどの程度外出（通勤・通学含む）していましたか。（京都市）

	京都市	大阪市・神戸市とその近辺	東京を中心とする首都圏	（左記を含む） 今住んでいる地域から一時間以上離れた地域
週に数回程度	82.0(419)	12.5(64)	0.8(4)	9.6(49)
月に数回程度	10.6(54)	25.6(131)	3.3(17)	22.7(116)
年に数回程度	3.5(18)	40.3(206)	38.7(198)	48.3(247)
出かけていない	1.0(5)	17.2(88)	51.3(262)	13.5(69)
DK. NA	2.9(15)	4.3(22)	5.9(30)	5.9(30)

0-3 新型コロナウイルス流行の影響を受ける前、2019年（前年）の1年間で、以下の地域にどの程度外出（通勤・通学含む）していましたか。（京都北部）

	京都北部7市町の中心部	京都市	大阪市・神戸市とその近辺	東京を中心とする首都圏	(左記を含む) 今住んでいる地域から一時間以上離れた地域
週に数回程度	51.6(272)	3.4(18)	2.7(14)	0.6(3)	8.3(44)
月に数回程度	27.7(146)	21.3(112)	16.1(85)	0.6(3)	32.6(172)
年に数回程度	12.0(63)	51.6(272)	57.1(301)	20.7(109)	37.2(196)
出かけていない	5.7(30)	19.0(100)	19.2(101)	71.9(379)	16.5(87)
DK. NA	3.0(16)	4.7(25)	4.9(26)	6.3(33)	5.3(28)

0-3 新型コロナウイルス流行の影響を受ける前、2019年（前年）の1年間で、以下の地域にどの程度外出（通勤・通学含む）していましたか。（札幌市）

	札幌市	札幌市を除く石狩管内市町村	東京を中心とする首都圏	(左記を含む) 今住んでいる地域から一時間以上離れた地域
週に数回程度	85.6(641)	10.0(75)	0.8(6)	6.4(48)
月に数回程度	7.3(55)	32.8(246)	1.9(14)	25.4(190)
年に数回程度	2.1(16)	33.8(253)	45.1(338)	48.3(362)
出かけていない	1.2(9)	18.4(138)	46.3(347)	14.3(107)
DK. NA	3.7(28)	4.9(37)	5.9(44)	5.6(42)

0-3 新型コロナウイルス流行の影響を受ける前、2019年（前年）の1年間で、以下の地域にどの程度外出（通勤・通学含む）していましたか。（オホーツク）

	オホーツク管内市町村の中心部	旭川市	札幌市	東京を中心とする首都圏	(左記を含む) 今住んでいる地域から一時間以上離れた地域
週に数回程度	46.2(367)	0.3(2)	1.3(10)	0.4(3)	7.2(57)
月に数回程度	37.0(294)	6.8(54)	5.8(46)	1.0(8)	34.0(270)
年に数回程度	10.8(86)	54.3(432)	60.1(478)	26.8(213)	36.7(292)
出かけていない	4.0(32)	32.6(259)	27.9(222)	64.0(509)	15.8(126)
DK. NA	2.0(16)	6.0(48)	4.9(39)	7.8(62)	6.3(50)

Q2 あなたの住んでいる地域は、以下のどのような環境に近いと思いますか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
「大都市」の中心部	0.9(7)	17.0(127)	0.9(5)	14.1(72)
「大都市」の周辺部	1.5(12)	54.6(409)	3.8(20)	49.3(252)
「地方」の中心部	33.7(268)	21.4(160)	26.2(138)	23.9(122)
「地方」の周辺部	63.1(502)	6.8(51)	68.9(363)	12.1(62)
DK. NA	0.8(6)	0.3(2)	0.2(1)	0.6(3)

Q3 あなたは現在住んでいるところの近く（最もよく利用する交通手段で30分以内で行けるところ）に、以下のようなものがあってほしいと思いますか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
ショッピングモールなどの大型商業施設	66.5(529)	67.4(505)	64.9(342)	66.1(338)
コンビニ	47.5(378)	68.2(511)	45.2(238)	69.1(353)
シネコン（複数のスクリーンがある映画館）	33.7(268)	37.1(278)	38.3(202)	39.3(201)
スターバックスコーヒー	36.6(291)	38.2(286)	29.8(157)	39.1(200)
ラウンドワンのような複合娯楽施設	46.5(370)	24.4(183)	34.2(180)	22.9(117)
ライブハウス	10.2(81)	10.8(81)	7.0(37)	10.8(55)
パチンコ・パチスロの大型店	9.1(72)	8.3(62)	7.8(41)	9.2(47)
活気のある商店街	33.3(265)	37.8(283)	29.8(157)	48.9(250)
コミュニティ・スペース（地域の人々が交流する場）	16.0(127)	16.7(125)	17.5(92)	21.9(112)
古民家を利用したカフェ	23.1(184)	31.0(232)	28.1(148)	37.4(191)
地元食材のマルシェ（市場）・イベント	25.9(206)	30.6(229)	30.2(159)	37.0(189)
大型の総合病院	37.0(294)	39.8(298)	33.2(175)	46.8(239)
大学	13.8(110)	18.6(139)	16.3(86)	21.1(108)
野外音楽フェス	13.1(104)	9.7(73)	11.8(62)	10.8(55)
コミケのような同人誌の即売会イベント	6.4(51)	8.9(67)	6.8(36)	7.0(36)
プロスポーツ・チーム	9.1(72)	12.0(90)	8.9(47)	10.0(51)

Q4 あなたが現在住んでいる地域は、「地元」だといえますか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
「地元」だといえる	65.0(517)	61.7(462)	67.9(358)	57.3(293)
「地元」だといえない	32.6(259)	36.8(276)	30.6(161)	40.9(209)
DK. NA	2.4(19)	1.5(11)	1.5(8)	1.8(9)

Q5 あなたにとって以下の範囲は「地元」と感じられますか。

A. 出身の小学校区

	出身の小学校区			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	91.7(729)	90.7(679)	93.5(493)	93.7(479)
いいえ	5.8(46)	6.9(52)	4.9(26)	5.7(29)
DK. NA	2.5(20)	2.4(18)	1.5(8)	0.6(3)

B. 出身の市町村全体

	出身の市町村全体			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	91.1(724)	85.8(643)	91.8(484)	83.0(424)
いいえ	6.4(51)	11.6(87)	6.5(34)	15.5(79)
DK. NA	2.5(20)	2.5(19)	1.7(9)	1.6(8)

C. 出身の市町村より広い都道府県内の地域

	出身の市町村より広い都道府県内の地域			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	25.3(201)	28.6(214)	23.7(125)	26.4(135)
いいえ	71.1(585)	67.0(502)	73.2(386)	70.8(362)
DK. NA	3.6(29)	4.4(33)	3.0(16)	2.7(14)

D. 出身の都道府県全体

	出身の都道府県全体			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	25.9(206)	31.5(236)	15.0(79)	20.7(106)
いいえ	69.9(556)	64.0(479)	80.1(422)	75.1(384)
DK. NA	4.2(33)	4.5(34)	4.9(26)	4.1(21)

E. その他の「地元」と感じられる範囲

	その他の「地元」と感じられる範囲			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	6.4(51)	9.2(69)	8.7(46)	12.1(62)
いいえ	92.3(734)	89.7(672)	90.7(478)	87.3(446)
DK. NA	1.3(10)	1.1(8)	0.6(3)	0.6(3)

Q6 あなたは現在住んでいる地域に暮らしている積極的な理由はありますか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
自身の親あるいは祖父母がいること	47.8(380)	42.2(316)	49.5(261)	44.8(229)
自身もしくは家族の持ち家（あるいは土地・墓等）があること	44.0(350)	39.3(294)	49.5(261)	45.6(233)
自身の通う学校があること	5.0(40)	7.9(59)	5.3(28)	9.0(46)
自身の働く職場があること	61.1(486)	50.7(380)	57.5(303)	46.6(238)
配偶者・恋人がいること	33.3(265)	25.8(193)	27.7(146)	23.3(119)
友人がいること	24.0(191)	28.6(214)	19.4(102)	23.3(119)
地域の人たちとの関係がいいこと	11.7(93)	7.7(58)	12.5(66)	8.0(41)
好きな地域であること	16.4(130)	33.4(250)	18.0(95)	28.0(143)
生活上便利であること	13.0(103)	50.6(379)	11.4(60)	46.6(238)
自分のやりたいこと（趣味等）ができること	8.2(65)	14.0(105)	7.8(41)	11.5(59)
行政サービスが優れていること	1.6(13)	3.5(26)	1.7(9)	2.7(14)
子育てをしやすいこと	12.1(96)	12.8(96)	12.1(64)	9.0(46)
その他	4.8(38)	5.1(38)	4.0(21)	3.5(18)
特に積極的な理由はない	4.7(37)	2.8(21)	4.7(25)	3.1(16)

Q7 あなたは、あなたの関わっている地域についてどのように感じていますか。

A. 総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している

	総合的に見て、現在住んでいる地域の現状に満足している			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	11.7(93)	42.2(316)	9.9(52)	32.1(164)
ややそう思う	48.3(384)	46.5(348)	54.1(285)	55.2(282)
あまりそう思わない	31.9(254)	8.8(66)	27.3(144)	11.4(58)
全くそう思わない	7.5(60)	1.6(12)	8.3(44)	1.4(7)
DK. NA	0.5(4)	0.9(7)	0.4(2)	0.0(0)

B. 今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたい

	今後、可能ならば、現在住んでいる地域に住み続けたい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	19.1(152)	38.7(290)	21.8(115)	30.3(155)
ややそう思う	39.7(316)	40.3(302)	40.0(211)	45.4(232)
あまりそう思わない	26.9(214)	15.4(115)	28.7(151)	19.2(98)
全くそう思わない	13.5(107)	4.7(35)	8.9(47)	5.1(26)
DK. NA	0.8(6)	0.9(7)	0.6(3)	0.0(0)

C. 20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う

	20年後も、現在住んでいる地域か、その近くに住んでいると思う			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	25.3(201)	31.2(234)	30.6(161)	24.5(125)
ややそう思う	39.9(317)	39.4(295)	38.5(203)	38.0(194)
あまりそう思わない	18.2(145)	19.1(143)	18.0(95)	25.8(132)
全くそう思わない	16.1(128)	8.9(67)	12.3(65)	11.2(57)
DK. NA	0.5(4)	1.3(10)	0.6(3)	0.6(3)

D. 今後、地域活動に積極的に参加したい

	今後、地域活動に積極的に参加したい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	7.0(56)	4.9(37)	8.2(43)	3.9(20)
ややそう思う	27.2(216)	24.7(185)	34.2(180)	31.5(161)
あまりそう思わない	45.7(363)	51.1(383)	41.0(216)	45.0(230)
全くそう思わない	19.6(156)	18.0(135)	15.9(84)	19.4(99)
DK. NA	0.5(4)	1.2(9)	0.8(4)	0.2(1)

E. 現在住んでいる地域にいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある

	現在住んでいる地域にいる地域にいる多様な人たちと交流することに興味がある			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	8.2(65)	6.8(51)	9.3(49)	6.7(34)
ややそう思う	25.7(204)	21.1(158)	31.3(165)	28.8(147)
あまりそう思わない	44.0(350)	47.0(352)	40.2(212)	41.1(210)
全くそう思わない	21.4(170)	24.2(181)	18.8(99)	23.5(120)
DK. NA	0.8(6)	0.9(7)	0.4(2)	0.0(0)

F. 隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい

	隣近所の人たちとは、何でも相談したり、助け合ったりできるような深い関係になりたい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	7.3(58)	4.5(34)	8.3(44)	7.2(37)
ややそう思う	29.2(232)	22.2(166)	36.4(192)	30.1(154)
あまりそう思わない	40.8(324)	46.7(350)	36.6(193)	41.3(211)
全くそう思わない	22.3(177)	25.2(189)	18.0(95)	21.1(108)
DK. NA	0.5(4)	1.3(10)	0.6(3)	0.2(1)

G. 休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい

	休日には、なるべく現在住んでいる地域以外の場所に出かけたい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	28.6(227)	21.2(159)	25.0(132)	16.0(82)
ややそう思う	43.5(346)	41.4(310)	46.9(247)	44.8(229)
あまりそう思わない	22.4(178)	29.8(223)	24.5(129)	34.6(177)
全くそう思わない	4.9(39)	6.5(49)	3.0(16)	4.5(23)
DK. NA	0.6(5)	1.1(8)	0.6(3)	0.0(0)

H. 現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ

	現在住んでいる地域に、外国人等の多様な住民が増えるのは良いことだ			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	13.0(103)	14.6(109)	11.4(60)	12.1(62)
ややそう思う	42.3(336)	35.2(264)	39.7(209)	32.5(166)
あまりそう思わない	34.3(273)	37.2(279)	37.6(207)	40.5(207)
全くそう思わない	9.7(77)	11.7(88)	10.6(56)	14.5(74)
DK. NA	0.8(6)	1.2(9)	0.8(4)	0.4(2)

I. 現在住んでいる地域よりも大きな街で暮らしたい

	現在住んでいる地域よりも大きな街で暮らしたい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	20.4(162)	5.6(42)	15.7(83)	4.5(23)
ややそう思う	30.4(242)	16.4(123)	27.5(145)	15.9(81)
あまりそう思わない	34.6(275)	46.5(348)	39.8(210)	48.9(250)
全くそう思わない	14.2(113)	30.6(229)	16.3(86)	30.7(157)
DK. NA	0.4(3)	0.9(7)	0.6(3)	0.0(0)

J. 田舎暮らしをしたい

	田舎暮らしをしたい			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	8.2(65)	6.7(50)	10.8(57)	7.0(36)
ややそう思う	28.2(224)	25.5(191)	31.3(165)	29.5(151)
あまりそう思わない	40.8(324)	38.1(285)	38.1(201)	35.8(183)
全くそう思わない	22.4(178)	28.8(216)	18.8(99)	27.2(139)
DK. NA	0.5(4)	0.9(7)	0.9(5)	0.4(2)

Q8 あなたは、現在住んでいる以下の地域の範囲について愛着はありますか。(京都市)

	近所（現在住 んでいる小学 校区）	京都市	京都府	関西
愛着がある	42.3(216)	48.1(246)	21.7(111)	28.8(147)
やや愛着がある	34.4(176)	37.8(193)	42.7(218)	44.2(226)
あまり愛着がない	15.3(78)	10.6(54)	27.8(142)	18.0(92)
愛着がない	7.8(40)	3.3(17)	7.4(38)	8.8(45)
DK. NA	0.2(1)	0.2(1)	0.4(2)	0.2(1)

Q8 あなたは、現在住んでいる以下の地域の範囲について愛着はありますか。(京都北部)

	近所（現在住 んでいる小学校 区）	お住まいの市町村	京都府	関西
愛着がある	35.1(185)	30.9(163)	25.2(133)	28.7(151)
やや愛着がある	33.4(176)	42.7(225)	45.7(241)	43.5(229)
あまり愛着がない	20.5(108)	16.7(88)	22.2(117)	20.7(109)
愛着がない	10.8(57)	9.3(49)	6.5(34)	7.0(37)
DK. NA	0.2(1)	0.4(2)	0.4(2)	0.2(1)

Q8 あなたは、現在住んでいる以下の地域の範囲について愛着はありますか。(札幌市)

	近所（現在住んでいる小学校区）	札幌市	石狩管内全体	北海道全体
愛着がある	40.5(303)	54.6(409)	14.2(106)	38.5(288)
やや愛着がある	33.6(252)	32.3(242)	33.2(249)	41.5(311)
あまり愛着がない	17.6(132)	8.9(67)	39.0(292)	14.8(111)
愛着がない	7.2(54)	2.9(22)	12.1(91)	4.3(32)
DK. NA	1.1(8)	1.2(9)	1.5(11)	0.9(7)

Q8 あなたは、現在住んでいる以下の地域の範囲について愛着はありますか。(オホーツク)

	近所（現在住んでいる小学校区）	お住いの市町村	オホーツク管内全体	北海道全体
愛着がある	29.6(235)	31.7(252)	22.9(182)	42.5(338)
やや愛着がある	34.2(272)	41.3(328)	43.4(345)	41.8(332)
あまり愛着がない	26.0(207)	19.7(157)	25.2(200)	12.7(101)
愛着がない	9.3(74)	6.7(53)	7.8(62)	2.4(19)
DK. NA	0.9(7)	0.6(5)	0.8(6)	0.6(5)

Q9 あなたの居住歴についてあてはまるものはどれですか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたことがない	20.6(164)	23.0(172)	17.6(93)	27.8(142)
現在住んでいる地域の出身で、他の地域で暮らしたあと戻ってきた	36.6(291)	21.1(158)	43.6(230)	19.6(100)
現在住んでいる地域以外の出身である	37.6(299)	48.5(363)	34.7(183)	47.7(244)
DK. NA	5.2(41)	7.5(56)	4.0(21)	4.9(25)

Q9-1 あなたがこれまで暮らしたことがある地域はどこですか。(MA) (京都市)

現在住んでいる市町村を除く京都市とその近辺	26.0(133)
大阪市・神戸市とその近辺	14.1(72)
上記を除く関西	17.4(89)
海外	5.7(29)

Q9-1 あなたがこれまで暮らしたことがある地域はどこですか。(MA) (京都北部)

現在住んでいる市町村を除く京都府北部7市町村	18.0(95)
京都市・大阪市・神戸市とその近辺	44.4(234)
上記を除く関西	14.2(75)
関西以外	25.0(132)
海外	1.7(9)

Q9-1 あなたがこれまで暮らしたことがある地域はどこですか。(MA) (札幌市)

札幌市内の別の地域	25.0(187)
札幌市を除く石狩管内市町村	8.5(64)
石狩管内市町村を除く北海道内	40.6(304)
北海道以外	28.8(216)
海外	3.2(24)

Q9-1 あなたがこれまで暮らしたことがある地域はどこですか。(MA) (オホーツク)

現在住んでいる市町村を除くオホーツク管内	27.5(219)
札幌市	30.3(241)
オホーツク管内市町村と札幌市を除く北海道内	33.0(262)
北海道以外	21.5(171)
海外	1.9(15)

Q9-2 あなたが現在住んでいる地域に戻ってきた理由、または転入してきた理由は何ですか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
自身の実家があるため (あるいは実家に関わる土地、墓があるため)	14.0(111)	7.6(57)	20.1(106)	9.6(49)
自身の就学のため	4.8(38)	7.2(54)	4.9(26)	9.2(47)
自身の就職・転職・転勤のため	25.8(205)	20.6(154)	25.0(132)	16.0(82)
自身の結婚・同棲のため	7.9(63)	6.9(52)	8.3(44)	7.8(40)
上記以外の家族の都合のため	8.3(66)	13.9(104)	5.9(31)	7.8(40)
友人・知人がいるため	0.5(4)	0.5(4)	0.6(3)	0.2(1)
その他	2.1(17)	2.9(22)	3.6(19)	2.3(12)
非該当	21.5(171)	23.1(173)	18.2(96)	28.4(145)
無回答	11.4(91)	14.3(107)	11.0(85)	16.6(85)
77	3.6(29)	2.9(22)	2.1(11)	2.0(10)

Q10 あなたは、出身の地域に戻って暮らしたいと思いますか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
戻りたい	7.5(60)	4.4(33)	6.1(32)	4.3(22)
やや戻りたい	11.1(88)	13.0(97)	11.8(62)	13.1(67)
やや戻りたくない	7.4(59)	12.0(90)	6.6(35)	9.6(49)
戻りたくない	6.3(50)	12.7(95)	5.3(28)	10.2(52)
非該当	57.6(458)	43.9(329)	60.5(319)	48.1(246)
無回答	10.1(80)	14.0(105)	9.7(51)	14.7(75)

Q11 あなたは昨年1年間で、出身の地域を訪れましたか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
訪れた	27.3(217)	32.8(246)	25.0(132)	30.5(156)
いちども訪れてない	4.4(35)	8.3(62)	3.6(19)	4.5(23)
非該当	57.5(457)	43.9(329)	60.9(321)	48.1(246)
無回答	10.8(86)	15.0(112)	10.4(55)	16.8(86)

Q11-1 訪れた目的はなんですか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
家族・親戚に会う（あるいは家族・親戚との用事）	25.4(202)	28.7(215)	23.1(122)	27.4(140)
知人・友人に会う（あるいは知人・友人との用事）	13.0(103)	14.3(107)	13.9(73)	11.4(58)
その他	3.9(31)	3.1(23)	3.4(18)	3.9(20)

Q12 あなたにとって親しい人についてお尋ねします。次のような間柄の親しい人はどこにお住まいですか。

A. 祖父母・親戚

	祖父母・親戚			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あなたが「地元」だと思ふ地域	55.7(443)	48.2(361)	54.5(287)	49.9(255)
現在住んでいる地域	36.7(292)	25.9(194)	37.4(197)	19.4(99)
現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域	18.5(147)	19.9(149)	17.1(90)	23.5(120)
片道1時間以上かかるが、日帰りで会える距離にある地域	20.3(161)	25.4(190)	27.1(143)	29.4(150)
日帰りでは会えない距離にある地域	23.0(183)	23.8(178)	15.2(80)	18.8(96)
そのような人はいない	1.3(10)	1.2(9)	0.9(5)	2.2(11)

B. 出身学校の親しい人

	出身学校の親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あなたが「地元」だと思う地域	44.2(351)	46.7(350)	42.3(223)	46.0(235)
現在住んでいる地域	35.2(280)	37.0(277)	28.8(152)	22.1(113)
現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域	17.9(142)	26.2(196)	24.5(129)	35.0(179)
片道1時間以上かかるが、日帰りで会える距離にある地域	22.0(175)	15.9(119)	39.5(208)	30.5(156)
日帰りでは会えない距離にある地域	39.4(313)	30.8(231)	24.7(130)	23.3(119)
そのような人はいない	4.5(36)	4.3(32)	4.2(22)	4.3(22)

C. 仕事つながりの親しい人

	仕事つながりの親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あなたが「地元」だと思う地域	24.7(196)	15.0(112)	25.6(135)	12.7(65)
現在住んでいる地域	51.3(408)	44.6(334)	42.9(226)	32.1(164)
現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域	12.2(97)	25.2(189)	21.1(111)	37.0(189)
片道1時間以上かかるが、日帰りで会える距離にある地域	11.4(91)	8.5(64)	14.6(77)	17.0(87)
日帰りでは会えない距離にある地域	12.3(98)	9.5(71)	6.3(33)	5.9(30)
そのような人はいない	13.5(107)	14.3(107)	11.8(62)	16.6(85)

D. 趣味関係の親しい人

	趣味関係の親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あなたが「地元」だと思う地域	22.9(182)	19.2(144)	20.7(109)	16.4(84)
現在住んでいる地域	30.1(239)	32.7(245)	23.9(126)	21.7(111)
現在住んでいる地域ではないが、片道1時間以内で会える距離にある地域	10.8(86)	16.6(124)	14.0(74)	28.8(147)
片道1時間以上かかるが、日帰りで会える距離にある地域	12.8(102)	10.4(78)	21.6(114)	24.7(126)
日帰りでは会えない距離にある地域	24.5(195)	18.6(139)	16.9(89)	15.9(81)
そのような人はいない	26.4(210)	29.0(217)	26.9(142)	27.6(141)

Q13 中学・高校時代の知人・友人のなかで個別に（ひとりひとりと）連絡を取り合っていますか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
出身地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人	66.9(532)	63.3(474)	62.6(330)	61.3(313)
出身地域を離れて別の地域に住んでいる中学・高校時代の知人・友人	59.1(470)	54.6(409)	56.4(297)	53.6(274)
個別に連絡を取り合っている中学・高校時代の知人・友人はいる	16.4(130)	19.0(142)	18.6(98)	19.0(97)

Q14 あなたはご自身と親しい人との関係についてどのように感じていますか。

A. 自分の母親との現在の関係

	自分の母親との現在の関係			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	51.7(411)	54.7(410)	49.7(262)	51.5(263)
まあ満足している	34.0(270)	31.6(237)	37.8(199)	37.2(190)
あまり満足していない	6.3(50)	5.1(38)	3.4(18)	5.3(27)
満足していない	2.5(20)	3.7(28)	3.0(16)	2.3(12)
該当しない	4.0(32)	3.2(24)	3.6(19)	2.0(10)
DK. NA	1.5(12)	1.6(12)	2.5(13)	1.8(9)

B. 自分の父親との現在の関係

	自分の父親との現在の関係			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	41.0(326)	41.8(313)	36.6(193)	38.4(196)
まあ満足している	35.0(278)	30.7(230)	38.9(205)	38.0(194)
あまり満足していない	6.4(51)	6.0(45)	7.0(37)	6.3(32)
満足していない	4.7(37)	5.6(42)	3.6(19)	3.9(20)
該当しない	10.7(85)	13.4(100)	11.6(61)	11.2(57)
DK. NA	2.3(18)	2.5(19)	2.3(12)	2.3(12)

C. 配偶者との現在の関係

	配偶者との現在の関係			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	31.1(247)	27.0(202)	30.2(159)	26.8(137)
まあ満足している	16.7(133)	12.6(94)	14.0(74)	13.9(71)
あまり満足していない	1.9(15)	2.5(19)	2.5(13)	4.1(21)
満足していない	2.0(16)	1.5(11)	1.5(8)	1.8(9)
該当しない	46.0(366)	54.2(406)	49.7(262)	51.9(265)
DK. NA	2.3(18)	2.3(17)	2.1(11)	1.6(8)

D. 友人関係

	友人関係			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	39.0(310)	39.1(293)	33.8(178)	38.7(198)
まあ満足している	44.9(357)	45.5(341)	49.5(261)	46.6(238)
あまり満足していない	8.8(70)	9.5(71)	8.7(46)	9.8(50)
満足していない	2.9(23)	1.9(14)	2.3(12)	1.8(9)
該当しない	2.8(22)	3.1(23)	4.0(21)	2.3(12)
DK. NA	1.6(13)	0.9(7)	1.7(9)	0.8(4)

E. 家事（育児・介護を含む）の分担

	家事（育児・介護を含む）の分担			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	20.1(160)	22.0(165)	20.1(106)	21.3(109)
まあ満足している	36.1(287)	29.2(219)	32.3(170)	27.2(139)
あまり満足していない	7.8(62)	6.5(49)	8.3(44)	8.8(45)
満足していない	2.5(20)	3.5(26)	1.7(9)	3.3(17)
該当しない	13.6(108)	17.1(128)	13.7(72)	16.6(85)
DK. NA	19.9(158)	21.6(162)	23.9(126)	22.7(116)

F. 子供との現在の関係

	子供との現在の関係			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
満足している	27.2(216)	20.4(153)	23.0(121)	21.7(111)
まあ満足している	12.8(102)	10.9(82)	14.2(75)	9.2(47)
あまり満足していない	1.5(12)	1.9(14)	2.7(14)	2.5(13)
満足していない	1.0(8)	1.2(9)	0.6(3)	0.4(2)
該当しない	54.2(431)	63.6(476)	57.3(302)	65.0(332)
DK. NA	3.3(26)	2.0(15)	2.3(12)	1.2(6)

Q15 あなたは家族と以下のようなことをどの程度しますか。

A. 電話など声でおしゃべりをする

	電話など声でおしゃべりをする			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日のおこなう	34.3(273)	33.1(248)	36.1(190)	38.2(195)
週に何回かおこなう	14.3(114)	15.9(119)	16.9(89)	14.9(76)
月に何回かおこなう	18.6(148)	18.2(136)	15.9(84)	18.6(95)
年に数回おこなう	5.2(41)	7.3(55)	6.3(33)	6.5(33)
ほとんどおこなわない	9.7(77)	10.5(79)	9.1(48)	6.1(31)
DK. NA	17.9(142)	15.0(112)	15.8(83)	15.9(81)

B. LINEなどで言葉やスタンプややり取りする

	LINEなどで言葉やスタンプややり取りする			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日のようにおこなう	23.9(190)	30.2(226)	25.4(134)	29.4(150)
週に何回かおこなう	31.2(248)	28.6(214)	31.3(165)	33.3(170)
月に何回かおこなう	15.3(122)	13.0(97)	16.3(86)	13.7(70)
年に数回おこなう	2.5(20)	4.7(35)	2.1(11)	2.9(15)
ほとんどおこなわない	9.3(74)	8.3(62)	9.1(48)	5.5(28)
DK. NA	17.8(141)	15.4(115)	15.8(83)	15.3(78)

C. 一緒にショッピングに出かける

	一緒にショッピングに出かける			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日のようにおこなう	4.5(36)	5.3(40)	4.4(23)	4.5(23)
週に何回かおこなう	26.9(214)	23.0(172)	25.4(134)	21.3(109)
月に何回かおこなう	27.9(222)	31.6(237)	30.4(160)	29.7(152)
年に数回おこなう	16.0(127)	17.6(132)	17.5(92)	20.9(107)
ほとんどおこなわない	7.0(56)	7.3(55)	6.8(36)	8.2(42)
DK. NA	17.6(140)	15.1(113)	15.6(82)	15.3(78)

D. 一緒に食事に出かける

	一緒に食事に出かける			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日のようにおこなう	2.9(23)	3.5(26)	2.8(15)	4.1(21)
週に何回かおこなう	12.7(101)	13.2(99)	13.9(73)	13.3(68)
月に何回かおこなう	35.5(282)	37.1(278)	35.9(189)	34.4(176)
年に数回おこなう	24.4(194)	23.9(179)	23.7(125)	28.6(146)
ほとんどおこなわない	7.0(56)	7.2(54)	7.8(41)	4.5(23)
DK. NA	17.5(139)	15.1(113)	15.9(84)	15.1(77)

E. 一緒に旅行に出かける

	一緒に旅行に出かける			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日のおこなう	1.8(14)	2.7(20)	1.3(7)	2.7(14)
週に何回かおこなう	1.8(14)	0.9(7)	0.6(3)	0.4(2)
月に何回かおこなう	3.1(25)	2.9(22)	3.0(16)	1.6(8)
年に数回おこなう	45.7(363)	44.5(333)	45.4(239)	46.4(237)
ほとんどおこなわない	30.1(239)	33.6(252)	34.2(180)	33.7(172)
DK. NA	17.6(140)	15.4(115)	15.6(82)	15.3(78)

Q16 あなたは、結婚相手との出会いを求めて以下のことをしたことがありますか。既婚者の場合は現在の配偶者と出会う前にしたことについてお答えください。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
合コン、コンパ、飲み会への参加	35.2(280)	34.6(259)	40.8(215)	36.8(188)
友人、親、親族に紹介を頼む	26.9(214)	21.0(157)	31.3(165)	26.2(134)
地方自治体による婚活サービスの利用（婚活パーティー、イベントなどへの参加）	6.8(54)	1.2(9)	6.1(32)	3.7(19)
民間企業による婚活サービスの利用（婚活パーティー、イベントなどへの参加）	4.4(35)	8.3(62)	7.2(38)	9.2(47)
SNS（Facebook、Twitterなど）の利用	8.7(69)	7.9(59)	6.5(34)	8.2(42)
婚活サイト、マッチングアプリの利用	7.2(57)	12.7(95)	10.1(53)	12.1(62)
その他	2.3(18)	2.7(20)	2.8(15)	2.5(13)
結婚相手は探していない（探したことがない）	45.4(361)	49.4(370)	38.3(202)	46.8(239)

Q17 あなたは趣味をお持ちですか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
趣味がある	77.0(612)	77.8(583)	74.6(393)	80.2(410)
趣味はない	21.8(173)	20.7(155)	22.0(116)	18.2(93)
DK. NA	1.3(10)	1.5(11)	3.4(18)	1.6(8)

Q17-1 あなたにとって最も大切な趣味と同じ趣味をもつ人が、現在住んでいる地域にいますか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
たくさんいる	9.6(76)	12.1(91)	7.4(39)	11.0(56)
少しいる	29.8(237)	30.7(230)	33.8(178)	27.6(141)
あまりいない	16.4(130)	13.5(101)	12.0(63)	16.6(85)
まったくいない	6.4(51)	7.2(54)	8.7(46)	8.0(41)
わからない	14.6(116)	14.4(108)	13.5(71)	17.0(87)
DK. NA	23.3(185)	22.0(165)	24.7(130)	19.8(101)

Q18 あなたがこれまで参加してきた地域活動・社会活動の関わりはどのようなものですか。

A. 趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動

	趣味関係（スポーツを除く）のグループ活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	8.6(68)	8.7(65)	9.1(48)	10.6(54)
一般的な関わり	19.9(158)	16.7(125)	22.6(119)	21.9(112)
消極的な関わり	12.3(98)	12.7(95)	12.5(66)	13.3(68)
全く関わりがない	57.7(459)	60.5(453)	54.1(285)	53.0(271)
DK. NA	1.5(12)	1.5(11)	1.7(9)	1.2(6)

B. スポーツ関係のグループ活動

	スポーツ関係のグループ活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	9.7(77)	8.7(65)	9.9(52)	9.6(49)
一般的な関わり	18.7(149)	14.6(109)	22.0(116)	16.2(83)
消極的な関わり	11.7(93)	11.2(84)	10.4(55)	13.3(68)
全く関わりがない	58.9(468)	64.1(480)	55.6(293)	59.7(305)
DK. NA	1.0(8)	1.5(11)	2.1(11)	1.2(6)

C. 職場参加としての地域活動・社会活動

	職場参加としての地域活動・社会活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	8.4(67)	2.5(19)	7.8(41)	6.5(33)
一般的な関わり	29.3(233)	20.4(153)	32.4(171)	20.5(105)
消極的な関わり	19.1(152)	15.0(112)	15.7(83)	15.5(79)
全く関わりがない	41.6(331)	60.7(455)	42.1(222)	56.0(286)
DK. NA	1.5(12)	1.3(10)	1.9(10)	1.6(8)

D. 地縁組織の活動

	地縁組織の活動（町内会・自治体・青年団・消防団、祭の運営等）			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	6.3(50)	2.0(15)	9.3(49)	2.7(14)
一般的な関わり	15.5(123)	9.1(68)	23.7(125)	17.6(90)
消極的な関わり	17.9(142)	15.1(113)	16.1(85)	17.4(89)
全く関わりがない	58.7(467)	72.2(541)	49.0(258)	61.1(312)
DK. NA	1.6(13)	1.6(12)	1.9(10)	1.2(6)

E. 学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動

	学校・保育所・幼稚園の保護者・同窓生組織の活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	7.8(62)	5.6(42)	5.1(27)	5.7(29)
一般的な関わり	23.8(189)	14.2(106)	28.7(151)	18.2(93)
消極的な関わり	14.6(116)	15.4(115)	11.8(62)	16.6(85)
全く関わりがない	52.2(415)	63.3(474)	52.8(278)	58.3(298)
DK. NA	1.6(13)	1.6(12)	1.7(9)	1.2(6)

F. 業界団体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動

	業界全体・同業者団体・労働組合・政治団体・宗教団体の活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	2.4(19)	1.9(14)	2.7(14)	3.3(17)
一般的な関わり	7.4(59)	4.4(33)	7.8(41)	7.4(38)
消極的な関わり	11.3(90)	9.6(72)	10.2(54)	9.2(47)
全く関わりがない	77.1(613)	82.8(620)	77.0(406)	79.1(404)
DK. NA	1.8(14)	1.3(10)	2.3(12)	1.0(5)

G. 上記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動

	左記以外のボランティア組織・消費者組織・NPO等の活動			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
積極的な関わり	1.4(11)	0.7(5)	2.5(13)	4.3(22)
一般的な関わり	6.0(48)	5.1(38)	5.1(27)	4.3(22)
消極的な関わり	8.2(65)	6.8(51)	9.5(50)	7.6(39)
全く関わりがない	82.8(658)	86.1(645)	80.8(426)	82.8(423)
DK. NA	1.6(13)	1.3(10)	2.1(11)	1.0(5)

Q19 あなたは、ご自身の生活について、どのように感じていますか。

A. 総合的に見て、今の生活に満足している

	総合的に見て、今の生活に満足している			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	24.2(192)	25.2(189)	20.3(107)	26.4(135)
ややそう思う	50.8(404)	50.1(375)	53.9(284)	49.9(255)
あまりそう思わない	20.9(166)	18.6(139)	19.7(104)	17.6(90)
全くそう思わない	3.8(30)	5.5(41)	5.3(28)	4.9(25)
DK. NA	0.4(3)	0.7(5)	0.8(4)	1.2(6)

B. 毎日の生活が「楽しい」と感じられる

	毎日の生活が「楽しい」と感じられる			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	19.2(153)	21.8(163)	15.2(80)	24.5(125)
ややそう思う	51.7(411)	50.1(375)	54.8(289)	50.9(260)
あまりそう思わない	25.3(201)	22.4(168)	25.4(134)	19.4(99)
全くそう思わない	3.4(27)	4.9(37)	4.0(21)	4.3(22)
DK. NA	0.4(3)	0.8(6)	0.6(3)	1.0(5)

C. 金銭的余裕のある生活を送っている

	金銭的余裕のある生活を送っている			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	12.3(98)	12.6(94)	9.1(48)	13.7(70)
ややそう思う	40.4(321)	36.7(275)	39.8(210)	38.7(198)
あまりそう思わない	33.3(265)	31.1(233)	35.1(185)	29.4(150)
全くそう思わない	13.6(108)	18.8(141)	15.2(80)	16.8(86)
DK. NA	0.4(3)	0.8(6)	0.8(4)	1.4(7)

D.時間的余裕のある生活を送っている

	時間的余裕のある生活を送っている			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	12.8(102)	13.1(98)	9.7(51)	15.5(79)
ややそう思う	38.7(308)	39.5(296)	39.1(206)	36.0(184)
あまりそう思わない	34.2(272)	33.5(251)	36.1(190)	32.5(166)
全くそう思わない	13.6(108)	13.1(98)	14.2(75)	14.9(76)
DK. NA	0.6(5)	0.8(6)	0.9(5)	1.2(6)

E. 現在の住居に満足している

	現在の住居に満足している			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	23.0(183)	26.6(199)	19.5(103)	25.8(132)
ややそう思う	42.1(335)	47.9(359)	48.8(257)	47.0(240)
あまりそう思わない	25.3(201)	17.9(134)	22.8(120)	18.8(96)
全くそう思わない	9.1(72)	6.9(52)	8.3(44)	7.2(37)
DK. NA	0.5(4)	0.7(5)	0.6(3)	1.2(6)

Q20 あなたは以下のSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を利用していますか。日ごろ、よく利用しているものについて○をつけてください。（MA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
LINE	91.2(725)	91.5(685)	90.3(476)	95.3(487)
Facebook	29.2(232)	27.0(202)	27.7(146)	30.5(156)
Twitter	45.7(363)	49.5(371)	41.0(216)	53.0(271)
Instagram	43.9(349)	49.8(373)	44.0(232)	51.9(265)
その他	1.0(8)	1.7(13)	1.1(6)	2.2(11)
SNSは利用していない	5.3(42)	5.7(43)	5.7(30)	3.1(16)

Q20-1 SNSを利用して以下のようなことをしますか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
新しい人間関係をつくる	20.4(162)	15.8(118)	17.6(93)	21.7(111)
人間関係を維持する	60.9(484)	69.8(523)	66.6(351)	69.3(354)
昔の知り合いの連絡先を探す	8.9(71)	10.0(75)	9.9(52)	9.0(46)
その他	17.7(141)	17.1(128)	15.7(83)	18.6(95)

Q20-2 親しい人と SNS で連絡をとったり、おしゃべりしたりすることはありますか。

A. 「地元」と感じる地域の親しい人

	「地元」と感じる地域の親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	6.9(55)	6.5(49)	5.5(29)	6.1(31)
週に1回以上	21.1(168)	19.6(147)	21.1(111)	19.6(100)
月に1回以上	22.1(176)	25.1(188)	26.8(141)	21.3(109)
半年に1回以上	21.8(173)	23.0(172)	19.5(103)	23.7(121)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	11.3(90)	11.1(83)	8.7(46)	13.7(70)
そのような親しい人はいない	7.0(56)	6.3(47)	8.0(42)	11.4(58)
DK. NA	9.7(77)	8.4(63)	10.4(55)	4.3(22)

B. 現在住んでいる地域の親しい人

	現在住んでいる地域の親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	7.9(63)	9.1(68)	6.6(35)	8.0(41)
週に1回以上	26.5(211)	26.8(201)	25.0(132)	24.5(125)
月に1回以上	23.4(186)	23.9(179)	26.4(139)	22.9(117)
半年に1回以上	11.3(90)	11.7(88)	10.4(55)	12.3(63)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	10.4(83)	8.7(65)	9.7(51)	10.4(53)
そのような親しい人はいない	10.7(85)	11.2(84)	11.6(61)	17.6(90)
DK. NA	9.7(77)	8.5(64)	10.2(54)	4.3(22)

C. 日帰りでは会える距離にいる親しい人

	日帰りでは会える距離にいる親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	3.4(27)	6.0(45)	6.3(33)	7.4(38)
週に1回以上	12.5(99)	15.9(119)	17.8(94)	19.8(101)
月に1回以上	24.4(194)	24.7(185)	26.4(139)	27.2(139)
半年に1回以上	19.9(158)	20.2(151)	20.5(108)	23.3(119)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	13.2(105)	9.5(71)	10.8(57)	8.2(42)
そのような親しい人はいない	16.9(134)	15.1(113)	7.6(40)	9.8(50)
DK. NA	9.8(78)	8.7(65)	10.6(56)	4.3(22)

D. 日帰りでは会えない距離にいる親しい人

	日帰りでは会えない距離にいる親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	3.6(29)	3.2(24)	2.7(14)	5.5(28)
週に1回以上	11.2(89)	9.7(73)	8.0(42)	10.0(51)
月に1回以上	19.5(155)	18.6(139)	18.6(98)	18.4(94)
半年に1回以上	29.1(231)	31.0(232)	28.8(152)	28.6(146)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	14.3(114)	12.8(96)	17.8(94)	14.5(74)
そのような親しい人はいない	12.5(99)	15.9(119)	13.3(70)	18.6(95)
DK. NA	9.8(78)	8.8(66)	10.8(57)	4.5(23)

E. ネット上で知り合い、直接会ったことのある親しい人

	ネット上で知り合い、直接会ったことのある親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	1.8(14)	2.0(15)	2.7(14)	2.7(14)
週に1回以上	3.1(25)	5.5(41)	4.2(22)	5.7(29)
月に1回以上	5.9(47)	5.1(38)	6.1(32)	6.1(31)
半年に1回以上	6.0(48)	5.9(44)	4.7(25)	6.8(35)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	9.7(77)	9.7(73)	9.5(50)	8.8(45)
そのような親しい人はいない	62.9(500)	63.3(474)	62.0(327)	65.6(335)
DK. NA	10.6(84)	8.5(64)	10.8(57)	4.3(22)

F. ネット上で知り合い、ネット上のみで付き合いのある親しい人

	ネット上で知り合い、ネット上のみで付き合いのある親しい人			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
毎日	2.3(18)	2.3(17)	3.4(18)	3.1(16)
週に1回以上	5.4(43)	6.3(47)	4.2(22)	6.3(32)
月に1回以上	5.8(46)	6.5(49)	5.1(27)	6.1(31)
半年に1回以上	5.0(40)	4.3(32)	4.0(21)	4.3(22)
連絡をとったりおしゃべりをしたりすることはない	9.8(78)	10.1(76)	7.4(39)	10.0(51)
そのような親しい人はいない	61.9(492)	61.8(463)	65.1(343)	66.1(338)
DK. NA	9.8(78)	8.7(65)	10.8(57)	4.1(21)

Q21 あなたは、ご自身の人生についてどのように感じていますか。

A. 総合的に見て、自分の現状に満足している

	総合的に見て、自分の現状に満足している			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	19.0(151)	17.9(134)	14.8(78)	20.0(102)
ややそう思う	47.9(381)	48.5(363)	52.9(279)	49.7(254)
あまりそう思わない	27.3(217)	22.7(170)	25.2(133)	22.5(115)
全くそう思わない	5.5(44)	10.1(76)	6.8(36)	7.6(39)
DK. NA	0.3(2)	0.8(6)	0.2(1)	0.2(1)

B. 自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている

	自分と近い仲間たちと交流する機会に恵まれ、深い絆を築けている			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	18.1(144)	19.5(146)	14.2(75)	21.7(111)
ややそう思う	42.5(338)	43.3(324)	45.7(241)	44.8(229)
あまりそう思わない	28.1(223)	24.3(182)	29.2(154)	24.5(125)
全くそう思わない	10.9(87)	12.0(90)	10.4(55)	8.8(45)
DK. NA	0.4(3)	0.9(7)	0.4(2)	0.2(1)

C. 自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている

	自分と異なる世界の人たちと出会う機会に恵まれ、視野を広げられている			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	10.4(83)	10.7(80)	8.7(46)	13.7(70)
ややそう思う	30.3(241)	28.3(212)	30.4(160)	31.1(159)
あまりそう思わない	38.7(308)	39.5(296)	40.4(213)	38.7(198)
全くそう思わない	20.1(160)	20.2(151)	19.9(105)	16.0(82)
DK. NA	0.4(3)	1.3(10)	0.6(3)	0.4(2)

D. 自分は幸せだ

	自分は幸せだ			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	27.9(222)	30.6(229)	24.3(128)	33.1(169)
ややそう思う	49.7(395)	47.8(358)	55.8(294)	48.3(247)
あまりそう思わない	17.4(138)	14.7(110)	13.9(73)	12.7(65)
全くそう思わない	4.7(37)	5.9(44)	5.5(29)	5.3(27)
DK. NA	0.4(3)	1.1(8)	0.6(3)	0.6(3)

E. 自分の将来に明るい希望を持っている

	自分の将来に明るい希望を持っている			
	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	15.0(119)	17.4(130)	17.3(91)	21.9(112)
ややそう思う	40.0(318)	35.8(268)	39.1(206)	39.1(200)
あまりそう思わない	34.0(270)	33.0(247)	32.6(172)	27.2(139)
全くそう思わない	10.4(83)	13.0(97)	10.4(55)	11.0(56)
DK. NA	0.6(5)	0.9(7)	0.6(3)	0.8(4)

Q25 国と地域の政治に関わるあなたの価値観や行動についてお尋ねします。

A 総合的に見て、日本の政治に満足している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	2.5(20)	2.8(21)	2.5(13)	2.2(11)
ややあてはまる	24.0(191)	25.6(192)	26.9(142)	22.9(117)
あまりあてはまらない	50.2(399)	47.0(352)	48.6(256)	47.9(245)
あてはまらない	22.4(178)	23.5(176)	21.6(114)	26.6(136)
DK. NA	0.9(7)	1.1(8)	0.4(2)	0.4(2)

B 日本の政治や社会問題に関心があり、知識を得ようと心がけている

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	8.4(67)	10.8(81)	7.6(40)	14.5(74)
ややあてはまる	39.7(316)	39.3(294)	37.2(196)	42.9(219)
あまりあてはまらない	38.4(305)	36.4(273)	41.4(218)	32.5(166)
あてはまらない	12.7(101)	12.7(95)	13.1(69)	10.0(51)
DK. NA	0.8(6)	0.8(6)	0.8(4)	0.2(1)

C 住んでいる地域の政治や社会問題に関心があり、知識を得ようと心がけている

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	6.2(49)	7.5(56)	5.1(27)	7.2(37)
ややあてはまる	37.2(296)	37.0(277)	35.9(189)	40.7(208)
あまりあてはまらない	43.0(342)	40.9(306)	44.2(233)	40.3(206)
あてはまらない	13.0(103)	13.9(104)	13.9(73)	11.4(58)
DK. NA	0.6(5)	0.8(6)	0.9(5)	0.4(2)

D 国の選挙には積極的に参加している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	36.5(290)	36.3(272)	32.4(171)	35.8(183)
ややあてはまる	31.4(250)	29.0(217)	31.7(167)	32.9(168)
あまりあてはまらない	21.8(173)	21.0(157)	19.9(105)	16.8(86)
あてはまらない	9.6(76)	12.8(96)	15.4(81)	14.3(73)
DK. NA	0.8(6)	0.9(7)	0.6(3)	0.2(1)

E 自治体の選挙には積極的に参加している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	35.5(282)	34.3(257)	33.6(177)	34.2(175)
ややあてはまる	32.5(258)	27.6(207)	31.1(164)	29.4(150)
あまりあてはまらない	21.8(173)	23.2(174)	19.4(102)	20.7(106)
あてはまらない	9.7(77)	14.0(105)	15.0(79)	15.5(79)
DK. NA	0.6(5)	0.8(6)	0.9(5)	0.2(1)

F 自分は日本の政治や社会問題に対して、影響を与えることはできない

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	34.6(275)	30.6(229)	34.7(183)	29.0(148)
ややあてはまる	38.6(307)	41.7(312)	36.4(192)	38.9(199)
あまりあてはまらない	19.9(158)	19.0(142)	20.5(108)	22.7(116)
あてはまらない	6.0(48)	7.7(58)	7.2(38)	9.0(46)
DK. NA	0.9(7)	1.1(8)	1.1(6)	0.4(2)

G 自分は住んでいる地域の政治や社会問題に対して、影響を与えることはできない

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
あてはまる	30.8(245)	29.1(218)	30.0(158)	25.8(132)
ややあてはまる	39.6(315)	42.7(320)	38.9(205)	41.9(214)
あまりあてはまらない	22.3(177)	20.0(150)	21.8(115)	23.1(118)
あてはまらない	6.3(50)	6.9(52)	8.2(43)	8.8(45)
DK. NA	1.0(8)	1.2(9)	1.1(6)	0.4(2)

Q24 あなたは、次のような意見についてどのようにお考えですか。

A 日本は、安全で安心して暮らせる国だ

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	23.8(189)	27.1(203)	24.9(131)	31.5(161)
ややそう思う	59.0(469)	54.5(408)	54.3(286)	54.8(280)
あまりそう思わない	15.2(121)	15.9(119)	18.0(95)	11.0(56)
全くそう思わない	1.5(12)	2.0(15)	2.5(13)	2.5(13)
DK. NA	0.5(4)	0.5(4)	0.4(2)	0.2(1)

B 日本は、こつこつ努力すれば成功するチャンスのある国

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	11.1(88)	10.4(78)	9.3(49)	11.4(58)
ややそう思う	41.1(327)	39.3(294)	43.5(229)	40.5(207)
あまりそう思わない	37.6(299)	39.3(294)	39.5(208)	38.9(199)
全くそう思わない	9.2(73)	10.1(76)	7.2(38)	8.8(45)
DK. NA	1.0(8)	0.9(7)	0.6(3)	0.4(2)

C 日本は弱い立場とされる人々が手厚く保護されている国だ

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	9.9(79)	10.3(77)	9.9(52)	12.9(66)
ややそう思う	33.6(267)	37.1(278)	35.9(189)	33.3(170)
あまりそう思わない	46.0(366)	39.8(298)	44.2(233)	41.5(212)
全くそう思わない	9.8(78)	11.7(88)	9.3(49)	11.9(61)
DK. NA	0.6(5)	1.1(8)	0.8(4)	0.4(2)

D 権威のある人びとにはつねに敬意をはらわなければならない

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	4.5(36)	3.7(28)	4.4(23)	4.5(23)
ややそう思う	24.2(192)	25.6(192)	29.6(156)	25.6(131)
あまりそう思わない	51.7(411)	48.1(360)	46.1(243)	47.2(241)
全くそう思わない	18.9(150)	21.4(160)	19.2(101)	22.1(113)
DK. NA	0.8(6)	1.2(9)	0.8(4)	0.6(3)

E 貧富の格差が大きくても、自由に競争し、成果に応じて分配される社会がよい

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	10.9(87)	9.6(72)	10.4(55)	11.2(57)
ややそう思う	38.0(302)	37.9(284)	37.2(196)	42.1(215)
あまりそう思わない	41.8(332)	41.7(312)	41.2(217)	36.2(185)
全くそう思わない	8.2(65)	9.6(72)	10.4(55)	9.6(49)
DK. NA	1.1(9)	1.2(9)	0.8(4)	1.0(5)

F 伝統やしきたりにはなるべく従うほうがよい

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	4.0(32)	5.1(38)	6.1(32)	5.7(29)
ややそう思う	40.3(320)	43.0(322)	45.5(240)	42.9(219)
あまりそう思わない	46.3(368)	42.2(316)	36.4(192)	43.4(222)
全くそう思わない	8.2(65)	8.7(65)	11.4(60)	7.4(38)
DK. NA	1.3(10)	1.1(8)	0.6(3)	0.6(3)

G 国を愛する心を持つことは大切だ

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	19.1(152)	20.3(152)	20.3(107)	26.0(133)
ややそう思う	53.3(424)	55.5(416)	59.2(312)	52.3(267)
あまりそう思わない	22.9(182)	16.7(125)	15.6(82)	15.5(79)
全くそう思わない	3.9(31)	6.3(47)	4.2(22)	6.1(31)
DK. NA	0.8(6)	1.2(9)	0.8(1)	0.2(1)

Q23 すべての方にお尋ねします。あなたの仕事に関わる価値観はどのようなものですか。

A 満足な収入が得られるのであれば、長時間働いてもかまわない

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	14.8(118)	15.6(117)	13.9(73)	17.4(89)
ややそう思う	33.5(266)	30.8(231)	30.2(159)	30.9(158)
あまりそう思わない	38.1(303)	35.4(265)	40.6(214)	35.2(180)
全くそう思わない	12.6(100)	16.0(120)	14.0(74)	15.7(80)
DK. NA	1.0(8)	2.1(16)	1.3(7)	0.8(4)

B やりがいのある仕事であれば、満足な収入が得られなくてもかまわなくても

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	4.4(35)	4.0(30)	4.9(26)	7.0(36)
ややそう思う	20.0(159)	26.6(199)	22.0(116)	26.8(137)
あまりそう思わない	49.8(396)	44.5(333)	51.8(273)	46.4(237)
全くそう思わない	24.8(197)	22.8(171)	20.3(107)	18.8(96)
DK. NA	1.0(8)	2.1(16)	0.9(5)	1.0(5)

C 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	2.6(21)	1.2(9)	1.3(7)	2.0(10)
ややそう思う	8.1(64)	10.0(75)	8.5(45)	10.6(54)
あまりそう思わない	40.3(320)	33.9(254)	36.4(192)	32.5(166)
全くそう思わない	48.1(382)	53.0(397)	52.2(275)	53.8(275)
DK. NA	1.0(8)	1.9(14)	1.5(8)	1.2(6)

D 夫が妻と同じくらい家事や育児をするのはあたりまえのことだ

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	22.1(176)	26.8(201)	28.3(149)	28.8(147)
ややそう思う	46.5(370)	41.1(308)	41.2(217)	43.4(222)
あまりそう思わない	25.3(201)	23.0(172)	23.3(123)	22.9(117)
全くそう思わない	4.8(38)	7.1(53)	5.3(28)	3.9(20)
DK. NA	1.3(10)	2.0(15)	1.9(10)	1.0(5)

Q22-2 今春以降の新型コロナウイルス流行の影響によって、あなたの在宅勤務の時間は増えましたか。
(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
増えた	9.6(76)	21.0(157)	15.9(84)	28.2(144)
変わらない	64.9(516)	49.8(373)	59.0(311)	44.4(227)
減った	1.9(15)	1.6(12)	1.7(9)	1.8(9)
もともと在宅勤務のみの仕事である	1.5(12)	1.2(9)	1.1(6)	1.4(7)
DK. NA	22.1(176)	26.4(198)	22.2(117)	24.2(121)

Q22-1 あなたは仕事についてどう感じていますか。

A 総合的に見て、自分の仕事に現状に満足している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	9.8(78)	8.5(64)	8.5(45)	12.3(63)
ややそう思う	41.3(328)	38.9(291)	44.2(233)	38.6(197)
あまりそう思わない	25.4(202)	22.3(167)	24.3(128)	21.9(112)
全くそう思わない	4.8(38)	6.9(52)	6.1(32)	6.7(34)
DK. NA	18.7(149)	23.3(175)	16.9(89)	20.5(105)

B 給料や報酬に満足している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	10.6(84)	7.2(54)	7.0(37)	8.8(45)
ややそう思う	35.0(278)	29.9(224)	35.3(186)	32.3(165)
あまりそう思わない	25.4(202)	27.6(207)	29.4(155)	26.4(135)
全くそう思わない	10.3(82)	11.7(88)	11.0(58)	11.9(61)
DK. NA	18.7(149)	23.5(176)	17.3(91)	20.5(105)

C 現在の職場の人間関係に満足している

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	15.8(126)	16.4(123)	13.5(71)	17.2(88)
ややそう思う	42.8(340)	38.5(288)	46.7(246)	39.9(204)
あまりそう思わない	16.2(129)	15.5(116)	17.6(93)	15.5(79)
全くそう思わない	6.3(50)	6.3(47)	4.9(26)	6.7(34)
DK. NA	18.8(150)	23.3(175)	17.3(91)	20.7(106)

D 自分は「やりがい」がある仕事をしている

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	17.7(141)	17.2(129)	19.5(103)	23.3(119)
ややそう思う	39.5(314)	34.2(256)	42.1(222)	34.6(177)
あまりそう思わない	19.2(153)	19.0(142)	15.0(79)	16.0(82)
全くそう思わない	4.7(37)	6.4(48)	6.1(32)	5.3(27)
DK. NA	18.8(150)	23.2(174)	17.3(91)	20.7(106)

E 現在住んでいる地域には魅力的な仕事の選択肢がある

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	4.5(36)	8.0(60)	3.4(18)	6.8(35)
ややそう思う	12.1(96)	25.0(187)	13.9(73)	29.5(151)
あまりそう思わない	43.0(342)	32.6(244)	44.4(234)	33.5(171)
全くそう思わない	21.5(171)	11.1(83)	20.9(110)	9.6(49)
DK. NA	18.8(150)	23.4(175)	17.5(92)	20.5(105)

F 今後の自分自身の仕事の将来について、明るい希望持っている

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	6.9(55)	7.5(56)	7.4(39)	11.2(57)
ややそう思う	26.3(209)	25.5(191)	28.7(151)	30.1(154)
あまりそう思わない	35.7(284)	32.7(245)	36.4(192)	29.0(148)
全くそう思わない	12.2(97)	10.9(82)	10.1(53)	9.2(47)
DK. NA	18.8(150)	23.4(175)	17.5(92)	20.5(105)

G 今よりよい条件の勤務先に移ろうとか、チャンス求めて転職しようという考えを持っている

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
全くそう思う	13.5(107)	15.6(117)	13.5(71)	15.1(77)
ややそう思う	25.2(200)	26.6(199)	27.9(147)	24.7(126)
あまりそう思わない	22.1(176)	20.4(153)	23.7(125)	22.7(116)
全くそう思わない	19.9(158)	14.0(105)	17.3(91)	17.0(87)
DK. NA	19.3(154)	23.4(175)	17.6(93)	20.5(105)

F1 あなたの性別を教えてください。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
男性	44.2(351)	41.0(307)	45.9(242)	40.7(208)
女性	54.2(431)	57.8(433)	53.1(280)	57.9(296)
その他	0.6(5)	0.1(1)	0.0(0)	0.4(2)
DK. NA	1.0(8)	1.1(8)	0.9(5)	1.0(5)

F2 現在、あなたは結婚されていますか。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
結婚している	47.5(378)	40.2(301)	44.4(234)	41.7(213)
離婚・死別した	5.0(40)	3.7(28)	4.0(21)	4.1(21)
結婚したことはない	46.9(373)	55.3(414)	50.1(264)	53.8(275)
DK. NA	0.5(4)	0.8(6)	1.5(8)	0.4(2)

F2-2 (京都市) 配偶者の出身地はどこですか。(SA)

京都市	17.2(88)
京都市以外の京都府内	5.1(26)
京都府内の関西	8.2(42)
関西以外	10.8(55)
DK. NA	58.7(300)

F2-2 (京都北部) 配偶者の出身地はどこですか。(SA)

現在お住まいの市町村内	20.3(107)
お住まいの市町村以外の京都府北部7市町	7.4(39)
京都府北部7市町以外の関西	8.2(43)
関西以外	8.3(44)
DK. NA	55.8(294)

F2-2（札幌市） 配偶者の出身地はどこですか。（SA）

札幌市	18.2(136)
札幌市以外の石狩管内	2.9(22)
石狩管内以外の北海道内	12.4(93)
北海道外	6.7(50)
DK. NA	59.8(448)

F2-2（オホーツク） 配偶者の出身地はどこですか。（SA）

現在お住まいの市町村	24.2(192)
お住まいの市町村以外のオホーツク管内	9.3(74)
オホーツク管内の北海道内	10.8(86)
北海道外	3.1(25)
DK. NA	52.6(418)

F3 あなたは結婚について、どのようにお考えですか。（SA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
ある程度の年齢までに結婚するつもり	19.1(152)	23.5(176)	24.5(129)	23.1(118)
理想の結婚相手が見つかるまでは結婚しなくてかまわない	25.2(200)	26.7(200)	23.1(122)	28.0(143)
一生結婚するつもりはない	6.5(52)	7.7(58)	6.8(36)	5.5(28)
DK. NA	49.2(391)	42.1(315)	45.5(240)	43.4(222)

F3-1 現在、あなたは付き合っている恋人がいますか。（SA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
恋人がいる	15.3(122)	19.1(143)	15.6(82)	19.6(100)
今はいないが、過去にいたことがある	21.3(169)	22.7(170)	21.6(114)	24.1(123)
恋人がいたことはない	13.2(105)	15.0(112)	14.8(78)	12.5(64)
DK. NA	50.2(399)	43.3(324)	48.0(253)	43.9(224)

F4 お子さんはいらっしゃいますか。（SA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
いる	41.4(329)	33.9(254)	38.7(204)	33.1(169)
いない	54.5(433)	61.7(462)	56.2(296)	64.2(328)
DK. NA	4.2(33)	4.4(33)	5.1(27)	2.7(14)

F6 あなたの最終学歴を教えてください。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
在学中（大学または大学院）	4.0(32)	9.2(69)	5.1(27)	11.4(58)
在学中（短大または高専）	0.8(6)	0.3(2)	0.6(3)	0.4(2)
在学中（専門学校）	0.3(2)	0.8(6)	0.6(3)	0.8(4)
大学卒または大学院卒	24.0(191)	35.2(264)	32.1(169)	52.8(270)
短大卒または高専卒	8.7(69)	8.9(67)	11.6(61)	5.3(27)
専門学校卒	20.0(159)	19.9(149)	14.8(78)	9.6(49)
高卒（大学中退も含む）	36.1(287)	20.6(154)	30.6(161)	15.3(78)
中卒（高校中退も含む）	4.5(36)	3.6(27)	3.4(18)	2.5(13)
その他	1.0(8)	9.0(6)	0.6(3)	1.4(7)
DK. NA	0.6(5)	0.7(5)	0.8(4)	0.6(3)

F7-1 高校卒業後の進学先・就職先の地域を考える際、以下をどれだけ考慮しましたか。

A 親の希望

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
考慮した	15.6(124)	16.2(121)	14.8(78)	17.0(87)
やや考慮した	27.0(215)	25.0(187)	26.6(140)	25.6(131)
あまり考慮していない	26.4(210)	25.5(191)	24.5(129)	26.6(136)
考慮していない	24.5(195)	27.8(208)	28.5(150)	26.2(134)
DK. NA	6.4(51)	5.6(42)	5.7(30)	4.5(23)

B 高校の先生との相談・アドバイス

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
考慮した	13.7(109)	11.9(89)	14.0(74)	16.4(84)
やや考慮した	31.7(252)	29.1(218)	34.2(180)	26.0(133)
あまり考慮していない	24.3(193)	25.6(192)	21.8(115)	29.4(150)
考慮していない	24.3(193)	28.2(211)	24.5(129)	24.3(124)
DK. NA	6.0(48)	5.2(39)	5.5(29)	3.9(20)

C 自分の成績

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
考慮した	29.9(238)	38.7(290)	34.7(183)	41.3(211)
やや考慮した	34.7(276)	29.8(223)	32.1(169)	31.1(159)
あまり考慮していない	15.8(126)	12.4(93)	12.1(64)	12.7(65)
考慮していない	13.5(107)	14.0(105)	15.9(84)	10.8(55)
DK. NA	6.0(48)	5.1(38)	5.1(27)	4.1(21)

D 実家の経済状況

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
考慮した	23.3(185)	25.6(192)	20.5(108)	19.6(100)
やや考慮した	27.8(221)	25.9(194)	26.8(141)	25.6(131)
あまり考慮していない	23.0(183)	24.2(181)	24.5(129)	28.4(145)
考慮していない	19.6(156)	19.0(142)	22.6(119)	22.3(114)
DK. NA	6.3(50)	5.4(40)	5.7(30)	4.1(21)

F7-2 高校卒業後の進路について教えてください。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
働いた	32.6(259)	20.8(156)	31.1(164)	13.3(68)
進学した	58.4(464)	72.2(541)	60.2(317)	78.7(402)
その他	1.9(15)	1.2(9)	2.3(12)	2.0(10)
DK. NA	7.1(57)	5.8(43)	6.5(34)	6.0(31)

F7-3 現在も同じ仕事をしています。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
はい	11.1(88)	5.2(39)	15.4(81)	3.7(19)
いいえ	22.3(177)	14.7(110)	15.0(79)	9.2(47)
DK. NA	66.6(530)	80.1(600)	69.7(367)	87.1(445)

F8 あなたにとって、以下の教育は進路決定の参考となりますか。(MA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
キャリア教育（インターンシップや職業体験活動など）が参考となった	10.1(80)	9.7(73)	10.6(56)	8.4(43)
ふるさと教育（郷土理解、地域への愛着や誇りを育む教育など）が参考となった	1.6(13)	0.9(7)	2.5(13)	1.8(9)
キャリア教育もふるさと教育も進路決定の参考とならなかった	10.3(82)	4.3(32)	8.9(47)	5.3(27)
キャリア教育もふるさと教育も受けたことがない	29.8(237)	31.4(235)	26.6(140)	20.4(104)

F10 あなたのご両親はどちらにお住まいですか。

A 父親

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
同居している	23.6(188)	26.3(197)	30.9(163)	28.4(145)
近く（1時間以内）の地域	33.8(269)	26.6(199)	29.0(153)	25.8(132)
日帰りで会うことができる地域	13.7(109)	15.8(118)	17.8(94)	19.6(100)
日帰りではいけない遠方の地域	14.5(115)	15.2(114)	7.6(40)	12.5(64)
いない（または、どこにいるかわからない）	12.7(101)	14.7(110)	12.1(64)	11.9(61)
DK. NA	1.6(13)	1.5(11)	2.5(13)	1.8(9)

B 母親

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
同居している	30.3(241)	32.8(246)	35.1(185)	33.5(171)
近く（1時間以内）の地域	35.3(281)	32.2(241)	32.8(173)	30.3(155)
日帰りで会うことができる地域	13.7(109)	15.9(119)	18.4(97)	19.2(98)
日帰りではいけない遠方の地域	14.5(115)	14.0(105)	7.0(37)	12.5(64)
いない（または、どこにいるかわからない）	4.5(36)	3.3(25)	3.8(20)	2.3(12)
DK. NA	1.6(13)	1.7(13)	2.8(15)	2.2(11)

F11（京都市） あなたのご両親は、北海道に出て生活したことがありますか。（質問票には北海道と明記）

	父親	母親
ない	51.3(262)	56.6(289)
関西出身だが関西以外で暮らしたことがある	16.8(86)	10.8(55)
関西以外の出身である	28.8(147)	31.1(159)
DK. NA	3.1(16)	1.6(8)

F11（京都北部） あなたのご両親は、北海道に出て生活したことがありますか。（質問票には北海道と明記）

	父親	母親
ない	62.2(328)	71.0(374)
関西出身だが関西以外で暮らしたことがある	15.2(80)	8.9(47)
関西以外の出身である	12.3(65)	12.7(67)
DK. NA	10.2(54)	7.4(39)

F11（札幌市） あなたのご両親は、北海道に出て生活したことがありますか。

	父親	母親
ない	51.7(387)	65.6(491)
北海道内出身だが道外で暮らしたことがある	27.9(209)	15.2(114)
北海道外出身である	17.0(127)	17.5(131)
DK, NA	3.5(26)	1.7(13)

F11（オホーツク） あなたのご両親は、北海道に出て生活したことがありますか。

	父親	母親
ない	66.2(526)	75.3(599)
北海道内出身だが道外で暮らしたことがある	20.3(161)	12.2(97)
北海道外出身である	10.4(83)	11.3(90)
DK, NA	3.1(25)	1.1(9)

F13 ここ1か月の間のあなたの就業形態と雇用形態はどのようなものですか。（SA）

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
仕事を主にしている、正規雇用（フルタイム）の仕事で収入を得た	54.0(429)	52.7(395)	61.5(324)	53.4(273)
仕事を主にしている、自営業またはその家族従業員として収入を得た	8.3(66)	1.6(12)	3.2(17)	6.7(34)
仕事を主にしている、会社経営者または役員として収入を得た	1.5(12)	1.5(11)	0.6(3)	1.6(8)
仕事を主にしている、パート・アルバイト・派遣・有期契約の非正規雇用の仕事で収入を得た	13.7(109)	14.6(109)	12.7(67)	13.1(67)
家事を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もして収入を得た	3.8(30)	5.5(41)	4.0(21)	3.3(17)
通学を主にしつつ、正規雇用以外の仕事もして収入を得た	1.1(9)	5.5(41)	2.1(11)	4.9(25)
家事を主にしている、仕事で収入を得ていない	10.2(81)	9.7(73)	8.0(42)	8.2(42)
通学を主にしている、仕事で収入を得ていない	2.1(17)	4.4(33)	2.7(14)	5.5(28)
家事も通学もしておらず、仕事で収入も得ていない	2.5(20)	3.2(24)	2.5(13)	1.8(9)
DK, NA	2.8(22)	1.3(10)	2.8(15)	1.6(8)

F14 あなたの主に仕事の種類は何ですか。分類が難しい場合は「その他」の回答欄に仕事内容を書いてください。(SA)

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
管理	0.5(4)	1.6(12)	1.5(8)	1.6(8)
専門・技術	19.4(154)	21.4(160)	18.2(96)	23.1(118)
事務	12.5(99)	14.7(110)	11.4(60)	14.5(74)
販売	8.8(70)	11.9(89)	8.7(46)	9.0(46)
サービス	12.2(97)	15.1(113)	13.1(69)	15.3(78)
保安	2.4(19)	1.2(9)	4.4(23)	1.4(7)
農林漁業	9.6(76)	0.4(3)	0.8(4)	0.2(1)
生産工程	5.0(40)	2.3(17)	12.1(64)	4.5(23)
輸送・機械運転	2.1(17)	0.9(7)	1.9(10)	2.0(10)
建設・採掘	2.5(20)	4.1(31)	3.6(19)	2.2(11)
運搬・清掃・包装	2.3(18)	2.9(22)	3.0(16)	1.8(9)
その他	3.8(30)	3.2(24)	3.8(20)	6.7(34)
DK. NA	19.0(151)	20.3(152)	17.5(92)	18.0(92)

F15 自身の年収

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
所得なし	12.2%	12.4%	10.2%	10.6%
100万円未満	12.3%	15.2%	12.0%	16.2%
100万円台	11.9%	11.7%	11.6%	10.0%
200万円台	17.2%	15.4%	18.2%	13.9%
300万円台	18.0%	18.6%	18.4%	17.2%
400万円台	11.4%	10.3%	11.8%	11.5%
500万円台	5.8%	5.3%	7.0%	8.2%
600万円台	2.8%	2.4%	4.2%	4.3%
700万円台	1.3%	1.6%	0.8%	1.0%
800万円台	0.3%	0.5%	0.6%	1.2%
900万円台	0.0%	0.3%	0.4%	0.0%
1000万円以上	0.6%	0.4%	0.4%	2.0%
DKNA	6.2%	5.9%	4.6%	3.9%
N	795	749	527	511

F15 世帯年収

	オホーツク	札幌市	京都北部	京都市
所得なし	0.9%	1.7%	1.1%	1.0%
100万円未満	1.5%	1.9%	2.3%	3.1%
100万円台	4.0%	4.0%	3.8%	2.3%
200万円台	6.8%	8.3%	5.9%	7.6%
300万円台	13.8%	10.9%	14.2%	12.3%
400万円台	13.3%	13.1%	12.3%	9.6%
500万円台	14.2%	12.0%	11.8%	11.0%
600万円台	10.6%	8.9%	9.7%	8.0%
700万円台	5.8%	9.3%	6.5%	7.8%
800万円台	3.8%	5.9%	6.1%	7.4%
900万円台	3.5%	4.9%	5.1%	5.9%
1000万円以上	8.1%	7.7%	7.2%	13.3%
DKNA	13.7%	11.2%	14.0%	10.6%
N	795	749	527	511